異世界の智将

トッティー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界の智将

【Ｎコード】
Ｎ２４５４Ｋ

【作者名】
トッティー

【あらすじ】
カタパルト王国の王子に召喚された一般高校生吉田亮。だが、特に魔法の才能があるわけではんく、美形でもなく、実はナントカ流派の跡取りだったという事情すらない。一般ピープルである。そんな亮が王子の秘書になることから始まる異世界戦記。そして現在内乱勃発中？　万単位の兵士が動く戦場で、亮は己の智略を武器にする。

プロローグ（前書き）

どうも、トッティーです。
初心者ですので至らない点はあると思いますが、どうかよろしくお願いします。

ちなみに、プロローグと本編はかなりノリが違うのでご注意ください。

プロローグ

「遂に。遂にこの時が来たかァ。待ったよ、ボクは。……待ったよぉ、長ァーくねぇ……」

とある地下室。そこでは、二人の男と一人の女が長らく時間をかけて実験を重ねてきた禁術が、遂に完成しようとしていた。

床に描かれる魔法陣は、彼らと大勢の技術者たちの技術が凝縮されたものだった。未だ魔力を通していないというのに、どこか妖しげな気を放っている。

当然だろう、と先程言葉を発した青年は思う。この魔法の権能はそこらの大規模魔法とは比べ物にならないのだ。あの魔法大国セリウス王国から盗み取った技術が大陸中から集めた最高級の技術者たちの手で昇華させられ、その上多額の資金がつぎ込まれている。

今回行うのは最終実験のようなもので、それすらこの世界に少なからず影響をもたらす。

本当は実験ではなく、ぶっつけ本番で行きたかった青年だが、彼に仕える壮年の男の忠告でとどまった。今回の実験が成功しても失敗しても、次にこの魔法を行使できる程の魔力を集められるのは何年後になるか分からないので、彼としては急ぎたかったのだが。本番で失敗して己に牙をむく様なことがあったら破滅だ。そう諭されて、思いとどまらざるを得なかった。

ふと、その男の方を向いた。男はそれに応えるかのように口を開いた。

「待ちましたな」

何も感じて無いかのようで、されど何処か感慨深さを覚えさせる声。髪には既に白いものが混じっており、壮年であろうことを窺わせる。積み重ねてきた経験も普通ではないのだろう、そのたたずむだけの姿は何か壮絶な気勢を放っていた。

「そうですねえ。長かった。本当に、長かったァ……。百年は越してましょうぞ。いい加減、待ちきれなくなってきたんですがねェ……フフフ」

女が口を開く。姿形は何の変哲もない四十路の女性だが、その目からはこちらも強烈な狂気を放っている。彼女はずっと、完成したばかりの魔法陣を凝視していた。蛇のように舐めまわす様な視線と親の仇を見るかのような憎悪を覚えさせる視線の混在が、彼女をより異様な存在へと仕立てていた。

壊れた機械の様な笑い声が、地下室に響き渡る。静かな地下室では、彼女のちょっとした笑い声さえ反響した。不気味な雰囲気が醸し出されたところで、青年は仕切り直すように言う。

「じゃあ、始めようか」

その端正な顔からは、他の二人に押しも押されぬ狂気をはらんでることが容易に推測できる。だが、そこで最も落ち着いている壮年の男が彼を制止した。

「上に。上に、知らせなくとも良いのですか？」

男が言う上とは、当然方向を表すものではない。彼らも一応国に所属している人間だ。当然ながら、実験の資金を援助する上が存在

する。そして、彼らの言う上とはつまり。

この国の、王。

「あの頑固爺か。別に良いだろ。どうせすぐ死ぬ」

「……、――――ッ」

二人は絶句した。「すぐ死ぬ」という言葉に隠された意味を察したのだ。先程まで気の違った様な顔をしていた女も流石に声も出せないらしい。

困惑からいち早く立ち上がったのは男の方だった。男は青年の放った言葉を吟味するかのように、ゆっくりと、されど何度も頷いた。

「貴方様には、いつも驚かされていますな。クク、それが貴方の選択なら、私はただそれに従うだけですが」

女も、男が余裕ありげに対応するのを見て少し立ち直ったらしく。男が喋り終えた後すぐ、それを引き継ぐように、

「私もですわ。フフフ、面白いじゃないですかぁ、貴方様というお方は」

青年は自分が行ったことを二人が理解したのを確認して、最期に一言、こう口に添えた。

「じゃあ、始めようか。ボクの、夢を」

第1章第1話　現実逃避の素晴らしさについて

ん、ここは何処だ……？

目に入ったのは花の絵柄。俺の体に覆いかぶさっている。柔らかくて温かい。毛布のようだ。ということは俺ベットで寝ているのか。

そういえば、さっき通学途中に変なトイレに近付いてたら……その後の記憶が無い。気を失ったのかな。誘拐されたのにしては、ベットがいささか高級品だ。恐らく、気を失って倒れた後近所の人に発見されてベッドで寝かせてもらっているのだろう。

原因不明の昏倒。存在しない記憶。未知の空間。何だか気味が悪くなって首を回すと、丁度俺の後方に金髪のプレイボーイが足を組んで椅子に座っていた。

「もう起きたかな？」

金髪の青年が、大人の男にしてはいくら高い声で軽やかに声をかけてきた。どうやら、この人が助けてくれたらしい。

「は、はぁ……あの、貴方が助けてくれたのですか？」

この金髪の青年は二コリと笑った。うわあ、輝いているよこの人。後光が差してるのが見えるし。ニコポされるヒロインの気持ちが少しだけ分かった気がした。

「うん。そうだよ。」

やはり、この人が助けてくれたらしい。

「ありがとうございます」

「いや、お礼を言われることはしてないよ。そういえばかれこれ一日間寝ているけど大丈夫？　お腹空いてるんじゃないかな」

一日も寝てたのか。流石の俺でも寝すぎだろ。最長睡眠記録（二度寝はなし）だってまだ１４時間だ。そのときだって三日連続で徹夜した後の記録なんだから。

しかし、何故だか俺のお腹は空いていない。起きたばっかりだからかな。

「いえ、大丈夫です」

そういえば、この状態は一体何なのだろう。正直この人医者にはとてもじゃないけども見えない。まずここは高級ホテルの一室みたいだし、服も白衣ではなくて豪華な洋風のものだからだ。ただ、洋風にしては古いデザインのような気がする。気のせいか？

それに、この高級感溢れるベット。何がなんなのやら、分かりませぬ。

「あの、ぶしつけかもしれませんが、あなたはどなたですか？」

彼はそういえば、と呟いて答えた。

「そういえば、君に分かるはずもないか。失念していたよ。なんせ、君は、異世界人なのだからね」

え？

「僕の名前は、カタパルト王国の第一王子ジル・カタパルトだ」

ハア？ナニイッテルンデスカコノヒトハ？

いや、待て。良く考えてみよう。思考を放棄するのは良くないことだ。今この人は自分を王子だとかなんとか言った。いや、おじさんと言っていたのか。なんだ、俺の聞き間違いね。そうかそうか。おじさんかぁーー。

「って、二重の意味で納得できるかーーッ」

何この人。頭狂ってる。この超絶クールな俺にノリ突っ込みをさせるとは、なかなかの腕前や……。

「だから、王子だよ王子。王子様」

死ねキチガイ。

「流石にいきなり納得させるのは無理か」

何コイツ。いかにも自分が正しいのに相手が分かってくれなくて困ってる感じにしてるけどさ、おかしいのはお前だぞ。

折角美形で性格も良さそうで好感持てたんだけどなー。流石に王子を自称するとは、余りにも痛々しい。

「とりあえず、自己紹介から始めようか。さっきも言ったけど、僕の名前はジル。君は？　あ、そうだ。タメ口でいいよ。殆ど同じ年齢だと思うし」

……。もう何も言うまい。てゆうか、最初の方の尊敬が一気に無くなった。

「俺の名前は、吉田亮。まあ、亮とでも呼んでくれ」

あっさり尊敬語からタメ口に変えた俺の言葉を聞き、ジルは思案顔になった。俺が生意気なのか？　断ってもらいたかったのかもしれない。まあ、なんにせよ電波に尊敬語なぞ話さないが。暫くして、何か良いことでもあったのかいきなり顔を明るくした。変な奴だ。

「そうだね、質問だけど君がここに来る前何か起こったの？」

記憶を辿る。

今日は高校の入学式。通学途中尿意が切迫してきたので、通学路の傍にあった公園のトイレに入った。入った所までの記憶はあるが、そこからの記憶はゼロである。

「へえ、ツウガクが何のことだかは僕もよく分からないけど、大体分かったよ。トイレって、トイレットのことだろ？　でさ、君、ここが異世界だって信じられるかい？」

通学が何のことか分からない？ここは異世だと信じられるか？こいつ電波じゃないのだろうか。良い人そうではあるけれど、電波さんとは話が通じんぞ。

「いや」

「魔法があるってことは？」

「いや」

「このアリア大陸の存在は？」

しつこい。

「はいはい、知ってますよ知ってますよ。もういいから説明に移れよ」

ジルは残念そうな顔をする。この電波さん、俺に流されたことが不満ならしい。つーかどうでもいいけど美形だな。見たことねえぞこんなイケメン。笑顔振りまけば女が十人は寄ってきそう。やばい。殺意がわいてきた。

「はあ、やっぱり見せないと納得してくれないか。でも、面倒くさいんだよなぁ、この魔ほ……ってそれやめて！その目。怖いよえーーーー、えーーーーっと。リョウ？　だったよね。あれそうじゃなかったか」

「名前忘れるなぁボケェ！亮で合ってるわ」

やばい、素が出てきた。危うく手が出てしまうところだった。相手は初対面だし、こんな電波でも俺の恩人であることには変わりない、だろう。多分。やりすぎは凶である。調子に乗って親しげに話すのは良くない。いくらジルから良い人オーラがぷんぷんしていても、だ。

「じゃあ、魔法見せるね。そうすれば亮も少しは僕のこと信じてくれるでしょ」

「は？だからもうい

「神の炎（ハーレーン）よ、燃え上がれ！」

一瞬の沈黙。そして虚空に向けて突き出されたジルの手に何か光のようなものが集まる。そして、掌の一メートル程上空から炎が噴出した。これは、魔法？　信じられないが、確かにそこに在る。二メートル離れているのに、暑くてたまらない。

5秒ほど炎を顕現させた後、炎は消えた。視線をジルに移すと、ジルは汗をビショビショにしていた。暑かったのだろうか。手を額に当てると、俺も汗をかいていた。

「ハア、ハア。疲れた。とりあえず、魔法のことは信じてくれた？」

今のなんかのトリックかなぁ。いや、分からない。まず、ジルが俺を騙す理由が無い気がする。それに、今の火は確かに熱かったがそれでもこんなに汗はかけない。自分の汗の量を調節できる人もいるらしいが流石にそれは無いだろう。

「微妙」

でも、信じきれない。だって魔法だよ？　ありえないでしょ。それよりはまだ幻覚を見せられていると言われた方が説得力がある。

ふむ。

「じゃあさ、太陽が二つあるって言ったら信じる？　君の世界に太陽っていくつあった？」

「そりゃ、一つだが。本当に二つあるのなら、信じるぜ」

「じゃあ、ベットから出て。そこに窓があるから」

ベットから出ると、俺はこの部屋の異常さに気がついた。まず、広い。学校の一教室ほどの大きさだ。そして、壁にはなんか凄そうな絵画が掛けてあった。なんかもう、俺みたいな小市民がいてはいけない雰囲気だ。いたたまれない。

「で、窓はそっちか」

一目、太陽は一つにしか見えない。え？　期待させておいてこれかよ。おいおい。

「んだよ。ねーじゃんか」

「いやいやあるって。ほら、右に少し膨らんでいて綺麗な円になっていないだろう？」

何だ、やっぱ妄言か。じゃあさっきの炎は何だったんだろう。と、興味を失くした俺。ジルがせがむので、仕方なくもう一度見てやった。すると。

確かに、太陽の右の部分の輪郭が少し違和感あるな。ん？　確かに良く見ると、ちっちゃな太陽がもう一個あるぞ。それってまさか……

太陽は、二つありました。

「で、信じたかい？」

そりゃ、信じるしかないだろう。それにしても、魔法なんて、異世界なんて、あったのか。最近超能力者関連の話題がテレビでやけに出てたけど、あれってガチだったの？

「まじかよオイ」

何故だか、笑いがこみあげてきた。人間は許容できない驚きを覚えると笑えるらしい。まあ異世界に来てしまってはキャパ越えするのも当然だろう。やべえ、頭がボーっとしてきた。

「なあ、そういえば何で俺が異世界人だって気付いたんだ？　この世界にも日本人……俺みたいな容姿の人はいるだろ？」

試しに質問してみる。

「過去に異世界から来た人物は君と同じように独特な魔力があるからね」

え？召喚？

「え？俺って迷い込んで来たんじゃないの？」

「う、うん。わざとじゃないんだけど……ちょっとした事故が起こったんだ。ごめん」

まじかよ。感謝して損した。

「そうか。あのさ……俺は、元の世界に帰れるのか？」

「分からない」

「分からない、だと？」

何言ってるんだよこいつは。お前、分からないってどういうことだよ。

「ごめん。召喚したことについては謝る。でも、僕は君を召喚するつもりはなかったんだ。本当は召喚獣を呼び出すつもりだったのに、何故か君が出てきて。そもそも召喚獣を元の世界に戻すなんてことしないから、」

焦っているのか？口調が饒舌になっているぞ。いや、俺の怒りに困惑しているようだ。だがそんなのどうでもいい。この反応だと、多分帰れない。もしも帰れる可能性が少しでもあるのならそれを言うはずだ。なんせ俺はこんなに怒っているんだから。

「ふざけんなよ！」

言葉にならない。うまく言葉を発せない。冷静な自分が居る一方で、激昂している自分も居るようだ。俺はジルの首に掴みかかった。こいつが国王だろうが金持ちだろうが、関係無い。こみ上げてきた怒りをコイツの為に抑えるなんざ、まっぴらだよ。

だが。ジルの反応は俺の驚くものだった。

土下座。

「本当にごめん！この通りだ」

恐らく、俺がこんなに怒るとは思ってもみなかったんだろう。表情に焦りが生じている。

許したわけではないが、怒りが冷めた。ここでこいつを追求しても意味は無い。その代わりに、今度は怒りとはまた別の感情が湧く。これは、なんだろう。怒りを通り越して呆れたのだろうか。否。そうではないな。これは、

「いいよ。出て行ってくれ」

これは悲しみ。もう、家族には会えないかもしれない。友達にも、もう会えない。

「いや、でも「一人にさせてくれよ！」……分かった。もう出ていくよ昼ご飯は、またあとで運ばせるね」

パタン。扉の音が、俺の心に響く。何だか、ジルが消えてこの部屋は急に静かになった気がした。俺の心の問題だろう。

「もう、会えないのかな……」

父、母、兄、妹、佐野、飯田、原口、山本。家族や友人の顔が次々と思い浮かぶ。走馬灯、ではなく。別離。俺は、良く分からないこの世界で生きていかないとならないらしい。だったら、もう、あいつらには二度と会えない覚悟をしなければならないだろう。

やけに冷静な思考をする自分に驚きながらも、俺は一人涙を流した。

第1章第2話　俺を無視するな餓死してしまう

結局、俺は三時間ほど悩んだ挙句、今すぐ元の世界に戻るのを諦めることにした。

事故って召喚されただけらしいから、何をさせられるというわけでもないらしいし。もし「神に選ばれし勇者よ。今民は魔王によって苦しめられている。どうか、魔王を討伐してほしい」なんて言われたら、死ねる自信があるけどね。

それに、怒りも冷めたのだ。俺は自分で思っていたよりも薄情なのかもしれない。

それはおいておいて、俺の当分の目標は生活費稼ぎだ。ここには親なんて居ないし。後でジルと相談してみよう。俺に気まずいという感情は無い！

だが、それはそれで問題がある。

「腹減ったー」

そう、ジルの奴がなかなか現れないのだ。こちとら一日間寝ていて飢餓状態に陥っとるんじゃい！

グーーー。

「あああああ」

俺の喉は極限の空腹で枯れ、壊れたスピーカー並みの音しか出ない。なんという悲劇。体力も無くなり、椅子に座った俺は動けなくなった。このまま死んでしまうかもしれない。すると、

コンコン。

扉を叩く音がした。ジルの奴、やっと来たか。

「ジル様の御客人、リョウ殿ですか？」

と思ったら、執事らしき人が来た。ベテランっぽい風格を漂わせている。若々しい黒髪とは裏腹で老練そうな顔つきが渋いねえ。

一瞬猫耳メイド（もしくはドジっ娘メイドでも可）ではないことに怒りを覚えたが、その手には飯が！　俺の執事さんへの好感度が５０アップした。

「は、はい。あの、ご飯を食べていいですか？」

「どうぞ」

その言葉を聞いた俺は肉食獣のように食事の置かれたテーブルに走りこむ。人間は常に力をセーブしていて平時は５０パーセントも出していないというが、それは真実のようだ。さっきまで感じていた体の重さは無くなり、俺の目には食事しか映らなくなった。

ガツガツモグモグビグビ×２０

「あー食った食った。」

うぅ……。なんか執事さんを待たせるのは悪い気がしてきた。もう遅いけど。つか、何でここに残っているんだろう。

「いえ、ジル様から用事を頼まれたので。」

「心読まれた！？」

この人は読心術でもたしなんでいるのだろうか。つか、用事って何だろう？

「ジル様がお呼びでございます」

ああ、なるほど。まああれでも一応王子様だからな。わざわざ出向くわけにはいかないのだろう。

そう思い、とりあえず執事さんに付いていく。扉を開けると、道に沿ってカーペットが広がっていた。柄は紅白で、いかにも王城といった感じだ。壁には絵画や彫刻品などの美術品がかかっている。高級そうだなぁ。

それにしてもここ、王城というよりは迷路みたいだな。部屋を出てから何回曲がったっかもう分からないし。ということで俺は頭がこんがらがるのでこの城の地理を頭に入れるのは止め、いかにも名匠が創ったような物をボーっと見ながら俺はしばらく無言のまま執事さんに付いていくことにした。

つか、まだ？

そう思ったら、執事さんは他よりも幾分か豪華な扉の前で止まった。この部屋にジルが居るようだ。

コンコン。

「ギルバートでございます。」

へえ、執事さんの名前ギルバートっていうんだ。

「おう、入れ」

入ると、そこは執務室みたいな場所だった。大きな机の上には書類が重ねてある。そしてなんと、横には美人な大人の女性が！歳は恐らく二十代前半。理知的な瞳とウェーブのかかっている長い黒髪が印象的な、可愛いと言うよりも綺麗だ、と表現すべき美しさである。

すると見られているのに気が付いたのか目が合ってしまい、少し気まずくなりつつも俺は机の前にあるソファーに座った。

ああ、ジルの奴うらやましい。どうせこのお姉さんも美形であるコイツにかかればあっという間に初心な少女になっちまうんだろ。いや、妬み過ぎかｗｗｗｗ。

「で、何の用だ？」

「どうやら気持ちに折り合いがついたようだね」

ジルはほっとした顔で言った。まあ、俺が怒っていたらそれを鎮めるのも面倒くさそうだしな。

「ああ」

「聞きたいことがあったら、何でも聞いてくれ」

わざわざお前に聞かなくてもギルバートさんに聞けばいいんだけどね。まあ、召喚されたことに負い目を持っているんだろう。多分。

さて、聞きたいことか。ふむ。とりあえず俺の処遇だな。異世界から来た俺は知り合いがジルしか居ないので、微妙な立ち位置にある。流石に見捨てるなんてことはないだろうが。

「俺はこれからどうすればいいと思う？」

「そうだね。リョウをこの世界に召喚したのは僕の不手際だから、僕が責任を取るよ」

責任、ねえ……。

「じゃあ俺を雇ってくれよ。ただで養ってもらうんじゃ他の人が不満を持つだろうからさ」

それに、ただ養われるのもしゃくだ。

「何かできることはあるの？」

確かに。できること何もないじゃん。せいぜいが雑用くらいしかできねえ。本職の執事やメイドにはとてもじゃないけど敵わないからな。

いや、待てよ。俺には異世界の知識がある。それだけでも大きな武器になるし、取り柄が無いって答えるのはプライド的にアレだ。

「無い。……けど、俺には元の世界の知識があるし、頭も回る方だった。少しは役に立つと思うぜ」

「じゃあ、僕の話し相手にでもなってもらおうかな。身分は使用人

だから低いけど、事実上の側近だから気にしなくていいよ。」

使用人。悪い響きだな。俺が一人でみじめに雑用をする姿しか思い浮かばない。いや、使用人の人を蔑視している訳ではなく。貴族とか王族の使用人って色々無茶ぶりさせられそうで怖いじゃん。

だが、ここでぜいたくなことをいうのもなんだし、ここで言い返してギルバートさんとかそこの秘書さんに悪く思われるのは後々悪い方向に作用する気がする。

「他には？」

「この世界の歴史とか。知識はゼロに等しいからさ」

「そうだね。簡単に説明をしよう」

ジルから聞いた話は簡単に纏めるとこんな内容だった。

この国の名前はカタパルト王国。ジルは一応この国の王位継承者で父親は第二十四代国王らしい。あとは大体がテンプレ。魔法があったり騎士団があったり戦争があったり魔物が居たり。

地理的な説明をすると、東には大河を挟んで広大な土地が広がっている。しかし、そこは紛争地帯で数々の勢力がひしめきあっているという。確か、イピロスとか何とか言ったっけ。南と西は海で、北は中原と呼ばれているカタパルト王国以上の大国が覇権を争っているという。この大陸はアリア大陸というらしい。（余談だが、このアリアというのはかつて世界を悪魔から守ったとされている英雄神である）

歴史的な説明をすると、今はアリア歴１６００年。アリア歴１２

００年くらいまで大陸を治めていたピタゴラス帝国が崩壊してからかれこれ４００年ほど戦火が絶えないらしい。一時的に平和になった時期もあったがすぐその体制も崩壊したんだとか。

「へえ。あとさ、もう一つ質問。俺の使っている言語は日本語っていうんだけどさ、何で言葉が通じるの？」

「この国で使われている言語は、カタパルト王国を建国したケンジという人物が広めた言語なんだよ。日の丸語といわれている。カタパルト王国以外では主にイングリ語と大陸語が使われているんだ」

イングリ語って、明らかに英語だろ。

ただ、けんじという名前から早くても明治時代の人だろうし、文字も通じるな。良かった良かった。けど、戦前って確か右から左に読むんだったよな。めんど。

「もう無いの？」

無いわけないだろう。俺はこの世界をほとんど知らないんだぞ。ま、そんなのおいおい知っていけば良いことだし。急ぐ必要は無い。そして、それよりも重要なことがある。

信用できる人物がジルしか居ないことだ。

俺は今のところジルすら心からは信頼していない。だが、ひとまずの信用はしている。実は俺には何かの才能が眠っていてその力を利用するために飼い慣らそうとしている、とかいう事情かもしれないがそれでも大変になるのは後々のことだろう。しばらくの生活には苦労しまい。

だが、他の人はどうだろうか？

この国がたとえ王制だとしても、いや、だからこそ派閥とか政争とかはあるに違いない。そして俺はそういう情報を全く知らない。これは拙い。もしもばったり要人と会ったりしてジルとの関係を問い詰められたらアウト。もしかしたら処刑されるかもしれない。いや、悲観し過ぎかなこれは。

「俺の素性を知っているのは誰だ？」

ジルはう～んと悩んでいる。あの美人秘書さんは何か呟いている。あの人さっきから俺をがん見してきて嫌だわー。恥ずかしい。ギルバートさんは無言。だが、こころなしか微笑しているようにも見える。

「まずここに居る二人。それから僕が召喚の練習をしていた時に立ち会った大魔導士のハンナ。彼女には一応口止めしておいたから誰にも伝わっていないと思うけど。それぐらいかな」

「国王は？」

「父上にもまだ知られていないよ。父上は今異民族反乱軍討伐の為に、ビスケット城で軍を編成しているから」

良かった。国王なんて胡散臭い奴信用できないからな。

それにしても、異民族討伐か。人種差別があるっぽいねこの世界でも。

「じゃあ、俺のこと秘密にしておいてくれないか？信用できるかどうか分からないし」

「……。いや、多分ばれると思うよ。それに隠していたことを怒られるかもしれないし。でも大丈夫。父上には僕から話を通しておくから」

う～ん。まあ、大丈夫かなぁ。いや、大丈夫だ。なんとかなる。

「頼んだ」

すると、会話が途切れたのを察した美人秘書さんがすかさず会話に割り込む。

「ジル様。閣議の時間が迫っています。お急ぎを」

「分かった。じゃあね、リョウ。ギルバートに部屋とかその他諸々を教えてもらって」

「おう」

「ギルバート、頼んだよ」

「分かりました」

美人秘書に先導されて、部屋を出ていくジル。どうやらかなり急いでいるようだ。すると、ギルバートさんが言った。

「では、付いてきてください。部屋を今すぐには用意できないので使用人の相部屋になりますが」

「あ、はい」

そう言って部屋を出ていくギルバートさん。それにしても、相部屋かぁ。相手が気難しくなければ良いなぁ。

第1章第2話　俺を無視するな餓死してしまう（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございました。トッティーです。

ああ、早くシリアスパートに進みたい。ただ、ろくに世界観も人物も出していないのでそうはいかないのが現状です。できるだけ早くしますが、マンネリ化しては困るので笑いも入れたいですねｗｗ。才能があるかどうかは分かりませんが。

第1章第3話　人って群れる生き物だよね

執務室を出ると、階段を降りて大広場（偉人っぽい人の銅像アリ）を通り、二の丸みたいな施設に入った。執務室は七階だったらしい。二の丸は王城と比べると殺伐としている。まあこれでも十分豪華なのだが。

二十分ほど歩き、やっと使用人室のある場所に来た。３０２号室とか３０３号室とか書いてある。ホテルかよ。てゆうか、俺２０分も歩いたのにあんまり疲れないな。何故に？

ギルバートさんが３０５号室の扉をコンコンと叩く。部屋の中からの「よーっす」という声を聞き、ギルさん（もう略していいや面倒だし）は扉を開けた。するとその部屋では、一人の青年が寝転がっていた。髪は赤く、ギルさんが「リッツ」と声をかける。どうやらリッツという名前らしい。「うす」と答えた青年はこちらを向いて俺を認識すると、興味深い視線でジロジロ眺められた。

「よろー。俺の名前はモーリッツ・バイダー。リッツって呼んでくれ」

相部屋になる使用人。どんな人かと思ったら軽いけどひょうきんそうな青年だった。

ただ。露出する腕には切り傷が多数。筋肉も、自己主張をしない程度にだが隆々としていて。僅かに漏れる肉食獣のような雰囲気。この青年、恐らく使用人といっても雑務担当ではなく、護衛とかそこら辺だろう。

「よろしく。俺の名前はリョウ・ヨシダ。リョウ、でいい」

握手を交わす俺とリッツ。この性格なら、打ち解けるのも時間の問題だな。すると、ギルさんが「では、明日の朝また来るので」と言って帰ってしまった。彼も忙しいらしい。

「なあ、リッツは今日仕事は無いのか？使用人だろ？」

とりあえず会話。同居人と仲良くなりたいのは当たり前だし、情報収集には世間話が一番だ。この城や王国について、知って悪いことは無い。

「あー、今日は休日だよ。基本週休一日制だから、明日からはまたお勤め。一日中気を張らなきゃいけねえから疲れるよ」

「何の仕事やってるんだ？」

当然の疑問。一日中気を張るって、相当な激務だろ。

「皇太子様の護衛だよ護衛。身分は使用人だけどな。一日十二時間交替とかつらすぎるぜー。一日の半分は常に気を張って暗殺者とかに備えなきゃいけないんだよ。やってらんねーわ。休日も体力回復の為に女遊びも出来やしねえ。まだ二十一なのによ」

へえ、時間単位は日本と同じなんだ。距離単位とかはどうなんだろう。なんてことに頭を巡らせつつ、俺は思った。

この男、二十一で護衛って結構強いんじゃね？

「へえ、大変そうだナー」

やべえ、棒読みになっちった。いや、運動できるイケメンは頭が悪い。だから気付かない。オーケー。

「棒読みするなよ。お前にゃあ護衛のつらさは分からねえぜ」

そして、「護衛はつらいぜ」とか言って黄昏るリッツ。ナルシストのケがあるぞ。

「おーい」

あ、こっち向いた。

「まだ質問あるんだけど」

「なんだよ」

「飯食う場所とか、トイレとか、王城の地理を俺は知らないんだよ。教えて」

するとリッツは目を見開き、しばらくして憐みの視線をこちらに向けてきた。

「ハア？知らないで使用人になったの？」

「まあ訳ありでね。俺は結構常識に疎いんだよ」

そう言うと、リッツは何か納得したようだった。

「ほう。じゃあ、王城案内でもするか」

「まじで？ありがと」

ジルの護衛で疲れているというのに。面倒見の良い奴だな。

「どうってことないさ。

ただ、お前この国の中枢の問題を知っているか？常識が無いとか言ったから気になったんだけどさ、じゃあ過激派とか保守派とかそういうのも知らないわけ？」

うお！来たよテンプレな派閥争い。しかもリッツがわざわざ助言するほど激しい争いなんだろうな。

「知らないよ。何それ」

リッツは顔を曇らせた。俺が本当に知らないのか疑問視しているのだろう。

「お前まじで知らないのかよ。

簡単に言うとな、この国の貴族・将軍は基本的に三つの派閥に分かれているんだ。まず、過激派。この派閥はその名の通り、戦争大好き！な連中が集まっているんだ。この派閥はカタパルト王国の同盟国であるフリーダ皇国との同盟解消を求めている。その割に将軍よりも貴族の方が多いけどな。この派閥の中心人物は内務大臣のマリオン・レーデ様だ」

要するに戦前の軍国主義みたいな奴らか。東条英機みたいな？

「そして、革新派。この派閥は若い将軍が中心となった派閥で、軍国主義であることには変わりないが、フリーダ皇国との関係は維持

すべきだという主張をしている。その代わりに皇国の周りの小国を併呑すべきだとのご意見だ。だが、中心人物は騎士団長だし政治的立場は弱い。」

豊臣政権の武功派みたいなもんかな（加藤清正や福島正則など徳川家康が取りこんだ派閥である）。

「最後に、保守派。この派閥が今王国最大勢力だ。主張は……あんまり無いな。中心人物は宰相のユルバン・シャルロワ様。あの人は父親の出が商人だから超金持ちでね。他にも産業大臣や総務大臣や司法大臣とかいるぜ。中心人物である宰相が国王の信頼を得ているから、現在の主流派とも言えるかな」

金持ち派閥か？　腐敗してそうな匂いがプンプン。主張がないってことは、自民党民主党みたいに様々な主義主張を持つ人たちの寄り合いなんだろうな。

「こういう派閥の話になったら気を付けた方がいいぜ。変なこと口走ったら解雇されちまうからな」

怖っ。解雇どころの話じゃなくて社会的抹殺とかされてしまいそうだ。いわゆるタブーってやつみたいだ。

「へえ……。そういえばさ、リッツって将軍？貴族なの？それとも平民出？」

興味本位で聞いただけだったのだがリッツは眉をひそめた。過去に身分について嫌なことでもあったのだろうか。

「いや、俺の親父は過激派の将軍なんだけどさ。俺あんまりそうい

うの好きじゃないから家族と仲が良くないんだよ。会っても沈黙が続く感じの、いわば気まずい関係な訳」

「ふうん。大変だねえ」

良かった。リッツが無所属なら話しやすい。流石に嘘はついてないだろ。多少歪曲された情報になっている可能性は否めないが。

そういえば、派閥の話になってたけど、後継者争いってどうなんだろ。ジルに兄弟がいるんだったら、織田家の信長と信行の家督争いみたいに派閥が二分されそうだ。今リッツは自分を無所属って言ってたし、聞いてみるにこしたことはなさそう。

「ジル王太子にはさ、兄弟っているの？」

「ああ。異母兄妹の妹が二人と、同腹の幼い弟が一人いらっしゃる。それがどうかしたのか？」

「いや、後継者争いってあるのかなーって思ってさ」

唯一の兄弟がまだ子供な上同腹らしいから多分無いのだろうと思って質問したが、予想に反してリッツは渋い顔をした。

「表面上はないんだが……実はあるんだよな」

ほほう。裏では対立してるのか。

「へー、誰と？」

心なしか声の小さくなったリッツに合わせてひそひそ声で質問す

ると、リッツは一瞬躊躇してから口を開いた。

「マクシム様だ。陛下の異母兄弟だったが外交にその能力を発揮したアリー・カタパルト様の長子で、特にどの派閥と仲がいいという訳ではないが、暗躍しているという噂がある」

ふーん。顔色変えたり躊躇したってことは、リッツはその噂を信じてるのだろうな。

「それから、マクシム様は魔術理論学について優れた才能を持っている。現在は王家から与えられた領内で魔術の研究をしているらしいな。僅か十二歳の時にかの高名な魔術師・魔術理論学専門家のキュトラ伯を唸らせる論文を書いたというのだから、相当なものなのだろうな」

魔術理論学か。魔術にも科学的な理論があるのだろうか。

「で、キュトラ伯って誰よ？」

「かつては魔導局局長を務めており、現在は下野してマクシム様と共同研究している、生粋の魔術理論学士だ。魔導国家であるセリウス王国出身だが、カタパルト王国に仕えて魔術技術の革新に大きく貢献した為伯爵の爵位まで貰って現在に至る。魔術理論学のドンだな。彼女に並ぶ学士は五人にも満たないだろう」

女性の研究家か。なんか凄い人みたいだ。っていうかそんな高名な学者にまで目をかけてもらうって、マクシム様は頭良いんだろーなー。

俺にもう疑問がないということを見てとったリッツは当初の目的

を思い出し、マクシム様について想像している俺に声をかけた。
「じゃあ、王城を案内するぞ。重要な場所だけ教えるから、覚えとけよ」
「よろーっす」
立ち上がり、部屋を出ようとするリッツ。性格はチャラそうだがやっぱり面倒見は良いのだろう。頼りになる。

「さて、ここが第二食堂。使用人用の食堂だ」
大体の地理を頭に入れ、最後に王城二の丸の使用人用食堂に来た俺達。向こうにも厨房があり、そこは兵士用の食堂らしい。人はたくさん居るが、黒髪が半分と金髪が半分。赤色や青色の髪の人がちらほら見える程度だ。
「黒目黒髪は聖なる勇者様だから。ハイこれひのきの棒だよ。頑張って魔王倒してねｗｗｗ」なんてことにはならないっぽい。それに、奇異の視線を投げかけられることも無いだろう。
「そうだ。俺まだ夕飯食ってないから食っていいか？つかお前も食う？」
「いや、俺はいいよ。さっき食べたばっかりだし」

厨房にいるおじさんに何かメニューを頼むリッツ。だが、俺には聞き取れなかった。俺の知らない食べ物だ。ま、食文化が違うのは想定内。

「なあ、メニュー見せて」

んなことより文字大丈夫かなぁ。心配になってきた。通じなかったら萎えるぞ。

「めにゅー？何それ」

む、横文字は通じないのか？　違うか。メニューって確か和製英語じゃなくてれっきとした英語だったよな。つまり、こいつに英語は通じないと。ま、日本語が通じればいいんだけどね。

さて、なんて言えば良いんだろう。横文字って普段使い慣れているから、普通の日本語に置き換えるのは面倒くさいな。

「料理名の一覧みたいな感じ。俺の地方ではそう呼んでいた。あるっしょ？」

上を指差すリッツ。上には、「栗栖飯」とか「羅？麺」とか、さらには「磁捌焼」とかいう素材の全く分からないものまである。

解読不能な料理の素材に頭を悩ましていると、リッツはもう飯をもらったようで「行くぞ」と言われた。机に座った俺はリッツの飯を見てみたが、チャーハンみたいだった。

「それ、何？」

「栗栖河原飯」

栗の入った酢飯かなぁ。それにしてもモグモグ食べるリッツを見ていると、俺も腹が減ってきた。そもそもさっきは本格的に食べたわけではないのだ。

「なあ、俺やっぱし飯食うわ」

「先に食えばいいのに。まあいいや。金ある？」

金。一番重要なものをすっかり忘れていた。つか食堂でも金がかかるのかよ。

「無いよ」

「この食堂はな、身分証明書があればタダで食えるんだけど無いと金払わなきゃいけないんだよ。身分証明書は発行まで時間がかかるからな。リョウは持ってないだろ。まあ、今日は先輩としておごってやるよ」

おお！優しい奴だ。

「ほい、５０円」

安！

……いや、物価が違うのか。手触りも見た目も日本の貨幣とは違うし、単位の呼び方だけが同じなのかもしれない。

「お勧めはな、この羅？麺だ」

ラーメン。こっちも味は同じなのかなぁ。

味噌にするか塩にするか考えながら、厨房のおじさんに頼みに行く俺。だが冷静に考えてみれば味噌とか塩とか選べないじゃん。

「すいません、ラーメンください。お金はこれです」

厨房のおじさん改めおっちゃんはニタリと笑う。

「見ない顔だねぇ。新入りかい？」

「まあ、そんなもんです」

話しつつも調理している。プロだ。

「太麺と細麺どっちがいい？」

「細麺で」

おっちゃんが調理している間、暇つぶしに食堂の人々を見ているのだが、怖そうな人多いな。こっちは使用人が多いけど、第一食堂の方はごつい兵隊さんばっかり。結局兵士や使用人にも女性は少なく、いたとしても筋肉隆々のマッチョだけという事実に悲しくなっているうちにラーメンはできた。

「へい、お待ちィ！」

おお、ウマそう。匂いがたまらないですなー。

調子に乗ってポワポワとした匂いを嗅ぎながら歩いていたら、兵隊さんと肩がぶつかってしまった。

「あっ……」

ビシャァーー。

やってしまった。兵隊さんにラーメンをぶっかけてしまったのだ。

オワタw

「すいませ

「っざけんなコラァ！」

第1章第3話　人って群れる生き物だよね（後書き）

第1章第4話　光の勇者、闇の魔王

「あぁーー。散々だった」

あの事件から二時間。いまだに頬がひりひりする。歯も痛い。そう、俺はあの兵隊さんに頬を思い切り殴られたのだ。バシィン！という効果音と共に。まさか俺の頬からあんな音が出るとは思わなかった。

「ありゃあ、お前が悪いだろ。ただでさえ兵士は気が立っているのに羅？麺ぶっかけられたら、気の短い奴はキレるぜ」

いや、でも本当に痛かったんだ。しかも殴られて倒れた上につばを吐かれたんだぜ。確かにラーメンかけちゃったけどあれは酷すぎる。つか、あんなマッチョはどうせ一日中気が立って……ん？

「ただでさえって何？なんかあったの？」

リッツは露骨に面倒くさそうな顔をした。すいませんね。これが俺の性分なんで。考察好きなんだよなー。まあ、口が達者と言われ近所の不良グループにいじめられた中一の夏の記憶はまだ鮮明なのでいくらか抑えているのだが。

「分かんねえの？陛下の御親征のせいだよ。あいつらは折角の戦争なのに城に残されたからな。不満が溜まっているんだよ」

折角の？　不謹慎だな。日本でそんなこと言ったらボロクソに叩かれるぞ。

「この国はあんまり戦争しないのか？」

「ああ。前に戦争したのが三年前かな。その前が……七年前か。どちらも内紛の鎮圧に過ぎない。これが実質的に最後の対外戦争かな。今代の国王陛下は戦争を好まれないからなー。そのおかげでカタパルト王国は平和になったが、その分兵士の出世の機会が失われたんだ」

「それで少ないって……。他の国は毎年戦争しているのか？」

「ああ。今は戦乱の世だからな。東の方にある紛争地帯やカタパルト王国以上の大国が群雄割拠している北方では毎日戦争が起こっているよ」

ふ～ん。戦国時代みたいなものか？

「よくそれでこの国は平和を保っているな」

そう考えればこの国は平和だ。

「カタパルト王国は南と西を海に囲まれている上に北で領土が接しているフリーダ皇国と同盟しているから。今回の御親征も南のマグナ族っていう民族が反乱したからであって、他国に攻めたことはここ十五年は無いな」

そういえばジルが「南と西は海」とか言っていたな。地の利ってことか。

「へえ」

それにしてもこの国が平和で良かった。いきなり戦争が起こって「これが、戦争……」と言いながら敵の兵士を大虐殺！　なんて展開にはならなそうだ。いや、まあ俺に魔法の才能があるのかどうか分からないが。魔法使えなきゃ俺ただの一般人だからねー。虐殺なんて出来んよ。

そういえば、リッツって魔法使えるのだろうか？

「なあ、リッツって魔法は使えるのか？」

まさか使えないなんてことは無

「使えるわけないだろ」

え！？　使えないの？　しかも「使えるわけない」って……。この世界でも魔法使いは貴重なのか？（元の世界では貴重どころではなかったが。いや、実は居たのかもしれないけどさ）

「この国に魔法使いって何人いるんだ？」

「七千人。魔法使える奴なんて千人にひとりも居ないんだぜ」

つーことは人口は一千万人くらいってことか。日本より全然少ないな。

「リッツより強い魔法使いって何人居るの？」

よく考えてみれば、護衛なのに魔法使えないんじゃ駄目じゃん。暗殺者に魔法使われたらどうするんだよ。

「魔法戦士は三千人ほど居るが、俺と同じくらいが三十人位。俺より強いなんて五、六人しか居ないぜ。そもそも、魔法は戦闘にはあまり使われないからな」

どんだけ〜〜。魔法使えね〜。

「リョウは使えるのか？」

「さあ？」

「さあ？って……」

魔法かぁ〜。使えれば良いんだけどなぁ。そうだ！　測ろう。（異世界召喚もので）よくある魔力計測器を使えば良いじゃないか。

「俺魔法のこと知らないからさ。魔力を測れるモン無いの？」

案の定ある様だった。だがリッツは難しい顔をしている。

「いや、あるんだけどさ……魔法戦士の屯所だから、あんまり行きたくないんだよ。」

「何で？」

「まあ……なんていうか、性格がとても個性的な人がいるんだよ」

個性的って……要するに変人ってことか。変人耐性の強い俺には大した問題でもないな。

「いいからいいから。俺は気にしないぜ」

まあ、リッツが気にしているんだけどな。だが俺にはあまり関係無い。早く魔力を測定したいのだ。期待大。
そう思いながら俺が立ち上がると、リッツも渋々といった様子で立ち上がる。

「ま、後になってから文句言うなよ」

そう吐き捨てるリッツ。つか、そんなにヤバい人なのかよ。

リッツいわく個性的な魔法戦士がどんな人なのか想像しながら、魔法戦士の屯所に向かった。このとき俺は後々後悔するとは思いもしなかった。

「どーも、リョウっていうんですけど。魔力測ってみてもいいですか？」

どうやら魔力計測器を使うには、大魔導師であるハンナさんに許可をとらなければいけないらしい。この人をリッツは苦手にしているようで、「一人で頼みに行け」と俺に言った。自分は物陰に隠れるようだ。それにしてもハンナさんか……。どっかで聞いたような名前だなぁ。

でも、ふたを開けてみればただの陽気なおばさんだった。歳は恐

らく四十代後半かな。白髪の生え始めた黒髪にパーマをかけている典型的なおばさんだった。内心『人を弄ぶのが好きな美人お姉さん』を期待していたのだが、やっぱりおばさんだった。まあ、俺にそんなルートがあるはずないか。

「あんた、皇太子様に召喚された坊やじゃないか。どうしたんだい？」

そういえば、ジルが言っていた気がする。もう一人俺の誤召喚に立ち会っていた人が居ると。この人だったのか。

つーか、人前でんなこと言うなよ。リッツに聞こえたかも知れないだろ。

「今やること無くて暇なんで、折角だから魔力を測ってみようかな、と思ったんで」

すると、ハンナさんはその目に好奇心を浮かべた。

「面白そうだね。あたしも見ていいかい？」

「面白そうとは？」

「まあ、お前さんが知らないのも当然か。異世界から来た人間は魔力が大きい上に伝説の属性『光』もしくは『闇』を使える可能性が高いらしいんだよ。北には王が死ぬたびに異世界から人間を召喚する国もあるし、カタパルト王国の初代国王も一説には異世界出身らしいけどみんなこの条件に当てはまるんだよ」

なるほど。まあ俺の属性は多分光だな。隣には超人幼馴染なんて

居ないから闇ってことは無いだろう。

「じゃあ、案内してください。見てもいいんで」

すると、ハンナさんはにっこりと笑った。もしハンナさんが三十年生まれるのが遅ければ見とれたかもしれないが、所詮はおばさん。その笑顔に攻撃力は無い。

「ほれ、リッツ。お前さんがそこに居るのは分かっているんだよ。出てきなさい」

すごすごとリッツが出てくる。耳良いんだな。って、今の会話聞かれたなら俺が異世界召喚されたのばれちゃったのか？　そう思いリッツを見たが、たいして驚いてもいないようだった。

「うへぇ、見つかっちまった。それにしてもリョウ。お前異世界から召喚されたのか。執事長から『殿』付けで呼ばれていたから何か秘密があるとは思っていたんだがなぁ。まさか異世界人とは」

ギルさん、執事長だったんだ。

「じゃあ、行くよ」

ここは屯所の一室。薄暗いこの部屋に、お目当ての魔力計測器があった。丸く、青色なそれの真ん中は透明色である。

「ここに現れた色が属性を示すのか」

さっきハンナさんに説明を受けた。基本的に魔法の属性は五つあるらしい。火属性、水属性、雷属性、風属性、土属性の五つだ。それぞれ赤色、青色、黄色、緑色、茶色で示される。他に伝説の属性として光属性と闇属性があるが、それぞれ虹色と黒色で示される。

また、魔力量を示すのは透明色の部分の下にある線である。この魔力線というらしい線が横に一メートルほどあり魔力量に応じて属性色で示されるのだ。（温度計のようなものだと考えればいい）この線も、通常時は透明である。

「どうすればいいの？」

「上部にある鏡に手を当てて。それだけで測れるから。簡単だろ？」

言われた通りに手を当てる。すると、透明色だった部分が虹色に発光し始める。

「これは……光属性」

そして、下の魔力線を見るとそれは

「……、――――ッ」

透明のままだった。

第1章第5話　無能力の真実、も糞もあるかボケーーッ

そんな、バカな……。魔力が、無い、だと？

「嘘……」

絶句。

「ありえない……魔力が無いなら何故色が出る？」

ハンナさんいわく、魔力の無い一般人はそもそも色が出ないらしい。だが、俺の場合は色は出ているのに魔力線は無いのだ。異常である。これは、もしかして何かのフラグなのか？

いや、かすかにある。一センチにも満たないが、ある。

「なあ、魔力線はほんの少しだけあるぜ」

リッツも気付いたようだ。

「本当のようだね。でも、こんなに短いって……」

俺の魔力は少ないらしい。少し萎えた。いや、魔力線が無いなら無いで何か秘密があると思ったんだがなぁ。魔力計測器では測りきれない程の魔力、とか。でも単純に魔力が少ないだけらしい。

「なあ、俺の魔力はどれくらいあるんだ？」

「一般人の百倍。そして、下位の魔法戦士の百分の一倍。ちなみに

あたしの一万分の一倍」

なっ。……最初の部分を聞いて喜んだ俺は馬鹿みたいだ。ほとんど役に立たないではないか。しかも最後の方はただの自慢になってるし。

「それって具体的にはどれ位なんだ？」

一応聞いておこう。嫌なことは一気に味わえ、が俺の最近のモットーだから。

「う～ん。そうだね、直撃すれば蛙が死ぬくらいの攻撃を一回するのが限界……まあ、魔力を限界まで使ったら死ぬんだけどね」

って、使えねーじゃん！カエルすら倒せねえ魔法とか要らないだろ。

「同情するよ」

リッツ。同情するなら魔力をくれ。異世界に来たのに魔力ほぼゼロじゃ悲しすぎる。何のために来たのか。無駄に落ち込んだだけじゃん。

「ほら、辛気臭い顔しないで」

辛気臭い……俺の心に百のダメージ！

いや、もうネガティブ思考は止めよう。どんなにネガティブになっても、結局俺は魔力が無いんだ……ってそれが駄目なんだよそれが。つーかそもそも心の中でノリツッコミしてどうするんだってーの。悲しくなるだえじゃねえか！

「でも、珍しいねぇ……」

ふとハンナさんが呟いた。珍しい？　魔力がないってことがか？　でも、確か魔術師は千人に一人もいないはずだったよな。どういうことだろう。

ハンナさんは俺の考え込んでいる姿に気付くと、解説を始めてくれた。

「ん？　ああ、知らないのね。召還された人はね、莫大な魔力を持っているもんなのさ」

「え、でも俺魔力ありませんでしたよね」

「そこよね、問題は。召喚獣だって大半は貴方よりも魔力を持っているでしょうに、お前さんはどうしてそこまで魔力が少ないのかしらねぇ」

なるほど。獣と間違えて召喚したってジルは言ってたし、本来俺位魔力の低いザコい獣を召喚したのだろうでＦＡだな。

ただ、もう一つ疑問が残る。

「あれ、召喚獣って召還者よりも魔力が少ないものなんですか？」

「別に召喚獣の魔力が少ない訳じゃないんだよ。召喚獣は平均的に人を一人焼き殺せる程度の魔力は持ってる。ただ、召還された『人』は別格。そこらの召喚獣じゃ太刀打ちできない。竜に匹敵する魔力を有していることだってザラにあるのさ」

「竜？」

「お前さんの世界には竜はいなかったのかい？　羽の生えた巨大な蛇のことだよ。身長は人の三倍あり、炎を吐きだす恐ろしい獣さ」

へえ、ドラゴンまで存在するんだ。でも、リアルにいたら怖い気がするわ。狼瞬殺レベルの獣とか、遭遇したら一貫の終わりじゃん。

「本当だったら滅茶苦茶危険な害虫じゃないですか。竜が暴れたらどうするんですか？」

「その心配はないわ。竜はカタパルト王国にはいないもの。アリア大陸の東方にひっそりと住んでいるらしいわ」

ほうほう、竜はいないのか。良かったわー。戦争中に竜に火炎放射されるとまずいからなー。攻撃の範囲外でたとえ損害を受けなくても、兵士は恐慌して士気も下がるだろう。

「あんた何にも知らないのねー。じゃあさ、あんたこの国の概要も知らないんじゃないのぉ？」

話を切り替えたシュマンさんの言葉に、俺は「そういえばカタパルト王国のこと殆ど知らなくね？」って気付いた。

「王様がいて、世襲制で、貴族は、流石に居るんですよね？　で、後は、……。うーん。全然知らないですねー」

やっぱり、と微笑んだハンナさんは国体についても説明をしてくれた。

「言ってることは間違っていないね。百七十六諸侯って呼ばれてる貴族と国王陛下の合議制が、カタパルト王国の国体なんだよ。国王の直領は王国内の八分の一で残りは貴族が領地を有しているから権力は相当あるね。それをまとめているのが国王陛下ってこと。」

江戸時代みたいなもんか？　多分システムは似ているぞ。ヨーロッパでいうと、中世の封建制度にあたるのかな。

「執行部は六大臣四将軍と宰相で成り立っている。つまり、この国を動かしているのはこの十一人と国王陛下なのさ。そしてこの執行部の選任は、国王陛下が決めるんだよ。ま、十一人のうち九人は貴族様だから実質有力貴族と国王の合議制ってことになるんだよね……」

そこまで一気に話したハンナさんの表情は憂いを帯びた。恐らくこの合議制に不満を持っているのだろう。すると……今は保守派が政界を牛耳っているのだからハンナさんは過激派か革新派なのかな。確証は無いけど。そしてもう一つの疑問。

「選ばれた貴族って国元の政治はどうしているんだ？」

「貴族は基本的に国元の政治は代理人、つまり家族や家臣に任せているのさ。選ばれなかった貴族もその下の軍事職や政務職に就くからね。ただ、下位軍事職の貴族はやることが無いから自ら政治をしているよ」

やっぱり江戸時代に似ている。

「こんなところかね。まだ知りたいことがあったらどんどん言って

くれるかい？」

「ありがとうございます」

そういえばリッツはさっきから一言も発してないな。このおばさんに苦手意識があるというのは本当みたいだ。ハンナさんも敢えて話しかけようとはしない様子。

「ま、こんな場所でいつまでも駄弁ってる訳にもいかないし、外に出ようかね」

「ですね」

ともかく、俺らは屯所に戻った。。そう、この時俺はこの行動が俺の運命にどんな作用をもたらすのか知るよしは無かったのだ。運命とは時に不可抗であり時に脆い。だが気まぐれな運命に抗うのは愚かな話である、とは一概に言えない。なぜなら……って適当なことを思考して勿体ぶるのはやめよう。

単刀直入にいうと、そこは、屯所は……

桃源郷だった。

「――――ッ。これが……異世界ッ」

そこには、ありとあらゆる美少女が揃っていた。ロリからお姉さん系まで。無乳（ナイチチ）から巨乳まで。ショートヘアからロングヘアまで。髪の色も黒青赤ピンク金茶等々。総勢五十人以上もの美少女は確か

に亮の目の前に存在した。
亮は修学旅行で女湯をのぞくような変態ではない。しかし、この光景には目を奪われた。まさに、天国。今亮は確信した。異世界に来て良かったと。

歓喜。そして、

「リッツさん」

「リッツ」

「お兄ちゃん」

「リッツ君」

絶望。

その思いは僅か三秒で砕かれた。この美少女ズは決して天使ではない。リッツのハーレムだ。何故だ。何故リッツがハーレムを築いているんだ！

「みんな久しぶりだな」

死ねぇぇぇぇ――――ッ。貴様、この五十人全員を……その毒牙で手に掛けたとでもいうのか！返せよ。世界遺産、いや絶滅危惧種である美少女を、返せぇ――――ッ。

己の中で渦巻く殺意を胸に、リッツの顔を見た。さっきまで意識もしていなかったが、美形だ死ね。赤い髪は粗暴な雰囲気を盛りたてつつも美形であることをさりげなくアピールしている死ね。強靭

な意志を秘めた眼は見るだけで女を虜にしてしまうだろう死ね。

「どうした？」

「何でも無いよ死ね」

おっとうっかり口が滑った死ね。リッツ改め鬼畜野郎が戸惑った表情を浮かべるとちっちゃい女の子がいきなり鬼畜の背中に抱きついた死ね。

「え！？ちょ、おいやめろっつーの」

ゴゴゴゴゴ。　鬼畜はこの轟音が、俺から発せられたと気付いたらしい死ね。即座に幼女を庇い、俺をにらむ死ね。そうか、そろそろ死にたいか。そろそろ我慢も限界だ。

「大丈夫？リア」

「大丈夫だよ。あぅぅ。この人怖いよぅ」

俺のことか。俺のことかァ――――ッ。

「ｇｒｗコｐｚｌロｖスｇ」

「あぁーー。散々だった」

あの事件から三時間。いまだに頬がひりひりする。そう、俺はあの鬼畜野郎改めリッツに機先を制され頬を思い切り殴られたのだ。バシィン！という効果音と共に。まさか一日で俺の頬があんな音を二回出すとは思わなかった。

「ありゃあ、お前が悪いだろ。いくら魔力が無かったとはいえあいつらのいる前でいきなりキレられたら俺も相応の手段を取らざるを得ないよ」

いや、でも本当に痛かったんだ。主に精神面が。しかも魔力ナシってカミングアウトされた上に美幼女美少女美女とイチャつかれたんだぜ。確かにキレるのがいきなり過ぎたけどあれは酷すぎる。主に精神面に対して。つか、てめえみたいなリア充はどうせ一日中フラグが立って……え？

こいつ、俺が何でキレたのか気付いていない？無自覚ハーレム野郎には死を……いやもういいや。どうでもよくなってきた。

「おいどうした。なに泣いているんだよ」

何故だ……何故俺の前にはヒロインが出てこないんだ。異世界から来たんだよ？魔力無いけど異世界出身だよ？それなのに何でなんだよ。

召喚者の巫女さんとかさ。居ないじゃん。なんでよ。

もしや……。ジル、リッツと美形な男ばかりが俺に接近するとい

うことは、まさか！　そっちか！　そっちはやだよ！　無理無理生理的に無理だ！

いや、冷静になろうか。そんなことが現実で起こってたまるか、って話だよな。有り得ん。うん、そんな展開が俺を待ち受けている訳が無い。

「まあいいか。俺はもう寝るぜ」

「早くないか？」

まだ日は傾いていない。明るいままだ。

「いや、俺明日からまたお勤めなんだよ。あー今日はお前の所為で貴重な休み時間を失ったぜ」

本気で責めている訳ではないだろう。会ってまだ一日も経っていないのに、信用が置ける友を持てたようだ。

「じゃな。また明日」

「おう」

そして俺の意識は闇に呑まれた。それは、異世界での初めての夜だった。

第1章第6話　秘書って頭良さそうな感じするよね

「おい、起きろ。起きろってば。おい！」

ん～？うるさいなあ、誰だよこんな朝早くに。今日は学校無いだろう。もうちょっと遅く寝てもいいじゃないか。

「ほらリョウ！王太子様がお呼びになっているんだぞ！」

そうだ。俺、異世界に来たんだっけ。すっかり忘れてた。くそ、起きたくねえなぁ。

「わーったよ。分かった」

眠気を抑えて起きると、目の前にはリッツとギルさんがいた。何の用だろうか。そういえば、ギルさんが昨日朝にまた来るとか言ってた気もする。

「それで、何の用、ですか？」

何故敬語にしたかというとギルさんがいたからである。

「王太子様が呼んでおられるから、執務室に来てもらいますか」

仕事。昨日勢い任せで見栄を張ってしまったが、日本の知識は役に立つのだろうか。そもそも仕事だるい。だが今更遅い。黙ってギルさんに付いていくしかないな。なんとかなるでしょ。そう考え、部屋を出る。

「じゃあな」

どうやらリッツは来ないらしい。護衛の仕事無いのか？

そして二の丸から本丸（？）にレッツゴー。階段を上り、執務室に来た。てか、相変わらず豪邸だなぁ。ま、人口が一千万人くらいの国の王様だから仕方がないのかもしれないが。

そして、ギルさんが扉を叩き「ギルバートです」と言う。しかし、答えが返って来ない。少しばかり眉をひそめたギルさんが同じことを繰り返したが、これも無視。居ないんじゃね？　って思ったらギルさんが静かに扉を開けた。こころなしかギルさんが怒っているように見える。

そして、謎が解けた。そう、ジルはあの豪華な椅子に座っていた。隣にはあの美人秘書さん。ジルの机には前回より若干多めの書類があり、一枚の書類を眺めながらペンを回している。へー、ペン回しってこの世界にあったんだ。

しかし、ジルの名誉の為に言っておくと彼は決してギルを無視していたのではない。そう彼は……

「ジル様。起きてください」

寝ていたのだ。つか寝ながらペン回しって、何気に凄くね。

「……ジル様」

怖ッ。俺怒りの対象じゃないのに鳥肌立ってきたよ。すると、ジルは目を開けた。

「あ、ギルバート。おは

「太子たるもの臣下より早くに起きるのは当然。それも執務中に寝るなど言語道断でございます」

意訳：ぶっ殺すぞてめえ寝坊すんなボケ

「は、はい。すいませんでした」

気圧されたジルは相手が家来であることも忘れて敬語を使う。お前次王様になるんだろ？そんなんじゃダメでしょ。威厳が無いよ。

そしてギルさんは隣の美人秘書さんにも牙を剥(む)く。

「リディー殿も君主を寝坊させるとは、臣下の心得を全く理解しておりませんな。これからは気をつけてもらいたいものです」

「いえ、ジル様を寝不足の状態でそのままにしておくよりは寝た方がいいかと」

しかしリディーという名前らしい美人秘書さんはこの殺気（むしろ呆れ）に平然と応対する。この人大物だ。

しばらくバチバチと目線での攻防を繰り広げた二人だが、バカらしいとでも思ったのかギルさんが苦笑した。そして、ギルさんの怒りが収まったと判断したジルは俺に話を切り出そうと体を前に乗り出す。

「リョウには僕の秘書をやってもらいたいんだ」

秘書って、俺に合わない気がする。もっと頭のいい人の方がそれっぽいでしょ。キャラ違ぇ。

「秘書って何すればいいの？」

「具体的には来客の接遇、予定の管理、調査、書類の管理をして欲しい。詳しいことは第二秘書のリディーに聞いて」

「オ、分かった」

オーケーって言おうとしたんだけどな。横文字は通じないんだよなー。面倒だ。

「君には専用の秘書室で働いてもらうから」

「おう」

「じゃ、リディー。頼んだよ」

「分かりました」

やべ、テンション上がってきた。しかも専用の秘書室で二人っきりでしょ。これはもう×××ルート真直線間違いなし！これぞ男の夢！

「では、リョウ殿。付いてきてください」

「は、はい」

リディーさんと目が合って俺は顔を赤くした。いや、美形でも童

顔でもない奴が赤面してもきもいだけ、なんて言うなよ。だってこんな美人と目合うと誰だって恥ずかしくなるでしょ。リッツみたいな美形ハーレム野郎は別として。

「では、ジル様。失礼します」

意外と執念深いという自分の新たな一面を自覚した俺は、リディーの後を追い、部屋を出る。

秘書室は執務室と一つ階が違う、つまり六階にあるようで、階段を一つしか降りなかった。途中巡回兵の人と会ったが、目つきが怖かったなぁ。「誰だコイツ」って目で見られた。

「この部屋です。覚えておいて下さい」

無理無理！　こんなでかい城の地理なんて覚えられないだろ、ｊｋ。リディーさんの印象を悪くしたくないので、肯定的に答えることにするけどさ。俺って単純だわー。

「善処します」

冷たい視線で見つめられた。どうやら俺の答えがお気に召さなかったらしい。どっかの悪徳政治家みたいな回答だから満足されるとは思っていないが。

「では、仕事の説明をします。さっきジル様が仰っていましたが、あなたの仕事は来客の接遇、予定の管理、調査、書類の管理です。しかし、異世界出身であり秘書の仕事をしたことのないあなたに全てを任せるのは心許ないのでしばらくは私の行動を見ていてください」

ホント俺に対する言動が刺々しい気がする。ツンデレ？　ツンデレなのか？　それならいいけど、違う気がするのは気のせいだろうか。

「はい」

「まず来客の接遇についてですが、基本的に来客者が来た時にはまず秘書室に連絡が入ります。秘書室に誰もいなかった場合は執務室に。そして、来客者には三つの種類があります。会わせなければならない人、会わせた方がいい人、会わせない方がいい人の三つです」

「はい」

「会わせなければならない人は、分かりますよね。国王陛下や皇族の方や他国からの使者や大臣の方々、つまり要人です。会わせた方がいい人か会わせない方がいい人かは微妙ですので、秘書の裁量に任せます。また、会う場合はジル様と同席する可能性が高いです」

とりあえず、偉い人には会わせればいいのか。

ただ、秘書の裁量に任せるって言われてもなー。裁量も何もねーよっていう。

「はい」

「では、予定の管理に移ります。予定はこの予定表に書いてあるので、予定が入ったらこの手帳に書いて下さい。
あとは、調査ですね。調査とは、ジル様に命令を受けた場合のみならず仕事に必要だと思ったら実行してください。調査するのに人手

が足りなければ私に言って下さい。秘書室役員は二十人いるので」

調査って、アンケートとかかな。よく分からんが。

「はい」

そのうち分かるだろ。

それにしても、秘書室役員二十人って凄いな。流石は王太子様。三千五百万人の次期トップなだけある。

「最後に、書類の管理ですが。書類にも、見せなければならないもの、見せた方がいいもの、見せなくてもいいものがあります。見せなければならないものは、要人からの手紙や重要な仕事の案件です。見せた方がいいものか見せなくてもいいものかは秘書の裁量に任せます」

来客の接遇と同じだな。

「はい」

「また、その書類は種類別に保管して下さい。後々使うこともあるかもしれません」

プロファイリングか。俺、整理苦手なんだけど。いつも部屋は散らかしっぱなしだったし。

「はい」

「まあ、仕事は大体そんなところです」

そして、一連の説明を終えたリディーさんはふう、と息をつき椅子に座る。俺も促されたので向かいの椅子に座った。そして、気まずい空気がこの部屋を支配する。くっ、悔しい。折角美人と二人きりなのに、話しかけずらいよこの人。もっとさ、軽い雰囲気出そうよ。

コンコン。

「失礼します」

第1章第6話　秘書って頭良さそうな感じするよね（後書き）

ここまで読んでくださいましてありがとうございました。トッティーです。

実は僕最初は亮のことを軍師にしようとしました。しかし、何故秘書なのか。

その理由は、作者の適当なストーリー作成です。ここらへん、書き始めた時はまだ考えていなかったんですよ。さっさと戦争始めるつもりだったのですが、そうにもいかず、クッションを挟まざるを得ないんですよねこれが。

そして使用人と言ってしまったからには軍師みたいに偉そうな仕事をさせるわけにもいかず、だからといって美少女成分も無いのに雑用させてもつまんないだろうなぁと思いまして。

第1章第7話　迷子の俺のｏｖｅｒｒｕｎ？

入ってきたのは若い男だった。彼はリディーに書類の束を渡して、そのまま部屋を出て行った。

「これが、書類です。私のやることを見ていてください」

リディーは一枚一枚書類を見て、二つに分類する。机の右側と左側にそれぞれ重ねているのだ。右側には「歩兵軍四隊経理担当より」とか「産業省生産局局長より」とか難しそうな手紙……というよりは仕事の案件っぽいのが積まれている。左側には「国王陛下より」とか「王国第三王女より」とか私用の手紙であり、当然こちらの方が量は少ない。

「では、とりあえず貴方はこの手紙をジル様に届けて下さい」

「はい」

リディーが指差したのは左側の手紙。右側の書類はさらに仕分けするらしい。ご苦労なことで。

「では、失礼します」

外に出て、少しばかり思考。さて、

「忘れた」

そもそも覚え切れるわけがないのである。当然、俺は誰かに道を聞くしかない。しかし適当に歩いて人を探してもなかなか見つから

ないのだ。もう十分は経っただろうか、という頃に俺はやっと警備員の人を見つけた。いかついおっさんだが、仕方ない。

「あの……すいません」

「なんだね」

「俺、道に迷ったんですけど。教えてくれませんか？」

「君、王城の地理が分からないのか？」

「は、はい。昨日登城したばかりなので」

すると、おっさんは疑うような眼差しで俺をジロジロ見る。だが、俺の様子を見て俺の言葉は真実だと思ったのかそのいかつい顔を少し緩めた。

「で、どこに行きたいんだい？」

「ジ、王太子様の執務室です」

流石に一国の王子様を呼び捨てにしてはまずいよね、ということで王太子様と呼んでおく。驚いたのか目を少し見開いたおっさんは俺に問う。

「何故だね」

「この書類を王太子様に届けろとの命令をいただいたので」

「誰に」

リディーさんにも一応様付けした方がいいよね。

「第二秘書のリディー様にです」

「ふむ」

しばらく沈黙が続いた。どうやら俺の回答は疑念を再燃させたようである。

「では、何か証拠となるものでもあるかね」

職務質問みたいだ。とは思ったが言わないでおく。言っても意味は分からないだろうが。

さて、証拠、か。別に俺はジルに何か貰った訳でもないし、どうしよう。いや、あるか。確かな証拠が。

「これは証拠にはなりませんか？」

それは、国王からの手紙。この手紙を持っているということは、それだけで十分な証拠となるはず。そして案の定おっさんは態度を急変させた。

「……、すまない。どうやら私の思い違いだったようだ」

頭を下げる。まあ、国王からの手紙の配送を任せられている俺がもしかしたら偉い人なのでは？　と思ったのだろう。あながち間違ってないけどね。一応ジルと対等に話してるし、偉くないという訳ではないだろう。

「いえ、こちらこそ疑念を抱かせるような行動をしてしまってすいません」

「それでは、王太子様の執務室への道のりを言うぞ。まず、この道を真っ直ぐ進んで三つ目の右への曲がり角を曲がり、今度は二つ目の左への曲がり角を曲がってくれ。そしてまっすぐ進めば階段がある。そして……」

「あの」

無理だ。頭がこんがらがる。絶対途中で忘れて再び迷子になっちまうよ。

「先導してくれませんか？俺そんなに覚えられる自信がないので」

おっさんは変な顔をして俺を見る。国王の手紙を預けられるほどの俺がこんなに簡単な地理を覚えられないのに驚いたのだろうか。もしかしたら秀才官僚だと間違えたのかもしれない……俺の外見からしてそれは無理か。

「う～む。……分かった。付いてきてくれ」

持ち場を離れるのに迷ったのだろうか。もしそうなら俺はすまないことをした。

「分かりました」

「ここだ」

見覚えのある絵画。王太子執務室の扉の右側にはムンクの叫びみたいな絵が置いてある。これからはこの絵を目印にしよう。その前にここまでたどり着けるか怪しいものがあるが。それはおいおい覚えていこうか。

「じゃあな」

「どうも。ありがとうございました」

そして、おっさんは自分の持ち場に戻っていく。さて、渡すか。と思いドアノブに手を掛けた俺は不意に止まった。何故か。

それは、いつものギルさんの行動を思い出したからだ。いつもの、というほど見た訳ではないがギルさんは部屋に入る時必ず扉を叩き、「ギルバートです」と言ってジルからの返答を待ち、そのあと入っていた。だからこそ、さっきの戦場が生まれたのだ。

ということで俺はギルさんを見習うことにした。

コンコン。

「リョウです」

「おう、入れ」

「失礼します」

扉を開けると、そこには書類に何かを書き込んでいるジルの姿があった。隣にはギルさんがいる。王子様って言っても、楽な仕事じゃないんだなぁ。

「どうしたの？」

ジルは一旦作業を中断したのかこちらを見上げる。顔はいつもより真面目だ。

「リディーさんから書類を届けるようにといわれました」

そのため、いつもは使わない敬語をつい使ってしまった。これが、王太子の威厳。帝王学とかを学んでいるのかもしれない。

「うん。そこに置いといて」

でかい机の何も置いていないスペースに手紙を置くと、俺は手持無沙汰になった。もう、出て行ってもいいのだろうか。無言でギルさんに問いかけるとギルさんはうなずいた。すでにジルは俺の持ってきた手紙を読み始めている。

「では、失礼します」

そう言い残し、扉を開けた俺。だが、やはりというべきか俺は秘書室への行き方が分からず、戻るのには長い時間を要した。学ばない俺。

「遅い。貴方は見習いとはいえ秘書なのですよ。自覚を持ちなさい」

そして、現在に至る。言っておくが俺はマゾではない。どちらかというと、リディーさんがサドなのだ。そして俺は勿論リディーさんの凍てつく氷のような視線に快感を覚えることなどなく、そろそろ精神的に参ってきた。

「すいません」

リディーさんは呆れの表情で俺を見つめ、さらなる仕事を命令した。

「では、この書類を届けに行きなさい」

そう言って差し出されたのは仕事の案件みたいな書類だった。重要だと思えるものだけを厳選したのか、百枚ほどのうち五、六枚しか渡されなかった。

「分かりました」

また、パシリか。まあ新入りの仕事は雑用と決まっているのだから仕方がないが、せめてもうちょっと優しく接してくれよ。

と思ったが口には出さない。どうせ出しても変わってくれないからだ。くっ。異世界で知り合った唯一のおんにゃのこだというのに。ドジっ娘巨乳メイドさんは何処に居るのだ！

「では、失礼します」

恐れるべきはヒエラルキー。先輩後輩の立場はあれ一応同僚の秘書なのに、部下のような態度を取ってしまう自分が居た。人間、初対面で互いの分が決まってしまうとも言うし、俺は初対面の時に何かミスでも犯したのだろうか。

着いたぜ。今回はそんなに迷わなかったぞ。前回よりも時間はかかっていないのではないか。もちろん迷って警備員（さっきの人はチャラ男だった）に道案内を頼んだのだが。

コンコン。

「リョウです」

面倒くさいと思いつつ、一応ここら辺はしっかりやっておく。ただでさえリディーさんに嫌われているのにギルさんにも嫌われる（儀礼とかを重んじる感じの人はそういうのを適当にする人に深い嫌悪感を抱く）と俺は孤立してしまうのだ。

「おう、入れ」

「失礼します」

入ると、そこにはジルとギルさんと……リディーさんがいた。バットタイミング。どうやら俺よりも後に部屋を出たらしいリディーさんの方が先に着いたらしい。

リディーさんに怯えながら俺は空いているスペースに書類を置く。すると、ジルが喋りだした。

「ねえリョウ。僕はこれから商人のピクルスさんと会談するんだけどさ、一緒に来ない？」

俺が？　……ああ、そういえば来客の接遇も秘書の仕事だったか。多分リディーさんは来客者を知り、ジルにそれを伝えに来たのだろう。

「分かった」

なんか緊張するなぁ。そういえば、秘書って会談の時に何かするのだろうか。聞こうと思ったが、聞ける雰囲気でもないので諦めることにする。ヘタレって言うな！

会談用の部屋ですでにピクルスさんが待っているらしく、その部屋に行くらしい。ただ、リディーさんは執務室で待っているとのこと。まあ、秘書三人も要らないよな。

四階の会談室に直行する。ちなみに、四階には絵画は無かった。

コンコン。

扉をいつものように叩き、ギルさんが扉を開ける。そこには、怜悧な瞳でジルを見据える若い男がいた。その瞳は、ジルを見定めていた。初めて会うのだろうか。

「皇太子様におられましては、ご機嫌麗しゅう」

そう言い、ソファーから立ち上がったその男、つまりピクルスは片膝をつき、ジルに頭を下げた。すでにジルはさっきの仕事中の時みたいな真面目モードになっている。

「うむ。ピクルス、であったかの」

「はっ」

「頭を上げよ」

「はっ」

ピクルスの目には畏れが伺える。ジルの威厳に呑まれたようだ。

「では、本題に入るとしよう。ピクルス。そこに座ってよい」

「はっ」

ピクルスは来客者用のソファーに座り、俺達も向かいのソファーに座る。そして、ピクルスは本題を切り出した。

「皇太子様。単刀直入に申し上げますと我々はグラビット鉱山の利権を求めています」

グラビット鉱山？何それ。俺は知らないがジルもギルさんも知っているようで、二人は難しい顔をしてうなった。

「あの鉱山からの金を全て王国が採れれば、大きな経済発展につながります。詳しい話は割愛させていただくが、グラビット鉱山を所有できなければ……」

三人とも息を呑む。

「王国の商人には未来がありません」

断言した。

どうやら、なんちゃら鉱山からは金が採れるらしい。話の流れから推測するに、その鉱山の所有権は王国以外の国も持っているらしい。

「分かりました。善処します」

「これが、我々商人の連判状です」

そう言って差し出されたのは、一枚の紙。そこにはいろんな人の名前が署名されていた。カタカナで。この国の文字おかしくね？と思ったのは割愛する。

そして、会談は終わった。後でギルさんに教えてもらったのだが、今回の会談の終わる早さは異例らしい。まあ、実質連判状を届ける

のが目的だったらしいので当たり前だが。

第1章第7話　迷子の俺のｏｖｅｒｒｕｎ？（後書き）

ここまで読んでくださいましてありがとうございました。トッティーです。

ようやく第一章も折り返し地点に到着しました。第一章はあと五、六話で終わらせる予定です。そして、第二章では戦争が勃発。シリアスです。

では、これからもこの作品をよろしくお願いします。

第1章第8話　甘い記憶と苦い決心

俺が異世界召喚されてから一週間。秘書の仕事にも慣れてきた俺は今日初めての休暇を取った。そのため、今は推定一時だがベットの中でゆっくりしていられるのだ。

「ふぁーあ。そろそろ起きるかぁ」

折角今日休暇を取ったのにずっと寝ていては時間がもったいない。ということで、俺は今日のプランをたてようと頭をフル稼働させてみた。だが、

「俺は友達が少ない」

のである。友達なんてこの世界にはジルとリッツくらいしか居ない。そんな彼らは今も仕事中だ。

確かに、俺は秘書の仕事をする中で知人は増えた。しかし、その面子を見てみれば俺の気持ちも分かるというもの。

髪を七三分けにした官僚っぽい男というか男の官僚。捕鯨禁止で俺の生活も危ういと言いながら泣き落としにかかってきたおっさん。政治家は常に裏の裏を読めとでも言ってそうな白髪眼帯アリの大臣さん。

知り合いというレベルでも女性という女性はリディーさんくらいだ。その唯一のいやしとなるべき俺のオアシスが毎日苛めてくるのでは嫌になる。そろそろおんにゃのこ成分を補給したいものだ。

なんかさ、アレだよね。世界の俺に対する拒絶感みたいなものをひしひしと感じる。本能的なものなんだけどさ、何かねー。場違い感が四六時中あるんだよ。やっぱ、ここって異世界なんだよなー。

「さて、とりあえず出かけるか」

そんな無駄な思考をしている内に、俺は着替えが終わり、靴もはいた。

ちなみに俺がこの世界に来た時に来ていた制服は大事に保管してある。今俺が来ているのはスーツっぽいもの。秘書になった時に支給されたものだが、仕事中でなくても私服として使っていいらしい。まあ、プライベートで使う人はあまりいないらしいが。

外に出て、今後の方針を決める。ちなみにもう城の地理は覚えた。リディーさんのスパルタ特訓で。

「そうだな……騎士団の演習でも見るか。見学は自由らしいし」

騎士団。それは、王族の主力戦力の一つである。総勢約二千騎と小規模だが、練兵度は王国一だという。何故見に行くのかといえば、騎士団の演習がハンパ無く厳しいらしいから好奇心をそそられたのだ。しかし、俺はこの噂を聞いた時一つの疑問を抱いた。

何故国王は平和大好きなのにそんなに厳しく演習するのだろう？

この疑問には、リディーさんが答えてくれた。その言葉を引用させてもらおう。

そもそも、このカタパルト王国は多数の貴族と一人の国王の連邦

国家である。簡単にいえば江戸幕府と似たようなものなのである。それも幕末の。
つまり、長州藩とか薩摩藩のように強大な力を持つ貴族がわんさかいるのだ。

それをふまえれば分かるだろう。もしも戦争するなら各貴族に動員令を出してもらうのだ。

そして、カタパルト王国の最大動員兵力は八万人。そのうち六万五千人が貴族の兵隊であり、国王直々の家臣は一万五千人しかいない。王族の力が弱くなるとともに貴族の力が大きくなり、合議制になったのもこれが原因である。

つまり、「国王直々の家臣、いわば『旗本』なんだから強くなろうぜ。そうじゃないとただでさえ貴族どもに舐められているのにこれ以上舐められて下剋上されちまう。」ということである。

話がそれたが、とにかくカタパルト王国の騎士団は強い。世襲制ではなく実力第一なのだ。全国の猛者が集まるのだ。ヤヴァい。クソ強い。不良十人に囲まれても勝てるレベルだ。

「ここか」

と思っていたのだが、それは思い違いだった。

「やあ？」「はあ？」「せいや？」「とりゃぁーッ？」

速い。早すぎて剣筋が見えない。しかも十連撃とか普通に繰り出しているし。

とゆーことで訂正。不良十人じゃねえ。百人はフクロにできる。千人も可能なのでは？という次元だった。

ここは大広場。騎士団の連中が演習している。それを見学しているのもまた顔が傷だらけの巨漢ばかり。なんだかなー。

十分ほど見ていてなんか飽きたので図書館に行くことにする。歩いて。歩いて。歩いて。歩いて。三の丸の中にでけえ図書館があった。

「これが国立図書館か……とんでもない蔵書量だろうなぁ」

見渡せる程度には本棚の数が多い。これで一階から三階まであるのだから驚きだ。元の世界に合った市立図書館より蔵書量が多いかもしれないぞこりゃ。

しばらく図書館のスケールに茫然としていると、図書館の館長らしき人に声を掛けられた。

「どうしました？」

どうやら、俺が驚いていたのを不審に思ったらしい。心配そうな表情で俺の様子を見ている。

「いえ……あの、本を探したいんですけど」

「何の本ですか？ウチは蔵書量が多いので大抵の本はあると思いますけど」

「いえ、特定の本ではなく……たとえば歴史関連の本とか。そんな感じで」

「分かりました。では、付いてきて下さい。二階だと思います」

俺のあいまいなニュアンスを掴み取ったのか、館長は俺を先導してくれた。螺旋式の階段を上り、二階に着く。すると、館長は俺の方を向いた。

「こちらが歴史関連の本になります」

指差された方を向くと、確かに歴史関連の本があった。

「では、ごゆっくり。用があればなんなりと」

そう言い残し、館長は帰って行った。

「さてと。何を読もうかなー」

なんとなく歴史って言ってしまったが、特に何を知りたいという訳でもない。適当に探して良さそうな題名の本を見つけよう。ノリだよノリ。

「む？」

俺はふと目に留まった本を手に取る。『魔導国家セリウス王国の召還王』という題名だ。

「へえ」

代々国王が死ぬたびに次の王を召還するセリウス王国。今でこそ十九代国王タロウ・ヤマダの悪政により没落した国だが、かつてはアリア大陸を席巻しもう少しで統一できるほどの勢いだったらしい。まえがきではこの山田太郎国王を痛烈に批判している。

この本の内容に移ろう。

世は四百年前のピタゴラス帝国崩壊時。群雄が割拠していたこの時代にある少女が召還された。彼女の名はジャンヌ・ダルク。

「ってオイ！」

いきなり偉人が出てきてビックリしたが、読み進めるとしよう。

……難しい。よく分からないので小難しい所は飛ばして読む。

要するに、ジャンヌ・ダルクは十二年の時をかけてセリウス王国を建国したのだと。その後八代国王のハナコ・ヤ……山田花子国王がその天才的な智謀と緻密な戦略により大陸に覇を唱え、アリア大陸一の大国にまで上り詰めた。しかし六十五歳にて結核を患い、病死。その後に起こった後継者争いで、セリウス王国は衰退したのだという。

「面白かったな。……ん？これも面白そうだぞ」

その本の題名は『召還魔法の歴史』。セリウス王国での召喚王システムを書いている。

「へえ」

この本に書いてある内容。それは、俺の将来に大きく関わることになるであろうものだった。

召還魔法に使われる魔力はとてつもなく大きい。たとえば、セリウス王国の国王召喚の場合。大魔導師一千人分の魔力を集束し、その魔力を使って召還術『神よ王者を召還せよ（キルシュガイスト）』を発動すると異世界から人間を召還できるらしい。

しかし、そんな量の魔力を溜めることは常人には不可能なので魔力を溜める魔導石で溜める。そして魔導石に溜められた魔力を使って召還術を行使するのだという。

だが、召還魔法は創造魔法、時限魔法、消滅魔法と並んで難しい次元魔法の一つである。（ちなみにこの四種の魔法は伝説の四幻魔法といわれている。後ろに魔法と付いているが代わりに属性と付けても支障は無い）

そのため、召還術の使い手はセリウス王国の神官のエーベル一族の直系のみなのだ。

「なんだよ。それじゃあ、俺が元の世界に帰るのにはセリウス王国のエーベル一族の助けが必要なのか？　同じ属性の魔法なら使えるかもしれないし」

そして、俺は思い出した。最近は忙しくてすっかり忘れていたが、俺って召還術の被害者なんじゃん。何でジルはエーベル一族の直系ではないのに召還術使えるのか？　と。

「お、これか」

次に手に取ったのは「四幻魔法について」という本。さらに召還

への知識を深めようと思ってね。

俺を呼び出したのは、召「喚」魔法。四幻魔法一つである召還魔法の原型だ。無論、それなりの技術と魔力がないと発動できないらしいが、大魔導士位なら余裕に行使できるんだとか。

さっき滅茶難しくてエーベル一族の直系でないと使えないと書いてあったのは、人を召還する魔法のこと。数々の前例があるのは、人ではなく動物を召喚する魔法らしい。

基本的に召喚（還）される動物は皆魔力を有し、召喚された魔獣は召喚獣と言われて魔術師に従うようになる。人間は召喚獣に比べて遥かに大きな魔力を有しており、召喚獣はどんなに凄くても亜竜（竜のワンランク下の位置付けをされている獣）レベルまでらしい。

この辺はハンナさんに教わったな。

ジャンヌ・ダルクが一人で千人を相手取ることができる程魔力が莫大だった、という表記には驚かされたなー。リアル一騎当千怖ぇ。ｔｋ元の世界では魔法なんかつかってなかったじゃねーか。

上に書いてあることを要約すると、二行で終わる。

人を呼び出すのが「召還」
獣を呼び出すのが「召喚」

「そうゆーことか」

恐らく、俺はジルが召喚獣を呼び出そうとしたところで、何かの間違いで召還されたのだろう。何かの、間違いねえ……。釈然とし

ないな。魔力を大量に使わないと人間は召還されないはずなのに、何故俺は召喚用の少なすぎる魔力だけで召還されたのだろうか。召還された人は大きな魔力を有するはずなのに、何故俺はカエル一匹すら殺せないのだろうか。

まあ魔術について俺は門外漢だから、これ以上考えても仕方がない。気を取り直して次行こうか。

「ふむ、ふむ……」

読み進めていくと、召還・召喚された人の帰還方法についても言及されていた。一言で言うと「シラネ」である。あることにはあるらしいのだが、はっきりとしている前例は一回のみ。一回召還されて帰還して再び召還された奇特な男がいるらしく、帰還後の安全は確実らしい。しかし、それだけだ。

具体的な手法はエーベル一族が知っている可能性が高い。ただ、国家機密なので誰も知り得ないだろう。とのこと。

「はぁ。それにしても、元の世界に帰れるのはいつになるのかなー」

ふと、みんなの顔を思い出す。

いつもニコニコしていて陽気だった母。厳格だが所々に優しさが見え隠れした父。だらしなかったけどなんだかんだいって頼りになった兄。赤ん坊で可愛い妹。小学生のころからの親友だった明るくひょうきんな佐野。変態だったが、何故か頭は良かった飯田。同じ部活で共に青春の一ページを刻んだ熱血天然の原口。唯一の突っ込みキャラだった山本。

そして、次々と走馬灯のように記憶が蘇る。

そう。みんな、良い奴だった。一度は会えないって絶望したけど。本当に会えないかもしれないけど。それでも、俺は諦めたくない。

「俺は哀れな誤召喚の被害者だ。俺から望んだわけではない。この世界に未練なんて無いが、元の世界には滅茶苦茶未練がある。思い出さないようにしているだけで」

そう、可能性はゼロではない。あの本には召喚獣の送還についても少しだけ書かれていた。前例はあるが、詳しいことは分かっていないらしい。エーベル一族なら知っているかもしれない、とだけ書いてあった。

「こういうのを、諦めが悪いっていうんだろうなぁ」

正直、俺はさっきまでは特に目標なんて無かった。でも。今、俺は明確な目標を見つけたんだ。

確かに、可能性は低いさ。何もかも手探りで、いつ帰れるかなんて分かったことじゃない。でも、俺は帰りたいんだ。元の世界に、帰りたい。

たとえ、帰還できる可能性が低いとしても。たとえ、帰還後の安全を保障されていなくても。それでも、俺は。俺は――――

「絶対帰ってやる」

そう、俺は決めた。

第1章第9話　嘘だ！と言いたいが自重しよう　ｂｅ　ｃｏｏｌ　俺

俺が秘書になって二週間。俺は高校生でありながら一国の王子の秘書として頑張ってきた。この経験は俺にとってとても有意義だった。俺は、学んだのだ。

「俺に秘書は向かない」

と。

今俺は秘書室に一人でいる。フリーダ皇国の外交関係者がジルと会談しに来たらしく、今リディーさんはこの部屋に居ない。ちなみにフリーダ皇国はカタパルト王国の同盟国だ。

そして、今俺の目の前にあるのは書類の束。とりあえず私用の手紙と仕事の書類に分けたのだが、ここからがきつい。

「どれが重要なのか分からないぜよ」

俺にはこの世界の知識が無い。その為、オールマイティーな知識が要求される秘書という仕事は合わないのだ。要するに、知識が無いからどれが重要なのか分からないっていう話。

ちなみに語尾に「ぜよ」をつけたのは気分転換である。この前リディーさんに叱られ、萎えた時は某野球ゲームの名脇役と同じ語尾「やんす」を付けた。語尾を変えるとテンションも変わるのだから不思議だ。

だが今回は失敗したようだ。テンションは全く上がらない。むしろ下がる一方である。

と萎えていた俺の部屋に、やっとリディーさんが帰ってきた。三

時間ぶりだ。

「終わったんですか？」

とりあえず聞いてみる。すると、リディーさんは美しい黒髪を振り払い首を横に振った。

「いえ。これから外務大臣のバトン氏と共に会談を再開します。しかし、バトン氏は用意に時間がかかるとのことで会談の再開は二時間後になる予定です。そこで、皇太子様は私だけでなく貴方も同伴させると」

要するにお偉いさん方の会談を見て経験値上昇しろということらしい。俺結構期待されているのかなぁ。リディーさんはあまりそのことを……いや、俺の存在自体を良く思っていないみたいだが。

最初はその態度に不信感と反発を抱いたが、今はそうでもない。彼女が何故俺に対して冷たいのか分かったからだ。その理由は簡単。よくある、「新参者への不満」である。

俺は、つい二週間前に召喚されたばかりだ。つまり、召喚した少年がいきなり自分と同じ秘書という地位に就き、そのくせ能力は無いし、さらには絶対的な主君であるジルにタメ口なのだ。むかついて当然である。

その小さな器に俺は軽く落胆したが、人間なんてそんなものだ。俺も彼女の立場なら同じ対応をしていただろう。

「分かりました」

「では、来て下さい」

部屋を出て、俺はリディーさんの後を追う。外務大臣とかフリーダ皇国の外交関係者ってどんな人なのだろうと少し期待を抱きながら。

四階の応接室。ここは来訪者と会う部屋だ。二週間程前に商人のピクルスさんと会ったのもこの部屋だった。しかし、リディーさんはそこで立ち止まらず、そのまま突き進む。応接室とは二十メートル離れた部屋に入ると、そこにはジルとリッツがいた。控室らしい。

「やあ、リョウ」

「おう」

「大体の事情はリディーに説明してもらった？」

「ああ。確か、フリーダ皇国の外交関係者と会談するんだよな。外務大臣のなんだっけ……バトンって人と一緒に」

すると、満足そうにうなずいたジルは俺に二、三枚の書類を渡した。

「そこに、詳しい数値とかが書いてあるけど。一応僕の方からも説明するよ」

そしてジルの口から語られたのは、夢は無いがリアリティーはある話だった。

そもそも、フリーダ皇国とカタパルト王国は同盟国である。同盟が締結されたのは四十年ほど前。それ以来、同盟関係を維持しているのだ。この同盟には、お互いの思惑が絡み合っている。

まず、カタパルト王国は四十年前東の紛争地域に東征していたため北の大国フリーダ皇国を敵に回したくなかった。
今代の国王は戦費による財政の圧迫を嫌って平和外交を基本としているため当初の同盟締結の理由は意味を失くしたが、逆に今度はその「平和外交」というのが理由となってフリーダ皇国との同盟が続いている。

一方でフリーダ皇国はどうだろうか。確かに四十年前の同盟締結当時はラクル連邦との戦争で忙しく、カタパルト王国と敵対するのは避けたかったためこの同盟には必要性があった。しかし、今フリーダ皇国はラクル連邦とは停戦協定を結んでいる。

それだけならいいのだが、二か月前カタパルト王国とフリーダ皇国の国境にある山から金が採れることが判明した。この山、グラビット鉱山の三分の二はカタパルト王国にある。しかし逆にいえば残りの三分の一はフリーダ皇国にあるということで、フリーダ皇国は鉱山の採掘権は我々にもあると声高に叫び外交問題にまで発展しているのである。

何故外交問題になるほど主張するのか。理由は単純である。

グラビット鉱山から採れる金がもたらす財政効果はバカでかいらしいのだ。試算によると五年で一年分の国家予算に使われるお金が儲かるらしい。日本円に換算すると年商一兆六千億。たしかにバカでかい。

そしてこの問題はすでに二週間ほど前に商人のピクルスとの会談のときには表面化していた。

「なるほど」

つまり、フリーダ皇国の外交関係者はグラビット鉱山の採掘権を得るためにここまで来たということ。これから始まるのは対談というよりは交渉である。フリーダ皇国は鉱山の採掘権をどこまで得ることができるのか。カタパルト王国は鉱山の採掘権をどこまで保持できるか。

それぞれの国の外交関係者が今、祖国の利益の為に舌戦を繰り広げようとしていた。

「四割。これ以上引き下げることはできません」

「二割で手を打ちませんか？」

さっきからずっとこんな感じだ。正直面白くもなんともない。ちなみに前者がフリーダ皇国の外交関係者であるランゲ氏。後者がカタパルト王国の外務大臣であるバトン氏だ。

三割や四割などの言葉が最初から交わされているが、これはグラビット鉱山による収益のフリーダ皇国の取り分だ。最初は皇国側が五割、王国側が皇国の取り分はなしと主張していた。それに比べれば段々とこの話し合いも終わりに近付いているだろう。

それにしても暇だなー。俺よく分からないから、口挟めないし。ランゲ氏とバトン氏しか喋(しゃべ)って無くね？俺は秘書だからともかく、ジルなんか皇太子なのに空気だよ。あーあ、可哀想に。

「駄目です。これ以上の引き下げは本国より許されていません」

「こちらも二割より上げることはできません」

らちがあかない。すると、事態を収拾しようと思ったのかギルさんが口を開いた。

「では、そろそろ時間ですので」

会談は一旦閉会となり、俺達は控室に戻った。ギルさんはランゲ氏の接待をしているらしい。なんだ、今は休憩時間なのか。ハア。またあの不毛な話し合いが始まるよ。

「なかなか相手も譲歩しませんな、皇太子様」

バトン氏が苦々しい顔をしながら口を開いた。ジルの顔にも僅かだが陰りが見える。やはり、それほど重要なことなのだろう。

「皇太子様、こちらが譲歩しますか？」

バトン氏は難しそうな顔をしながらジルに聞いた。気弱になっているようだ。このままじゃ拙くね？ジルの性格的には譲歩しそう。

しかし、ジルの対応は予想外だった。

「いや。なんとしてでも二割で止めろ。父上がマグナ族討伐を終えて帰ってくれれば、流れはこちらに向く。すでに父上が手を打っているからの」

ジルの強気な態度。本当にマグナ族の反乱軍討伐が終われば流れがこちらに向くのか？それとも、バトン氏を強気にさせる為のハッタリか？

どちらにせよ、バトン氏はこの言葉を聞いて安堵を顔に浮かべた。あるいは、両方なのかもしれない。

その後少し雑談をし、それから応接室に移った。また会議が始まるようだ。

「ランゲ殿。二割に、譲歩してはくれないだろうか」

とりあえずバトン氏は口火を切った。

「条件次第ですな」

ほえ？条件って、二割とか四割とかが王国の採掘権を認める条件じゃないの？

俺はよく分からなくなってバトン氏やジルやギルさんの顔を見たが、普通に分かっているようだった。

「条件、とは？」

バトン氏が警戒しながら聞く。言葉の意味は分かったが、真意を測りかねている様子だ。

「領土割譲」

分かった。つまり、「収益の取り分は二割で諦めるからその代わりアソコとアソコをくれ」ということ。なるほどね。

「具体的には？」

今度は露骨に警戒の色を浮かべながらバトン氏が聞く。

「ボストール海沿岸部を」

ここで解説。ボストール海というのは、カタパルト王国の西部の海のことだ。そこからは様々な魚介類が採れるらしい。鮪（マグロ）など知っているものもあれば、ペポロやラニャルジ等の聞き覚えのないものまで。

ボストール海から採れる魚介類はカタパルト王国の輸出品目の一つであり、この国の財政に少なからず貢献している。そこの沿岸部をフリーダ皇国に割譲したら、グラビット鉱山の収益の取り分を二割から四割に上げるよりカタパルト王国にはるかな損害を与える。

「無理です」

バトン氏が驚愕しジルに視線を向け指示を仰いだところ、ジルはきっぱりと断った。ランゲ氏は予想外の拒絶に目を丸くした。が、それも一瞬のことですぐに言葉を紡いだ。

「こちらもかなり譲歩しているのですよ。そもそもグラビット鉱山から採れる金の取り分は半々でいいでしょう。それを二割というから、三割分に相当する利益を我々は求めているのです」

ランゲ氏は強硬な態度をとる。しかし、ジルの強気に押されたのかバトン氏もそう簡単には引き下がらないようだ。

「バカなことを。そもそも、この鉱山の殆どの場所がカタパルト王国内にあります。貴方達が利益の配分を求めること自体が間違っているのです」

しかし、その言葉にランゲ氏も声を荒らげた。

「何を言っているのです。たとえ一平方メートルでも領地内にあればそれだけで我々にも採掘権はあります」

「いえ、三分の二以上カタパルト王国内にあるのですからフリーダ皇国には採掘権は認められません」

「暴論です。過去のガブルデア鉱山の採掘権問題を考えて下さい。王国内にあったのは四分の一だったのに利益は半々に折半されました」

「あの事例は特殊な場合です。発見したのはカタパルト王国ですから当然。しかし今回はカタパルト王国の役人が見つけました」

「今回その調査にフリーダ皇国の住民が随行（ずいこう）していたことを確認しています！」

「しかし調査の企画を出したのはカタパルト王国の執行部。たまた

ま随行していただけでそちらが見つけたというのは無理があります」
「その企画者の中にフリーダ皇国の住民がいたのですが。たまたまというのは違うと思います」
「十一人の内の一人でしょう。そもそも彼はフリーダ皇国の住民としてではなく、技術者としてです。その彼がフリーダ皇国の住民として行動していたとは言えません」
「――――ッ。しかし！」
「なんでしょう。私に間違いがありましたか？」
どうやら、バトン氏が舌戦に勝利したようだ。言ってる内容は難しくてよく分からなかったが。
「では、二割でいいですね？これでも譲歩しているのですよ？」
バトン氏が畳みかけるように言う。
「くっ。……とりあえず、私には利益の配分を四割未満にする権限が与えられていない。一旦フリーダ皇国の首脳部に聞いてみるが。それには時間がかかる」
二人とも悩んでいる。まあ、その気持ちは分かるが。
何故悩むのか。それは、今の勢いを落としたくないからだ。フリーダ皇国の首脳部に聞くのは時間がかかる。すると、今ランゲ氏を論破した勢いが無くなる。だが、どうしようもなかった。ランゲ氏の言葉は正論なのだ。

「分かりました。フリーダ皇国の首脳部からの応答を聞き次第また会議を開きましょう」

ジルは、そう言わざるを得なかった。

第1章第10話　使用人なんて言わせない

「そういえばこの間ここで兵士に殴られたよなー」

「あれは面白かったわ」

ここは食堂。昨日の会議から一夜明け、俺達は今日休暇を取ったのだ。ちなみに今時間は一時である。ついさっきまで寝ていた。さて、何しようかなと思ったらこの世界には漫画もゲームもラノベもパソコンも無かったのだ。文明開化万歳！

だから、今日は俺と同じく休暇を取ったリッツと一緒に居ることにした。

「おっちゃん、磁捌焼の大盛一丁！」

リッツはいつも食べているらしい栗栖飯ではなく、新しい食べ物に挑戦するらしい。じゃあ俺は何にしようか。……よし、決めた。

「俺は華梨夷来栖（カリーライス）の大盛で」

身分証明書を見せながらおっちゃんに頼む。これは恐らくカレーライスだろう、と予測を立ててみたのだ。それにしても手抜きな当て字だなぁ。

暇なので待ってる間周りを見てみると、なんか妙に凝視されている気がした。敵意ではないと思うが、違和感がある。

「なあ、リッツ。俺達妙に見られている気がするんだけど。自意識

過剰かなぁ」

すると、リッツは驚いたような顔をして言った。

「分からないのか？」

「何を」

どうやらリッツはこの視線の意味を知っているようだ。

「お前、皇太子専属秘書服着てるじゃん。言っとくけど、秘書って偉いんだぞ。この前の私服で来た時とは全然違う」

俺偉いんだ。いつもリディーさんにパシリにされているからあんまし自覚してなかった。

「どれ位？」

「形式上は局長と同格。でも、実質的には副大臣と同じくらい偉いぜ」

ちなみに、この国の政府は日本みたいにナントカ省というのがある。内務省とか産業省とかである。そこの長を大臣というのだ。副大臣は二人いて、大臣を補佐する役目を持つ。大臣と副大臣は貴族から選出されることが多い。少なくとも現体制での大臣は全員そうだ。

そして省の下に局がある。そこのトップを局長というのだ。新撰組みたいでかっこいい。ちなみに局の下は課、その下は係となる。トップはもちろん課長、係長だ。

つまり、俺はカタパルト王国内でもかなり偉いのである。

「へぇ。俺凄ぇーー」

そんな雑談をしていたら、あっという間に磁捌焼とカレーライスができた。食堂のおっちゃんから飯を貰った俺達は、机に向かって歩く。すると、前とは違いぶつかりそうになると避けてくれた。リッツの言ったことは正しいようだ。なんか俺、権力に酔いそう。

椅子に座り、飯を食い始めた矢先。俺は、ふと回想してみた。そういえば、国王自ら戦争している最中なんだよなー。この前兵士にぶん殴られた後にそんな話をしていた気がする。

「なあ、リッツ」

「ん？」

「国王陛下の御親征はどうなったんだ？……確か、マグマ族討伐だっけ」

「マグナ族だよ。んで御親征の首尾が聞きたいのか？」

俺は頷く。すると、リッツは嫌そうな……というか気まずそうな顔をして言った。

「結構苦戦しているらしいんだよね」

「え？本当に？」

驚いた。この前聞いた時はちょっとした反乱だと思っていたのだが。

「ああ。マグナ族一団となっての反乱だから、女子供老人も参加しているんだよ。その上、戦場はマグナ族の本拠地だし」

地の利を生かしているのか。ゲリラ戦でもしているのかな。

「反乱の規模は？それから討伐軍の規模も教えてくれないか？」

「そこまで詳しくは知らねえよ」

確かにリッツが知っているのはあくまでも噂のレベルだと思う。ただの護衛だし。

「ふ～ん」

気まず！カタパルト王国に不利な状況の話をしたからかな。話題を変えなきゃ、と思ったらリッツの方から話しかけてきた。

「そうだ。飯食い終わったら、城下町に行かないか？お前異世か……コホン」

異世界、と言いかけて止めた。理由はもちろん、どこで誰が何を聞いているのか分からないからだ。

「まあ、できればお前みたいな男じゃなくて女の子と行きたいんだけどな。ま、男同士でも面白そうだし行ってみるか。もしかしたらイベントが起こるかも」

「イベント？」

そうだ。この世界では横文字は通じないじゃん。説明めんどくさ！

「特別な出来事って意味だよ」

「その内容は？」

どうやら、内容が知りたいらしい。

「決まってるだろ。城下町でリッツとはぐれて探している途中に、強面のお兄さん達に絡まれている美少女を助けるんだよ。ちなみに高確率でどっかの国の姫」

常識だよジョーシキ。ただ、俺は美少年という面ではないから厳しいかもしれないが。

「お前、その絡んでいる奴に勝てるの？」

「ＯＨＯＯＯＯＯーーーーッ」

嫌ぁなことを思い出してしまった。一人の不良と肩ぶつかって喧嘩した時、友達と二人人掛かりで戦ったのにリンチされたんだよなぁ。俺はなんと一秒で気絶した。俺の友達とは死闘を繰り広げたらしいが。俺弱ぇーーーーーーーーーーッ。

「まあ、気にするなよ。もしかしたら、隠された能力が開花するかもしれないだろ？」

「同情するなら魔力をくれ。前一度言った気もするが、魔力さえあ

れば俺は強いんだ」

「誰でもそうだよ」

「もしも俺に魔力が無いって言うのなら、まずはそのふざけた現実をぶち壊す！」

「現実ぶち壊すって……妄想に逃げているただの痛い奴じゃん」

「フッ。よくぞ見破ったな」

「よく誇らしげに言えるな」

俺はリッツの新たなる才能（突っ込み能力）を開花させた。むしろ自分の新たなる才能（ボケ能力）も開花させた。

ふと皿を見ると、いつの間にか飯を食い終わっていた。

「行くか」

「そうだな」

皿を食堂のおっちゃんに渡し、出口を出る。すると、

「ん？」

そこには、こっちに向かって汗ダラダラで走ってくる兵士。その表情は九回の裏ツーアウト満塁敵バッターは四番そしてフルカウント得点は一点差で勝ってるさあ投げるぞな緊迫した表情だ。

「ハア、ハア」

兵士のただならぬ気配に周りは何事かと視線を集める。兵士は手を膝に乗せ、言った。

「国王陛下が……国王陛下が崩御なされた！」

静寂。

みんな、彼の言葉が理解できていない。隣のリッツも口をポカンと開けている。かくいう俺も、だが。だってそうだろ。いきなり国王が死んだって言われて、冷静で言われるかよ。つか、これなんのドッキリ？むしろマジネタ？

「おい、お前今なんて言ったんだ？」

どうやらこの兵士と知り合いらしい男が聞く。

「国王陛下が崩御なされた。……事実だ。今皇太子様が兵士を全員大広間に集めろとのご命令を出した」

兵士は少し冷静になったようで、ゆっくりと、噛み締めるように言った。つか、これマジっぽい。

冷静さを取り戻した一人の兵士が立ち上がる。それに釣られて数人の兵士も立ち上がった。どうやら、ジルの命令に従うようだ。さっきまで飯を食っていた兵士は雪崩を打つように立ち上がり、大広間の方に歩き始めた。

ふと隣を見ていると、リッツは正気を取り戻したようだった。未

だに、困惑しているようだが。

「リョウ、行くぞ」

リッツは俺にというより、自分に向かって言ったように見えた。その言葉を耳にした俺も、大広間に向かった。

大広間には、大量の兵士が集まっていた。ジルが台の上に立ち、マイクのような物を持つ。ジルの演説が始まるようだ。ざわざわしていた兵士が、一瞬にして黙った。これは、王者の貫録。

ジルがマイクを口の近くに当て、話し始める。

「みなさん。我々の敬愛すべき国王陛下が崩御なされました」

ざわめきが広がる。皇太子の口から聞いて国王の死を実感したのだろう。俺は見たことも無いので少し驚いた程度だが、他の人々にとってはそうではない。

「部屋でくつろいでいる最中に、何者かによって暗殺されたのです」

暗殺？警護がなってないんじゃないの？

「我々は暗殺者の解明を急ぐとともに、国王陛下の死を契機に活動を活発化させたマグナ族や東方の豪族たちの牽制を図ることとします」

あちゃー。まあ妥当に考えて暗殺はマグナ族の差し金だろう。

「そこで、私が第二十五代国王に即位することとなりました」

一瞬の静寂。そして湧きあがる歓声。

「私は、カタパルト王国の平和を乱す者を決して許しはしません。みなさん。共に王国の平和を祈ろうではありませんか」

パラパラと拍手が起こる。そして、いつしか地面に落ちる豪雨のような音を出した。フォーと叫んでいる人もいる。

「カタパルト王国万歳！」

ジルが両手を挙げて力強く言うと、兵士たちも追従した。

「「「「「万歳！」」」」」

「「「「「万歳！」」」」」

「「「「「万歳！」」」」」

「「「「「万歳！」」」」」

「「「「「万歳！」」」」」

いつの間にか俺も熱くなり、万歳！と叫んでいた。ジルにはカリスマ性があるようだ。

ふと熱が醒め周りを見ても、みんな狂信的に万歳を続けている。
リッツも例外ではない。
でも、俺は思ったんだ。

俺って、王様の秘書になるんでしょ？偉くはなるけど、仕事大変になりそうだよね。召喚制をとっているセリウス王国の中枢に近付くという俺の目的からすれば良いことだが、あまりにも事態が急展開すぎる。とりあえず、やることは決まっているけどね。

未だに湧き起こる歓声を聞きながら、俺は呟いた。

「偉くなりたい、じゃねえ。偉くなるんだ。目指すは宰相の地位。圧倒的な権力であの世界に戻ってやる。」

この日、俺の成り上がり物語が始まった。

第１章第１０話　使用人なんて言わせない（後書き）

第一章終わりました。

ついに第二章。ついにという程一章に時間をかけていませんが。

第二章は荒れます。主にカタパルト王国内が。もしかしたらカタパルト王国が滅亡するかもしれません。いえ、あながち冗談ともいえないんですよ。今のところプロットでは王国滅亡ルートしか見えませんし。

それに、主人公は天才でもなんでもないので色々苦労しますよ。是非とも勝ってもらいたいものですね。（他人事）

では、第二章もよろしくお願いします！

第2章第1話　閣議

「それでは、閣議を始める。欠席者は総務大臣のジギスムント・ベルのみ」

閣議室にジルの威厳のある声が響く。ジルの国王即位宣言から二週間。俺は秘書として、ジルが行う会議に参加していた。もちろん発言権は無い。ジルの右隣やや後ろに立っているだけだ。左後ろにはリディーさんが立っている。

閣議室は日本と同じ感じで、みんな椅子に座りながら意見を出したりする。国王の椅子だけやけに豪華である。ここら辺は近代的だ。まあ、閣議室はただ会議するだけの場所で論功行賞とか任命式は中世的な場所で行うらしいが。

「まず、状況説明を行う。さっき入った情報によると、東方の豪族カール一族に不審な動きが見えるとのことだ。また、昨夜マグナ族がクリスパンテリル砦とベゼブルキー砦を落としたとも聞いている。これは由々しき事態である。早急に対応を検討する必要性がある」

先代国王であるエドガー二十四代国王が死んでカタパルト王国は混乱しているようだ。

「カタパルト王国の権威を復興する良い手段を考え付くものはいるか？」

いや、戦争しかないよ。わざわざ聞く必要はないでしょ。と思ったが、俺はすぐにジルの考えが読めた。

戦争しか手段が無いことははジルも分かっているのだ。では何故それをすぐ言わないのか。理由は求心力不足にある。

兵士の前の大演説の時など、いざという時の威厳から考えてジルはかなり求心力があると思ったが違ったのだ。

たった二十三歳の若造がいきなり国王の地位を担ってもよっぽどのことが無い限り家臣は尊敬しない。当たり前だ。たまたま先代国王の子供に生まれた若造のくせに生意気な！って感じ。

失敗をした訳ではないから不満は無いだろうけど、不信感はある。だから、反発を生まないために家臣の方から意見を出させてそれを採用するという手段を取ったのだ。上から一方的に命令するのと下からの意見を採ってそれを命令するのじゃ、後者の方が家臣としては納得が行くってこと。

ただ、俺としては少し低姿勢ではないかなぁとも思う。

「……であるからにして、蛮族の反乱軍のこれ以上の反撃を阻止する為に国王陛下自ら討伐軍を率いこれを撃退するのが最上の策かと存じます」

おっと、聞いてなかった。

今喋っていたのは、過激派の内務大臣で、マリオン・レーデという名前だ。

「異議あり」

そう言って手を挙げたのは、保守派の経済大臣ヤニク・カロン。

「レーデ殿。貴方は国防というものを全く理解できていない。敵はマグナ族だけではないのですぞ。たとえば、東の豪族カール一族。たとえば、北の小国群。たとえば、西の海賊集団。また、国王の暗殺の噂を聞いて一揆が起こるかもしれません。ここで無闇に戦いを挑んでは、最悪苦戦している間に王都陥落となる可能性が極めて高いのです」

それを聞き、産業大臣と司法大臣が拍手をした。

ここで閣議出席者の説明をしよう。閣議には文官七人武官三人の合計十人が出席する。この十人を閣僚と呼ぶ。

文官は宰相と内務大臣、産業大臣、外務大臣、経済大臣、司法大臣、総務大臣である。

武官は第一将軍といわれている騎士団長、第二将軍といわれている大魔導師、第三将軍といわれている歩兵軍団軍団長である。

このうち騎士団長と大魔導師は革新派、歩兵軍団軍団長と内務大臣は過激派だ。それ以外は全員保守派なので、過激派と革新派が一緒になっても保守派に数では敵わない。

「ではどうするというのだ」

レーデ大臣が怒りを抑えてたずねる。俺も意味が分からない。東西南北敵ばかり、という事実をそう自信満々に言われても。そこ落ち込むところだろ。

この問いには宰相のユルバン・シャルロワが答えた。

「陛下自ら攻めるのではなく、家臣に命じて戦えばいいのです」

「それで勝てるというのか。今兵士は前国王の死で士気が下がっているのだぞ。国王陛下が居なければ勝てるかどうかも怪しいではないか」

俺もレーデ内務大臣に賛成だ。

「何を気弱なことを言うのです。マグナ族が前国王陛下を暗殺したといえば、兵士たちは弔い合戦と信じます。当然、士気も上がるのです。異論はありますか？」

確かに。いまだに前国王を暗殺したのは誰なのか分かっていないけど、嘘も方便だしな。この方法なら確実に士気は上がるだろう。

やっぱり、シャルロワ宰相に賛成だ。顔は賄賂（ワイロ）大好き政治家で痴漢常習魔みたいだけど、言っていることには納得がいく。

「くっ……。そうだな、それも一理ある。しかし、……それなら同じことがいえないか。国王陛下が攻めている間に来た敵が前国王を暗殺したといえば、同じように士気が上がり撃退できる。少なくとも国王陛下が凱旋（がいせん）するまではな。

その上、国王陛下がマグナ族を討伐すれば名声が高まる」

なるほど。レーデ内務大臣の言うことも理にかなっている。巧く切り返した。やっぱこっちが正しいのでは？

「攻めなら士気は上がるかもしれないが、守りだと士気は上がらないのですぞ。国王陛下が凱旋する前に王都が陥落するでしょうな。よって、国王陛下自らが攻めるべきではないと考えます」

う～ん。どっちも正しいように聞こえるなぁ。これが話術か。

どうやら、この舌戦はシャルロワ宰相の勝利のようだ。レーデ内務大臣は悔しそうにしている。ジルの方を見ると、悩んでいるようだった。まあ、どちらも正しそうだからな。

しかし、ここでレーデ大臣がニヤリと笑みを浮かべた。

「なるほど。確かにシャルロワ宰相の言葉から推測するに、マグナ族討伐軍を出した場合東西北三方位の敵が王都に向けて攻めてくると言っておられるように聞こえる。
ならば、国防にそれなりの兵力を割かなければなりませんな。数でいえば少なくとも二万人を。ならば、シャルロワ宰相はマグナ族を四万人で討伐できるとでもいうのですか？
しかも、カタパルト王国の財政は決して余裕がある訳ではない。つまり、短期間で討伐しなければならないのですぞ。
シャルロワ宰相にそれが、できるのですか？」

前国王のマグナ族討伐軍は五万人。それよりも少ない四万人しか動員できないのに短期間で、しかも士気は段違いなのに勝たなければならないのだ。もちろん段違いってこっちの方が低いよ。王様死んだもの。

レーデ内務大臣の言葉に苦渋の表情を見せたシャルロワ宰相。口を横一文字にしたまま、地面をにらみつける。
そう、マグナ族討伐の手段なんて分かるはずもないのだ。この人はあくまでも文官。諸葛亮公明みたいな万能軍師とは違う。マグナ族だって馬鹿ではないから、そこら辺の武官でも分からないだろう。

しかし、シャルロワ宰相はいきなり顔をレーデ内務大臣に向けた。

微笑。

そして、

「できますよ」

断言した。

面食らったレーデ内務大臣。だが、これは他の人間も変わらない。俺ももちろんその中に含まれる。何言ってるの？て感じである。

この反応に満足したのかもう一度微笑む。じじいがやっても気持ち悪いだけだが。

「むしろ、貴方はできないのですか？簡単じゃないですか。あのような蛮族を倒すなんて、赤子の手を捻るようです」

挙句の果てには挑発を始めやがった。こいつ、本当に勝算があるみたいだ。

一方でレーデ内務大臣は混乱しているのか何も言わない。それに追い打ちをかけるようにシャルロワ宰相は言葉を紡いだ。

「レーデ殿、どうなんですか？」

「……できぬな」

絞り出すような声。しかしレーデ内務大臣の目にはまだ闘志が眠っている。闘うといっても、舌戦って悪く言えば口喧嘩みたいなものだから格好良くはない。レーデ内務大臣は少年ジャ〇プの主人公ではないのだ。

「だが、シャルロワ宰相はできるののだな？」

「無論です」

「ならばシャルロワ宰相にその勝利の手順を教えてもらいたい」

今の状況で舌戦は不可能と思ったらしく、態度を軟化させた。狙いは、言葉尻だ。シャルロワ宰相が失言をした瞬間それにつけこもうという魂胆なのだろう。

「お教え出来ませんな」

「何故だ？勝算があるのでは無いのか？まさかまだ考えていないとは言わぬよな」

そんなに追い詰めていないけど鷹の目をするレーデ内務大臣。気持ち悪い微笑を浮かべるシャルロワ宰相。

「もちろん構想はできています。しかし今言えば作戦が成功しなくなるかもしれないのです」

遠慮のない発言にレーデ内務大臣は顔を茹でだこの様にした。漫

画なら頭から湯気でも出しそうだ。

「お主は、儂が敵に通じているとでもいうのか！答えよ、シャルロワ！」

ガチ切れしたよ。何怒っちゃってんの（笑）

と思ったのは俺と保守派だけのようで、「そーだそーだ！」とのヤジが飛ぶ。ヤジを飛ばしたのは過激派の歩兵軍軍団長、革新派の騎士団長、同じく革新派の大魔導師の三人。それ以外は保守派ばかりなのでヤジを飛ばさずこのやり取りをじぃっと見ている。

「貴方とは誰も言っておりません。しかし、ここに居る人々の誰かがカタパルト王国の敵と通じているかもしれないのですぞ」

正論だし、当たり前のことだ。秘策は誰かれ構わず言いふらすものではない。できる限り誰にもばらさず秘密裏に準備を進めなければならないのだ。

「……」

何も言い返せずだんまりを決め込むレーデ内務大臣。舌戦の勝敗は決したようだ。

それを察したのか空気と化していたジルが口を開いた。

「では、決を採る。マグナ族討伐軍を儂が率いるかどうか」

ちなみに決を採ったからって多数決で全てが決まるわけではない。あくまでも参考程度に、だ。カタパルト王国は国王専制政治なので

ある。

「儂が率いるのに賛成の者は手を挙げよ」

手を挙げたのは三人。レーデ内務大臣とジュネ歩兵軍軍団長と大魔導師ハンナさん。ブルゴー騎士団長は革新派だが手を挙げなかった。

「では、反対の者は手を挙げよ」

七人。保守派全員とブルゴー騎士団長だ。革新派は一つに纏(まと)まっていないらしい。

「ふむ。では、皆の意見も考慮に入れて命令を下す。シャルロワ宰相。三万五千の軍勢を率いてマグナ族を討伐せよ」

「御意。必ずや蛮族を討伐してみせましょう」

ジルはシャルロワ宰相の秘策にかけてみるようだ。俺も、あんなに自信満々に言われたら信じたくなる。それに、「できますよ」と断言した時の目が深かったのだ。全てを知り尽くした目、って感じで。

一体、その秘策とやらは何なのだろう？

第2章第1話　閣議（後書き）

亮が冷静すぎる……最早三人称レベルです。でも、これが亮の性分なんです。それ以外にも理由はありますが、それは本編で明かされることとなるでしょう。作者が伏線を忘れなければ、ですが。

さて、ここからが大変です。ヒロイン不在のまま戦争に突入！？そもそもヒロイン誰にするか決まっていないんですがね。

ヒロインはジルでいいかなぁ。とか思っている駄目な作者ですが、どうか見捨てないでください。←僕男だよ！　ＢＬは嫌いだよ！そういう意味じゃないからね！　（誤解されそうな気がしたんだ…）

第2章第2話　同盟

シャルロワ宰相がマグナ族討伐の命令受けた日の夕方、カタパルト王国内の殆どの貴族に兵士動員令が下った。その三日後である今日。シャルロワ宰相は保守派の家臣を引き連れてマグナ族討伐軍を出発させた。

すでに東方の豪族カール一族はカタパルト王国内に攻め込み、西の海賊達も活動を活発化させている。だが、北の小国は逆にカタパルト王国との国境駐屯兵を減らした。何を企んでいるのか分からないが、少なくともカタパルト王国には関係ないので割愛する。

ここは国王専用の執務室。ジルはカタパルト王国の財政の書類を見ている。今、カタパルト王国の財政状況はヤバいのである。よーするに赤字ってこと。

ちなみに部屋に居るのはジルと知らない護衛の人二人とギルさん、そして俺。

今俺はジルの相談役みたいなことをしているのだが、あまり役に立っていない。金を空から降らせる良いアイディアないかなぁと暗中模索しているところである。

「「う～ん」」

俺とジルが同時に唸る。

ここでカタパルト王国の国防について考えてみよう。情報の整理だ。

まず、東方の豪族カール一族は一万の軍勢を率いてカタパルト王国頭部を侵略し始めた。それに応対するのは有力貴族で過激派のジュネ一族。歩兵軍団軍団長ローラン・ジュネはジュネ一族の当主パウル・ジュネの伯父なのだ。この一族は『王国四族』の一つである。意味はそのまま、四天王みたいな感じ。

他にはシャルロワ宰相が棟梁をやっているシャルロワ一族も『王国四族』の一つである。つまり、偉いのだー。

話を元に戻そう。

パウル・ジュネ率いる東方守備軍は四千人。カール軍の半分もいないので、籠城(ろうじょう)するらしい。籠城は城に籠(こも)って仲間の助けを待つことである。急なことなので兵糧は四ヶ月分しかない。

これでは拙いということで、ジルの従兄弟であるマクシム・カタパルトを総大将にした東方応援軍が一万人派遣されたのが昨日のことである。この中には歩兵軍団五千人のうち二千人を率いたローラン・ジュネも含まれる。

「どうしよ……」

ジルは面倒くさそうな顔で悩んでいる……というか萎えている。

「伝令です！」

「入れ」

そんな閉塞感(へいそくかん)漂う執務室に伝令が駆け込んできた。ナイス。

俺は彼が来たことによって気まずい空気が無くなったことに素直に喜んだ。でも、伝令の男性の顔はリングを見て漏らしちゃった幼稚園児みたいで。彼は、気まずさを払拭(ふっしょく)してくれた代わりに俺達の脳を機能停止させた。

「フリーダ皇国の兵士が越境してきました！数は憶測ですが三万は下らないかと。そして、赤十字の旗もあったとの報告が届いています！」

ｗｈａｔ？意味が分からない。

「赤十字……皇王が居るのか！？ならば……奴らの目的はただ一つ」

皇王ってフリーダ皇国の王様でしょ？会談しにきたなら三万人も要らないじゃん。戦争でもない限り……戦争？

「カタパルト王国の侵略」

ちょちょちょ

ジルは立ちあがる。俺も、よく分からないけど立ち上がる。

「なあ、あれって本当？」

「本当に決まってるじゃろ。馬鹿なことを言うな」

いつもは温厚なギルさんが怒った。怖いッス。

「行くぞ」

ジルが声をかけたので、ギルさんの無言の圧力は無くなった。俺弱キャラだわー。つかさ、地味にこれカタパルト王国の危機じゃね？

その後は会議室（閣議室とは違う）に行き、次々と報告を受けた。最新報告では無くて詳しい数値の書いた資料は一時間で作り終わり、今配っている最中だ。

ジルは危機だからこそ冷静に対処しなければならないと言って表面上は冷静なフリをしている。

そして、今城に居る会議出席者が全員集まったので資料は配り終わっていないが会議を始めた。

「それでは会議を始める。たった今情報が入った。フリーダ皇国は、皇王自ら三万以上の兵を率いて越境しカタパルト王国侵略を始めた。詳しいことはそこに書いてある」

閣僚で残ったのは、ブルゴー騎士団長とハンナ大魔導師とレーデ内務大臣とバトン外務大臣とヤニク経済大臣。誰もが、驚いた顔を

している。だが、国王であるジルが冷静に振る舞っているからそれほどでもないようだ。

「無論、儂自ら兵を率いてフリーダ皇国軍と当たる。誰か、我こそはという者はいないか」

一瞬の静寂。そして、事態を呑み込んだヤニク経済大臣とブルゴー騎士団長が真っ先に手を挙げる。次いでハンナ大魔導師、レーデ内務大臣、バトン外務大臣が手を挙げた。他の貴族は閣僚に遠慮してただ周りを見回すだけだ。

「ふむ。では、ブルゴーとハンナとレーデとヤニク。共に闘い、憎きフリーダ皇国軍と当たろうぞ！」

興奮して、呼び捨てになっている。殆どの人は気付いてないだろうけど。

「「「「は！」」」」

「バトンは城の守りを頼む」

「は！」

そして、ジルはふうっと深呼吸した。気を落ちつける為だろう。

「レーデとヤニクは兵を動員し終わっているか？」

一拍置き、ジルは二人に尋ねた。兵が動員出来ていれば、明日には出発できる。だが出来ていなければ、出発は明後日、明々後日と延びるだろう。

「終わっています」

と、レーデ内務大臣。

「あと、一日かかります」

と、ヤニク経済大臣。

「では、ヤニク経済大臣。お主は、早急に領土に戻って兵を連れて来い。クリム城で合流だ」

「は！」

「さて。ここには今貴族が三十二人居るが、それぞれに命令を言い渡す。シュマン大公は従軍。キルバース公爵（こうしゃく）は従軍。ナタルミア公爵は城の防備。……」

そして、遂に戦争が始まった。

会議から三時間。軍人たちとの戦略会議も中断され、休憩中。俺、やっぱり役に立たないみたいだわ。全く口挟めない。慣れればなんて悠長なこと言ってたら、カタパルト王国は滅亡するのでは？

あーー、鬱だ。正直、俺の知識の使い道無くね？無理無理。

「ハア……」

あ、これは俺じゃないよ。ジルの奴、たんか切った割には萎えているな。いや、啖呵切ったからこそ、か。貴族の前では常に気を張っていなくてはいけない、という義務感に縛り付けられて疲れたのだろう。普通ならパニックに陥るほどのことが起きたのに。王様って大変だねぇ。

「疲れたわ……」

本音出たよ。ジルの心労を察したのか、ギルさんは何も言わない。執務室はだるだるムードが漂った。てゆーか思ったんだけど、最近執務室に良い空気流れてなくね？

コンコン。

「失礼します」

「入れ」

すると、さっきまで違う仕事をしていたリディーさんが入ってきた。余計に空気が悪くなったよ。主に俺の。俺に対して悪意こそ無いけど善意が全く無い！好きの反対は無関心っていうけど、俺はその言葉を深く実感した。

「来訪者です」

「誰？」

面倒くさい。こんな大変な時に、誰と会うんだよ。

「ミクセム王国のニブセ氏とジュゲム氏です。同盟締結を持ちかけてきました。バトン外務大臣は居ないので、代わりに部下のシグル副大臣が接待しています」

訂正。こんな大変な時だからこそ、だ。もっと解り易く言うとフリーダ皇国がカタパルト王国との同盟を破棄したから。

つまり、ミクセム王国とはフリーダ皇国と敵対している北の小国群の一つなのである。今まではカタパルト王国とも敵対していたが、昨日の敵は今日の友。フリーダ皇国の増長を止めたいミクセム王国はフリーダ皇国がカタパルト王国に侵略した、という情報を聞いてカタパルト王国と手を結ぶしかない、と踏んだのだろう。

「分かった。すぐ行くよ」

そう言い、ジルはとりあえずギルさんにミクセム王国とフリーダ皇国軍の資料を持ってこいと命じた。

十分ほど経ち、ギルさんが資料を持ってきたらすぐ国王専用応接室へと出発した。

そして、ここは国王専用応接室。二人の男がソファーに腰掛けていた。歳は一人が初老、もう一人が青年。初老の男は特段変わった

ところは無かったが、もう一人の青年からは、何かを感じた。

別に、美形なわけでもブサ面な訳でもない。顔は召喚される前に会ったコンビニの店員と似ている、普通の青年。だが、その目は何故か力強い。こういうのをオーラっていうのだろうか。

王冠をかぶったジルを認めると、二人は膝を地面に付けて頭を下げた。

「「国王陛下におきましては、拝謁させていただき恐悦至極に存じまする」」

古風、というか戦国時代っぽく二人は声をはもらせた。この世界、挨拶だけは古風なんだなー。

「うむ。そっちがニブセ殿でそっちがジュゲム殿で合ってるな。では、早速だが話に移らせてもらおうかの」

青年はジュゲムという名前らしい。

「「は！」」

二人はまるで家臣のように振る舞った。当たり前だ。前に来たフリーダ皇国のランゲ氏は対等な国の家臣だったが、そもそもミクセム王国の領地はカタパルト王国の十分の一ほどしか無い。そんな小国の家臣なのだから、腰が低くて当然。

ジルは国王用の超豪華なソファーに座って、二人に座るように促した。右隣の普通のソファーには副大臣のなんちゃらさんが座る。俺は、その人のさらに右隣に座った。ギルさんはジルの左隣だ。

「で、何の用だね」

すると、ジュゲム氏の目がキラリと光った。もちろん擬音だよ。

「我々は先程フリーダ皇国がカタパルト王国に侵攻した、との報せを受けました。単刀直入にいえば、手を組みフリーダ皇国の暴虐（ぼうぎゃく）を防ごうではないか、と言いたいのです」

予想通り、同盟の締結を求めてきた。

「魅力的だな。だが、他の小国はどうなんだ。儂はお主らの争いに巻き込まれるつもりはないぞ。不戦協定なら結んでやってもいいが、無駄なことには力を割かない」

強気に出るジル。

「割く力、ないしは金が無い、と」

だが、ジルは若き外交官ジュゲム氏に一本取られた形となった。だが、怒らない。本来なら怒っても良い場面なのに。舐められるぞ？

「あいにく冗談につきあうほど暇では無くてね。質問に答えてもらえないか？」

逆だった。これは、相手を怒らせて思考をマヒさせる為だったんだ。

あれ？さりげなくなんちゃら副大臣が空気となっているぞ。可哀想に。

「すいません、性分なもんで。質問には、……そうですね。この紙で示させてもらいましょうか」

ジュゲム氏が差し出した紙、そこには様々な国の名前が書いてあった。

「対フリーダ皇国連合、だと？」

「フリーダ皇国に隣接している小国十七ヶ国の内十ヶ国、です。しかも残り七ヶ国の内五ヶ国とは不戦協定を結びました。これらの国は漁夫の利、つまり親フリーダ皇国の小国を狙うようです」

これは、力になる。漁夫の利を狙った五ヶ国の漁夫の利を狙えば、つまり五ヶ国と親フリーダ皇国を争わせれば、十ヶ国がフリーダ皇国の敵にまわるのだ。総勢三万は下らないだろう。

ジルもそう思ったようで、ゴクリと唾（つば）を一呑んだ。

ビジネスチャンス！ならぬウォーチャンスだ！

「……いいだろう。民の平和が為に同盟を結び、共に暴虐なるフリーダ皇国と闘おうではないか！」

ジルの目も、ジュゲムの目も、勝利を確信していた。これは、強者の目。闘う者の目、だ。俺は思わず鳥肌が立った。

この日、対フリーダ皇国連合とカタパルト王国の同盟が成り、俺は勝利の気分に酔っていた。

だが、まだ戦争は始まってすらいない。

第2章第2話　同盟（後書き）

敵も味方もごっちゃごちゃ。どんどん大規模になってきています。亮にとって初めての戦争なのに……。

できるだけリアリティーを出したいから、これ以上敵は増やしたくないです。まあ、僕が言うことじゃないんですけど。

では次回、シャルロワ宰相の秘策やいかに？まだその全貌は見えませんが（作者にすら奴の考えが読めない！流石は宰相だ……）、その一部が明かされます。

第2章第3話　危惧

「なあ、ジル」

ここは、執務室。対フリーダ皇国連合との同盟が締結された後は、ジルも休憩に入っていた。隣にはリディーさんしかいない。ギルさんはまだやらなければならないことがあるそうだ。

そして、俺はふと思った。なんか、巧くいきすぎていないか？と。

「どうしたの？」

久しぶりにジルのいつもの口調を聞いた気がする。

「フリーダ皇国の皇王って、頭いいのか？」

「いいか悪いかで言ったら、……どうだろう。普通かな」

普通、か。

「じゃあさ、対フリーダ皇国連合が結成されることも気付かなかったのかなぁ。このままだとフリーダ皇国は、俺達と対フリーダ皇国連合の挟み撃ちにあうぜ」

そう、そこが気になる。何の対策もせずに、カタパルト王国の国王が死んだのに乗じて攻めてやろうとか考えた馬鹿なら何の問題も無い。しかし、もしもここまで予測済みだったらどうなのか。俺達は、とんでもない罠にはめられているんじゃ無いの？という訳である。

「いいじゃん。そのことに、何か問題でもある？」

「フリーダ皇国がそこまで予測済み、とかいう可能性は無いのか？」

すると、ジルはそんなこと無いと思うけどなぁと呟いた。リディーさんは俺を軽く睨みつける。「空気読めやコラ。折角ムード良くなってんのによォ。何なんだよテメエ、殺すぞ」的な。

「確かに、俺の考えは深読みしすぎだとは思う。でも、常に最悪の可能性を考えた方がいいだろ？」

例え最悪なことが起きても対策がしっかりしていれば、なんとかなる。少なくとも、何も対策していないよりはマシだ。

とはいえ、具体的に何があるかもしれない、と思った訳ではない。ただ、なんとなく気になるんだ。第六感と言えばかっこいい。

「そうだね。で、もしそうだとしたら何が起こると思うの？」

だから、俺はそう言われると答えずらい。ジルもリディーさんも心配そうな顔をしている。俺が、重要なことに気付いたと勘違いしたのだ。これが「なんとなく」と言ったら、何コイツってなるだろう。

なので、適当に具体例を考えてみた。フリーダ皇国に有利な状況、たとえばカタパルト王国の敵が増えるとか。敵、か。

「あの連合が俺達をはめる為に作られたモノだとしたら？あいつらに騙されていたら、俺達の作戦は大幅な修正が必要だ」

軍議を聞いた限りじゃ、連合の戦力を当てにしている奴ばかり。自分達だけで勝とうと思っている奴が少なすぎる。まともなのはブルゴー騎士団長だけだ。あくまで俺の目から見たら、だけど。

その言葉にリディーさんは反論をしようと口を開く。

「でも、彼らは昔から反フリーダ皇国でした」

「十ヶ国もあるんだ。一国でも内通してたら、彼らの戦力は当てにならないよ。情報は戦局を左右する。カタパルト王国侵略軍が戻る必要もなく敗北するのは必至。それならカタパルト王国侵略軍は何にも気にせず戦えるよ」

俺って、口が達者だなぁ。と思いつつ悔しそうなリディーさんに追い打ちをかけるように俺は口を紡ぐ。

「それに、家臣にもフリーダ皇国と内通している者がいたら？さっき情報の流出は戦局を左右するって言ったよね。それは、カタパルト王国においても同じなんだよ」

これは、非常に危険だ。俺達の行動が丸分かりだと、奇襲を食らうかもしれない。最悪ジルの位置を知られて国王戦死、てなるかもよ。

「貴方は！国王陛下の忠臣たる貴族が神聖なる王国を裏切るとでもいうのですか！」

「あくまでも例えばの話だよ。それに裏切らない保証は無い。俺には、ジルに忠誠心を持っている人が殆ど居ないように見えたけどな」

いつもパシリにされている鬱憤を晴らすように反論する。

俺の方が正しい。少なくとも、閣僚でジルに対して忠誠心を持っている奴は一人もいないように見えた。まだ武官は国王の器を見せれば従いそうだったからいい。でも文官はみんな金の亡者だから、利権を保証しなければ従わないだろう。きもいよ、本当に。

「それは、国王陛下に対する不満、と捉えてよろしいのでしょうか？」

リディーさんは俺の言葉に棘を感じたらしく、その言葉に怒気をはらませた。

「勘違いしないでくれるかな。俺はそういう意味で言ったんじゃない。ただの意見さ」

一々面倒くさい。さん付けするのやめよっかなーと思った俺とキレてるリディーさんの目線がぶつかる。漫画なら火花が散るほど険悪な空気を変えたのは、驚くべきことにジルの一言だった。

「喧嘩なら、外でやってくれる？」

底冷えするジルの声。それはまさしく王の言葉。俺もリディーさんも硬直した。ジルから感じるのは畏怖。国王になってジルも変わったのだろうか。前はこんなに怖くなかった。なーんて俺はジルと長い付き合いではないんだけどね。

そしてちょっぴり反省。もっと柔らかく言えば良かったかも。

俺達が委縮したのを確認すると、ジルは口を少し綻ばせた。

「リョウの意見は確かに一理ある。対フリーダ皇国連合については僕らでは何もできないけど、内通者は特殊部隊に探させるよ。居ないのが一番望ましいんだけどね」

「特殊部隊？」

「ああ、亮は知らないのか。影から国王を支える部隊だよ。今もどこかで僕を守っているはずだ。諜報任務とかには長けているから、結果は出せるだろう」

忍者みたいな感じかな。

「じゃあ、僕はもう寝るよ」

まだ夕方だが、いつ何が起こるか分からないので眠れる時に眠ったほうが良いのだ。ジルは目を閉じた。

グーー。スピーー。

寝るの早！　まさしく一瞬で寝たぞ。野比の〇太君と競え合える人材。是非とも我が睡眠研究部に！

……って、ここは学校じゃないじゃん。ついつい昔の癖（くせ）が出ちゃったよ。俺、中学生の頃は睡眠研究部に属していたからなぁ。俺が行くはずだった高校には高一にして睡眠のインターハイ優勝を飾った先輩が居たことを思い出して、俺はちょっぴりセンチメタルな気分になった。

みんな、元気にしているかなぁ。行方不明になっていると思うか

ら、心配してくれているだろうなぁ。……そこ！　俺を心配してくれる人が居る訳がないとか言うな！　傷つくだろ！　グスン。

とか妄想に浸っていたら、リディーさんがぼーっとしているのに気付いた。気を張っている姿しか見たことがないので、驚きだ。黙っていれば美人なのに。このきつい性格なんとかならないものか。ツン率１００％のツンデレの方がまだマシだよ。ってそれもうツンデレじゃあないか。

無心になってぼーっとしていると、思考は自然に戦争の方に向かった。

どうなるんだろう。

俺は心配症だから、どうしてもこのまま巧くいくとは思えない。だってさ、そうだろ？　このままいけばフリーダ皇国は俺達と連合の挟み撃ちにあう。それに気付かない馬鹿じゃあない筈(はず)だ。

戦略的な懸念以外にも、カタパルト王国を戦争でフルボッコにできる作戦があるのでは？　とも思ったりする。もしも気付いていたなら、何を考えて軍を動かしたのだろう。

色々考えて、俺は一つの可能性を見つけた。

「グラビット鉱山……」

そう、狙いは大量の収益が見込まれるグラビット鉱山なのでは？　そこだけ奪って帰るつもりではないか、と思ったのだ。実際フリーダ皇国軍は西、つまりグラビット鉱山のある方向に動いていた。

でも、それにしては不自然すぎる。グラビット鉱山の近くは複雑な地形になっていて、そこだけを支配するのが難しいのだ。

詳しく説明すると、グラビット鉱山の北には山脈がある。また、東にも西にも大きな街道が無いので維持するには南部の領地を奪わなければならないのだ。すると、その間に連合がフリーダ皇国を攻め落としてしまうかもしれない。カタパルト王国は時間稼ぎをすればいいので、楽だ。

だから、やはり何か策があるのだろう。連合かカタパルト王国を足止めもしくは撃破する作戦。色々ありすぎて、対処に困る。

ただ、一つだけ言えること。

「もしもフリーダ皇国の皇王が馬鹿じゃなければ、……これって危機じゃね？」

「なんですかいきなり」

うわ！リディーさんが反応してきた。

「あ、いえ。何でもないです」

面倒くさいので、適当にごまかす。リディーさんは怪訝な表情を見せたが、何を納得したのか視線は俺からそれた。

まあ、いいや。寝よ。

「――――て」

ん？うるさいなぁ。

「起きてって言ってるじゃん。おーい、リョウ」

目を開けると目の前にジルの顔が視界を一面遮(さえぎ)っていた。女性もしくはそっちの趣味がある人には「くーー。たまらん！」と言いたくなりそうな光景だが、俺はノーマルな男。何も感じない。これがリディーさんだったらなぁ。

「すまん」

時計を見ると、最後に見た時と比べてだいぶ進んでいる。五、六時間ほど寝ていたらしい。

ちなみにこの世界の時計は一味違う。元の世界の時計は十二時間経って一周だが、この世界の時計は二十　四時間で一周なのだ。そのため秘書をやり始めたころは苦労した。夜の九時だと思ったらまだ六時だったとか。カルチャーショックだ。

「何か起こったのか？」

「軍議だよ。あと一時間で始まるからね。特に準備することはないだろうけど、一応起こしておいた」

ここで「はァ！？もっと寝かせろよ！」と言う俺ではない。なぜ

なら、軍議の前に調べておきたいことがあるからだ。願ったり叶ったり。

それは、地形である。

「資料を取りに出かけてくる。十分位かかると思うけど、いいよね？」

部屋に居るのはリッツとジル。一応断りを入れてから地図を取りに行く。

「いいよ」

ジルの承諾を受け、国王専用執務室を出る。地図は、第一級資料室に保管されてある。そこに入るのに必要な鍵を貸してもらう為には身分証明書を見せなければいけないので一応ポケットにそれが入っているかどうか確認した。ん？無いぞ。左のポケットか？

あった。ふう、良かった。無くしたかと思ったよ。一度無くした時、大変な騒ぎになったからちょっとトラウマになったのだ。そうでなくても再発行している間に軍議が始まってしまうので焦るのは仕方がない。

ここまで来てあれ？と思った人は居ると思う。俺も最初にこの話を聞いた時は疑問を覚えた。

何が疑問って、地図が第一級国家機密になってることだよ。それでリディーさんに聞いてみたところ、大規模な地図を持っている一般人はおらず、それが常識らしい。

調べてみて理由は分かった。そう、国の地形を敵国に全て把握されると戦争で勝てなくなってしまうのだ。『天地人』と纏められる天の時、地の利、人の和。その一つの地の利を失い、完全にリードされるということ。こりゃ大変だ、という訳である。

っと、着いたな。

「あ、第一級資料室の鍵下さい。これ、証明書です」

「はい」

受付の人からもらった鍵を持ち、第一級資料室に向かう。

ピィーーン。

鍵は魔術で開くので、カチャリとは鳴らない。指紋認証的な？

「ここか」

そこは、図書館みたいな構造だった。だが、薄暗いので雰囲気は最悪。ひぐ〇しの拷問部屋みたいな感じ。

「これは……過去の予算だ」

目的とは関係ないが、少し覗(のぞ)いてみた。すると、なんと１３４１年は軍事費が半分を占めている。歴史年表を見ると、『パプリカの乱』が起こったとされる年だ。どうやら、内乱が起こったらしい。パプリカというのは反乱した貴族の名前だ。

「ふむふむ……っと。ここに来た目的をすっかり忘れていた。さて、地図を探しますか」

いいところだったのだが、時間がないので読むのは諦めることにする。気分を入れ替えて地図を探さなきゃ。ジルが待ってる。

地図といっても、全体図や一部をズームインした地図など色々ある。その中で俺は全体図と北部の図を取り、そそくさと第一級資料室を出た。出るのに鍵は要らない。

あの擬音もう一度聞きたかったのだが、残念だ。鍵を使わないと音は出ないらしい。

「ども」

鍵を受付の人に渡して、早歩きで執務室に向かう。

急がないと。軍議が始まる前にやりたいことがあるのに。

第2章第4話　急報

部屋に戻り、俺は地図を見ていた。フリーダ皇国側に立って、何か良い作戦がないか探しているのだ。これこそ、俺の「将棋盤をひっくり返す」考え方。単純だが意外に効果は高い。

む。パクリって言うな。

「ふ～む」

だが、特に良さそうな作戦が見つからない。そもそも、まともに戦ってカタパルト王国が勝てるかというと勝てないのだからただ「全面対決でぶっ殺してやるわー」と考えたのかもしれない。戦争に私用の地図を持っていくつもりだったので、持ってきた意味がないという訳ではないが。ちょっと残念だ。

「失礼します！」

汗だくのおっちゃんが入ってきた。部屋の中にはジルと俺しか居ない。こいつが暗殺者だったら、ジル死ぬんじゃね？いや、忍びの者的な人がいるとか言ってたし大丈夫か。

「ど、どうしたんだよ」

そういえば、ジルの返事を聞かずに入ってきたなこの兵士。どんだけ焦っているんだよ。リディーさんが居たら、説教されるぞ。いや、あの人なら解雇もありえるか。

ん？　なんかデジャヴが。この風景前に見たぞ。あの時は、フリ

ーダ皇国の侵攻を報告された。それと同じ位……いや、それ以上に拙い事態が起こっているのか？　いや、そんなことは……

「シャルロワ宰相返り忠！シャルロワ宰相返り忠！」

返り忠ってなんぞや？　と俺は疑問を持ったが、言葉の意味が分かったらしいジルは口をポカンと開けた。予想通りヤバい事態の様だ。

「……、う……嘘だ。そんな馬鹿なことがある訳が……」

ジルは目尻に涙を浮かべ、放心状態になった。おいおいどんだけ～。シャルロワ宰相何したらこんなにジルがショックを受けるんだろ。まさか裏切った訳じゃあるまいし……裏切り？

「なぁ、ジル。まさか、シャルロワ宰相が裏切った訳じゃないよね？」

「そんなの、僕が聞きたいよ」

返り忠って、裏切りという意味らしい。俺の人生、いやカタパルト王国オワタｗｗｗｗ

「し、失礼します」

悲壮な空気に耐え切れなくなったのか、兵士は逃げ去った。残されるのは、目の死んでる国王と生気の無い秘書。

「……ハ。ハハ、ハハハハハハハハハハーーーーーーーーッ」

ジルは壊れたように笑い出した。その瞳は絶望色を浮かべている。闇の様に黒く、そして深い。現実に耐え切れなくなった様だ。だが、そこまで絶望する事態なのかなと俺は思った。

だってさ、たかが一人謀反しただけだぜ。大した事態じゃねえだろ。余裕余裕。こんな時こそ主人公補正発揮してやるよ。これって最早開き直りか。

「ケケケ」

これが自分の声だと理解するのに、数秒かかった。怖い笑い声だ。友達に「笑い方怖い」って言われていた理由がやっと分かった。

「どうしたのですかジル様」

するといつの間にかギルさんが居た。彼は、主従揃って壊れたように笑っているのを奇怪に思ったようだ。ギルさんを認めた俺は、馬鹿みたいに笑っているジルは答えないだろうと推測し、代わりにギルさんの質問に答えた。

「ジルは壊れちゃったみたいです。シャルロワ宰相が裏切ったとか兵士に言われて。そんなにヤバいんですかね？」

するとギルさんはさして表情を変えず、俺に言い放った。

「その報告は私もさっき受けたところです。それよりも、リョウ殿。何をボーっとしているのです。主君が不調な時こそ家臣が正気を取り戻して差し上げなければいけないのですぞ」

「すいません」

確かに。俺はもっと冷静になれば良かった。
俺を叱ったギルさんはくるっとジルの方に向いた。目が吊り上がる。

「ジル様！」

パシィン！

その瞬間いつまでも笑い続けているジルの頬をギルさんが引っ叩いた。ジルが椅子から転げ落ちる。流石にやり過ぎでは？と非難の視線を向けたが、ギルさんは微笑した。これ位大丈夫らしい。
一方、ジルは目でキョロキョロと周りを見渡し、口を開いた。

「あ、あれ？何で僕は椅子から落ちているの？それに、何でギルバートが居るの？リョウしか居なかっ……そうだ。シャルロワが、返り忠をしたって聞いて、それで……

「ジル様は正気を失っておりました」

ギルさんがジルの言葉を遮る。まるで、親が子供を叱っているようだ。どちらかというと、執事に怒られている資産家の次男かな。

「え？あれは夢じゃないの？シャルロワ宰相本当に返り忠をしたのかよ」

「はい。シャルロワ宰相の返り忠は紛れもない真実でございます。ですが、ジル様。どうか気を強く持ってくださいませ。あなたは、この国の未来を背負っているのですぞ」

「う、うん」

ジルはようやく正気を取り戻したようだ。さっきの情けない姿とは一変、頼もしい王の姿になっている。

「じゃあ、軍議の前に出席者全員に情報を通達しておいて。あと、緊急でシャルロワ反乱軍の情報を纏めて。会議に間に合う？」

「はい。大丈夫です」

ギルさんは走り去る。なんか重大な局面だけど、俺は何すればいいんだろう。やること無いのかな。じゃあ、この地図を生かそう。北部の地図は要らないけど、全体の地図なら少しは使える。

って、シャルロワ軍の情報が無きゃ意味無いじゃん。会議まで時間はあと四十分。十分は考える時間が欲しいから、三十分以内にシャルロワ軍の資料が欲しい。

どうせ軍議で配るんだから、十分位我慢しろって？それじゃあ意味が無い。俺は、軍議で「こんな手があったのか」的な作戦を発表するつもりなので考える時間が欲しいからだ。秘書なのに無理して出しゃばるな、と思われるかもしれないが、これだけは避けて通れない。理由は二つある。

シャルロワ宰相が裏切ったのは相当の痛手。このままだとカタパルト王国が滅亡してしまう可能性が大きいので俺も何か良い作戦考えなきゃ、というのが一つ。これを機に俺の発言力を増やしておきたい、というのが一つ。このままいつまでも秘書の地位に甘んじていたら、元の世界に帰れないんだよ困ったことに。

何故なのか。詳しく言おう。元の世界に帰る唯一の手段は、セリウス王国の召喚術だ。だから、とにかく政治的影響が欲しい。別にカタパルト王国を裏切ったって構わない。だが、今俺を欲しがる奴なんて居ないだろう。だから、俺は偉くなるのだ。セリウス王国の神官エーベル一族に命令できるくらい偉くなってやる。権力を得るのだ。

「暇だなー。そうだ、南部の地図を取ってくるか。ジル。俺用事あるからちょっと出かけるわ」

難しい顔をして何かを考え込んでいるジルに一応声をかけて部屋を出る。そして俺は再び第一級資料室に向かった。

「あ、ギルさん。もう終わったんですか？」

俺が部屋に戻るとギルさんが書類を抱えて机に置いているところだった。相変わらず仕事が速い。

「見るかい？」

「ありがとうございます」

ギルさんは気が回る。俺はギルさんからありがたく資料を貰い、地図と見比べた。

シャルロワ軍は総勢三万五千人。マグナ族討伐軍がそっくりそのまま反転した様子だ。その中には革新派や過激派の貴族もいる。シャルロワ宰相は随分前から反乱を画策し根回ししていたようだ。シャルロワ軍は今ビスケット街道を通っているらしい。ビスケット街道はその名の通り南の要塞ビスケット城から北に延びている街道である。

一方カタパルト王国軍は総勢八千人。だが千人にはいざという時に備えて城に残ってもらうので実際出兵できるのは七千人。構成は魔法部隊三千、騎士団二千、歩兵軍団三千。歩兵軍団はジュネ歩兵軍団長が精鋭二千を率いて東に向かったので、練度はそこまで高くない。とはいっても、民兵に比べれば天と地の差ではある。

ここで民兵と直轄兵について説明しよう。民兵は戦争をする前に領民から徴兵した兵士で、戦前の赤紙で出兵した兵士がそれだ。要するに普段は農業などの普通の仕事を営んでいるが戦争になったら活躍するぜ！な人。一方、直轄兵は国に仕え戦争を生業としている。自衛隊の人や中世の騎士みたいに。常に訓練をしているので、民兵に比べれば練度は高い。

閉話休題。

戦力差はこんな感じである。簡単に言うと敵は五倍。北に散った貴族も含めればもっと増えるが、その中には保守派の貴族も含まれる。彼らが裏切っている可能性は大きい。北の貴族の中には信頼できる人も居るらしいので北に備えて兵を残す必要は無いらしいのでまだ勝算はある。だが、それでも勝つ可能性は１％位だ。憶測だけど正しいだろう。

「むぅ……」

これはやばい。ジルが正気を失ったのも頷ける。大ピンチだ。ようやく実感がわいてきたよ。

資料は見たので、秘書机に南の地図を広げる。シャルロワ軍の進路を予想してみよう。ビスケット街道最北終了地点の北にはいくつかの群がある。ここで言う群は日本の市とか県とかそういう括りの群だ。その北はパセリ平原。地理的にパセリ平原はシャルロワ軍と王都の真ん中なので、ここでで両軍はぶつかるだろう。

と考察してみたが、そこからがうまくいかない。見渡す限り何も無い平原でどう戦えばいいのか、という問題である。これは単純に采配で勝つしかない。ハメ手も奇襲もできないのだ。ま、パセリ平原で衝突しないかもしれないのでとりあえずギルさんに聞いてみよう。もしも間違っていたら考えなくてもいいことを考えて時間を無駄にしてしまう。

「あの、ギルさん」

最近ギルさんにちょっと砕けて呼べるようになった。親しくなったかな。

「なんですか？」

「あの、ちょっと地図見て下さい。俺達とシャルロワ軍が衝突するのって何処だと思いますか？俺はパセリ平原だと思うんですけど、一応ギルさんの意見も聞いておきたくて」

「そうですね。このままならパセリ平原で間違いないでしょう。で

きるだけ広い場所で戦った方があちらとしても数の利を生かせますから」

「ありがとうございます」

ふむ。やはりギルさんもそう思っていたか。そこまでに至る理由は違うけど。流石ギルさん。目の付けどころが違う。数の利を生かすとか、頭いいなー。

ん？　何かが引っ掛かるぞ。んー。数の利を生かす？

「あ」

分かった。この考察は相手の立場に立ってばかりだったんだ。広い場所で戦えばシャルロワ軍は数の利を生かせるので勝ちは間違いなし。カタパルト王国側の勝利は不可能だ。なら。

そんな場所で戦わなければいい。

こっちが仕掛ければシャルロワ軍も応戦せざるを得ない。先手必勝ってこと。

で、具体的に何処で戦おうか。う～ん。そうだな、あっちが数の利を生かそうとするんだから、こっちも何かを生かさなきゃ。でも、こっちに利なんてあるかな。

いや、生かさなくてもいいか。相手の数の利を『打ち消す』。それだけでいいんだ。数の利を打ち消し、同数で戦えば練度の高いこちらが勝つ。

方向性は定まった。あとは相手の数の利を打ち消す、つまり相手を分散させる作戦を練ればいい。

第2章第4話　急報（後書き）

驚きましたか？なんとシャルロワ宰相の『秘策』はハッタリだったのです。自分が兵を率いて反乱を起こす布石だったのですよ。決して、思いつかなかった訳ではありません。本当ですよ？

第2章第5話　愚策

「では、軍議を始める」

ジルの凛とした声が軍議場に響く。軍議場に閣僚は武官しか居ない。貴族である文官は殆どが故郷で兵を集めているのだ。ジュネ歩兵軍団長が居ないので、今居る閣僚はブルゴー騎士団長とハンナ大魔導師の二人ということになる。あとは、副団長とかそこら辺の階位の武官である。

「南でシャルロワが率いる軍は三万五千。対して我々は精兵とはいえ八千。城を出れるのは七千に満たない。良い作戦が無いか、皆は知恵を振り絞ってくれ」

意外なことに「適当に攻めれば勝てるじゃろー。ワハハハハハ」とか言う馬鹿は居なかった。誰も喋らない。ブルゴー騎士団長も気難しい顔をして唸っている。俺はさっき作戦を思いついたのだが、こんな空気で言っても注目は集まらないだろう。雰囲気が（悪い意味で）最高潮に達した時に言うから「コイツ凄ぇー」となるのだ。

「兵力差だけを伝えられてもなかなか思いつかないだろう。地図を出す」

ジルが俺に目配せをした。地図を出せ、という合図だ。俺は倒しておいた地図を立てた。大きいテレビみたいな感じの地図で、遠くからでも分かるようになっている。そして、俺は磁石のように地図にくっつく小さい玉（囲碁の碁石のような形をしている）を配置する。白色のがカタパルト王国軍、黒色がシャルロワ軍である。一つ千人として配置しているので、ビスケット街道が黒色で埋まった。

敵は多いな、と改めて実感したのである。

「何か無いか？」

視線が地図に集中する。皆必死に考えているようだ。だが、名案が浮かんだ人はまだまだ現れない。

二、三分ほど静寂が続いたが、不意にブルゴー騎士団長がその静寂を破った。

「国王陛下。発言をお許しください」

「うむ」

「私は、タケチュリア山道出口で交戦するのが上策だと思います。ここは狭いので、兵力の差があまり関係有りません。しかも、タケチュリア山道は我々に近い場所にあります。罠をかければより効率的に敵を蹴散らせるでしょう。そのうち、敵も諦めて撤兵するに違いありません」

成程。投入できる兵力が制限される狭い場所で戦えば、質の高いカタパルト王国軍が圧勝できる。罠もバンバン使って殺しまくれば敵も諦めるだろう、ということか。ブルゴー騎士団長頭良いなー。こりゃあ、俺の秘策を使わなくても大丈夫かもしれない。無理に俺の意見を押し通す必要なんて無いんだし、これでいいかなぁ。

「では、どうタケチュリア山道出口に誘導するのだ？敵も馬鹿ではあるまい」

ジルが疑問を呈す。その問いに、ブルゴー騎士団長は誇り気に答

えた。

「タケチュリア山道入口に敵が分かるように兵を配置します。山道を避けて迂回したら背後を取られるので、恐らく交戦することになるでしょう。そこで、ちょっと戦ったらすぐに逃げるのです。当然、敵も追うでしょう。山道を出て迂回すれば、結局背後を取られることになるのですから。そして、結局我々の布陣するタケチュリア山道付近に辿りつくのです」

成程。全軍を二つに分けて誘導作戦を行うのか。少勢が分裂をするのはタブーだが、そうも言ってられまい。仕方無いのだろう。ん？

「成程。この作戦ならば、敵を蹴散らすこともできるだろうな。流石はブルゴー」

待てよ。俺は重要なことを見落としてないか？俺達が分裂できるってことは……

「ありがたき幸せ」

敵も分裂できるのだ。

そうだ。そうだよ。将棋盤をひっくり返せ。あいつらは三万五千人居るんだ。半分の一万七千人になったって、七千人しか居ないカタパルト王国軍にそうは負けまい。そもそも、誘導部隊を見た時点で抑えの兵を置いて迂回するかもしれないじゃないか。こんな作戦全然凄くない。

「他に、意見はあるか？」

ふと軍議場を見渡すと、圧勝ムードになっていた。ブルゴー騎士団長万歳！って感じ。ここで反論したら俺ＫＹじゃん。いや、ここはとことんＫＹになるべきだ。できるだけ自信ありげに言えば、なんとかなるって。よし、行ける。

「国お「た、大変です！」――――ッ」

俺の声を遮ったのは連絡係の兵士。またまた血相を変えて、今度は何があったんだよ。

ジルもそう思ったのか、兵士に顎で促した。だが、兵士が言ったのは予想外の出来事だった。

「マクシム・カタパルト様が、返り忠をしました！どうやら、シャルロワ軍はその分隊に過ぎないようです」

カタパルト王国の不幸属性半端ねえな。思わず「不幸だーッ」って叫びそうになっちゃった。流石に自重したけど。

「詳細を」

ジルは冷静に対処している。ギルさんに貰った喝が効いているのかな。普通だったら発狂レベルだろ、この事態。つーか、発狂しているおっさん居るし。いや、どちらかというと憔悴（しょうすい）かな。

さて、ここで何故マクシムの反乱がヤバい事態なのか説明しよう。まず、マクシム・カタパルトという人間はジルの従兄弟である。要するに、皇族ってこと。しかも、皇位継承権も持っていてジルの次に偉い皇族なんだ。かつてはジルとマクシムのどちらが皇位継承権を得るかで議論になったらしい。そんな人が敵に回ればどうなるか。簡単である。士気が落ちるのだ。

ただの貴族が敵に回るのとは違う。さっきまでは「敵の圧倒的優勢だけど、こっちは王国側なんだから俺は正義なんだぞ！」だったが、今は「王位を争っていて、こっちが圧倒的敗勢って無理じゃね」である。分かり易く幕末風に言うと、錦の御旗をこっちだけが持ってる状態からお互い錦の御旗を持っている状態になるという訳。

その上、同じ理由でシャルロワに根回しされていない保守派過激派の貴族でも敵になるかもしれないのだ。絶望するのには十分過ぎる情報である。

だが、まだ俺にはあの秘策がある。少々予定が狂ってしまったとはいえ、まだまだ勝利の可能性は捨てがたい。不幸絶望何でもいいぜバッチコーイ！

「マクシム軍は総勢八千。それをジュネ歩兵軍団長率いる総勢一万が食い止めているようです」

つまり、いずれ東は破られるということらしい。東の豪族カール一族の一万人が到着したら、フルボッコ大会が始まるからだ。それ以前にマクシム軍を撃破できれば話は別だが、不意を突かれたジュネ軍にそれを期待するのも酷だろう。

「くっ。……厳しいな。だが、やることは変わらない。偉大なるカタパルト王国を裏切った逆賊共を片っ端から打ち破るのみ！違うか？」

ジルの自信に溢(あふ)れる声にみんなの顔が喜色に輝く。益々気まずくなるばかりなのだが、言わざるを得まい。

「秘書という身分で恐れながら、国王陛下に申し上げたいことがあります」

出来る限り明るい顔で、この空気をぶち壊すべくジルに声を掛けた。ジルは「うむ。何だ？」と答える。何を勘違いしたのかジルは喜びを隠し切れていない。俺が「実は味方があと少しで現れるのです」と言うのだとでも思ったのかよ。

周りの視線が俺とジルに注目し、軍議室に静けさが戻る。本来軍議中秘書が口を挟むのは御法度なので誰かに止められると思ったのだが、周りもジルと同じ勘違いをしているらしく何も言ってこない。

「これは、王国直臣の皆様にも聞いてもらいたいことなのですが……」

ここが勝負。勇気を出すんだ、俺！

「ブルゴー騎士団長の仰られた作戦なのですが、その作戦が成功する確率は極めて低いと思われます」

プレッシャーから逃れるべく早口で言いたいのを我慢し、余裕を見せるように俺はあえて勿体ぶった言い方をした。周りは驚き、声も出ない様子だ。ここは畳みかけるか。

「皆様はどうやら勘違いをしているようですね。ブルゴー騎士団長はカタパルト王国軍を二手に分け片方が誘導する作戦を仰りました。ならば、敵も軍勢を二手に分ける可能性は考えなかったのですか？例えばすでに二手に分かれて進軍しているとか。例えば抑えの兵をタケチュリア山道入口付近に残して本隊は迂回するとか」

「くっ……しかし」

ブルゴー騎士団長が言い訳がましく口を開く。ここは一喝。

「しかし、何だと言うのですか？」

いやらしく聞き返す。

「……ッ」

想定通り。ブルゴー騎士団長は何を言っても俺に鋭く切り返されると思い喋れない。これで周りには俺の優位をより印象付けられただろう。

「この作戦の成功率は一割にも満ちません。逆賊シャルロワがこんな罠も見抜けない馬鹿だったら勝てるかもしれませんが」

相次ぐ駄目だし。言い過ぎたかも、周りの反発を無用に大きくしているだけじゃね？とも思うが仕方が無い。このキャラを突き通すぜ。そもそも、この言葉は俺の台本をそのまま音読しているだけなのだ。俺の予想だと次は……

「では、貴様にこの案を超える作戦があるとでもいうのか！　あるのならば言ってみろ！」

とブルゴー騎士団長に言われる筈だ。実際俺に怒鳴ったのは副騎士団長の女性だが、細かな差異は気にせず。

「ありますよ、勿論。なんなら、言ってみましょうか？」

副騎士団長の女性への挑発。何故さっさと言わないのかというと、そういう空気ではないからだ。

詳しく言おう。俺は副騎士団長の女性（以降副子さんとする）に秘策の内容を聞かれたのではなく、「てめえどうせ良い作戦考えて無いんだろ？人の揚げ足とるなよクソ野郎」とこんな感じのニュアンスで怒鳴られたのだ。ならば、今秘策を言うよりも内容を聞かれてから言った方が良い。

「あるのならば言ってみろと言っただろう！　耳でも壊れているのか？」

副子さんは怒気をはらませて俺を罵倒する。みんなも困惑よりも秘書の分際で揚げ足を取られた怒りが勝ってきている様だし、そろそろかな。

「では」

立ち上がり、隠してあった指示棒を取り出す。秘策を説明する為に地図の横に立った。みんなの視線が集まって緊張するなぁ。こんな状況小学校の頃のスピーチ以来だよ。

「国王陛下。我が秘策を説明してもよろしゅうございますか？」

蚊帳の外に居たジルにも一応確認を取る。「うむ」と答えたジルの目にもやはり不信の感情が。ちょっとショックだが、まだジルは俺の天才的作戦を知らないので無理は無いだろう。

さて、と。いい感じに空気も温まってきたし、始めるとしようか。

「皆様。最初に言っておきますが、この作戦のキモは情報です――――」

第2章第5話　愚策（後書き）

なかなか展開が進みません。今回は一気に亮の秘策を書くつもりだったのですが、二つに分けることになってしまいました。ちなみに次回のはちゃんとした秘策なので安心してください。シャルロワ元宰相みたいなハッタリ（もしかして、裏切るということが秘策？）ではありません。

さて、次回では亮が超天才的な（誇張表現アリ）秘策を明かします。どんなもんか、楽しみにしていて下さい！

第2章第6話　秘策

「第一段階。ブルゴー騎士団長の仰った作戦、仮の名を山道作戦としますが、それを利用します。正しく言うと、山道作戦を私たちがするとシャルロワに思い込ませて裏を書くのです」

これは、今思いついたもの。俺の秘策と組み合わせれば、より勝率が上がると読んだ。思考、思考、思考……

「まず第一段階。タケチュリア山道入口付近に千人の兵を置きます。この時絶対に人数は秘匿して下さい。この場合予測される敵の行動は三つ。馬鹿みたいに攻めてくるか、抑えの兵を二、三千人程置くか、あるいは警戒して五千人程抑えを置くか。一つ目なら山道作戦で済みますし、二つ目なら抑えの兵を蹴散らして敵の背後に回ることができるので問題ありません。そもそも、敵はタケチュリア山道入口付近の兵数を知らないのですから、半端な数を置くはずがありません。三つ目の手段が正解です。この時は素直に待機して下さい。この千人は、私達の採る作戦を山道作戦だと誤解させるのと敵の兵数を少しでも減らすのが目的です。もしも完全に秘匿できれば抑えの兵数は増えるかもしれないので、心がけて下さい」

考えながら喋る俺に周りはそんな手があったのか、と感心している。まあ、俺の演出した空気に流されているだけだけど。味方用の黒い石を山道入口に一個、そのすぐ南に敵用の白い石を五個置く。右手で白い石を三十個程取り、俺は喋るのを再開した。

「第二段階。ここで敵は選択を迫られるでしょう。二手に分かれて東と西にそれぞれが迂回して進軍するか、固まって東西どちらかに迂回するか。固まって動かれると私達に勝つ見込みはありません。

例え五千人を打ち破って挟撃しても所詮は寡勢(かせい)。五倍もの敵に呑まれるからです。良い作戦でも思いつけば別ですが、そんな状況での作戦なんて私には考え付きません。
ただ、敵が固まって動く可能性は限りなく低いでしょう。理由は、挟撃する時に何か私達に作戦があるかもしれないという危惧です。敵は私達が山道作戦を採ると思っているので当然挟撃の時にも何か策があると思うでしょう。実際は無いのですが。一方で、二手に分かれればどちらかが破られてももう片方が進軍できます。どちらの作戦が良いかは言うまでも無いでしょう」

これは賭けに近い。敵が二手に分かれるはずだという理由は弱く、固まって動かれる可能性も十分あり得るのだ。後でその可能性を潰すのだが、今はまだ考え中。そして、みんなの表情が曇(くも)る。

「それでは、我々は両方とも足止めしなくてはならないのか？　そんな方法がある訳がないだろう」

髭を生やした武士みたいなおっさんが尋ねる。だが、勿論その点は補強済みなので大丈夫だ。危ねー、「そんな理由じゃ二手に分かれねえだろ」と言われたら返す言葉も無かったよ。

「これから説明しますよ。さて、話を元に戻しますが、第二段階の続きを。
敵が二手に分かれると仮定します。最善の策は、総大将つまりシャルロワのいる方を狙う作戦です。ここで、さっき言った情報の重要性が現れてきます。シャルロワの居ない方と交戦すれば……たとえ勝ってもさらにシャルロワ軍本隊と勝負しなければならなくなります。とにかくシャルロワの居る部隊と戦う為に情報を集めるのです。総大将の居ない軍勢を打ち破った所で、大勢に影響は無いのですから。

さて、抑えに五千人置いているという仮定ですので敵は三万人。これが分かれるので敵は少なくとも一万五千。最悪二万人居るでしょうから、そう仮定します。一方私達は五千人。余った千人にはもう一つの部隊との戦闘を要求します」

整理しよう。カタパルト王国直轄兵は全部で八千人居る。王城に千人、タケチュリア山道入口に千人、対シャルロワ軍別働隊に千人、そしてシャルロワ本軍に五千人。

敵を二万人と仮定した理由を一応説明しておく。簡単なことである。その場合が最悪の状態だからだ。将たるもの（将ではないが）、常に最悪の事態を想定しておかなければならない。最悪の事態すら対処できれば、最悪では無い場合でも対処できるのだ。

「そして、第三段階。敵軍との戦闘。一応言っておきますと、ここからが本番です。敵は二万人味方は五千人と、四倍もの敵を相手にしなければならない状況は最悪と言っても過言ではありません。兵力差は、単純に激突した場合と比べて一万三千人減っていますが。

さて、こんな最低最悪絶体絶命の状況から逃れる作戦を紹介しましょうか」

ゴクリと唾を呑むみんな。十分に間を持たせて、俺は告げた。

「――――国王陛下を囮にし、殺到する軍勢の間を掻い潜り、そしてシャルロワを討つ。簡単でしょう？」

文字通り囮にはしない。国王が死んだら俺達に正義は無くなる。

これは、王位継承権を巡る戦争なのだ。

「国王陛下を囮にするとは……何たる不敬！」

一人のおっさんが怒髪天を衝くといった感じで俺を怒鳴りつけると、周りの連中も「そうだそうだ」と便乗して俺を叩いた。ミスった感が否めない。言葉をもっとオブラートに包み込むべきだったかも。

それにしても、ムカつくな。まあ俺も単刀直入過ぎたとは思うけど、みんなで叩くとか酷くね？もうこりゃあイジメだよ。そもそも、他に良い作戦も思いつかなかった上にカタパルト王国軍部首脳の癖して山道作戦の欠陥すら見抜けなかった役立たず共が、調子乗ってんじゃねーよ。

ん？　いつの間にか静かになっているぞ。しかもみんな額に青筋立てているし。

「貴様、誰に役立たずと言った？」

あれ？　思っていたことが口に出ていた？　そんな、このタイミングで……萎え～。もういいや、開き直ろう。一応俺の言っていることは正論なんだし。

「分からないんですか？　だから役立たずなんですよ」

プツン。そんな擬音が聞こえた。

「我々のことか……我々のことかァァァァーーーーッ？」

キレたおっさんは、クリリンをフリーザに殺された時の悟空を連想させた。目が逝っちゃってる。

ガタン、と机を倒したおっさんが俺の襟(えり)を掴む。瞬間。

「オイ。何騒いでんだ？」

底冷えのする声。低く、氷の様なその声はおっさんの体を硬直させた。その目から読み取れる感情は、畏れ。恐れではなく、畏れ。

「ここは軍議場。いかなることがあっても暴れてはならない。分かっていないのか、サルバン騎士団第弐隊隊長よ」

ジルの奴、キレてやがる。視線が冷たいし。

「も、申し訳ありません……」

おっさんが殊勝な態度で謝ったのを満足そうに見つめたジルは視線を俺に変えた。危険を察知した俺がすかさず謝ると、物足りそうな顔をしながらもジルは「まあいいだろう」と返した。

「話が脱線したな。以後はこういうことが無いようにやってくれ。で、話を戻そう。とりあえず、リョウはその作戦とやらを説明してくれ。聞くだけ聞こう」

一瞬にして軍議の主導権を制したジルは俺に話を振った。

「では、恐れながら続きを申し上げます。国王陛下を囮にするということで皆様は大いに反発なされているようですが、無論国王陛下を文字通りに囮にするのではないのです」

意味が分からない、と言った顔をするみんな。まあ、俺の「国王を囮に」という言葉はインパクトを与える為だけに言ったようなものだから、分からなくて当然だろう。

「一から説明した方が早そうですね。
敵は我々と相対した時、当然ながら数で押しつぶそうとするでしょう。その時、カタパルト王国軍五千人の内四千人を敵軍の横に配置するのです。要するに伏兵。敵が気付かず千人しか居ない本陣に突進した瞬間、横から敵の本陣を急襲しシャルロワを討ち取る」

一拍置く。できると誰かが突っ込んでくれれば嬉しいのだが、みんな静かに聞いている。仕方ないから、種明かしだ。

「敵はそう思うはずです」

そう、伏兵なんてばれたら終わりだ。あくまでも奇襲狙いであり、それ故に成功率は低い。それに、

「相手だって馬鹿ではありません。恐らく布陣した時に伏兵の存在に気付くはずです。いや、そのように情報を動かして下さい。そして、ここで国王陛下を囮にします。要するに、本陣に国王陛下が居ると錯覚させて本陣を攻めさせる。しかし、本物の国王陛下は伏兵部隊を率いているので何も問題は無いのです」

つまり、あえて悪手を取ることで敵が採る選択肢を狭めるということだ。分かり易くじゃんけんで例えよう。何らかの方法で相手に俺がグーを出すと思わせれば、相手は当然パーを出す。そこで俺がチョキを出せば俺の勝ち。現実ではそう巧くはいかないが。

と、そこまで言ったところで質問が出る。

「何故敵は本陣を攻めると言うのだ？伏兵部隊を潰してからでも遅くないだろうに」

「いえ、間違いなく本陣を攻めます。そもそもシャルロワ軍はマクシム反乱軍の一部に過ぎません。そして、これを機会に国王陛下を討ち取れば大きな戦功になります。しかし、伏兵を破っても国王陛下に逃げられれば大した戦功にはなりません。
また、奇襲など来ると分かっていれば怖くありません。一万人が備えていれば大丈夫。残りの一万人で国王陛下を討ち取ろうとするでしょう」

シャルロワ単体の反乱なら安全策を取って伏兵から先に潰すだろうが、今回シャルロワはマクシムの家臣に過ぎない。ジルを討ち取ってマクシムの作るだろう新政府での発言力をより一層強めようと考えているのではないかな。それに、聞いた所シャルロワは文官なのに攻撃的な性格だとか。ジルの命を狙うのは間違いないだろう。

「ここで味噌なのがまたしても情報です。伏兵の存在はばれなければいけませんが、その数までは知られてはなりません。本陣にしても同様です。千人しか居ないと分かれば一万人も投入してくれないでしょうから。
本陣に居る兵士の数が分からないシャルロワは一万人程を投入してくるでしょう。たとえ五千人いても圧倒できるように。そしてシャルロワの周りに残ったのは一万人。我々は四千人。やるべきことは決まっていますよね。
そう――――正面決戦です」

ゴクリ、と唾を呑む音が聞こえた。

「罠のある場所は避けます。山から降りて、我々の本陣とはシャルロワ軍の本陣を挟んだ反対側に布陣。そして、突撃。あとは皆様の仕事ですよ。当初あった二万五千もの兵力差は六千にまで減りました。たったこれだけの兵力差。もう小細工は必要ありません。ただただ、押し潰すだけ」

質はこっちの方が圧倒的に高い。敵は罠のある場所に特攻するのだと思っているだろう。その意表を突けば、ペースもこっちが持っていける。

とは言わない。今はみんなのテンションを挙げるのが最重要事項。後で付け加えればいいのだ。まあなんにせよ、ここまで運べれば俺達の勝ちだ。

俺は不敵な笑みを浮かべた。それと同時に、ジルが喋りだす。

「流石は、儂が目を付けただけのことはある。皆の者、この作戦に異存は無いな？」

ちゃっかり自分の手柄にもしてジルはみんなに問いかける。もちろん、反対意見なんて挙がるはずもなく。俺の発案した作戦は『分断作戦』と名付けられ、採用されることとなった。

五日後、戦いの火蓋が切って落とされることとなる。それは、長く続く『ビスケット紛争』の幕開けだった。

第2章第7話　布陣

軍議から十日後の今日。兵士の姿をしている俺はジルに従軍しており、天幕の内にいるジルの隣に居た。少し後ろには護衛としてリッツが剣を片手に立っている。他は誰も居ない。

「暇じゃの」

と、ジルが呟いた。足が小刻みに震えてている。俗に言う貧乏揺すりだ。もちろん、こんな大事な状況で暇を持て余しているのではない。恐らく、作戦がうまくいくかどうか不安なのだろう。

作戦計画立案なんて初めてなんだし、俺だって不安だ。隣のジルが物凄く心配そうにしているので、俺は落ち着いていられるが。

「今は報告を待つしかありません。ただし、情報が来たらすぐに動きますので鋭気を養っておいて下さい」

ここで状況を説明しておこう。

現在俺達はタケチュリア山道出口から少し北、つまり王都の方角に居る。俺の進言通りタケチュリア山道入口付近に千人の兵士を置き、今はシャルロワ軍の動向を窺っているのだ。もしも馬鹿正直にタケチュリア山道入口へ攻めてきたら、誘導してタケチュリア山道出口で迎え撃つ為に。

総勢六千人がここで陣幕（テントのようなもの）を張っており、今は一杯の酒を飲んでいることだろう。これは俺の進言で、必ず上司が酒を飲ませてやるように通達してある。適量の酒を飲ませることでリラックスさせ、や

る気を上げさせるのが狙いだ。

「そうだね。今は待つべき時、か」

どうやら理解してくれたようで、ジルは砕けた口調に戻った。だが、貧乏揺すりは収まらない。完全に緊張がほぐれていないようなので、俺は特殊アイテムを懐から取り出す。

「じゃさ、ジル。こんなのどう？」

「大事な決戦前に酒を飲めと？」

酒瓶を出した俺にジルが眉を顰(ひそ)めた。俺がふざけているのだと思っているのだろう。

「リラ……緊張をほぐしてもらう為だ。酒飲めば少しは緊張も取れるだろ」

おっと、横文字は通じないんだったな。

「まあ、確かに一理あるね。一人だけど折角だから飲むか。リョウは飲めないんでしょ？」

「ああ」

納得したジルは酒瓶を手に取り、ゴクゴクと飲む。

「プハーッ。旨い」

ジルは、まるでビールのコマーシャルの役者さんのようにたまら

ないといった顔をした。俺の知らない感覚だ。

ここで俺の役職を説明しておこう。俺はジルの軍師になった。……なんちって。冗談だよ。結局俺の階級は変わっていないのさ。秘書のまま。しかし、秘書は戦時中君主のジルにぴったりくっついていなければならないらしい。つまり、なんか作戦変更しなきゃいけない事態になったらジルに言えばいいのだ。やることは軍師と何も変わらない。

ちなみに俺は反省している。何をって、軍議の時のことをだ。あの時は一種の興奮状態になっていたので軽く軍人さん達に喧嘩売るような言動をしてしまったが、今思うとぞっとする。ジルの後ろ盾が無かったら殺されても仕方なかったのだ。そもそも、秘書が口を挟むこと自体越権行為だし。調子に乗り過ぎた感が否めなかった。

ただ、俺が口を挟まなきゃ敗北決定寸前だったのは明らかなので後悔はしていない。もうちょっとソフトに自分の意見を通せば良かったなと思っただけだ。

「申し上げます！」

諜報員が国王用陣幕に入ってきた。敵軍が動き出したようだ。どうなるんだろ、マジ緊張するわ。

「申せ」

ジルはリラックスモードから一転、精悍な顔つきで諜報員に聞く。俺も表情を整え、諜報員の方に向いた。

「敵軍、動き始めました。秘書殿の献策通り、四千人程がタケチュ

リア山道入口付近に抑えとして残されました。あとは東に迂回した二万人弱と西に迂回した一万人強の二つに分かれたようです。恐らく、二万人の方にシャルロワが居るかと。シャルロワ一族の『下り藤』の旗が堂々と掲げてありました。一応裏も取っておりますし、間違いは無いかと」

予想通り。俺の言ったとおりに敵は動いている。倒さなきゃいけない敵が二万人も居るのは不満だが、そこら辺は妥協。ケケケ、こりゃあ勝てるかもしれないぞ。

「陛下」

出撃を促す。ジルも俺の意を汲み取ってくれたようで、頷いた。

「では、諸将に伝達致します。出撃、でよろしいですな」

「うむ」

俺は陣幕の外に出て、連絡係の兵士に出撃の意を伝えた。

「皆の者。これより、戦場に向かう。敵は我々の優に五倍もおる。厳しい戦いになることは明らかだ。しかァしィッ。ここで退くわけには行かない。よいか、これは正義の戦いぞ。先代国王陛下を殺して国家の転覆を謀った逆賊シャルロワを今ここで倒し、このカタパルト王国に再び平和を取り戻すのだァ！」

ジルの演説。戦闘直前に国王から直々の言葉を貰うことによる士気（やる気）アップが狙いだ。正義の戦いとか第三者から見れば「戦争を正当化しているとか（笑）」としか言えないけど、自分は正義だと思い込むことによって士気は上がるらしい。だから、マクシムのことは口にしない。それを言ったらこの戦争の意味が逆賊討伐から王族の争いにグレードダウンしてしまう。

演説が終わると兵士はみんな持ち場に戻り、上官の命令に従って着々と準備を進める。俺はジルに駆けより、共に馬車に乗った。もちろん、護衛のリッツも一緒だ。馬に乗ることにならなくて良かったなぁ。

俺達が馬車に乗り終わると、出発の笛が吹かれ、カタパルト王国軍は一斉に動き出した。

ゴゴゴゴッッッッッ――――――。

騎馬が歩き出し、轟音が聞こえる。軍事パレードみたいだ。

……、暇だなぁ。やることねぇー。寝よっかな……うん、そうしよう。羊が一匹羊が二匹羊が三匹羊が四匹……

「戦場に到着したぞ」

「ふぁ？……あ、分かりました」

眠りは浅かったようで、君主モードのジルに一声かけられるだけで俺は起きた。男の娘でもない男が「ふぁ？」なんて気持ち悪い声出すな、と思った人。僕はあなたが大嫌いです。男が擬音発したっていいじゃない！

さて、今俺達が居るのはタケチュリア山道の東にあるまっさらな平地。ここに偽国王率いる千人の偽本陣が敷かれるのだ。ということで、これから面倒くさい作業に入る。偽国王、つまり役者さんとジルが入れ替わらなければならないのだ。敵のスパイがここら辺に居るかもしれないので、あくまでも秘密裏に。そしてその後見せかけ伏兵軍は隣の山に移動する。天王山の戦いみたいだな。（本能寺の変を起こした明智光秀と中国大返しをした羽柴秀吉の戦いで、もちろん秀吉が勝利した）

この暗さ、今は夜なのだろう。今日は地球で言う新月の日で、秘密裏の行軍にはぴったりなのだ。二つある月の両方が新月とは、なかなか無い偶然だ。今回はばれるのも戦略の一部なので、あまり要らない幸運なのだけれども。ま、どちらにせよシャルロワは伏兵に気付くだろうから無問題。

そう、今秘密裏の行軍と言ったが敵軍はもう間近に迫っているのだ。戦場につくのももうすぐだろう。大体、みせかけ伏兵軍が山に登りきった位の時刻だと予想されている。

「では、儂の代わり、頼んだぞ」

「は！ありがたき幸せにございます！」

よし、ジルと金色のカツラかぶった役者さんが入れ替わった。俺とジルは兵士になり替わり、伏兵を率いる（と敵軍に思わせる予定

の）ブルゴー騎士団長の元へ。先導する兵士についていく。

「ここです」

ジルの為に馬が用意してある様だった。とはいえ、馬に国王が乗っていると敵のスパイにばれてはいかんので、ジルは兵士に差し出された兜（かぶと）を被った。……俺はどうなるの？

「あの、俺はどうすれば？」

さっき先導してくれた兵士に聞いてみる。こういう細かい所は俺は知らないのだ。

「ああ、兵士に紛れて下さい」

あなたは兜を被る必要が無いのでしょう？とにこやかに言われ、俺は反応に困った。潜む場所まで走って進む訳ではないので体力面の心配は要らないから、大丈夫かな。でも、なんか不安だわ。……ま、いっか。

「分かった」

と答えたのが運のつき。俺は、軍隊を舐めていた。

「ハアハア、ハァァー。……死ぬだろ……」

行軍を開始してから時間ほど。周りの兵士達はこれから始まる戦いが楽しみだー、とか汗一つ掻かずに言っているが、俺は今死にかけている。よくよく考えると、カタパルト王国に誤召喚されてから俺運動してないんだよなぁ。それがいきなり自衛隊の訓練みたいな行軍させられちゃ、たまんねえよ。

「まあ、気を取り直してジルの居る陣幕に向かおう。えーっと、ここをずっと真っ直ぐ行って、って長ぇなぁ。暇だし、歩いている間は兵士の挙動をじっくりと観察しようかな」

今俺の周りに居るのは騎士団。彼らはみんな馬を持っていて、それに乗って戦うのだ。武田信玄の騎馬隊でさえ馬に乗っている兵士は五十パーセントだったのに、全員騎乗して戦うとか……そもそもそんなに馬はあるのか？

さて、騎馬団員の肉付きを見てみようか。……ゴリマッチョと細マッチョが半々ずつ。ゴリマッチョはおっさん臭いゴリラ顔の人間が多く、細マッチョはイケメンが多い。もちろん、顔が微妙な細マッチョも居るには居るけどね。

ん？　一人だけ女の人が居るぞ？　そこだけなんか輝いて見える。周りに居るのがゴリラ（雄）なだけに。顔はというと、少々目つきはきついがキリリとしていて、可愛いというよりは綺麗と形容できる女性。そのまるで燃えているように紅い髪が女王様的オーラを纏っている。

とはいえ、止まって鑑賞する訳にもいかないので、名残惜しいが進むことにする。

ふう、胃がキリキリすんなぁ。ジルには緊張ほぐせなんて言った

けど、俺の方が緊張しているっぽい。異世界(ここ)に来てもう二ヶ月は経っているのでこの世界には慣れてきたとはいえ、これから始まるのは戦争。テレビ越しにも滅多に見たことのない、俺にとっては手の届かない非日常だ。届きたくなんかなかったけど。

おっと、ネガティヴ思考は萎えるから打ち止めだ。ぼーっとしながら歩こうかな。あまり思考にふけてもいいことぁ無い。たまには、無心でいようではないか。明鏡止水、ってやつだ。

第2章第7話　布陣（後書き）

くそっ。また戦争までいかない！

どうも、トッティーです。やっと戦争の日程（？）が決まりました。次の次です。ここまで焦らしたのですから、質も当然高くしなきゃ……自分でプレッシャーをかける作戦です。

ちなみにこの紅髪さんはいつか登場します。結構メインかもですよ。……お姉さんキャラだけでなくロリキャラも出さねば。女性の平均年齢高ぇよ。僕の好みは１〇才位なのに……

ちなみに最期の方は独り言です。

第2章第8話　前夜

何も考えずにずっと歩いていると、十分ほど歩いた後にやっとジルの陣幕に着いた。もちろん周りは精鋭の中の精鋭近衛軍に厳重に警備されているので近寄ったら威嚇（いかく）されたが、身分証明書を見せたらあっさり引き下がってくれた。

黄門様を真似して「この身分証明書が目に入らぬかァーッ」と言おうとしたんだけど、別に俺そこまで偉くないので自重した。どうせ誰も元ネタ分からないから滑るだろうし。これこそが、折角良いパロネタのギャグ思いついたのに、元ネタみんな知らなそうだから自重する気持ちか。

さて、ジルを見つけたぞ。

即興の国王専用椅子に座るジルの隣には護衛のリッツが立っており、警戒を怠らずその目を鷹のように光らせて周囲を見渡している。ジルの右斜め前に座っているのは表面上伏兵を率いていることになっているブルゴー騎士団長。美形ｏｒｚとだけ言っておこう。あとは小者ばかり。伝達兵とか、そんなもんだ。まあ、俺はそういう情報伝達の軽視は良くないと思うんだけどね。情報収集能力はかなり重要だべ。

俺は近々、つまりこの戦争に勝って経験値上昇☆（ここ重要）＆発言力を大きくした後に、諜報組織を作ろうと思っている。できれば、誤情報の流布や暗殺なんかもやってくれるとありがたいな。

なぜ情報をこんなにも重視するのか。それは……ん？　強い視線を感じるぞ。誰だろうか。

……、あー、ブルゴー騎士団長か。その視線が国王陛下に御挨拶しろと言っている。ちなみにブルゴー騎士団長の目は鷹とかそんなもんじゃない。いうなれば、ブルートゥスに裏切られたカエサル。もっと分かり易く言うと、ベジータにブルマを寝取られたヤムチャ。

「国王陛下、只今到着しました」

ま、一応挨拶はしておく。着いてから大分経っているが、そこはノーカン。ジルはそんなに心の狭い奴じゃない。

「……まあよい。では、早速だがお主の見解も聞こう。敵はいつ動くと思う？」

「敵が我々の存在に気付くのは明朝かと。動き始めるのは……明日の昼である可能性が高いと思います」

今は真夜中なので、敵がもし既に着いていたとしても仕掛けてくる可能性は低い。今日は様子を見て、伏兵には明朝ごろ気付くだろう。なら動き出すのは昼かなーみたいな推理だ。

「その心は？」

もちろん、明日の昼敵が動くと思われる要素はこれだけではない。つかこれだけだと推理になってねえよ。ジルがなぞかけを知っていたのは意外だったが、今は話を先に進めることを優先しよう。

「私がこの地域の住民にこの地域の気候について聞いた所、この時期は昼に霧が発生するらしいという情報を掴みました。通常は霧が発生したら静観した方が安全ですが、今シャルロワは国王陛下を討ち取ろうと躍起になっているはずです。奴は気が強いことで有名で

したし」

シャルロワは気が短い訳ではないが、強気な性格である。その決断力で宰相の地位にまで上がってきたのだ。もちろん、これもシャルロワについて取材したから分かることなのだが。ちなみに、霧についての情報はブルゴー騎士団長に借りた騎士と共にそこらのおっさんに聞いた。忙しかったぜ。

「目の前にはたった千の兵隊に守られた国王陛下。そして突然の霧に身動きできず、シャルロワもそうだろうと油断しているだろう我々。ここで動かずして国王陛下を討つことはできぬ。……とでもシャルロワは考えているのではありませんかな？」

なるほど、と唸るお二方。しかし、ふとブルゴー騎士団長が俺に疑問を呈した。

「しかし、あのシャルロワだぞ。何を考えているのか分からない。もしかしたら、静観するかもしれない。いや……そもそも彼奴が伏兵を先に潰そうとしてきたらどうするのだ？軍議では気付かなかったが、策はあるのか？」

色々と質問が飛んできたな。

「まず、静観する可能性ですが、まああることにはあるでしょう。ですが、そうなっても我々が損することはありません。それに、シャルロワの過去の戦績を見てもそこまで思慮深いわけではなさそうなのです。政治謀略の場では冷静沈着かつ老獪なシャルロワですが、戦争はあまりパッとしません。猪突猛進と言う訳ではありませんが、強気な戦略に出ることは間違いないかと。同じ理由で、伏兵を先に潰す可能性もナシです」

俺はシャルロワ反乱の報せを聞いてからしばらくシャルロワについて調べていたんだよ。うん、俺偉い！

「ほう、なるほど……まあここは秘書殿を信じることとしよう」

ブルゴー騎士団長は一応納得したようで、これ以上聞かないと意思表示を行った。その目には俺への不快感がにじみ出ている気がするが、気にせず。

「国王陛下もブルゴー騎士団長も仮眠を取ったらいかがです？　敵が動く可能性は低いのですし」

「いや、俺は起きている。ここは戦場、何が起こるか全く分からないからな。国王陛下。陛下は存分に睡眠を取って下さいませ」

敵が来ない以上起きていても無駄骨だと思うが……。まあ注意する程の事ではないだろう。

「そうだな、寝るか。リョウ。お主も寝てよいぞ」

「は！」

俺は兵士に簡易椅子を渡された。ジルも座って寝るらしい。まあ仮眠だし、仕方ないか。

ふぁーあ、もう寝よ。眠いったらありゃしない。

所変わってシャルロワ軍。夜の二時半、本営には白い髭を生やした禿げ頭の男が座っていた。既にシャルロワ軍は戦場に着いたが、ある情報を聞いてどう行動するか迷っているところだった。

「ふむ。四千人の伏兵か……どうしたものかの」

千人の本隊に四千人の伏兵。思い切ったものだ、とシャルロワは苦笑いしていた。

「たった千人しかいないのですし、単純に本陣を攻めれば勝ちではないのでしょうか。ジル・カタパルトを討てば敵は総崩れするはずです。たった四千人程度の伏兵など、一万程で備えていれば返り討ちにできると思います」

居並ぶ貴族の内の一人が言った。亮の思惑通りだ。だが、シャルロワは浮かない顔をしている。

そう、シャルロワは決して強気な性格ではない。政争も戦争も慎重に行うタイプなのだ。一方で、決断力は優れている。上に立つ者としては、バランスがとれている。少々果断過ぎる位で丁度いい。

亮は、強気と果敢をはき違えてしまっていたのだ。

「少し待った方がよいのではないかの。こちらに五千を割いている

ということは、西に迂回した別働隊に相対するのは多くても二千。別働隊はどうせ勝利するのだから、勝ちに行ってわざわざ危険をおかしたくないからの」

何故多くても二千なのかというと、総兵力七千の内戦場の五千、王城内に少なくとも五百、タケチュリア山道入口に少なくとも五百あると考えられるからである。

「お言葉ですが、四倍の兵力があるのですから、勝ちを狙ってもなんの問題もないかと」

また別の貴族が発言した。みな戦いたがっているようだ。当然である。彼らはマクシムを中心とした新政権の中で出来る限り高い地位が欲しいのだ。その為に今できることは戦功を挙げることだが、戦わないとその機会をみすみす逃してしまう。

その上に、今回は国王であるジルが出陣している。その周りを守るのがたった千人ならばジルを討てる可能性も大きい。敵の親玉であるジルを殺せば間違いなく戦功第一となり、もしかしたら閣僚にさえなれるかもしれない。

このようなカモがネギをしょってきたような状況では、焦らない方がおかしいのである。

「なるほどのう……。とりあえずは様子を見るかの……」

シャルロワは迷っていた。どうもあの伏兵が罠の様な気がしてならないのである。文官職に就いているとはいえ戦歴も若いころにそこそこ積み重ねてきたシャルロワは、何か危険な匂いを感じ取っていた。

「大公殿」

若い貴族がシャルロワを呼んだ。大公というのはシャルロワの官位のようなものだ。宰相というのは彼らにとっての旧政権におけるシャルロワの役職だったので、新政権の一翼を担うシャルロワは既に辞職している。まだ新政権は正式には立ち上がっていないので、シャルロワは無職である。

「どうした」

「今即座に攻めた方が良いかと思います」

「何故かの？そこまで急ぐ必要はないと思うがの」

「どうせ戦うのなら、敵が油断しているであろう今攻めるのが良策かと。それに、敵はすでに伏兵を置いているのですから、これ以上の罠を張っている可能性は低いのではないでしょうか」

彼の言っていることは道理だ。様子見をする必要性はあまり無い。しかし、シャルロワは不安を拭いきれなかった。何の、と言われれば返す言葉は無いが、どうにも怪しい気がした。

とはいえ、直感だけでは居並ぶ貴族達を納得させることはできまい。杞憂だろう、とシャルロワは遂に重い腰を上げた。

「そうじゃの。お主らの言うことも道理。では、ニャクルツッペリ卿の意見を採用しようかの。一万は敵本陣に、一万は敵伏兵に割く。伏兵に対しては鶴翼の陣形で、本陣に対しては……蜂矢の陣形で相対。こんな次第で勝てるのではないかの。ただし、蜂矢の後方に位

置する四千人程は、いつでも反転できるようにしておいてくれ」

鶴翼とはVの字の陣形で、大将はVの尖っている所にいるのが普通だ。敵が大将の居るであろう尖っている所に向かっているのを左右から押し潰す、いわば大軍向きの陣形。伏兵の二倍以上の軍勢を有しているので、これが最上の判断だろう。

一方、蜂矢の陣形は→型の陣形で、攻撃的な陣形だ。本来兵力の劣っている方が使う陣形で攻撃力は優れている。だが、今回は敵総大将のジルを殺すのが目的なので、攻撃力に最大の焦点を置いた。今回はシャルロワが後ろで指揮するので、代わりにニャックルツッペリ伯爵に指揮を取ってもらおう、とシャルロワは考えていた。シャルロワとしては自分がわざわざ功績を立てる必要は無い。ニャックルツッペリ伯爵はシャルロワの腰巾着なので、手柄を奪われたといった感じにはならないのだ。

大まかな作戦を決めた後シャルロワは各貴族の割り当てを発表した。本陣殲滅部隊に選ばれなかった貴族は落胆している者が殆どだった。全ての準備が終わったのは四時。もうすぐ夜が明ける位の時間だった。

「では、ジル殿には申し訳ないが、あっさりと勝たせてもらおうかの」

シャルロワは妙に攻撃的な目をして呟いた。そして、シャルロワの命令を今か今かと待っている貴族に対して告げた。

「出撃だ。総大将ジル・カタパルトの首をマクシム様は御所望の様子。必ず討ち取れ」

「は！」

貴族たちが自分の持ち場に散っていく。シャルロワはふと、空を見上げた。まだ太陽は昇っていない。

「日が昇るまでに終わらせるかの」

呟く。だが、戦争はまだ始まってすらいない。これからだ、とシャルロワは気を引き締めた。

第2章第9話　激突

「――――ッ。――――のッ」

ん？

「秘書殿ッ。起きて下され」

ああ、そういや戦場で仮眠してたんだっけな。

「あとご……なんでもない今起きた」

兵士のおっさんに叩き起こされ、俺は渋々目を開く。あと五分、と言いそうになったがそんなふざけたことを言える空気では無かったので自重した。なんだか、妙に空気がピリピリしている気がする。

「それで？何が起こったんだ？」

辺りを見回すと、隊長レベル（百人程度の部隊の長が隊長）の武官がチラホラ集まってきている。ジルはいつもの悩み顔で、ブルゴー騎士団長は俺を睨んでいるのだ。なんでだ？

「シャルロワ軍が戦場に着くなり攻撃を仕掛けてきたのです」

おっさんが声を抑えて言う。

「え？　何故に？　……、クソッ」

俺は絶句したが、すぐに正気を取り戻して状況を把握した。要す

るに、敵さんは見事に俺の予想を外してくれたのだ。だからブルゴー騎士団長に睨まれたのか。俺は自信満々に予想した敵の攻撃してくる時間が見事に外れて赤面ものだよ。畜生。

すると、集まってきた武官たちが急遽設けられたっぽい椅子に座り、軍議が始まった。誰かが軍議を始めると言った訳ではないが。そこら辺は場の空気とノリである。

「シャルロワは一万の兵で囮部隊を攻め、残り一万を自ら率いて我々の対処をするようだ。既に囮部隊は押されており、時間にあまり猶予は無い」

「では、我々は当然シャルロワの首を目指してこのを駆け下り、敵軍と激突するのですよね」

武官の一人が言った。もちろん、そんなことは言われなくたって誰でも分かっている。だが、俺は即時開戦には反対だ。もう少し様子を見たい。

「うむ。無論じゃ。しかし、儂はもう少しシャルロワの動きを見定めたいと思う。もうすぐ、儂の放った間者（敵軍などに交じって情報を集めてくる人のこと）がシャルロワ軍の陣容を伝えてくれよう。動くのはそれからでも遅くはない」

俺の言いたいことは全部ジルが言ってくれた。ま、事前に話しておいたから当然なんだけどね。ちなみに間者＝諜報員である。

「時間に猶予が無いのでは？」

また別の武官が畏れ多くもジルに向かって問いただす。ジルに対

して反感がある訳ではなく、単純にさっさと戦いたいだけらしい。

「いや、少なく見積もっても三時間くらいは持つだろう。慌てるほどではない」

ジルが丁寧に言葉を返すことによって、軍議に一瞬の空白が空く。その隙を見計らって俺は今日初めての発言をした。

「陛下。シャルロワ軍を攻める際、陛下はどうなさるおつもりですか？」

「うん？決まっておろう。全軍を率いて最前線で剣を振るう」

やっぱりか。亮は心の中でひそかに毒ずいた。

「しかし、囮部隊に陛下が不在であることをシャルロワが気付けば、敵が反転してくる可能性も有るのですぞ。陛下が戦場に躍り出るのは、最後の最後にした方が良いかと」

これに気付いたのはついさっき。俺馬鹿じゃん。

「一理はある。だからといって、儂と近衛兵五百を使わないのは勿体なく無いか？」

そうだな。どうしよう。考えてねー。その五百を別の所で使うか？いや、むしろジルの言うとおり戦場に投入していいかもしれない。考えるんだ。思考、思考、思考……。

「いえ、陛下とその近衛兵五百には、囮部隊の北を迂回して、シャルロワ軍を真後ろから奇襲していただきたい。さすれば、東と西か

ら挟みうちに出来ます」

囮部隊千人の南には二万人ものシャルロワ軍が相対している。そして、そのうち一万人は囮部隊に対して、残りの一万人は東にある山に潜む俺達伏兵に対して攻撃態勢をとる。俺達は後者と戦うのだが、シャルロワは本陣を西の方に構えているのは明白だ。

（通常、大将は敵から遠い所に位置する）ならば、そのノーマークの西から更なる奇襲を仕掛ければどうなるか。敵は混乱するだろうし、あわよくばシャルロワを討ち取れるかも知れないのである。まさに盤上この一手！

「なるほど。近衛兵は全て騎馬隊で揃えられているから移動も速い。敵に奇襲を悟られる前に攻撃を仕掛けることも不可能ではない、ということか」

ブルゴー騎士団長が大きく頷いた。感心しているようだ。まあ、近衛兵の質があってこその策なんだけどね。他に発言者は居ないようなので、ジルは軍議を纏めようと口を開いた。

「では、リョウの作戦に異論は無いな。ブルゴー。お主に三千五百の指揮を任せる。儂は五百の近衛兵を率いて奇襲するが、儂が奇襲する前にシャルロワを討ち取るほどの気概を見せてくれ」

「かしこまりました国王陛下」

「では、諸君。健闘を祈る」

ジルは立ち上がり、護衛のリッツと共に陣営から立ち去っていく。俺も着いていこうとしたが、ブルゴー騎士団長に手を掴まれた。え？どゆことや。そうこうしている間にジルは行ってしまった。

「これから陛下が行かれるのは戦場です。貴方は戦えるのですか？」

ブルゴー騎士団長は詰問するように言う。俺が気圧されながらも「いや」と答えると、ブルゴー騎士団長は再び口を開いた。

「では、私の傍で軍師でもやって下さい。……せいぜい、ね」

後半部分はよく聞き取れなかったけど、言葉に毒が入っている気がするな。ま、いいか。

分かりましたと俺が了承すると、ブルゴー騎士団長は少し間を開けて周りの武官に「行くぞ」と一声かけた。いよいよ、敵軍とぶつかるんだなぁ。

ブルゴー騎士団長は、兵士の差し出した凄そうなオーラを放っている馬に乗る。「セキトバ、行くぞ」と言っていたが、まさか呂布さんのあの馬パクった訳じゃないよね？

「俺は？」

ブルゴー騎士団長に聞く。俺馬なんて無いぞと。すると、ブルゴー騎士団長はかぶりを振り、そして仕方なさそうに答えた。

「兵士にでも交じって戦って下さい。陛下ではありませんが、健闘を祈ります」

え。

絶句した俺をブルゴー騎士団長は待ってくれないようで、ヒヒー

ンと叫ぶ馬に乗って何処かへ行ってしまった。周りでは兵士が忙しそうに動いている。俺を心底邪魔そうな視線で睨みながら。

俺、どうすればいいわけ？

敵軍、四千弱の軍勢が東の山から駆け降りてきた、と注進が入った。シャルロワ軍は手筈通り速やかに動き、たちまち鶴翼の陣が完成する。

そして、激突。敵はシャルロワ軍の右翼に対して攻撃をしてきた。指揮するのはブルゴー。流石は王国一の武人、見事な用兵で右翼を翻弄している。兵力でいえばほぼ同数。質も将も上のブルゴー軍が圧倒するのは当たり前のことだ。

「じゃがのう、戦はそんなに甘いものではないのだよ若造が」

シャルロワは呟く。

使者を出して、左翼の諸侯に敵を横から攻撃するよう指示した。ブルゴー軍は一瞬押されかけたが、すぐに軍を立て直しシャルロワのいる方向へと猛進を始めた。そこからは互角の戦いが繰り広げられており、そして攻めてであるブルゴー軍が少し押している。

だが、シャルロワは意に介さない。なぜなら、これはあくまでも局地戦。敵本陣を潰せば勝ちなので、たとえ押されていたとしても大丈夫なのだ。

「さて、そろそろ敵本陣も落ちるかの」

シャルロワは勝利を確信していた。一万対一千。勝敗は目に見えている。ニャックルツッペリ伯爵からの勝利の注進を今か今かと待っていたのだ。

そして走ってきた注進の使者。しかしその顔はあまり晴れやかでない。その表情の暗さにシャルロワが疑問を持つ前に使者は口上を述べ始めた。

「ニャクルツッペリ伯爵軍、苦戦しています！流石精鋭、敵の守りは堅く却ってこちらが被害を受けている状況です。攻め崩すにはまだ時間が必要。そう、ニャクルツッペリ伯爵は仰っていました」

「――――ッ」

絶句。

一万対一千で苦戦。シャルロワの頭は一瞬吹き飛びそうになった。あり得ない出来事なのだ。

スー、ハー。シャルロワは目をつむって一回深呼吸した。

目を開いた時にはもう混乱は収まっていた。この想定外の報せにどう対処すればいいか思考にふける。

ニャクルツッペリ伯爵の力量が予想外に低かったのか、敵の強さを甘く見ていたのか。ともかく、シャルロワがミスをしたのには変わりない。その額から汗が滴った。二万対五千という兵力差で敗北を喫したら、たとえマクシムを王とする新政権が勝利してもシャルロワの立場は危うくなる。己の保身の為にもここは負けるわけにはいかなかった。

「ニャクルツッペリに告げよ。三十分で敵を撃破せよ。一時間経っても撃破できなければ貴族の位を剥奪し、二時間経っても撃破できなければ打ち首にする、とな。折角立身出世の機会を与えてやったのだ。もちろん失敗は死。あやつとてそれ位は分かっておるじゃろう」

使者は顔を蒼白にし、君主であるニャクルツッペリのもとに走っていく。シャルロワは本気だ。今まで苦労して築きあげてきたものをここで失う訳にはいかない。

「さて、どうするかの」

シャルロワはすっと目を瞑った。これは本気で集中している時に出る癖の様なものである。

敵本陣を潰すまでには時間がかかるだろう。それまでシャルロワは敵の猛攻に持ちこたえなければいけない。敵は寡勢だが精鋭。精一杯戦略を張り巡らし、陣頭に立って指揮しなければ敵の本陣を潰す前にシャルロワ軍の本陣が壊滅してしまう。

シャルロワは、ここにきて何故か高揚感を覚えていることに気付いた。久しい感覚。自分でも無意識のうちに顔に微笑を浮かべてい

た。

第2章第9話　激突（後書き）

いやはや、遂に戦争が始まりました。早速読みが外れる亮。しかも殺し合いはおろか喧嘩すらほとんどしたことの無い亮は戦場に放り込まれてしまいます。あら大変。

さて、今回の戦争シーンは、ブルゴー騎士団長、シャルロワ、亮、等様々な視点で描いていくと思います。

第2章第10話　戦場

「オオォォォォォォォーーーーッ！」

鳴り響く喚声。あちらこちらで剣と剣がぶつかりあう音が聞こえる。ここは、戦場。ブルゴー騎士団長率いる三千五百がシャルロワ軍に突撃したのだ。

俺はただの一般人。それをブルゴー騎士団長も分かっていたはずだ。なのに、どうしてこんなことに……あれ？

「うわあっ」

ぼーっとしていたら敵の兵士が剣で斬りかかってきた。驚いて一歩後退すると、兵士は手首を返して下から斬り上げる。

「やば――――ッ」

手に持っていた軽量剣で刃を交差させなんとか防ぐも、咄嗟のことだったので強く握れなかったのか俺の剣は後方に飛んでしまった。兵士の顔が狂笑に歪む。兵士は剣を握り直し、俺の胸めがけて剣を突き出した。

グジュ。

「クッ」

俺は態勢を崩し後ろに転んでしまった。土が濡れていて、足を取られたようだ。運の良いことに、その動作は敵の突きを避けていた。

兵士は剣を突いて伸ばした手を元に戻し、倒れた俺を刺し殺そうと剣を天高く振り上げて――――ッ

「ぐあァッ」

瞬間、俺は丁度兵士の金玉の下にあった足を上に振り上げた。兵士はうめき声を上げながらのけぞり、俺を睨みつける。自業自得だ。ざまあｗｗｗｗ。

再び態勢を整えて俺を刺し殺そうと剣を振り上げた兵士だが、横から味方の騎士が槍で一閃してくれた。兵士は血を吐き、俺に呪うような視線を向けた後ゆっくりと倒れた。

「……ありがとうございます」

「ほう。君があのリョウ殿、だな。そんな格好している者は他に居ない」

全身を鎧兜で覆っているので性別は分からなかったが、どうやら女性らしい。ソプラノの澄んだ綺麗な声だ。……って、なんで俺有名なの？

「あの……何故俺だと……？」

「噂はかねがね聞いているよ。聞いたよりは悪い人物ではなさそうだな。意外だった。ほれ、これが貴方の剣だろ」

投げつけられた剣を受け取る俺。そして俺は、助けてもらったお礼を言っただけで驚かれる程度には悪評らしい。

「では。幸運を祈る」

動揺している俺を余所に彼女は敵軍へと雄（？）たけびを挙げて突っ込んでいった。二、三人の兵士に囲まれるも全く押されることなく互角に戦っている。

呆けた俺がようやく正気に戻ると、周りには味方しかいなかった。どうやら、ブルゴー軍はシャルロワ軍を押しているようだ。

「ふう、良かったわ小学生の時剣道やっていて」

俺は一回敵兵士の剣を防いでいた。あれは、剣道の経験のおかげだ。俺は元の世界では剣道部に在籍していた。一番良かった成績でも県大会三回戦負けとあまりパッとしないから、あれは恐らくまぐれだろうが。

ふと、さっき騎士の女性に殺された敵兵士に目を向けてみる。そこにあるのは死体。周りには血が散乱し
、体からは内臓が見え

「おえええェーッ。ハア……ハァ……気持ち悪ぃ……」

口から溢れ出るモノ。黄土色で泥の様な質感を持つソレを、俺は地面に吐き出した。元来グロい系統の物に苦手意識は無いが、平和主義の国日本で育った俺にグロい死体は流石に守備範囲外だった。

「俺も……こうなってたかもしれないのか？」

俺の問いに答える者はいない。だが、ここに至ってようやく実感した。

「戦争は、ボードゲームなんかじゃない。遊びなんかじゃないんだ。何で今まで気付かなかったんだろう。戦争は――――殺し合いだ」

体中を恐怖が駆け巡る。死ぬかもしれない。俺は、いまこの瞬間も死の危険に晒されているんだ。

嫌だ、死にたくない。死にたくない。死にたくな……いや、違うか。死ぬわけにはいかない。元の世界に戻る為に、ここで死ぬわけにはいかないんだ。

再び思考が冷静になった時、既に俺は答えを導き出していた。適当に後ろから見てれば死なない。流れ弾に気をつけていれば、安全だ。

「さて、と」

とりあえず周りの様子を観察する。半径十メートル以内に敵は居ない。だが、二十メートル先の前線では激戦が繰り広げられている。兵も、死に物狂いだ。まあ混戦になっていないようなので安心した。

しかしその矢先。前方から敵の兵士が突進してきた。

「お前は旧王国勢だなッ」

若い金髪の男。凡庸な顔立ちだが、自信ありげな空気を纏っている。俺が慌てて剣を構えなおすと、男はその手に持っていた槍先をゆっくりとこちらに向け、獲物を見つけた狼の様にギラギラとした視線で俺を凝視してきた。

「お前で三人目だ……悪く思うなよ、俺の出世の糧になってくれッ」

三人目って俺殺されること確定かよ。どんんだけ自信があるんだこの野郎。

男は上下左右に足を動かしながら少しずつ間合いを近付ける。俺も同様に足を動かしながらタイミングを計っていた。俺が狙っているのはカウンターだ。男は槍を持っているのだから当然突きを放つだろう。その突く瞬間に上がる手首を斬り落とす。

十秒ほど対峙し、男はようやく自分の間合いに入ったのか一瞬後ろに体重を移動した。そして、槍を突き出す。

ビュン、と。その槍は空気を切り裂き、穂先を俺の胸へ向け一直線で迫ってきた。予想外に速い。俺は咄嗟に槍先を左側にいなした。カウンターする余裕が無かったのだ。しかし男はその力を利用して左上に槍を掲げ、

「うおおおぉっ」

斬り下げた。

しかしその槍は空を切る。剣では防ぎきれない、そう確信した俺が後ろに跳んだのだ。そしてその選択は正解だった。相手は今槍を地面に対して打ちつけてしまい、隙を見せている。今しかない。

俺は左足に体重をかけ、敵に向かって跳んだ。剣先は敵の首の高さと同じ。狙いは――――突きだ！

だが相手もさる者。後ろに下がりながら首を右に捻って俺の突き

を避け、それと同時に手首を返して俺の腰を下から斬り下げようとしてきた。カウンターだ。俺の動きを見透かしていたのか。だが、

「甘い」

俺の剣は男の喉を切り裂いた。男の避けた方向に剣を水平移動したのだ。首からは血が噴水のように噴出し、男の体は崩れ落ちる。首を斬られたので、男は断末魔さえあげられずこの世を去ることとなった。

「ハア、ハァ……」

たった十秒足らずで勝負は決したのだが、それでも俺は息を乱していた。ジルに誤召喚されてから、運動なんて殆どやっていないのだ。体力が落ちているのは当たり前である。剣道の勘が鈍るほどこの世界に居なかったのは救いだったな。

閉話休題。今の戦いには、俺が勝利する二つの要因があった。

一つは、剣道をやっていたということ。前述の通り俺は中学生の頃、剣道部に入っていた。だからこそ、敵の突きをいなしたり咄嗟に後ろに下がったり首を正確に突いたりできたのだ。さっきの男は戦い慣れてはいてもスピードはなかったので、お世辞にも剣道が強いとはいえない俺でも勝つことができた。

そして、もう一つ。それは、俺のこの傍観者じみた性格だ。最初こそ動揺したものの、俺はこの異世界にすぐ馴染んでいった。チート能力を授かった訳でもなければ、この世界に居場所を見つけた訳でもないのに、だ。それに、前述の剣道県大会三回戦負けだってそう。俺は予選すら突破できない程の実力だったのに、県大会に進出

しさらには二回も勝利することができた。全国大会優勝とかしている最強系主人公には見劣りするものの、俺的には快挙だ。

そう、俺はいつだって冷静になることができるのだ。だから、俺は命の取り合いだと言うのに冷静に戦うことができた。

「それにしても、やっぱ死体は気持ち悪いな……」

もちろん、一般人なので死体を見て平然としていられるほど冷静ではない。

俺は迫りくる吐き気を堪えて、辺りを見渡した。俺のすぐ前では二人の男が剣戟をぶつけ合い、激闘を繰り広げている。いつのまにか混戦になっていたようだ。……ヤバい、ヤバいぞ。混戦ってことは前後左右どこから敵が攻撃してくるか分からないってことだ。

とりあえず剣をちゃんと握って臨戦体勢を整えた。さっき二回とも助かったのは運が良かっただけなのだ。一回目は騎士の人が助けてくれなかったら死んでいたし、二回目も綱渡りだった。油断してはいけない。

瞬間。

「おおオォォォーッ」

空気が変わった。ブルゴー軍の騎士たちが喚声を上げているのだ。その視線の先には、先程俺を助けてくれた女騎士の姿。馬上で彼女はいかついおっさんの首を持ち上げている。首の根元からは血がジュルジュル垂れており、グロイことこの上ない。彼女の手は垂れる血で真っ赤だ。

「敵将、ペケ男爵討ち取ったり！」

敵兵士たちの顔が変わった。ついさっきまで数で勝っているとはいえ精鋭であるブルゴー軍に対してあんなにも必死で戦っていたのに、彼らの顔が恐怖に歪む。副官らしき男が声を張り上げて恐怖にとりつかれた兵士たちを纏めようとするが、すぐさま女騎士に首を斬られた。

敵兵士の理性はそこで完全に切れた。情けない声を出しながら、味方の居る本陣に逃げていく。背を向けて逃走しているので、後ろから矢で射たれたり剣で斬られたりと散々だ。

もちろん俺は逃げる敵を追ったりはしない。自分から死地に飛び込むなんて兵士でもない俺がそんな危険なことする訳ないだろう。逆に、俺は周りを警戒しているくらいだ。追いつめられた敵兵士が俺に危害を与えてくる可能性も無きにしも非ずだしな。

一分位経っただろうか。女騎士は潰走した敵を追うのを止めた。

「急いで小隊ごとに纏まれ。すぐに敵と当たるぞ」

どうやら、女騎士がこの二百人程を指揮する権限を持っているようだ。さて、次からはちゃんと後ろで安全確保しなきゃな、と今回死の危険に二度も晒されたことの反省をしていると、女騎士が話しかけてきた。

「リョウ殿、先程敵兵士をたった十秒で葬った動き、なかなか良かったぞ」

いや、一分経つか経たないかで敵軍を潰走させたあんた達の方が凄いでしょうよ。こんなに質の差があったのなら、わざわざ戦略立てなくても真正面からぶつかって勝てた気がする。

「こちらこそ、貴方に助けてもらえなければ今頃死んでいたでしょう。ありがとうございます」

とりあえず、謝礼をば。命を助けてもらったのだ。感謝しきれない。……ん？今彼女何か呟いていなかったか？

「あの、何か？」

「いや、なんでもない。……そうだ、まだ名乗ってなかったな。リョウ殿は私の名前を知らないだろう。私の名は、エレナ・シュマンだ」

へえ、シュマンさんっていうんだ。

「シュマン隊長、用意ができました」

副官らしき男が言った。兵士は皆整列している。……また戦場に行かなきゃいけないのか。嫌だなぁ。

「分かった。……皆の者、今度はプリクト侯爵の軍勢を潰すぞ！気を抜くなよ！」

シュマンさんもまた気を引き締めて、小隊を指揮しようと副官の位置まで戻ろうとする。

しかし、不意に振り向いてシュマンさんは俺に向かってにやつき、

そして健闘を祈ると言った。……不思議だ。俺がにやついてもキモいとしか言われないのに、シュマンさんがすると頼もしい。

「健闘を祈る、か。……こっちの方こそ祈ってるよ。あいにく俺は戦場じゃあ何もできないんでね」

今も、戦況は刻々と変化している。だが、戦争なんか経験したことの無い俺なんかが口出ししても意味がなく、今の俺は居ても居なくても変わりがない。あとは俺の立てた作戦を彼らが実行するだけだ。もう俺の出る幕は無い。

第2章第１０話　戦場（後書き）

今回の戦場での亮の活躍、どうでしょうか。不意に戦闘シーンを書きたくなってきて書きました。ちなみに、相手は二人とも素人です。二人目なんてちょっと腕っぱしの良いだけの一般人なので、亮に負けても仕方ありません。もちろん、敵が全員そうだと言う訳ではありませんが。

でもやっぱり戦争シーンって書くのが楽しいですよね。血が湧き肉が踊る的な？

え～夏休みに入り少しは暇ができたので、更新スピードは速くなると思います。……久々の一週間以内更新？

第2章第11話　右翼

「別人だな。あの時とは似ても似つかない……」

あの時、とは軍議で彼が秘策を発表した時のことだ。あの時、彼は我々軍人に対して暴言ともとれる発言をした。国王陛下に目をかけられていなかったら血の気の多い武官に斬り殺されていただろう。そう思う程酷かった。騎士の自尊心をズタズタにされたのだ。

一方で、今目の前に居る少年はただただ命を助けられたことに恐縮している。暴言を放ったのと同人物が、だ。まさかそんな殊勝な性格だとは思ってもみなかった。驚きを隠せない。

この少年はまだまだ謎が多いようだ。

「あの、何か？」

おっと、独り言を言っているのを気取られたようだ。まあ聞かれても支障の無いことなのだがな。

「いや、なんでもない。……そうだ、まだ名乗ってなかったな。リョウ殿は私の名前を知らないだろう。私の名は、エレナ・シュマンだ」

シュマンの姓を聞いて驚くかと思っていたが、全く動じていない。普通は五大公の一族の娘が戦場で剣を振り回していると聞くと驚くのだがな。無知なのか、爵位に興味が無いのか。……いや、私のことを最初から知っていたのかもしれない。掴めない男だ。

「シュマン隊長、用意ができました」

副官が言った。もう用意ができたのか。

「分かった。……皆の者、今度はプリクト侯爵の軍勢を潰すぞ！気を抜くなよ！」

私がブルゴー騎士団長から受けた任務は、敵の最右翼の撃破。今回は瞬殺できたが、次は本格的に混戦となるだろう。二、三分ではとてもじゃないが撃破できない。

ふと、後ろの少年のことが気になった。ブルゴー騎士団長ら武官に嫌われて、一般人らしいのに護衛もなしに戦場に放り込まれた不憫な少年。最初はざまあみろとしか思わなかったが、意外と殊勝な一面を覗いて少し同情している。少し剣の心得があるようなので大丈夫だろうが、やはり不安はある。

ふと、私は少年の方を向いた。この気持ちにケジメを付ける為に。

「健闘を祈る」

さて、行くか。馬を歩かせ、小隊の先頭に立つ。私は、個人的に大将が先頭に立って戦う方が兵の士気も上がるしいいと考えている。将が勇猛なら、兵も勇猛になる。これが私の持論だ。

さて、次当たるのはなかなかの強敵なので、陣形を組んで攻めた方が良いだろうな。するとどの陣形にするかだが……蜂矢の陣が妥当か。→の形をしていて、寡勢が戦うのに適した突撃用の陣形。この状況と同じだ。それに、先頭に立って戦うのが好きな私の性格にも合っている。

「では、次は蜂矢の陣で挑む。いつもの、だ。分かるな？」

「「「はい？」」」

良い返事だ。さて、行くかな。

「敵は目と鼻の先だ。陣形を組むぞ」

速やかに兵たちが動いていく。流動的で、芸術性さえ覚えるほどだ。よく使う陣形なのでたとえ戦っている最中でも組めるように訓練している。十秒もたたずに組み終わった。

「行くぞ。全軍、突撃ィーーッ」

馬蹄を轟かせてプリクト侯爵の軍勢へと駆け行く。愛用の大剣を握りしめながら、先を見つめる。

三十秒ほど駆けただろうか、プリクト侯爵家の家紋のある旗が見えた。敵兵士たちはそれぞれ得物を取り、こちらを睨みつけてくる。良い気合いだ。戦争はこうでなくちゃな。心が躍る。

「我が名はエレナ・シュマン。カタパルト王国直属軍騎馬団第二小隊隊長なり。いざ、尋常に勝負せよ！」

私は古風の名乗りを好む。それに共鳴したのか、敵の兵士が一人、これもまた名乗りを上げて私にかかってきた。馬に乗っているのでそれなりの実力者だろう。楽しみだ。

兵士の得物も私の得物も大剣。私は手綱を引き絞って、更に加速させた。大剣を上段に構え、いつでも振れるようにしておく。私の

狙いは単純だ。すれ違いざまに、斬る。相手も同じことを考えているようで、大剣を左に振りかぶった。

もうすぐだ。私は上段に構えた大剣を振り下ろした。同時に、兵士の剣も風を薙いで私の脇を狙う。そして、兵士の剣が私の脇腹を斬りつける前に、私の大剣が兵士の頭を砕いた。

グジュリ。

兵士の体が力を失い、私に斬りつける前に落馬した。即死のようだ。勝負は一瞬で決した。

良い示威行為になった。敵の士官を瞬殺したことは、味方には勇気を与え敵には恐怖を覚えさせるだろう。

「どうした？プリクト侯爵家も所詮はこんなものか。拍子抜けだな」

そして、挑発する。この言葉に頭がかっとなった男数人が槍を持って私を殺そうとするが、冷静さを失った雑魚など敵ではない。数秒で斬り殺し、敵にはますます恐怖を、味方にはますます勇気を与えられた。あとは、蜂矢の陣で潰すだけだ。人数で劣っているとはいえ、質も士気もこちらが上となれば敵を圧倒できるだろう。

「「「うおおォォォーッ」」」

後ろから配下の者達がそれぞれの手に武器を持って突撃する。私も敵陣に斬りこんだ。槍を避け、斬り殺す。腹に向かってきた剣を打ち落とし、斬り殺す。飛んできた矢を掴み、腰に付けておいた短刀を矢の来た方向に向かって投げ返す。矢を討った男の首に短刀は命中した。

左右から同時に来られた時は、馬を後ろに跳ばさせて両方とも避けた。二人の得物がぶつかる。ひるんだ。その隙に、まずは一人の首を斬る。後ろに下がって避けられたが、次は腹、その次は頭と三連打するととうとう守りきれなくなり、四発目の突きをもろに食らった。なかなか実力はあったのだが、防戦一方に回って自分のペースを掴めなかったのが敗因だった。二人目の方を見ると、副官が殺したようだ。

ふと周りを見ると、いつの間にか敵軍が二倍以上に増えていた。だが、押し込まれた私の小隊を助けようと味方の小隊が助けにきてくれている。やはり、混戦だな。

この後も十数人を屠り、遂に敵将の一人プリクト侯爵の位置まで辿り着いた。馬は途中敵の兵士に斬られて使い物にならなくなったが、私は馬上より地上戦の方が好きだ。性に合っている。

プリクト侯爵は肥満でろくに動けないようで、周りに居る護衛の男数人を倒せばプリクト侯爵は瞬殺できそうだ。しかし護衛の内一人は他を寄せ付けない殺気を纏っている。

「お主がプリクト侯爵だな。陛下に対する謀反の罪で、殺す」

宣言すると、護衛の男の内一人がプリクト侯爵の前に立った。この中では段違いの殺気を放ってきた男だ。お互い剣を構える。

剣先と剣先の距離十センチ。既に私の射程範囲内だ。機を窺う。

男は足を動かさない。まるで、私が技を放つのを待っているかのように。応じ技（カウンター）狙いか？上等だ。その誘い、乗ってやろうじゃない

か。……いや、ちょっと待て。師匠に言われたことを思い出すんだ。「動かない敵に痺れを切らせてすぐ一か八かの勝負にしようとするのはお前の悪い癖だ。戦場では、失敗したら死なんだぞ」、とよく言われた。

そうだ、そうだよ。私はこの男の戦いを一度も見ていない。しかし、この男は私の戦闘を遠くから見ていたのではないか？そして私の剣技を全て把握したうえで、誘っているのかもしれない。これは、罠だ。相手のこともよく分からないのに誘いに乗るべきではない。うん、そうだ。

だが、お互い動かないままだといつまでたっても決着はつかない。早く勝負を終わらせないと、プリクト侯爵に逃げられるのかもしれないのだ。だが、誘いに乗る訳にもいかない。ならば……フェイントだ。

私の得意技は面と胴（上から頭を斬るのが面で、斜め上から男の右腹を斬るのが胴）。とりあえず、面を見せてやるか。

少し、剣先を上げる。ただし、素早くだ。すると、男も少しだけ剣先を上げた。視線の先は……私の手。出がしらの小手（手から手首の辺りを打つこと）を狙っているのだろうか。フェイントと分かると露骨に舌打ちし、後ろに五センチほど下がった。

お互い足を動かす中で、再び私の射程範囲内に入った。今度は、足を少しだけ前に滑らせる。今回もフェイントだ。

「――――ッ」

しかしその瞬間、男はフェイントだと気付かなかったのか釣られ

て剣線を上げてしまった。迂闊、と男が思わず漏らす。もちろん私がこんな機会をやすやすと見逃すはずもなく。剣線が上がって空いてしまった胴を狙い、前に踏み込んでいる。今更小手を打ってももう遅い。終わりだ。

人肉の感触が剣を通して伝わってくる。男は小手を打つのを諦めて回避しようとしたようだが、時既に遅し。致命傷には出来なかったが、ほとんど勝負は決した。もちろんだからといって油断したりはしないが。

男は痛みを堪えて面を打ってきた。私は男の腹を抉った大剣を引き戻して、守る。男の面を受けた私は、手首を返して逆胴（相手の左腹を斜め上から斬ること）を打った。男の顔が苦悶に歪む。

今だ。

私は腕を引き、そして思い切り突いた。男の首を大剣が貫く。勝負は、決した。私は大剣を横に薙いだ。首が転がり落ちる。

「プリクト侯爵。終わりだ」

残った三人の護衛達は、私に相当怯えている。剣先を向けると、一人が尻もちをついた。無様だな。あの護衛の男を見習えば良いのに。

「ヒィッ……うあぁぁ！」

怯えた護衛の一人が、恐怖に耐えかねて飛び出してきた。それを一刀のもとに斬りふせると、男たちはまた半歩下がった。怯えきっている。

そう判断した私は、まだ立っている男に面を打った。剣と剣をぶつけて守ろうとしているが、遅い。守る前に大剣が頭に届いた。次に、尻もちをついた男の首を斬りおとす。これで護衛は居なくなった。

しかしここでプリクト侯爵は意外にも逃げたり、ましてや尻もちをついたりなどしなかった。逃げられない、自分はもう死ぬんだと分かったのかもしれない。諦めたような顔をして、口を開いた。

「まさか、お主の様な小娘に殺されるとはな。旗揚げした時は思いもしなかった。フッ。ここで命乞いをするなど誇り高き貴族である儂にはできぬ。一思いに、殺せ」

その言葉を聞き、私は躊躇なくプリクト侯爵の首を斬りおとした。逆賊は逆賊だ。首が、まるで鯨の潮吹きのように血を噴き出しながら地面を転がる。私はその血塗れの首をまたも天高く上げて、声の限り叫んだ。

「敵将が一人、プリクト侯爵を討ち取ったり！」

勢いは伝染する。それを聞いた王国軍兵士は喚声を上げ、それを聞いた敵軍兵士は後ずさった。

「シュマン、よくやった」

「は！ありがたきしあわせ！」

後ろから来たブルゴー様が労いの言葉をくれた。いつの間にか援軍として来ていたようだ。私の憧れの一人だ。いつかは、こんな強

い人になりたい。

さて、ブルゴー様が来たということはここが主戦場だ。

「ブルゴー様。ここを、突破するのですか？」

ブルゴー様はああ、と答えてその顔に笑みを浮かべた。そして、全軍に聞こえるように大声を上げて言う。

「皆の者！敵の策は封じた。あとは突破するだけだ。迫りくる敵をぶち殺して、逆賊シャルロワを討つぞ！」

戦場の空気が変わった。

第2章第12話　轟炎

シャルロワ軍の陣形は鶴翼だった。敵が大将の居るであろうV字型の尖っている所に向かっているのを左右から押し潰す陣形。分かり易く言うと、蛙が口を開いた形。通常この陣形は、蛙の食料である虫（ここでの敵軍）が前（V字型の上方）から口の中（V字型の中）に入ってきた所で口を閉じて捕食する（両翼を閉じて殲滅する）。作戦がハマれば大勝しやすいが、V字型の尖っている所にある本陣を崩されると大敗となる。

つまり、敵が本陣を撃破するのが早いか両翼で包み込み殲滅するのが早いかを競う陣形。

しかし、シャルロワ軍の鶴翼はV字の角度が若干小さい。ブルゴーが着目したのはそこだった。このまま敵の誘いに乗り速度勝負しようとすると、恐らく敵が両翼を閉じる方が早くなり、敗北するだろうと読んだのだ。

「総員方向転換だ。敵軍右翼を急襲する。シュマン第二小隊隊長、第二小隊は最右翼を外側から攻撃だ。残りは全て右翼を内側から潰す。急げ、時間の勝負だ」

ブルゴーは、三千二百程を率いてv字の内側から右翼の中腹を急襲した。まさか右翼の方に向かうと思っていなかったのか、敵軍が崩れる。シュマンの小隊の働きもあって、敵軍右翼は混乱した。このまま戦えばすぐ撃破できるだろう。

しかし、後ろからは左翼の軍勢が迫ってきている。ブルゴーは、ひとまず右翼と左翼の挟撃を防ぐことにした。

「皆の者、いったんここは引けぇ！引いて敵をおびき寄せて、そこから左翼右翼を纏めてぶっ殺すんだ」

ブルゴーの命令を受けて兵士たちは一斉に下がり始める。右翼と左翼は一緒になって俺達を追いかけてきた。だが、いや、やはりと言うべきか。元右翼の軍勢の士気は既に低い。一度崩されたので、足並みが揃っていないのだ。

中腹から右翼の先の方まで下がると、丁度シュマンが居た。プリクト侯爵の首を掲げている。ブルゴーは感心した。昔より格段に剣技が上がっているとはいえ、彼女にとっては初めての本格的な戦争。

「シュマン、よくやった」

シュマンは、即座に敬礼して礼を言った。彼女はブルゴーの剣の弟子だ。ブルゴーに対しては畏敬の念を持っている。

「ブルゴー様、ここを、突破するのですか？」

ブルゴーは首肯した。ふと周りを見ると、配下の三千五百は戦いたくてうずうずしているようにブルゴーは感じた。

（そろそろだな……）

「皆の者！敵の策は封じた。あとは突破するだけだ。迫りくる敵をぶち殺して、逆賊シャルロワを討つぞ！」

空気が変わった。さっきまで逃げることしかしかなかったブルゴー軍が一斉に逆襲したのだ。敵はいきなりの逆襲にやや押される。

ブルゴー自身も先頭に立ち、敵兵を五、六人斬り捨てた。それを見て配下の兵士たちに気合いが入る。持ち直してきた敵を再び押し始めた。

余談だが、ブルゴーは基本的に「将たるもの常に後方で采配しなければならない」という考えの持ち主だ。そのブルゴーが先頭に立って味方を鼓舞したのにはそれなりの理由がある。

（逆襲した勢いを殺さずこのまま敵軍を崩す為には、大将である俺が出張らないとな）

「第三小隊は、敵軍深くまで切り込め。敵を混乱させる」

髭面の男が俺の命令に従い勇猛な兵士たちを連れて、敵軍の奥深くまで駆け抜ける。第三小隊は全員馬上と言う完全なる騎馬隊だ。こういう役にはうってつけである。

「よしっ、敵を押し込むぞ。揉んで揉んで揉み上げろ！」

ただでさえ押され気味だったのに、その上騎馬隊などに荒らされてしまっては、敵軍はもう崩壊しかけていた。もう軍はほとんど機能していない。もうすぐで勝てる、そうブルゴーは肌に感じた。

しかし、戦争はそんなに甘くない。敵に援軍が入った。さっきまで前線に出ていなかった軍勢だ。これで敵軍はまた持ち直すだろう。気付くのが少し遅れたようだ。もう少し早く気付いていれば、いくらでも対処のしようはあった。

（これはなかなか厳しいな。倒しても倒しても敵が湧いてくる。それに兵士たちの士気が衰えたら終わりだ）

ブルゴーは指示を出した。敵を引きつけるから近付いてきたら魔法を撃て、と。ちなみに、今ブルゴーは魔導士を殆ど連れてきていない。その少しをずっと温存しておいたのだが、今使って戦局を一気に傾けないとシャルロワの所に着く前に敵軍一万が偽本陣を破るだろう。ちなみに、敵軍には魔導士は二十人程しか居ない。恐らく要人警護にしか使われていないだろう。

「少し引け、敵を引きつけるのだ」

ブルゴーの命令どおりに敵は引きつけられ、そして魔法を一気にくらった。鉄砲で言うなら一斉射撃だ。援軍も咄嗟のことで混乱する。混乱が醒めないうちに撃破すれば……戦局はブルゴー達に傾く。

「今だ、再び反転せよ！」

後ろに下がって敵を引きつけていた兵士達が前に進み突撃する。再びブルゴーは前に立ち、また敵兵を何人か斬り捨てた。しかし今回はそこで終わらせるつもりはない。貴族を一人か数人、殺すつもりなのだ。

（ここで敵将を一人でもいいから殺せば、敵の士気を保つことはできないだろう）

ムルイ伯爵が戦場に居た。恐らくこの場では最高の権力者だろう。馬蹄を轟かせて、剣を振り上げた。一瞬で決めるつもりだ。しかし、隣に居た馬上の魔導士に気付かれてしまった。

「神の炎（ハーレーン）よ、燃え上がれ！」

国王と同系統の魔導士。火系統だとブルゴーは確信した。

咄嗟のことに体を捻り、マッドバーナーのように噴き出す炎を避ける。ブルゴーは、捻った体勢のまま魔導士の首に狙いを定めた。ビュン、と剣を振る。しかし、その剣は魔導士には当たらなかった。盾に防がれたのだ。

「神の炎(ハーレーン)よ、燃え上がれ！」

魔導士が再び魔法を放つ。もう逃げられない体勢だ。しかし何故だかブルゴーはその顔に笑みを浮かべていた。魔法によって生み出された炎に対して剣を振る。

本来、炎と物体がぶつかるということは有り得ない。物理的に有り得ないのだ。なぜなら、炎は物体ではない。それは物理を習っていないこの世界の人々も知っている常識。しかし、ブルゴーはその常識を覆した。

ボワッ。

炎が、消えた。ブルゴーは魔導士に驚かせる暇も与えず二の太刀、三の太刀をあびせようとする。魔導士はなんとか盾で防ぎ、そこでブルゴーの剣にあったある仕掛けを見た。馬に対して加速の魔法を使い間合いを取る。そして、魔導士は口を開いた。

「……、退魔剣(レーヴァテイン)か」

魔法に対抗できるのは魔法だけ。この世界の常識である。もちろん魔法を使わなくても魔導士より強い人間は居るが、絶対に魔法が当たると言う時それを防ぐことはできない。

しかしその常識を壊したのはある鍛冶屋だった。彼の名前はレーヴァテ・インストラ。百年ほど昔の人間である。ある地方にある神話になぞって、彼のつくった魔法を無力化する剣は退魔剣（レーヴァティン）と呼ばれた。アリア大陸に二百程しか現存しない剣。これは、魔法に対して魔法以外で対抗する唯一の手段である。作り方は、インストラが死んだ今となっては誰も分からない。

「ならば、こちらも相応の覚悟が必要だ」

魔導士にとって天敵ともいえる剣を目にしても、魔導士の男はまだ自分の優位を疑わない。ブルゴーは懐疑的になった。

（なんだ？何か策があるのか？……いや、そう惑わせることが目的か）

魔導士はゆっくりと呟く。

「神の炎（メテオフレーン）よ、燃え上がれ！」

ブルゴーの頭上に突如火が出現した。ボワ、ボワと火は勢いを増し、渦を巻いた巨大な炎となった。紅蓮の煉獄とも評するべきか。そしてその熱気でブルゴーの額には汗がにじみ出る。この炎は、退魔剣の一振りや二振りで消えるような規模ではない。

ブルゴーと魔導士の距離、僅かに二メートル。ブルゴーなら一瞬で詰められる間合いだ。しかし、ブルゴーは動けなかった。今動いた場合の未来予想図が悲惨すぎたからだ。

（今動けば、剣を盾で防がれると同時に炎が上から落ちてくる。しかしだからといって、引くことも出来ない。……八方手詰まりか。

ならばっ）

魔導士の盾を使った守り方は相当だ。剣を相手に守る訓練をいつもしているのだろう。一方で、ブルゴーは盾だけで守る人間と戦ったことは殆どない。その上、仕留めるのに少しでも手間をかければ死ぬのだ。それを承知の上で、ブルゴーは前に出ることにした。

しかし、この逡巡こそが魔導士の狙いだった。そう、ブルゴーが轟炎の出現に驚いている間に魔法が完成したのである。もしもブルゴーが魔導士の呪文なんか気にせずに前に出て強襲していれば、今頃魔導士はブルゴーの剣の錆となり、無様に地を這っていただろう。

魔導士が狂笑する。ブルゴーの剣を防ぐべく、盾を前面に押し出した。しかし、剣と盾は衝突しない。剣は盾を巧く避けて魔導士の体に食い込もうとしていた。蛇のようにクネクネした動きで剣が盾を抜ける。魔導士は危険を感じ、手綱を引きしぼって馬を後ろに跳び上がらせた。しかし完全に避けれた訳ではなく、腹を左下から右上に真っ直ぐ裂かれた。血が霧状に噴出する。魔導士の顔が今度は怒りに歪んだ。

魔導士が指をクイクイ、と引き寄せる。挑発しているのではない。魔法によって生み出された炎を引き寄せているのだ。ブルゴーは魔導士に二の太刀を浴びせようと剣を振る。果たしてどちらの攻撃が速いか。

「ぁが――――ッ」

ここで軍配が上がったのはブルゴーだった。退魔剣（レーヴァティン）が魔導士の首と胴体を引き離す。血飛沫が炎のように上がった。無論ブルゴーとて無傷では済まない。ブルゴーの剣で魔導士が絶命する直前、炎の

海はブルゴーの背中を侵食したのである。その直後炎が消滅したのは救いだった。術者の死によって無効となったのだ。

「……、痛ぇ」

しかし、軽く摂氏百度はいったであろう轟炎は背中に火傷を与えていた。一瞬だったから良かったものの、あと一秒でも浴びていればただでは済まなかっただろう。

激痛に耐えつつ、周りの状況を窺う。すると、敵は潰走気味だった。

「何が起こったのだ」

ブルゴーの独り言のように呟いた疑問に答えたのは、突如国王陛下の秘書として名を上げた亮だった。

「ムムイ伯爵とやらを殺したら、なんか敵軍が怯んで、それで今みたいな状況になったという訳です」

亮はムルイ伯爵の首を手に持っていた。ブルゴーは伯爵の名前を訂正する余裕をも失う。

「貴様が？……馬鹿な、そんなことが」

亮はあの後色々考えた末に、武功を上げてカタパルト王国の武官達に認められる為に何がしかの功績を挙げようと考えた。その後の行動は速い。シュマンが既に撃破したペケ男爵配下の死体から鎧など一式を拾い、その場で着替えてそして敵軍に潜り込んだ。すると偶然ブルゴーと護衛の魔導士が戦い始めたので、他の護衛やムルイ

伯爵の気が一瞬そちらに向いた。その隙を突いて伯爵を殺したのである。

「そんなことより、敵を攻めたらどうです？」

亮は謙虚を装いブルゴーに進言した。ブルゴーは亮の正しいがどこか馬鹿にしている様な言い方に少しムカつきを抱いたが、事実なのだから一々噛みつくことも出来ない。

そんなことより、とブルゴーは気を取り直す。今はとにかくこの局地戦を制さなければならない。優勢に傾いたからといって、勝利が確定した訳ではないのである。まだ敵には温存している軍勢が四千程いる。この局地戦を制してやっと五分五分の戦いができるのだ。

「皆の者！敵は怯んでいる。一気に潰すぞ！」

ブルゴーはいつの間にか背中の痛みを忘れていた。轟炎が与えたダメージはちょっとやそっとのものではないのに、だ。そう、彼はいつになく高揚していた。

第2章第13話　首級

「ァ――――か、ふ」

壮年の男、ムムイ伯爵の腹に剣が突き刺さった。男は白目を剥いて、倒れる。周りに居た護衛の男達は皆、ポカンとした表情で俺を見た。剣の取っ手を握っているのは俺の手。そう、俺がこの男を殺したのだ。……それにしても、やっぱり気持ち悪いな。吐きそうだ。

まさか、裏切り者がいるとは思ってもみなかったのだろう。護衛の男達は茫然としている。さて、ずらかりますか。

と、俺は剣を手から離してムムイ伯爵の腰に差してあった剣を取りだした。人の体を貫通した剣を取りだすのは時間がかかる。

首を斬ってムムイ伯爵を殺した証拠を取るか。敵将の首級を挙げないと、証拠が無いので認めてもらえない。倒れたムムイ伯爵の髪の毛を掴み、首に剣をあてがう。

そこで、ようやく冷静な判断を下せるようになった護衛の男達は、俺を睨みつけた。主君を殺されて怒っているのか、金をくれる雇い主を殺したのを怒っているのか。一見どちらか分からないが、とりあえず俺に敵意ないしは殺意を抱いているのには変わらない。でも、俺はそんな視線は無視して首切りに励む。うわ、血がたくさん噴き出してきたぞ。

「オマエ、この落とし前はどう付けてくれるんじゃァ！舐めてんのかオイ。あァ？」

どうやら柄の悪いお兄さんだったようで。さっきの疑問だが、恐

らく後者だったのだろう。もちろん、忠誠心があろうと無かろうと腕っ節が立つのには変わらない。なんといっても貴族様の護衛だ。

首を脇に抱えさて逃げますかと思った俺だが、周りを囲まれているのに気がついた。あれ？これってヤバくないすか？

後方では炎を出して戦う魔導士にブルゴー騎士団長が押されている。俺を助けてくれるほどの余裕は無さそうだ。

……、腹を括ろうか。多少危険だが、仕方がない。

「我が名は、カタパルト王国国王陛下の秘書リョウ・ヨシダ。敵将が一人ムムイ伯爵、討ち取ったりィッ！」

ムムイ伯爵の首を皆が見えるように高く掲げる。おお、とどよめきが起きた。シャルロワ軍の兵士たちが、怯む。

「今だ、逆賊シャルロワ軍をぶっ潰そうぜ！」

ぶっ潰せ、という命令系だと反感を買う気がしたので変えた。俺はそんなに偉くないし。

さて、ここで俺を囲むガラの悪い兄ちゃん包囲網の一角が崩れた。仲間の兵士達が助けに来てくれたようだ。俺はその方向にダッシュする。逃げんなやコラァ！という声が聞こえた気がするが勿論シカト。

「覚えとけよ、コラ。いつか、必ずぶち殺してやっからなァ！」

今まで三流悪役の捨て台詞として有名だった「覚えとけー」。実

際こんな言葉を投げかけられると怖くて仕方なかった。人に殺意が湧くほど恨まれるって、嫌だね。

全力で百メートルほど走りふと後ろを向くともう誰も追ってきていなかった。振り切ったのか、と目をこらすと柄の悪いお兄ちゃん達はジル軍と交戦していた。ジル軍兵七人とお兄ちゃん達四人。お兄ちゃん達は貴族の護衛と言うことから俺が推測したように、強かった。カタパルト王国の精兵と言われている彼らと、半分しか人数が居ないのに互角に渡り合っている。三流ではなかった、ということか。

右を見ると、ブルゴー騎士団長が魔導士の出した炎に背中を焦がれながらも胴体を一文字に斬り裂いていた。辛勝、といった所か。魔導士が絶命した後、しばしの間ブルゴー騎士団長は激痛に耐えていた。

「何が起こったのだ」

呟く。俺もつられて周りを見ると、確かにブルゴー騎士団長が魔導士と戦い始めた時と状況が変わっていた。こちらが押している。俺は、ブルゴー騎士団長に何故こうなったかを告げる為に一歩ブルゴー騎士団長に近付いた。

「ムムイ伯爵とやらを殺したら、なんか敵軍が怯んで、それで今みたいな状況になったという訳です」

俺、説明下手糞だなぁ。ほれ見ろ、ブルゴー騎士団長は頭に疑問符を浮かべてそうな顔になったぞ。

「貴様が？　……馬鹿な、そんなことが」

そっちですか。そっちの疑問でしたか。俺って武官の人たちからイメージ悪かったんだなぁ。ちょっとショックだわ。てゆうか、何でこんなに悪印象持たれているの？

まあ色々腑に落ちない点はあるがそこは置いといて。ブルゴー騎士団長、最高指揮官なのに呆けていても大丈夫なのかよ。

「そんなことより、敵を攻めたらどうです？」

俺は謙虚に進言する。ブルゴー騎士団長は一瞬顔をしかめたが、すぐに気を取り直したようで考える人みたいな表情になった。きっと、俺みたいな若造にもっともらしいことを言われたのが気に喰わなかったんだろうなぁ。この人二十代にしか見えないけど。

「皆の者！敵は怯んでいる。一気に潰すぞ！」

ブルゴー騎士団長が叫ぶ。ただでさえ調子に乗っていたジル軍は、ここに来て更に勢いを増した。馬上のブルゴー騎士団長は、小隊の隊長達に次々と指示を出した。

「う～ん、俺はどうしようかなぁ」

ここで悩むのは自分の進退だ。もう貴族も一人殺したし、これ以上危険を冒さなくても良い気がする。むしろ、戦いたくない理由は吐き気かな。初めての殺人、初めての死体、初めての戦争。結構来るモノがある。

そうだよな、ここって大量に殺人が行われいる現場なんだよなぁ。そう思って見た戦場の風景は、吐き気とおぞましさしか生まなかっ

た。我慢できない。

「……、オェッ」

胃がひりひりする。何度も吐いたので、胃に何も残っていないのだ。胃酸が逆流し、喉に焼く様な痛みが走る。嗚咽。俺の口からは、胃酸しか出てこなかった。一時間ほど前の嘔吐で胃から食べ物が無くなったのだ。

だが、戦場では一瞬の隙が命取り。たとえ大事を取って後方に居ても、戦争が始まった直後のように敵兵が入り込んでくる可能性もあるし矢だって飛んでくる。多少の痛みは堪えて、周りを注視しなければならない。

片膝をついて、何かあればいつでも動けるようにしておく。まだ息が整っていないのだ。

「ハァ、ハァ……ッ」

矢が飛んできた。咄嗟に右に跳んで避ける。危なかった。片膝つきは避けにくいからやめよう。

剣を地面に突き刺し、ゆっくりと立ち上がる。前方を見ると、どうやら新手の兵士と戦っているようだった。戦局は互角。まあ、敵は二万人も居るしな。まだまだ予備兵力はあるのかな。

あちこちで剣戟を振るい、戦っている兵士達。シャルロワ軍は予備兵力の導入によって、士気を修正したらしい。さっきまでの弱弱しく頼りない雰囲気が嘘のように奮戦している。ブルゴー騎士団長が大声を挙げて指揮しているが、なかなか厳しそうだ。やっぱり、

兵力が極端に少ないから予備兵力が無いのが戦況の厳しい原因かな。全員休む暇もなく戦い続けているんだものなぁ。

「せいやッ……はぁ！」

剣を振るい、槍を持って迫ってきた兵士を斬る。だが、また他の兵士がやって来た。倒しても倒しても湧いて出るようだ。きりが無い。二、三発攻撃を剣で適当にいなし、再び斬り殺した。

「兵力差がもろに出ているな……」

何故さっきの優位な状況から互角の攻防に転じたのか。それは、今ブルゴーが呟いた戦力差のせいだ。ついさっき、シャルロワ軍は予備兵力を導入した。そのタイミングが巧く、ジル軍は戦いの主導権を失ったのである。もうすぐ偽本陣も破られるだろう。時間の猶予はあまり無い。

馬の脚を止め、周りを見る。そろそろ疲労が溜まってきたようで、皆動きにキレがない。これでは、到底シャルロワ軍本陣まで辿り着かないだろう。

（国王陛下の奇襲が頼みか。最早独力では突破できまい）

ブルゴーは歯を食いしばった。カタパルト王国の騎士として、国

王に自ら戦わせるのは恥である。それに、体面や誇りの問題の前に大きな懸念があった。

（……、くそッ。もしも国王陛下が戦死したらどうするのだ。陛下の命が無くなればカタパルト王国は瓦解するぞ）

考えるだけでもおぞましい話だ。ブルゴーはその懸念を振り払うようにかぶりを振った。何にせよ、今こんなことは考えるべきではない。今自分のできることを精一杯やるだけだ。

ブルゴーは後方に待機している唯一の部隊、魔導士第八小隊に指示を出した。身体強化（フィジカルチャージ）をジル軍の兵士にかけろ、と伝えた。ここで気合いを入れ直さないとじきに劣勢になってしまうだろう。それでは、国王陛下率いる五百の近衛隊が急襲しても効果が上がらない。あくまでも互角の激戦を演じている所で近衛隊が突入することに意味があるのだ。

ちなみに、魔導士は殆どが偽本陣かシャルロワ軍の別働隊一万五千を食い止める一千人の守備兵の中にいる。

大体の兵士が魔法をかけてもらい元気になったのを見計らってブルゴーは喝を入れた。

「皆の者、ここが踏ん張り所だ。一気に敵を打ち破れェッ」

おおぉ！と喚声が返って来た。再びジル軍が主導権を握る。疲労を回復したジル軍は、ついさっき投入された兵士たちよりも元気な様子で戦場を駆けまわった。

少しずつこちらが押していく。この調子で戦いが進めば、ジル率

いる近衛隊突入もうまくいくだろう。

「敵は怯んでいるぞ。進め、進めェ！」

悪鬼の様な形相でブルゴーは味方の士気を上げる為敵軍に単騎突っ込む。十人二十人と雑兵が群がるが、ブルゴーはそれを蹴散らした。他ならぬブルゴーも魔法をかけられたのだ。炎の魔法による背中の痛みはもうない。

それに勇気を与えられたのか、畳みかけるように兵士が敵陣になだれ込んだ。各小隊を押したり引いたりさせて徐々に敵を追い詰めていくと、遂にシャルロワ軍が崩れた。そろそろ予備兵力を導入するだろうか。そう思って、雑兵と剣戟を交わしながらも敵陣を注意深く観察した。だが、いつまでたっても新手の軍勢は来ない。もう敵も限界なのか、そうブルゴーは考えた。

しかしこれは慢心。勢いに乗っているジル軍だったのだが、いきなりその勢いが失われた。横槍を入れられたのだ。右方から千人程の遊軍がジル軍の横腹を突く。一瞬崩れた。

「第六小隊が食い止めろッ。他は気にせずシャルロワ本陣の方向に突っ込め。なりふり構うな」

だがブルゴーもそんなことで一々うろたえたりはしない。配下に指示を与え、自分は第一小隊を率いて再び敵軍に突っ込んだ。もちろん心中は穏やかではない。内心、シャルロワと敵の用兵を見抜けなかった自分に対して煮えくり返っていた。

（横槍を入れられたか。これではこの勢いも長くは続かない。この勢いが失速する前に陛下が奇襲できなければ、負ける。……陛下よ、

早く来て下され。もう限界だ）

味方の士気をこれ以上落とさない為に、前線でひたすら剣を振るうブルゴー。横から攻撃されて勢いを少し落とした兵士も、少しはこれで鼓舞されていればいいが、そんなに物事はうまくいかない。そもそも、亮の読みが当たった上にブルゴー達がここまで押しているのが既に奇跡のようなものなのだ。

敵の堅陣はそう簡単には破れない。本当に、時間との勝負だった。

第2章第14話　急襲

ジル・カタパルトは、高揚していた。

戦争経験は二回。いずれも小規模な反乱で、家臣たちに殆ど任せるだけだった。しかし、今回は違う。作戦こそ家臣任せているが、最後に勝利を決めるのはジル率いる近衛隊だ。いわば、救国の王。このシチュエーションに燃えない方がおかしい。だが、ジルが高揚していたのはそれだけが原因ではなかった。

（最初は人間が召喚されて驚いたけど、これはとんだ儲けものだったね）

誤召喚をして呼び出してしまった少年亮。秘書業をやらせてみてなかなか素質があるとは思っていたが、まさかこれ程の切れ者だとは思ってもみなかった。ジル軍が施した仕掛けを敵が無視したら終わりという、多少賭けに近い部分のある作戦だったが、亮の読みは当たり今ジルたちはシャルロワ軍本陣の真後ろに来ている。

静寂（サイレント）の魔法を使い、シャルロワ軍本陣の僅か一キロメートル後方まで進んだジル率いる近衛隊は、今まさに敵の喉元を斬り裂こうとしていた。

（やっぱり、敵の気配探査の魔導士よりも王国の気配隠蔽の魔導士の方が優秀かぁ。まあ質の良い魔導士は殆どが王国の直臣、つまり精鋭八千に入ることができるから当たり前かな）

狂ったような笑みをその顔に浮かべ、ジルは今まさに本陣急襲の指示を出そうとしていた。その目は勝利を確信している。油断では

ない、裏付けされた自信があるのだ。

「突撃」

呟いた程度でしかないその声は、五百程居る近衛兵全員に伝わった。後方からの奇襲ということで、誰も声はおろか微かな物音さえ発しなかったのだから当然である。

しかし、この呟きで静寂は破られた。近衛兵全員が手綱を強く引き締めて、馬を高速で走らせたのである。馬に乗った兵士たちは、まるで競馬の騎手のように競うようにしてシャルロワの本陣へと向かう。誰かが気付き、敵襲ッと叫んだがもう遅い。既に喉元に食い込んでいる刃は簡単なことでは取れないのだ。

パラパラと出てくるシャルロワ軍の兵士達が近衛兵の攻撃を妨げようと立ちはだかるが、その末路は近衛兵の上手な馬捌きで避けられるか近衛兵の剣捌きで命を刈り取られるかの二択。

そして、一番速かった近衛兵が遂にシャルロワの陣幕に到着した。それに続いてまた一人、二人とシャルロワの陣幕に入っていく。ジルは後方で邪魔をする兵士を炎の魔法で焼き殺しながら、シャルロワ討ち死にの報告を今か今かと待っていた。

そして、近衛兵の一人が伝達しに来る。これは、来たか？

「国王陛下に申し上げます。賊将シャルロワの陣に突入するも、殺害には失敗。シャルロワは馬に乗って逃げているとのことで、数名がそれを追っています」

シャルロワの殺害には失敗したらしい。仕方ない、正攻法で崩すか。

「分かった。……全軍に告ぐ！これより作戦は賊将シャルロワの殺害からシャルロワ軍の撃破に移る。シャルロワを追っている者は直ちに諦め、シャルロワ軍を撃破せよ！」

シャルロワを今殺せなくても、シャルロワが逃げればジル軍の勝利だ。シャルロワを追っている最中に敵軍に囲まれると厄介なので、普通に敵を撃破することにした。

一直線にシャルロワ軍本陣の奥深くまで進んで来たジルだが、何故か囲まれたという感じはしなかった。駆け抜けることで、却って敵が混乱したのではないか？　と考え己の優位を疑わない。

シャルロワ軍本陣の真ん中ほどで陣形を組む。偃月（えんげつ）の陣だ。この陣形は、鶴翼とは反対に真ん中の軍勢が前にでて両翼を下げる。Λの形だ。大将やその周りの精兵が先頭となって斬りこむので、蜂矢と並んで攻撃力は高い。蜂矢とは違い機動力のある陣形なので、シャルロワ軍の中を動き回りかき乱すには持って来いの陣形だ。

指示は近衛隊隊長に任せ、ジルはシャルロワ軍の様子を観察する。既にリッツが横に付いているので、乱戦にならない限り安全だ。

（シャルロワ軍の殆どが士気を無くしているな……奇襲は成功か？）

近衛隊は縦横無尽にシャルロワ軍の中を駆け回り、混乱している敵兵に次々と襲いかかる。カタパルト王国きっての精兵である近衛隊と農民が武器を持っただけの上に混乱している民兵では勝負にならない。敵は逃げ惑い、命乞いをする者までいた。

しかしそんな中でもちゃんとしている部隊もあるようで、なかな

かシャルロワ軍は撃破できなかった。守りの堅い方円の陣で近衛隊の攻撃を凌ぐ部隊、近衛隊と同じ偃月（えんげつ）の陣でぶつかってくる部隊、消耗戦に強い魚燐の陣で近衛隊の勢いを削ごうとする部隊。いずれも手強い敵であるのは確かだった。

しかし、カタパルト王国最強の名は伊達ではない。いくら敵が執念を見せようとも、いくら敵の人数が多くとも、近衛隊は苦戦しつつ撃破した。

ふと、遠くにブルゴー軍の旗が見えた。挟撃は成功したようで、敵は勢いを失っている。恐らくシャルロワも逃げ回っているだろう。ブルゴー軍も近衛隊ももう敵軍の掃討という段階に入っていた。

しかし、後方から一万の新手がやってくる。恐らく偽本陣を襲撃していた部隊だろう。偽本陣を破るのにかなり苦労したようだが、それでも一万は大軍だ。それにジル軍と比べれば疲労は少ない。

このままぶつかれば、負ける。ジルは確信した。いくら勝ちに乗って士気が上がっているとはいえ、新手一万と戦う程の体力は残っていないのだ。その上シャルロワ軍の中でもしぶとい部隊はまだ抗戦を続けている。

ただ、シャルロワ軍本陣の崩壊に彼らは腰が引けている。目を付けるとしたら、そこだろう。ジルは大きく深呼吸をし、そして新手の軍勢にも聞こえるように大声を出した。

「儂は賊将シャルロワを撃破した！貴様ら賊軍の敗北だ。ただちに武器を置いて投降しろォ！」

そして黒い笑みを浮かべながら付け加えた。これでも尚逆らう者は一族郎党皆殺しだ、と。新手の軍勢はジルの言葉に恐怖し、上官

の許可が出たらすぐにでも投稿したいという心理状況になっているだろう。

行進が止まった。敵の混乱は頂点に達したようだ。ではどうするか。……とりあえず、ブルゴー騎士団長と合流することにした。

「陛下、ご無事で」

汗でびしょびしょの顔でジルを心配してくれた。気持ちはくみ取るが、今はそんなことより大事なことがある。

「新手が一万。偽本陣は破られたようだ。どうするべきだと思う？」

ブルゴーの顔がすっと厳しくなる。考えているのだろう。時間の猶予はあまりないので、良い案が無いのならと、ジルは去ろうとした。しかしブルゴーが引き留める。何か良い案が浮かんだのだろうか。

「降伏の勧告を一回……いや三回致しましょう。それで従わなかったら、戦います」

ブルゴーが一回を三回と訂正した訳をジルも理解した。時間稼ぎだ。早速、一人目を新手との交渉で送り出した。

その間にも、シャルロワ軍は次々と撃破されていく。そして、シャルロワ逃走の報せが入った。もしも新手の方に移動されたら面倒だったが、もうその心配は要らないようだ。

ジルは、新手の方を向いた。今も一人目が交渉している。

（そろそろシャルロワ軍が全員撃破できそうだし、二人目以降は送らなくてもいいかな。……いや、新手に対する戦闘態勢を整えるにも時間が掛かりそうだし、一応送る準備はしておこっか）

しかし、一人目の使者は五体満足で帰ってきた。降伏勧告を却下する場合は、使者を殺すか鼻や耳を削ぎ落すことが多い。敵将がそんなに人格者だとは思えないジルは、降伏勧告の成功を予感した。しかし、使者の言葉は意外なものだった。

「ニャクルツッペリ伯爵は、直ちに武装解除する。そう伝えてくれ。と、そう仰いました。しかしその顔は嘘くさく、恐らく逃げる為の時間稼ぎかと思われ」

ブルゴーが頭を叩き、陛下に聞かれても居ないのに私見を言うなと説教する。しかし彼にそんなに構っても居られないので、すぐ追い出した。だがジルはそんな遣り取りを目にもくれない。少し考える素振りをした後、ブルゴーに告げた。

「シャルロワ軍の追撃は千人に留めておけ。それに、深追いも禁止してすぐ戻ってこさせろ。もしも降伏するならあんな大人数を連れるのに人数が要るし、逃げるのならとりあえずあいつらにも一打撃与えたい」

ブルゴーは了解の意を示し、配下に通達した。

ジル軍が掃討を終え、三千弱の軍勢をニャクルツッペリ伯爵勢の方に臨戦態勢を取らせていると、千人程が近付いてきた。一見武器を持っていないように見えるが、それはまやかしだろう。その目は、降伏すると言うには敵意が強すぎる。

あと百メートルでジル軍となった時に、千人の決死隊は武器を隠していた場所から取り出し雄叫びを挙げて攻めてきた。ニャクルツッペリ伯爵勢本隊も動く。こちらは決死隊を盾にして逃げるようだ。

「追え？」

一言。ジルの一言で三千もの軍勢が動いた。一斉にニャクルツッペリ伯爵勢を追い討ちしようと戦闘で疲れ切った体を動かす。一千人の決死隊が立ちはだかるが、ブルゴー騎士団長の指示で第二小隊が決死隊を強襲。士気の低い決死隊を押し込み、ニャクルツッペリ伯爵勢への道を開けた。

その間を抜けて二千千五百程の軍勢が疾走する。ニャクルツッペリ伯爵勢に打撃を与える為に、駆けに駆けた。

ニャクルツッペリ伯爵勢を追う途上、少しずつ兵力が増えていった。ニャクルツッペリ伯爵勢に撃破された偽本陣に居た兵士たちだ。十人、二十人と戻ってくる。

遂にニャクルツッペリ伯爵勢に追いついた。確かに大軍だが、士気が低い。追い討ちをかけるジル軍に背を向けて逃げ惑う兵士が殆どだった。ニャクルツッペリ伯爵がそのいい例だ。

（それにしても、ニャクルツッペリ伯爵が腰ぬけで助かったなぁ。あそこで逃げずに戦いを挑まれていたら厳しかった。虚勢を張って相手を怯ませるのが有効だったかな）

「よう、ジ……国王陛下」

ジルの目の前には亮が居た。体中血塗れで、どうやら怪我もして

いる様子だ。戦争中は足手まといになるのでブルゴー騎士団長に預けていたのだが、結局乱戦になって戦闘してしまったらしい。

「大丈夫？怪我しているようだけど」

亮は舌打ちし、答えた。

「まあ、ちょっとね」

重傷ではないようなので、ジルはこれ以上の言及を避けた。すると、ブルゴー騎士団長が現れた。返り血を浴びており、この追い討ちにさっきまで参加していたことが容易に窺える。彼が口を開く前に、ジルの側から話しかけた。

「追撃をいつ止めるか、でしょ。そろそろ止めるように言っておいて」

兵力の損耗が激しい。隣で亮も頷いているし、これは賛成の様だ。ブルゴー騎士団長もはっと一言了解し、伝令にそのことを伝えた。もうこの戦いは終わりだ。長かった。時間にすればあっという間だったが、ジルにとっては長く感じた。胸の中には高揚と共に不安もあったからだろう。呪縛から解き放たれたような気分だ。

（勝った。完膚なきまでに叩きのめした。僕の、勝ちだ）

まだまだ不安要素は多い。兵士の損耗もそうだし、北では同盟国フリーダ皇国がマクシム新国王に味方するという名目でカタパルト王国領を侵している。また、東からは豪族カール一族がカタパルト王国に攻め入り、それを防ごうとしたジュネ将軍も苦戦しているという噂だ。また、財政難という問題もある。このまま戦争を続ける

と、カタパルト王国内部の敵勢を全て鎮圧する前に金が無くなるという試算である。

でも、それでも、ジルは笑みを浮かべていた。何があったにせよ、ジル達は勝ったのだ。

「テンション上がってきたー」

亮が呟く。テンション、という言葉の意味は知らないが、恐らくジルと同じ気持ちになっているのだろう。茫然としている。

「僕達、勝ったんだね」

「テンション上がってきたー」

亮は同じ言葉を繰り返すのみ。頭が壊れていなければいいけれど、とジルは一瞬心配したがすぐにその考えを頭から振り払った。亮にとって初めての戦争なのだ。終わった後妙な虚脱感に襲われるのも無理はない。

何にせよ、ジル達は勝利した。

第2章第15話　終局

シャルロワ軍別働隊退却。

シャルロワ軍本隊を打ち破ったジル軍だったが、もしかしたら別働隊一万が進軍速度を緩めずに王都へ進軍するかもしれないので、速やかに王都の方向に戻った。しかしそれは杞憂だった。シャルロワ軍二万人が僅か四分の一しか居ないジル軍に敗走した、という報せを聞いて別働隊の長が退却を決心したそうだ。

連戦にならなくて一安心だ。激戦で兵士たちは相当疲れているだろう。もしも別働隊と交戦したら大敗したかもしれない、というか多分負けていただろう。俺は、安堵のため息をついた。

「なあジル、兵士はみんな疲れているの？」

試しにそう聞いてみると、ジルはかぶりを振った。

「いや、激戦の疲れよりも勝利の喜びが勝っているみたいでさ。凱旋を楽しみにしているよ」

凱旋か。俺はジルの言葉を聞いて、ふと想像してみた。パッパラパーというラッパの音と、それに合わせて王都で行進するジル軍。天皇よろしくにこやかに国民に手を振っている馬上の国王ジル。

確かに、命がけで国を守った彼らにしてみればテンションが上がるだろう。

ちなみに、ここはジル軍の陣営。俺とジルと護衛のリッツしか居

ないのでタメ口である。場所は、……何だっけ。忘れたけど、あと二日で王都に到着するらしい。

「まあ、凱旋と言っても所詮内乱の鎮圧を収めただけなんだけどね。しかもまだ内乱は終わっていないし」

いや、むしろ始まったばかりだろうとジルの言葉に俺は心の中で付け加えた。反乱軍は、一度打ち破ったとはいえまだ降伏も全滅もしていない。東からはカール一族が攻め寄せてきているし、北からは大国フリーダ皇国の攻勢が厳しい。南のマグナ族も相変わらず反王国一色だ。

もちろん、この戦いで戦況は一気に楽になった。一度シャルロワ軍を打ち破ったので、反乱軍からジル側になびく貴族は多いだろうと予測されるのだ。しかしシャルロワ等反乱軍の首魁はフリーダ皇国と深いつながりがあるだろうし、そう簡単にはなびかない。少しでも内憂を抱えている状況で北東南三方の外敵と争うのは厳しい。つまり、プラス１０マイナス１１０で合計マイナス１００といった感じだ。

前途多難である。

閉話休題。今回の戦いの顛末（てんまつ）を纏めておこう。

シャルロワ軍をなんとか撃破した俺達だったが、まずシャルロワ軍の別働隊が退却したのは前述のとおりだ。また、タケチュリア山道入口付近の五千人も同じく退却した。味方のジル軍千人は、無傷。恐らく今後時間の経たないうちにまた戦争するだろうが、彼ら千人が要となってくるだろう。

さて、シャルロワ軍別働隊に相対した千人のジル軍だったが、彼らも奮戦したようだ。破竹の勢いで千人のジル軍を粉砕しようと攻めてきた相手に対して、魔法で守ったらしい。とにかく専守防衛。柵を作って、その中から攻めてくる敵に対して中長距離魔法を放ちまくった。なんとか柵の地点を突破した敵兵も槍や刀や近距離魔法で一人残らず殺された。もちろんこれは俺の指示。

こうしてなんとか一日目を凌ぎ切ったジル軍。その日の夜には奇襲を繰り返して敵兵に精神的肉体的疲労を積ませた。二日目には敵の攻勢も大分落ち、午後には魔力が底を尽きかけたらしいがなんとか守りきった。そしてその日の夜。奇襲をしようとしたら、シャルロワ軍は逃げ去っていたらしくもぬけの殻だった。

こんな事情で別働隊と堂々やりあったので、この千人もかなり疲れている。

「陛下」

陣営に、諜報員が入って来た。何か報告することがあるらしい。毎度の如く悲壮な顔だ。

「フリーダ皇国軍がクリム城を落としました。ベル伯爵は自刃したようです」

フリーダ皇国は四万という圧倒的な兵力で、ベル伯爵とやらが立て篭もったクリム城を力攻めしたらしい。あいにく、楠正成（南北朝時代に活躍した武将。後醍醐天皇について二十万もの幕府軍に対して僅か五百の兵で渡り合った）のような人は居なかったのか。

「であるか。下がって良い」

ジルの顔はそこまで陰りを見せていない。想定内だったのだろう。

「陛下」

今度は別の諜報員が入って来た。

「東方のカール一族一万人の侵攻に三千の兵力で相対しようとしたジュネ将軍でしたが、後方から八千の賊軍に襲撃され敗走。なんとか立て直したようですが、一万八千となった東方の敵軍はますます勢いを増しているとのこと。援軍を要請してきています」

おいおい。これから俺達は四万もいるフリーダ皇国軍と戦わなければならないんだぞ。援軍とか無理無理。カール一族と戦っている間にフリーダ皇国がカタパルト王国を荒らしちゃうよ。

ジルの顔も幾分か余裕を失っている。折角五倍ものシャルロワ軍に勝利したのに、こんな奇跡を何度も続けないといけないなんて、とでも思っているのだろうか。

「……、であるか。下がって良い」

どーしましょ。どーしましょ。このままじゃカタパルト王国が滅亡しちゃう。内心はこんなもんだろう。

俺としても、もしもカタパルト王国が滅亡したら、唯一の召喚術を行使できる人間の居るセリウス王国に接触する手段がなくなるからな。あまり他人事ではない。戦争がリアルだってことは実感したけど相変わらず俺の思考回路はゲーム感覚だから、気を引き締める必要があるだろう。

さて、と。なんか起死回生の案でも無いかなぁ。

まず北のフリーダ皇国軍に付いて考えてみよう。彼らは四万という大軍を率いてカタパルト王国に侵攻してきた。わざわざ標高の高い山まで越えて大軍を率いてきたのだから、グラビット鉱山だけが狙いではないだろう。クリム城を落とし、既にグラビット鉱山の地域は制圧しているだろうから、次の狙いは何かと考えてみる。

「ふ～む」

地図をよく見る。……お？

俺が着目したのは、グラビット鉱山を背にしているクリム城の立地だった。クリム城がカタパルト王国側に属しているなら問題はない。しかし、フリーダ皇国側に属していると仮定すれば、孤立しているのだ。フリーダ皇国に面している北側は殆ど山に遮られており、咄嗟に援軍を送りにくい。平地を通るのと山を通るのではかかる時間が違うのだ。もしもカタパルト王国が全軍を以て攻めれば、援軍が山を越えてクリム城に到着する前にクリム城はカタパルト王国の手に落ちてしまうだろう。

ならば、クリム城から南方の一帯を制圧するだろうな。そこら辺を全部フリーダ皇国のものにすれば、援軍が山越えするまで耐えることができる程度の戦力を徴兵・保持できる。

「ジル、どっちから片付けるつもりなんだ？」

どっち、というのはフリーダ皇国軍とカール一族&反乱軍の二つだ。ジルは、不機嫌そうに返した。

「決まっている訳ない。馬鹿なことを言わないで」

そりゃそうだわな。すまん、と謝り再び思考する。

どちらを先に潰すか。

勝利前提なのは仕様だ。てゆうか、どちらと先に戦うにしても、負けたら終わりなのである。とりあえずフリーダ皇国カール一族が撤退するまでは、連勝しなければならない。

さて、どちらと先に戦うかだが。まず、フリーダ皇国軍と戦った場合を考えよう。超超頑張って勝ったとして、一万八千ものカール軍（カタパルト王国反乱貴族含む）を三千人しか擁していないジュネ将軍が足止めできるか。できないね。ジュネ将軍が無能って訳ではないけど、六倍の敵に勝つなんて奇襲が成功しない限り無理でしょ。

しかもフリーダ皇国軍は一度破られたところで、クリム城で態勢を立て直すことができるのだ。俺達は城攻めなんかしているとカール軍に王都を落とされるので、一旦王都に戻るしかない。そこでカール軍と戦い撃退する。しかしその間にフリーダ皇国軍は態勢を立て直し終わり、再び戦わなければならないだろう。

ここで問題となるのは南に敗走したシャルロワ軍だ。彼らも俺達が何度も戦争している間に態勢を立て直し、北上してくるに間違いない。前門に虎、後門に狼ってのを具現化することになる。ここからさらに二連勝しなければならない。きついね。

ということで、フリーダ皇国軍を先に倒すととんでもないことに

なりますね～。という結論に達した。

「じゃあカール軍が先か？」

俺は誰にも聞こえない位小さな声で呟いた。横目でジルを見るとジルもまた何かを考えているようだった。あまり話しかけて欲しくなさそうな顔をしているので絡むのは控えておく。

思考を継続しよう。

カール軍を先に倒したらどうなるか？　どうやって撃退するかは置いといて。

あれ？こっちの方がもっと駄目じゃね？カール軍なんか相手にしているうちに、フリーダ皇国軍が北方を全て制圧しちゃうじゃないか。南からはシャルロワ軍が再起するだろうし。

結論。またの名はQ．E．D。

まともにあんな奴ら相手にしていたら駄目だね。北東南どれか一つを相手にしていると残りの二つがのさばる。

じゃあ他にはどんな作戦があるだろう。たとえば、三つの内どれか一つと和睦するとか。お？これはいいかもしれない。

北のフリーダ皇国軍。駄目だ。講和する条件で北の大地を丸ごと奪われてしまうだろう。

東のカール一族はどうだろうか。また、東や南の反乱貴族。……和睦は無理だ。てゆうか、よく考えてみればわざわざ攻め入ってい

る時点で和睦とかしてくれないだろ。

全然よくなかったな。

でも、今の思考で一ついいことを思いついた。

反乱貴族の懐柔。反乱に参加した貴族は、恐らくシャルロワの様な積極派と積極派に誘われて参加した消極派に分かれる。フリーダ皇国と直接つながっているだろう積極派はともかく、消極派ならカタパルト王国側に内応（裏切り）してくれるかもしれない。俺達は先の戦いで勝利したのだ。勢いはこちらにある。

いわゆる、離間の計ってやつだな。これは使える。功を奏せば、戦っている時相手の足並みが乱れたり反乱貴族の一部がこちらに寝返ってくれるかもしれないし。

さて、起死回生の策を考えなきゃ。戦争で勝つ手段も大事だけど、とりあえず頭を整理しよう。

三方から押し寄せる敵軍。俺達はこれを撃退しなければならない。各個撃破を繰り返し、五回位勝てば敵は全て撃退できるかな。もちろん奇跡が五回も続くはずもなく。なるべく戦わずに済めば嬉しいんだけど。

「……、思考、思考、思k――――ッ」

遠交近攻という文字がふと頭に浮かぶ。これだ、と亮は目を輝かせた。

そもそも、遠交近攻とは、外交姿勢のあるべき一つの姿だ。遠く

の国と親交を結び、近くの国を攻める。遠くの国とは戦争できないし、近くの国と仲良くばかりしているといつまで経っても領土を広げられない。領土拡張政策を取っていたのなら当たり前とも思えることである。

さて、今は逆に攻められている訳だが。俺が思いついたこと。それは、「フリーダ皇国周辺の小国やカール一族領周辺の豪族とよしみを通じて（仲良くして）、フリーダ皇国やカール一族領を攻めさせればよくね？嫌でもカタパルト王国に進めている兵力を本国に戻さなきゃいけなくなる」という考えだ。

そんなにうまくいくはずもないだろうが、全力を尽くすのはいいことだ。もしかしたら、敵が本当に退却してくれるかもしれない。

他に何か良いアイディア無いかなぁ。要は、戦争せずに敵が退却すればいいんだろ？う～ん。

「駄目だ、もう頭が働かない」

大体、人生初の戦争が終わって疲れているんだ。もう寝よ。

そう思いジルの方を見てみると、未だに難しい顔をしていた。何を考えているのだろう。まあ、ジルは国王だけど俺も国賓みたいなもんだし、気兼ねする必要ないでしょ。

俺は、座りながら目を閉じた。すると、睡魔がいきなり襲ってきて、意識は一分も保てずに落ちた。

第2章第15話　終局（後書き）

第一部終了。これで一区切りです。

激闘の末に勝利しました、ジル軍。しかし忘れてはいけません。北からは大国フリーダ皇国が、東からは豪族カール一族が攻めてきているのです。まさしく前途多難。そして亮も次章からは様々な壁にぶち当たることとなるでしょう。

ここまで読んでくださって、ありがとうございました！　執筆の糧となりますので感想をお送りしてくれると幸いです。

では、これからも拙作をお願いします。

～用語集&地図～（前書き）

ネタバレはありません。

また、用語を纏めただけなので、見るのが面倒な方は見なくても支障をきたすことはないのでご安心ください。

～用語集&地図～

≪カタパルト王国≫虹蛇の御旗

今作の舞台。ヨーロッパにおけるポルトガルのような立ち位置。西と南を海に囲まれいる。人口は九百万人と多いが、中原の諸国に比べると少ない。

中原のほとんどの国と同じように封建制である。貴族の力はなかなか強い。しかし、貴族たちは三派に分かれて対立している上、国王直属軍はかなり精強なので、うまく立ち回れば国王専制も可能である。

東に国境を面するイピロス紛争地帯は豪族が割拠していて纏まっておらず、北に国境を面するフリーダ皇国とは同盟を結んでおり、周りに大きな敵が居ない為他国と比べるとかなり平和な方である。

第二十四代国王エドガー七世はマグナ族との同化政策によって南へと勢力圏を拡大しようとしたが、反乱をおこされた。

≪フリーダ皇国≫赤十字の御旗

カタパルト王国の北に位置する国。西は海、南はカタパルト王国、東はラクル連邦、北はセリウス王国に囲まれている。中原の一国で、人口は一千二百万人と平均値。

カタパルト王国との国境にあるグラビット鉱山の権益が欲しいらしく、外交面でカタパルト王国に圧力をかけている。

≪セリウス王国≫白錦の御旗

フリーダ皇国の北に位置する国。中原の一国で、人口は七百万人と少なめ。

国体は召喚王制というかなり特殊な物を取っている。初代国王は、ジャンヌ・ダルク。建国当初は数ある小国の一つに過ぎなかったが、八代国王山田花子が主導してアリア大陸に覇を唱えたことによって大国の仲間入りをする。現在は第十七代国王エーベルトが国を治めている。

この国に代々使える巫女のエーベル一族は「人」を召還できる技術を保有している。このような魔法を継承魔法という。

≪ミクセム王国≫

フリーダ皇国周辺にある小国の一つ。フリーダ皇国と敵対しおり、ジュゲムという外交官が反フリーダ外交をけん引している。

≪イピロス東方紛争地帯≫

カタパルト王国の東に存在する地域。昔の中国や日本の戦国時代みたいに、軍閥みたいなもの（豪族と言われている）が群雄割拠している。かつてはイピロス王朝によって統一されていたが、それが崩壊してからは毎日のように戦争が起こっている。

≪アリア大陸≫

上記の国や地域とその他色々（クレムリン帝国、ラクル連邦等々）によって構成される大陸。ぶっちゃけ、今作ではカタパルト王国周辺でしか人が動かないと思うので、気にしなくておk。色々と裏設定があるけど、物語の本筋とは関係が無いので省略した。

ちなみに、今作の時間軸は１６００年。キリがいいのは仕様です。

≪保守派≫

カタパルト王国内貴族の派閥の一つ。指導者であるシャルロワ大公が国王と懇意なこともあって、国内では最大勢力である。十一人居るうちの五人の閣僚が属している。

封建制にのっとった保守的な政治を主張している。シャルロワ大公の母親が商人の娘なこともあって、重商主義的な政治を推し進めている。

また、フリーダ皇国やイピロス紛争地帯の豪族との交易で儲けている貴族達が中心となっている為、平和外交を信条としている。

≪過激派≫

同上。内務大臣のレーデ公爵と歩兵軍団長（第三将軍）ジュネ大公が中心となっており、国内では保守派につぐ勢力をほこっている。三人の閣僚が属している。

軍需商人や王国軍部（王家の直属軍）とつながっていることもあって、戦争を好む軍人貴族が多い。軍国主義（軍が国家の中で強い権力を持つべきだというもの）をとっているが、貴族からなる地方分権派と軍人からなる中央集権派に分かれている。

レーデ公爵のカリスマによって纏められているが、横のつながりは弱い。

≪革新派≫

同上。騎士団長（第一将軍）ブルゴー男爵と魔術師団長（第二将軍）ラウナ侯爵が中心となっており、国内では保守派過激派と並んで三大派閥と言われている。閣僚はこの二人しか属していない。

軍人や官僚、特に若年層に強く支持されている。中心人物であるブルゴー男爵の武勇とラウナ侯爵の政治力が群を抜いていることもあって、閣内での人数の少なさにも関わらず、強い影響力を持っている。

親フリーダ皇国的な要素を持つ外交政策を主張。彼らの悲願はイピロス紛争地帯の併呑である。

≪王国四族≫

カタパルト王国における四つの大公家の総称。領有貴族であるシュマン一族、カロン一族と法衣貴族であるジュネ一族とシャルロワ一族。かつては王国の政治を牛耳っていたが、最近はユルバン・シャルロワや過激派の台頭によりそれも崩れてきている。

ちなみに、シャルロワ一族の旗は下がり藤である。

≪グラビット鉱山≫

カタパルト王国とフリーダ皇国の国境にある山。国家予算の五分の一の収益が見込める資源が見つかり、利益の配分を巡って両国間の関係は悪化した。ここら辺、尖閣に似てる。

≪ボストール海≫

カタパルト王国の西部の海。そこからは様々な魚介類が採れる。鮪（マグロ）やラニャルジ等の魚である。中原でよく売れる。カタパルト王国

国家予算の十分の一弱はここから出ている。というより、これ以外に主要な産業が無い。

≪クリスパンテリル砦・ベゼブルキー砦≫

カタパルト王国南部の砦。マグナ族反乱鎮圧においての最前線だったが、あえなく突破された。かつてはマグナ族が住んでいた場所である。

≪パセリ高原≫

カタパルト王国南部中央よりの高地。

≪タケチュリア山道≫

東西を山脈に囲まれた盆地。南北に長いので、山道と言われている。

≪ビスケット城≫

カタパルト王国南部の城。王城、クリム城に次ぐ堅牢な城である。

≪位置関係≫

北←タケチュリア山道―パセリ高原―ビスケット城―――クリスパンテリル砦・ベゼブルキー砦→南

≪地形図≫

＞ｉ２６３７４―３４２９＜

≪魔術・魔法≫

いわゆるーな感じのファンタジー要素。この作品はバトルものではないので、あまり登場しない。戦争シーンで魔術の描写が少ないのは、乱戦だと味方にも損害を与えるかもしれない魔術は使われないからである。杖は必要ないが、大規模な魔法の場合は魔法陣が必須。

≪退魔剣≫

百年ほど昔の鍛冶屋、レーヴァテ・インストラのつくった魔法を無力化する剣。通称レーヴァテイン。とある神話を基にした異名である。アリア大陸に二百程しか現存しない、かなり希少なものである。魔法に対して魔法以外で対抗する唯一の手段なので、かなり高値で売買される。

作り方はあまり知られていないが、模造品だけなら千近く出回っている。

≪召喚・召還魔法≫

召還魔法とは、人を召還する魔法である。
召喚魔法とは、獣を召喚する魔法である。

召還魔法に使われる魔力はとてつもなく大きい。
たとえば、セリウス王国の国王召還の場合。大魔導師一千人分の魔力を集束し、その魔力を使って召還術『神よ王者を召還せよ（キ

ルシュガイスト）』を発動すると異世界から人間を召喚できるらしい。

しかし、そんな量の魔力を溜めることは常人には不可能なので魔力を溜める魔導石で溜める。そして魔導石に溜められた魔力を使って召喚術を行使するのだという。

また、召還魔法は創造魔法、時限魔法、消滅魔法と並んで難しい次元魔法の一つである。（ちなみにこの四種の魔法は伝説の四幻魔法といわれている。後ろに魔法と付いているが代わりに属性と付けても支障は無い）

そのため、召還魔法の使い手はセリウス王国の神官のエーベル一族の直系のみなのだ。

そして、召還された人間は大きな魔力を有しているという共通項もある。特にジャンヌ・ダルクは一人で千人を相手取ることができる程魔力が莫大だった。

召還された後帰還した人は四人いる。その内一人は再び召還され、余生をこの世界で過ごした。奇特な男である。帰還方法は伝わっていない。

ぶっちゃけ、召還魔法について詳細を知っているのはエーベル一族のみだ。

召喚魔法は、召還魔法とは違って難易度は低い、召還魔法の亜種である。

召還魔法と同じく、基本的に魔力を有している魔獣しか召喚されないらしい。召喚された魔獣は召喚獣と言われ、魔術師に従うようになる。　魔力はかなり使うが、召還魔法の比ではない。とはいえ、召喚を行うのにはセンスが必要なので、魔術師なら誰でもできるという訳ではない。

～人物紹介～（前書き）

第一部のネタバレを含みます。

～人物紹介～

吉田亮（１５）

異世界に召喚された少年。高校の入学式に行く途上召喚された。謀略を張り巡らすのが得意。魔力は殆ど無くて、光系統。容姿は平凡……とは言い難く、狐のようなずるがしこい目をしている。肉体は普通で、背も普通。普段は明るいがずる賢い。ちなみに剣道一級。小学生のころやっていた。

ジル・カタパルト（２３）

亮を召喚した青年。カタパルト王国の第二王子。金髪の美形で、長身である。若干優柔不断なところがあるが、頭の出来は良い。かねてより諜報局と親交を深めていた辺り、情報を重視しているところがある。魔法は炎の下級で、王族にしては低い方。妹や弟達を大事にしているように、身内に対しては情が深い。

マクシム・カタパルト（２０）

ジルの従兄弟で、高等な魔術師かつ魔術理論学士。僅か十二歳の時にかの高名な魔術師・魔術理論学専門家のキュトラ伯をも唸らせる論文を書き、話題を呼んだ。現在は領内でキュトラ伯と共に魔術理論の研究を重ねているらしい。

ビスケット紛争ではシャルロワの大義名分を充足する為の傀儡となった。詳細は不明。

ユルバン・シャルロワ（４９）

カタパルト王国の宰相。商会と繋がっている。母親は商人の娘で妾腹だったが、その能力を父親に認められてシャルロワ家を継いだ。保守派の筆頭。権力闘争に勝って宰相になっただけあり、政治力はかなり高い。内乱では反乱軍の首魁となった。顔は、いわゆる中年オヤジみたいな感じ。反乱を起こした動機は不明。

ギルバート・ニッケル（６３）

謎の爺。吉田亮にかなり敬意を払われており、ジルからも厚い信頼を受けている。王太子の秘書となっただけあって能力は高く、全般的に深い知識を持っている。

リディー（２１）

優秀な官僚。あまりに仕事ができるのでジルの第二秘書になったが、元は下級貴族の出身。かなりの美人で、大人っぽい。髪の色は緑である。ジルへは敬意を払っている様子だが、吉田亮とは仲が悪い。

ドニ・ブルゴー（３３）

騎士団団長であり、戦闘は最強。一騎当千。浅黒い肌に黒髪といった容姿。槍術が得意だが、大剣も使える。レーヴァテインを所有しているが、これは先代国王エドガーに下賜されたものである。元々領土も持たない零細貴族の生まれだったが、数々の戦功により三十一歳で騎士団長に昇格。

吉田亮を敵視しているフシがある。

エドガー・カタパルト（４５）

第二十四代国王。亮召喚の一ヶ月後病死。マクシムの暗殺だという説もある。重商主義であり、外祖父の出が元商人であるシャルロワを重用していた。国王に即位したのは３２歳の時。以来殆ど戦争を行わず、南方への勢力拡大を図って来た。とはいえ、温い平和主義者という訳でもなく実際エドガーの御世でも数回戦争を遂行した。

モーリッツ・バイダー（２１）

ジルの護衛騎士の一人。父親は有力貴族だが、そりが合わず家出。王国の騎士団に入る。剣の腕は騎士団でもトップクラスだったが、人を率いるのに向いていなかったのか、王太子の護衛を志願した。ジルには深い忠誠を誓っている。また、美形なうえに性格がいいので、魔術師団の少女達に絶大な人気を誇っている。亮のこの世界初の友人。

ローラン・ジュネ（４５）

カタパルト王国の歩兵軍団長であり、第三将軍。父親は、カタパルト王国に降伏したイピロス紛争地帯の豪族。かなりの戦上手で、軍部では二番目に人気のブルゴーを圧倒する程の支持を得ている。過激派の中心人物である。

マリオン・レーデ（３９）

過激派の中心人物。保守派の内乱ではジルに味方する。軍需商人と繋がっている。明治時代の桂太郎とか寺内正武と似てる。親分肌なので貴族たちを纏めているが、爵位の格ではシャルロワに敵わない。北の同盟国フリーダ皇国に攻め込むべきだと主張している。曰く、今こそ疲弊している中原に攻め込むべきだとか。

エレナ・シュマン（２２）

カタパルト王国革新派の武官。騎士団第四部隊隊長である。ブルゴーに師事しており、彼を崇拝している。大剣使いで、その細い腕からは考えられない程の力を出す。カタパルト王国では十指に入る実力者。四大貴族の一つシュマン一族の棟梁の娘。魔術は身体強化のみ。

レイナー・ピクルス（３７）

カタパルト王国内の大商人。鉱山からとれる魔導石や鉄鉱石等の売買を主に取り扱っている。端役。

アロンソ・バトン（３６）

カタパルト王国外務大臣。十一人居る閣僚で唯一派閥に属していない。

今の所端役。永遠に端役のままかもしれない。よくてモブキャラになる程度だろう。

～これまでのあらすじ～

異世界の王子に誤召喚された高校生吉田亮。王子の秘書として働き始めて暫く経ったある日、亮の暮らすカタパルト王国で反乱が勃発した。南方の異民族マグナ族である。

そして、事態は急変する。討伐軍総大将エドガー国王の死。その後討伐軍を掌握したシャルロワ大公の裏切り。呼応した第二王位継承者マクシムの新生カタパルト王国設立。カタパルト王国は窮地に陥った。

眼前には、進軍途中で軍をとって返して反乱を起こしたおよそ三万のシャルロワ大公軍。僅か八千しかいない王都のカタパルト王国軍は、四倍もの敵に立ち向かうこととなった。

亮は敵兵力を二分する策を立てて、兵力差を削ることに成功する。戦場に立ったのはカタパルト王国軍五千と、シャルロワ大公軍二万。激戦が始まった。

本陣を囮にし、一万の軍勢をたった一千で引きつける。残り一万を横から三千五百の軍勢でブルゴー騎士団長が斬り込む。そして、ブルゴー軍の反対側から迂回した近衛隊五百がシャルロワ大公軍の本陣を奇襲した。

激戦の末、シャルロワ大公軍本陣は壊滅。寄せ手を担っていた一万もまた敗走し、分断された別働隊一万も撤退を決断した。

こうして、カタパルト王国は辛うじて第一の危機を乗り越えることとなった。

第3章第1話　ジル・カタパルトの凱旋

「キャーーッ」

十代の少女から五十代のおばさんまで、幅広い世代の黄色い声。もちろんその注目を浴びているのは俺ではない。ザ・美形でありかつ戦争にも勝利したジル国王陛下様にである。ヨン様のファンかよ。羨ましいな。ケッ。

そしてその声援にジルは一々手を振って笑顔で答えている。ここだけ見ると天皇みたいだ。

総括して、天皇＋ヨン様＝ジル国王陛下ってことかと思われ。

周りに騎士たちを従え、優雅に馬に乗るジル。隣に居るのはこれまたハーレムの持ち主リッツだ。俺は、後ろの方で目立たない様に歩いている。馬に乗れないという悲しさを踏みしめて。

「おおーーッ」

今度は、主に十代二十代の若者達の黄色い（？）声。憧れの眼差しは、ブルゴー騎士団長や後ろに並ぶ小隊長達に降り注がれる。一部シュマン第二小隊隊長（女性でふ）に対するモノは別として、彼らにしてみれば国を守った騎士様かっけぇ、といった感じなんだろう。ブルゴー騎士団長とか特に。二十代ながら渋い容貌をしていて、歴戦の猛者のオーラをビンビンに放っている。もしもこのオーラを向けられれば、普通の人なら足がすくんでしまう。それくらい凄い。

カタパルト王国の首都の大通りを凱旋している俺達だが、そろそ

ろ王城が見えてきた。部活の合宿の帰り道にやっと家を見つけたような、妙な安息感が兵士たちを包んだ。俺もだ。
まあどうせすぐ戦いにいくから、せいぜい一週間位のつかの間の休息。でもやっぱり嬉しい。

王門をくぐり、凱旋が終了した。王城の中に一般人は原則立ち入り禁止なのである。しかし、まだ解散ではない。さっきは王城を家に例えるような表現をしたが、間違っていたようだ。広場に兵士をみな集めて、ジルが演説を始めた。遠足が終わった後学校に一旦集合し校長先生の言葉を聞く、そんな感じの雰囲気で、みんな早く終わってよという空気を醸し出している。

「皆の者、御苦労だった」

ジルがまず、労いの言葉をかける。だが炎天下の中、ジルの言葉なんか聞く奴が居る訳……みんなビシッと背筋を伸ばして聞いていた。

「今回の勝利は、カタパルト王国を愛する皆が頑張った結果だ。君達一人一人の実力と想いの強さが勝利を呼び起こした。逆賊シャルロワは我々の五倍もの兵力を持っていたのにもかかわらず、我々が勝利したのだ。快勝、と言っても良いだろう」

兵士たちは皆誇らしげな顔をした。国王に褒められたのだ、嬉しくて当然。そしてひたすら勝利したことを強調するジル。

「であるが」

と一言言って一旦区切った。

「まだ敵は多い。北からは同盟を結んでいるのにも拘らず突如攻めてきたフリーダ皇国。東からは有力豪族カール一族を引きこんだマクシム軍。西も、近頃海賊の動きが活発化しているという。そして南には大敗したとはいえ命からがら逃げ延びたシャルロワが残っている」

ここで一気にカタパルト王国の厳しい情勢を独白するジル。このままネガティヴなことばっかり言っていたら士気下がるぞ？

「マクシムも海賊もカール一族も、この勝利を受けて怯むだろう。大した敵ではない。諸君らの健闘と王国側貴族の力を以てすれば、楽勝だ。問題なのはフリーダ皇国。大軍を擁し、用意周到にして攻めてきた。撃退するのは、簡単なことではなかろう」

「しかしッ」

二度目の逆接を使い、悪鬼の如き形相をするジル。その目には憎しみを宿らせ、言い募った。

「彼奴らは同盟破棄すら発表せずにいきなり攻めてくる屑どもだ。なんとしてでも勝利しなければならない。カタパルト王国を守り、父上……エドガー二十四代国王の御世のような、平和な国とするのだ。

戦いは苦しいかもしれない。厳しいかもしれない。それでも、敗北は許されない。平和を守るのだ。これは聖戦ぞッ」

いつの間にか、みんなのジルを見る目に熱が入っていた。確かに、殆ど戦争をしなかったという平和を乱したのはフリーダ皇国だ。俺も、エドガー前国王の死やシャルロワの反乱、カール一族の侵攻もフリーダ皇国の謀略なのではと疑っている。聖戦というのは言いす

ぎかもしれないけどね。

ふと、ジルの顔が普通になった。正気を取り戻した、というか冷静になったようだ。さっきまでの演説はあまりにも感情的だったからな。だからこそ、兵士達の心に響いた。だが、ジルはさっきまでの自分の演説を恥ずかしがるかのように、手短に纏めた。

「誇り高き、カタパルト王国の兵士達よ。今回の凱旋は小休止に過ぎない。これからも戦争は続く。くれぐれも体には注意してくれ。以上だ」

ジルの演説はここで終了。ブルゴー騎士団長が入れ替わるようにして壇上に立ち、各兵士達の行動を指示した。俺は、その範疇から外れているだろうからジルの元に駆け寄った。

「お～い、俺はどうすればいいんだ？」

ジルは、未だに怖い形相をしている。なにか思う所でもあったのだろうか。詮索してはいけない気がした。

「う、うん……自室に戻っていていいよ。初めての戦争で疲れたでしょ？　まあ僕はまだまだ仕事あるんだけどね」

疲れた様な表情を見せる。

「分かった」

「あーあ、疲れたなぁ」

ベッドに横になり、手を頭の後ろに組んで、俺は呟いた。リッツとの相部屋だがしばらくは一人だろう。ジルはまだ色々やることがあると言っていた。それはつまり、護衛のリッツにも休息はしばらくないということでもある。

目をつむり、走馬灯のように戦場の記憶を呼び起こす。

色々なことがあった。

自信満々でまだ敵は攻めてこないだろうと言ったのに、いきなり攻めてきたシャルロワには驚いた。それを察知できたカタパルト王国直臣の精鋭は凄いと思う。

戦場にいきなり放り込まれて、敵が斬りかかって来た時は焦った。運と剣道の経験で生き延びたけど、危なかったよ。

初めて人を殺した感触は、気持ち悪かった。そう、俺は何人も人を殺した。

そして、戦争をリアルと認識した。今までは戦略ゲームをやっているような、そんな気分だったけど、違うんだ。ここでいう死傷者ってのは、画面に表示された数値ではない。人間が死んだ数だ。

……そうか。俺は。

「俺は、人を殺した……　数値上の1とか2とかじゃなくて、普通に生活している、リアルの人間を殺した……」

戦争している時は戦いに勝って生き延びることに夢中で、そんなことには気付かなかった。終わった後も脱力感が押し上げてきて、人生初の殺人のことなんかに気が回らなかった。でも、今は違う。たった二ヶ月程しか使っていない自室だけど、それでもこの世界ではマイホームと言える場所。そこに帰ってきて、落ち着いて、そして理解した。

いや、とっくに分かってたんじゃないか？　分かってて、その事実から逃れたくて考えなかったんじゃないか？

そうだ、そうだよ。この世界では、戦争で人を殺すのが罪とならないのかもしれない。いや元の世界だって、戦時の殺人は罪とならない、だろう。

でも、日本では。戦争中だったとか正当防衛だったとか、そんな理由抜きにして、殺人ってのは最大のタブーじゃないのか？

「俺は、……人殺し……？」

俺は、人を殺した。シャルロワ軍は民兵、つまり民衆から志願または徴兵された人々の集まりじゃないか。一般人だ。

戦争だった。仕方がなかった。自衛だったんだ。しょうがない。……でも人殺しであることには変わりない。

「……、――――ッ」

頭を掻き毟る。耳元から、悪魔の囁きのような声が聞こえた。人殺しだ、ヒトゴロシだと。その粘りっこい声は確実に俺の精神を絞り上げた。

グジュリ、と剣を腹に刺した音が耳にこだまする。気味の悪い、まるで背筋を蛇が走ったかのような感触が体を震わせた。ここは戦場ではないのに。あの時の音、あの時の感触が蘇る。

喉の奥から何かがこみあげてきた。胃酸が気管の表面を傷つけながら口に溢れ出てくる。それと一緒にさっき食べた物を俺は嘔吐した。ベッドに黄土色のドロドロしたものが飛び散る。

『お前は、人殺しだよ。血の通っている、普通に暮らしていた人間を殺した』

違う、違うんだ……俺は殺そうとした訳じゃない。生きる為にはしょうがなかったんだ。襲われてやり返したんだから、正当防衛だろ？

『でも、その後お前は自分から出向いて貴族の男を殺した』

それは……しょうがなかったんだ。俺は……。

『人殺しめ。それに、お前はジルに対して作戦を献策しただろ。お前の作戦で、何人の人間が死んだと思っているんだ』

『もう元の世界には戻れないな。あいつらが、今のお前を見てなんて思うか分かるか？　分かるだろう。忌避されるに決まっている。お前は殺人鬼だぞ』

「ぁ……うあァァァーッ」

狂ったように涙を流す。悲しい訳ではない。自分の罪が怖いのだ。半開きになった口から涎がこぼれおちた。下を向いたが、目を涙が

遮り、視界がぼやける。

城が戦勝に湧きあがっているその時、俺は人知らず慟哭していた。

第3章第2話　ぼくの

ジルは、静かに自室に籠っていた。

凱旋が終わり、演説が終わり、王都に来てジルへの服従を改めて誓う貴族たちとの面会も終わった。他に色々やるべきこともあったが、ジルは今日一日は一人にしてくれと言った。周りの人々は、ジルがまだ若いのにカタパルト王国の命運を賭けた戦いをしたことで、疲れているのだろうと推測した。恐らくジルの気持ちをくみ取ったのは、ギルバートを含めた数人程だろう。

椅子に座り、何も置いていない机をぼんやり見つめる。

「やっぱり、父上は……」

ジルと父親である前国王エドガーとの仲は、決して深い訳ではなかった。皇后の第一子でありかつ政務担当能力も決して低くなかったので、次期国王はジルだとエドガーも認めていたが、余り可愛がって貰った記憶は無い。だからこそ、ジルはエドガーが急死したところで、大きく取り乱したりはしなかったのだ。

しかし、ジルの兄弟の中にはエドガーに可愛がって貰っていた者も居る。同じ母親から生まれた王女エリアや異母弟であるクラウンなどがそれだ。エリアは十四歳、クラウンは七歳。二人とも、エドガーの死を聞いて号泣したという。

そして、ジルはクラウンやエリアと仲が良かった。一緒に遊んであげたこともある。そのため、ジルは父エドガーを殺した犯人に対して怒りを多少なりとも持っていた。

そして、つい最近その犯人が薄々分かってきた。最初はマグナ族の手の者を睨んでいたが、違う。フリーダ皇国だ。

そもそも、国王であるエドガーの警備体制は半端なものではない。なんてったってカタパルト王国で一番偉いのだ。いくら戦地とはいえ、暗殺者がエドガーの元まで辿り着くのは内通者の手引きでもない限り不可能だろう。

その内通者が近頃見つかったのだ。シャルロワである。

当時宰相だったシャルロワは国王の信任も深かった。四大貴族の一つシャルロワ家を出奔して、役人の下っ端から宰相にまで上り詰めた男である。大臣になる時に己の出自を明かし、国王の口添えもあってシャルロワ家の当主になった。一時は出奔していたのにである。他国からはカタパルト王国一の切れ者と言われていた。

「まさか奴が父上への暗殺者を手引きしたとは……誰も予想だにしなかっただろーな」

そう、シャルロワが若き国王ジルに謀反したのは、誰でも納得できるのだ。二人は喋ったことも殆どなかったし、実力主義者のシャルロワがジルを嫌っても、そんなに矛盾は無い。でも、エドガー前国王とシャルロワは個人的な仲だった。親友、という程ではなかったが、友人ではあったし家臣としても第一等だっただろう。

そのシャルロワがエドガー前国王の暗殺を手伝った。まだ調査段階だが、諜報員は八割程の可能性でそうだと断じていた。それに、その後のシャルロワの行動などの状況証拠を加えれば完璧である。暗殺者自体はフリーダ皇国だろう。その情報を聞いてジルが推測し

たことは、合っていた。暗殺者がフリーダ皇国の手の者だということは立証したらしい。

つまりは、そういうことだ。今のカタパルト王国の惨状は、決して前国王エドガーの死という偶然から起こった事故ではない。フリーダ皇国の陰謀とシャルロワ宰相の変心が全てを作り上げた。

「……、糞がッ」

右手を振り上げて、机に八つ当たりをする。目は充血し始め、歯をぎりぎりと噛み締めた。フリーダ皇国とシャルロワへの激しい怒りの感情。理由は一つではなかった。

妹や弟を悲しませた。特に、まだ七歳のクラウンには大きなトラウマになっただろう。

この国をここまで追い込んだ。エドガーという最大権力者の死によって、カタパルト王国は短期間で滅亡の危機に扮している。全ては、フリーダ皇国の策略だ。今や北東南それぞれに強大な敵を抱えている。カタパルト王国が滅亡すれば、ジルは間違いなく死刑になるだろう。

何の罪もない民衆を死の危険にさらした。今までの戦いでも、これからの戦いでも、民兵は多数死ぬだろう。それも、フリーダ皇国のせいだ。エドガー前国王は平和主義だったからカタパルト王国は殆ど戦争が無かったのに。

様々な理由がないまぜになって、ジルの心はさらに怒りの色を増していく。いや、これは最早怒りではない。怒りが増幅凝縮され生まれた、憎悪だ。

さっきまで人の前に居る時は、なんとか己の感情を制御していたがもう限界。ジルは、狂ったような笑い声をあげた。

「ヒゃ、は？　アひャヒゃ、あはははははははーーーーッ」

手を横に思い切り伸ばして、狂笑。悪魔の様な聞く者全てを凍りつかせる声は、絶えない。ジルは、溜まりに溜まった憎しみを口から吐き出すかのように、笑い続けた。

どれほど時が経っただろうか。喉がこれ以上笑うことに耐えられなくなったのか、それとも憎しみを全て放出したのか、ジルは不意に黙った。恐らく前者だろう、息を乱しながらベッドに腰掛ける。しかし後者もあったのか、これ以上笑おうとはしなかった。

「おぐのｋ……」

喋ろうとして、また黙る。喉が悲鳴をあげたのだ。ジルは喋るのを諦めた。

（フリーダ皇国、ねェ。容赦はしない。カタパルト王国国王である僕を気違い同然な精神状態になるまで追い詰めた……覚悟はしてもらわないとね）

一応自分でも先程の行動がいかれていると分かっていたらしい。頭が冷え、徐々に目が穏やかになり発せられる空気も正常になっていく。

（フリーダ皇国を、潰す。まあその手始めに、僕のカタパルト王国を邪魔する奴は一掃しよっか）

恐らく、今最もカタパルト王国の危機を恐れていないのは、ジルだろう。最終鬼畜三方敵という窮状を理解している貴族役人武官等お偉いさんはともかく、一般の兵士すらカタパルト王国は大変な状況にあると知っているはずだ。でもジルはそんな不安は塵ほども抱かない。

ジルの思考回路は、この窮状を乗り越えられるかどうかではないのだ。どうやって乗り越えるか、ですらない。ジルは、

（さっさと一掃しないとなぁ）

乗り越えること。それを前提にして方法論を考えているのだ。いうなれば、東大の入試問題を出された小学生が、その難しさをちゃんと理解してなお、自分の能力で解けること前提にその問題を解く方法を探すようなもの。普通の反応ではない。

ともかく、ジルは顎に手を当てて考え始めていた。

（まず、離間の計。これは外せないでしょ。五分の一の兵力で切れ者であるシャルロワを撃退した僕。多少の貴族は靡いてくれるかもしれない。たとえ靡かなくても、こちらが反乱貴族の切り崩しを図っていることをあえて知らせれば、敵さんが疑心暗鬼になってくれるからね）

あっという間に、ジルは亮と同じ考えに至った。亮が日本での知識を基に思考を構築しているのだとすれば、ジルは帝王学を基に思考を構築している。ジルとて英才教育を受けた身。発想力はともかく、知識は国王として一人前だ。

（いいねぇ。欲まみれで足並みのそろわない反乱貴族にはお似合いの策でしょ。ただ、フリーダ皇国には通じないんだよなぁ）

ジルは、離間の計だけで反乱貴族、すなわち南と東は脅威にならないと断定した。過信ではない。

亮に「情報って大事だよね」と言われてから、密かに諜報員の数を増やしている。ジルは、元の五倍ほどに増えた諜報員になら反乱貴族を分裂させることは容易い、そう判断したのだ。細かい作戦は亮や諜報局長に考えさせればいい。彼らにはそれだけの能力がある。

（僕には無理だな、フリーダ皇国を倒す手段なんて思い浮かばない。せいぜいフリーダ皇国周辺の小国に本国を襲わせるくらいしか考えられない。それも、一回僕達が勝利して初めて効果が出る作戦だ）

もしもフリーダ皇国との会戦で勝利して、更に本国が襲われているとの報告を受ければ侵攻軍も焦るだろう。そこを、叩く。それでフリーダ皇国はカタパルト王国から手を引かざるを得なくなるはずだ。しかし、その仮定を生み出す術をジルは知らない。

（せめてラクル連邦とか、大国が動いてくれればな……僕には軍事の才能は無いから考えは浮かぶはずないか。まあ、亮とかブルゴー騎士団長に任せるしかないかぁ）

国王が家臣に任せる、というのは悪いことではない。その道には

その道のエキスパートがいるのだ。ジルは戦術や戦法など、軍事的素養に関して言えばあまり才能は無かった。

（とりあえず、諜報員に反乱貴族の調略を命じよう）

第3章第3話　鬱だ、死のうと言う前に

ここは、何処だ？上を見やると、白い壁があった。よく、分からない。何で空じゃないんだろう。野営なんだから上に何かあるはずもないのに。

それが自室の天井だと認識するのには数秒かかった。それと同時に、昨日城に戻ってきたことを思い出す。

「あー、よく寝た」

泣き腫らして真っ赤になった目をこすり、ラジオ体操のような大げさな動きで体を伸ばす。気分は晴れない。天気でいえば、曇天。思わずため息が漏れた。気分もどんどん暗くなる。

それでもベットから起き上がり、足を床に乗せた。ベットに座っている、そんな感じだ。部屋を見渡すと、既にリッツの姿はなかった。朝早くから護衛しているのだろうか。それともこんな遅くまでずっと護衛を続けているのだろうか。まあ、どっちでもいいか。

目にやっていた手を膝の上に乗せて、そして本日二度目のため息をつく。

「この手で……何人も人を殺したのか……」

思うだけで、口に出さなければよかったのに。俺の気分はさらに落ち込んだ。

一日経っただけあって少しは冷静で居られるようになったみたいだ。気分は沈んでいるが、昨日のように爆発的な感情になるよりはマシ。無気力感も脱力感も無いので、鬱病ではない。

でも、答えは、出ない。

人を殺したことを許容することはできない。戦争でたくさんの兵士を死に追いやったことの正当化もしたくない。直接的であろうが間接的であろうが、人殺しは罪だ。犯罪である前に、罪だ。

「これだから、異世界なんて嫌だったんだよ……」

もしも元の世界に戻らずこの世界でのんびりゆっくり暮らしたいなら、話は別だった。ジルに金を貰って、とっくに何処かで暮らす算段を立てていただろう。でも、この世界に俺の居場所は無い。友達なんてリッツとジルしか居ないのだ。

だが俺は、元の世界に戻りたい。そのためには、セリウス王国の巫女にコンタクトを取らなければならない。ならば、コンタクトを取れるようにならなければならない。簡単な三段活用だ。

旅をして巫女に接触する手段も考えたが、戦闘能力が無い上この世界のことを知らない俺に旅は厳しい。それに、たとえセリウス王国に着いたって、王を召喚する立場にある巫女と会うなんて難しく、彼女に元の世界に戻らせてもらうなんて以ての外だ。

ならば、カタパルト王国内で地位を上げるしかない。

「でも、そんなの……簡単にはいくはずがねえよ」

そう、それはとても難しいのだ。人を殺すことにふんぎりがつかないことには始まらない程度には難しい。

俺は頭を抱えた。最近切っていなくて延び始めた髪を掻き毟る。結局、殺人なんて許容できないのだ。

「畜生ォ……。何で、何で俺がこんなに苦しまなくちゃいけねえんだよ。ただの高校生だったのに、一般人だったのに……理不尽すぎるだろうが」

理由は見つからない。ジルに誤召喚されたのが直接的な原因だが、ジルに憎しみをぶつけることはできない。秘書と言う大役に就かせてもらっており、その報酬は平民が一生で稼ぐ値を超越しているのだ。誠心誠意謝ってもらったし、ジルは負い目を持っているのだろう。

憎しみの対象が居れば、この感情は簡単に制御できる。恨めばいいのだ。感情と言うのはぶつける相手がいればすぐ解消できる。たとえば、何かあって悲しくなった時に誰かの胸で泣くのと、自分だけでその想いに決着を着けるのと、どちらが早く悲しみを癒せるか考えてみよう。明らかに前者だ。中には一人ですぐに立ち直れる心の強い人も居るかもしれないが、俺は違う。

俺の頭は、激情を抑える為に必死に憎しみの対象を見つけようとしていた。いつの間にか殺人がどうこうという話ではなくなってきている。殺人を許容しないと幸せを取り戻すことができない、そんな理不尽に対する怒りが殺人への恐怖を上回ったのだ。

「……、もうちょっと横になろう」

罪悪感と憎悪で一杯な俺の心はもう限界だった。これ以上何も考えたくない。俺は、しばらくぼーっと寝っ転がることにした。しかし、俺に休息は訪れないようで。コンコン、という音が俺の部屋に響いた。

扉を叩く音に続いて、入ってもいいですか、という声が聞こえる。誰だろうか。いいですよと答えると使用人の男性が部屋に入ってきて、俺にジルの口上を伝えてきた。

「今日からまた秘書の仕事だ、と仰っていました」

面倒くさい。気持ちに整理がつかないのに仕事をやるのはしんどいのだ。ついつい物思いにふけったりして集中できないだろう。友人と喧嘩した後勉強しようと思っても身が入らないようなもんだ。こういう時はな、放っておいてほしいんだよ。

「何時間後だと？」

それでも上司に従わなければならないのが悲しい。まあ、鬱屈した気分を晴らすのも一つの手か。久しぶりに仕事をしてみよっかな。良い気分転換になるかもしれない。

「一時間は待つと。そう仰っていました」

一時間越えたら何かあるのかよ。遅刻したら罰がありますってか？　五分前行動の重要性ですな。

「分かった。飯食ったらすぐ行くよ」

さて、食堂に行こう。他人と少しながらも会話して少しは気分も

晴れたし、兵士に誰か友達でも作ろうかな。

使用人が退室する。着替え着替えと呟き秘書用の制服を着ながら、俺は使用人の彼に対して思いを馳せていた。思い、というのは彼と俺の身分についてだ。別に彼に見惚れて「身分違いの恋ヒャッホー」と思った訳ではない。男だしね。

俺は秘書、彼は国王直属とはいえただの使用人だ。その上、俺は先の戦でも秘策を献策した。身分は圧倒的に俺の方が上だろう。

その身分通り俺は彼に対して、自分の方が年下なのにも拘わらず格上の様な態度を取った。会話を聞けば分かることである。彼は俺に対して丁寧語を使っていた。

この世界では、あまり年功序列は考慮されない。官位や役職で全てが決まるのだ。昔俺はその対応に若干ながらも違和感を覚えたものだった。しかし、今や秘書という役職が板に付き、使用人にペコペコされるのに慣れてしまった。これは拙い。

何が拙いかと言うと、この世界に慣れていることが拙いのだ。いずれは元の世界に戻る身。この世界に愛着を湧くのはあまりいいことではない。

まあ、そんなことを一々考えてもきりがないか。俺は秘書の制服に着替えると、食堂に向かった。もちろん身分証明書は持参。何を食おっかなぁ、食堂で食べるの久しぶりだしなぁと考えにふけっていても、俺の体は自然に食堂に向かっていく。順応性が高いのだ。食堂や執務室等のよく向かう場所への道筋は頭で考えなくても分かる。

「そんなんじゃないって」

「嘘付け、良い雰囲気出てたじゃねえか。手なんか繋いじゃってさぁ。もうキスしたの？」

「だだだから、違うって言ってんじゃん」

「え、もうしたんだぁー。もしかして、夜の営みとかもしちゃっている訳？」

「してる訳ないだろ！　マリーと俺はただの友達だよ」

通り過ぎていく二人の男。からかわれて赤面していた男は女顔だった。とどのつまり、童顔。ギャルゲやラブコメの主人公なんかは大抵女顔。会話の内容も加えて俺が察するに、女顔野郎はもてもてだな？　もしかしたらハーレムとかも作っているかも。……流石に妄想か。自重します。

と、俺の馬鹿な思考の流れはともかく。俺は、やはり先の戦で勝利したことは色々と影響を及ぼしているんだなぁと改めて実感した。

「城の人間の表情が前よりも明るくなった」

無意識的だろう。でも、確実にこの城の空気はよくなっている。良いように捉えれば戦勝で士気が上がっていると言えるが、悪く言えば城が戦勝気分で浮かれている。

まあ末端の兵士達はそれでもいいのだが、上層の指揮官達が調子に乗っていては困る。トップは常に動じてはならない。風林火山、まさにその通り。指揮官は、林のように静かで山のように不動の姿勢を見せるべきだ。そして、いざという時は風のように速く動き火のように果敢に戦う。これこそトップのあるべき姿。武田信玄、と

いうより孫子カリスマじゃん（笑）。

と、ここまで考えた所で俺は頭を横に振った。顔をしかめる。カタパルト王国の指揮官がたるんでいないかどうか心配しているのではない。

「俺ってさ、寄り道ばっかの思考回路だよな」

ついつい思考が脱線することを反省しているのだ。自分でも考察癖があるのは知っている。何かあるとすぐ考えに耽ってしまう。そういう状況の時は、ぼーっとしてしまう。昔この癖が発動して不良とぶつかり大変な事態になった時、心から反省した。これからは気を付けよう、と。でも、長年の癖と言うのはなかなか直らないもの。

まあ異世界に来てからはこの癖に随分と助けてもらっているので、そんな悪いもんじゃないか。一般人である俺がこけてないのは、よく考え考察し冷静に判断するという性格に助けられてのものだ。もしも俺が短慮だったら、今頃戦争で死んでるか秘書の役職を解雇されているかのどっちかだろう。

食堂に到着し、俺はラーメンを頼んだ。朝っぱらからなんだが、そういう気分なんだ。数分待ち、出来たてほかほかのラーメンを受け取ると俺は一人寂しく食堂のテーブルの方に向かう。相変わらず軍部に友人のいない寂しい俺だった。

第3章第4話　打算と交友

「リョウ殿ではないか？」

おっと。驚いて落としそうになったラーメンを両手でしっかりと支える。誰だろうか。振り向くと、知らない女性だった。

燃えているように赤い髪、キリリとした力強い双眸、凛とした美声、可愛いというより綺麗な容姿。そういえば、カタパルト王国軍の陣を歩いていた時に見たなぁ。（第2章第7話参照）あれ？でも、喋ったことは無いはずじゃ……。

「そうですけど。……あの、誰でしょうか」

何処かで聞いたような気がする声だが、誰だかは特定できない。すると、その女性は残念そうな顔をした。不快の念も少しであるが混じっているようだ。だが俺はこんな美人と知り合いになった覚えは無い。もしかして、単に俺が有名だから話しかけただけなのかな。戦場で助けてくれた騎士、確かシュマンさんだっけ。彼女は悪い意味で有名だとも言っていたから、ちょっと心配だ。

「戦場で助けたのをもう忘れたのか？　律儀な少年だと思っていたのだがな」

戦場？　ああ、まさかのシュマンさん本人だったか。戦陣で見かけた美人さんと同一人物だったらしい。そういえば、女騎士の声も凛としていたな。

「いえ、兜を取った素顔を見たことがなかったので」

少々ばつが悪くなり、言い訳のように言葉を並べる。シュマンさんはそれで納得したようだ。

「まあ、それなら仕方ないかな。それより、リョウ殿。君はあの後ムルイ伯爵の首級を上げたそうじゃないか。分断作戦と言い、今回は大活躍だったな」

ムルイ伯爵？　ムムイ伯爵じゃなかったかな、と思ったが口には出さない。俺は優しいのだ。

「ありがとうございます。ムムイ伯爵を殺した時は大変でしたけどね。周りを護衛だった人達に囲まれて、危機一髪って感じでした」

変に謙遜するのもあれなので、素直にあざすと答えた。だが、真正面から褒められると意外に対応に困るな。鼻高々に「そんなことないっすよ。たまたまっすたまたま」とか言うと嫌われそうだし。美人に嫌われると萎えるってのもあるが、武官達に反感を受けている以上懐柔策が必要だろう。そのためにはシュマンさんとの交流は必須である。打算の友人関係というのは初めてなので、慎重になるのに越したことは無い。

「ほう、大人数に囲まれても生き残ったか」

誤解誤解。感心したシュマンさんにどう誤解を解くべきか、困る所だ。ちなみにちゃっかり自分の手柄にするという選択肢は存在しない。いずれは助けてくれた兵士の口から、俺が戦って包囲網を脱出した訳ではないことが洩れるだろう。嘘はばれない分には構わないが、ばれると一気に不信感を増大させてしまう。

「いえ、助けてもらったんです」

面倒なので一言で済ませると、シュマンさんは至極納得と言う表情を浮かべた。

「なるほどね。確かに君は大人数相手に生き残る程の実力者ではなかったな。もしもそうだったなら、あんな雑魚に手間取っていたはずがない」

ああ、あれは危なかった。

……やばい人を殺したことを思い出しちゃったよ。折角忘れていたのに。萎えるな。俺はかぶりを振り、そのことは極力考えない様に自戒した。

「すまなかった。気を悪くしたかな？」

「いえ」

すると、シュマンさんは周りを見渡し口を開いた。

「どうだ、立ち話もなんだし、一緒に飯でも食わないか」

「そうです、ね」

さっき暗くなっていた俺の心の中では、歓喜の感情が溢れかえっている。その種類は二つ。美女と一緒にごはん食べるとか役得じゃん♪という世俗的な喜びと、これを機に軍部の情報とかを聞きだせるじゃんと言う打算的な喜び。

先導するシュマンさんに着いていくと、そこにシュマンさんのものらしい栗栖飯があった。湯気を立てており、作りたてなのは間違いない。他人の庭は赤いというけど、本当に美味しそうだな。

向かいあうように座ると、シュマンさんが切り出した。

「そうだ、その敬語、やめてくれないか？　階級に殆ど差は無いんだし、タメ口でもいいだろう」

そういえば、無意識に敬語使ってたな。女王様オーラ放っているし、どうにも委縮していけない。いや、どちらかというと先輩オーラかな。

「そうですね……いや、そうだな。普通に話すよ」

ラーメンを口に入れる。久しぶりに食べた出来たてのラーメンは旨かった。戦時はずっと非常食を食べていたからな。ちなみに、朝からこんなこってりしたものを食べているのにはちゃんと理由がある。秘書業は休憩をとれる時間が少なく、昼飯も軽食くらいしか摂れないのだ。そのため、非番でない場合は朝から腹いっぱい食べることにしている。

俺はスープを飲み、笑みを浮かべた。この世界で一般的なラーメンは味噌ラーメンだ。そしてこれは俺の大好物♪　しかもこの食堂の料理人の作るスープは美味しい。

そんな俺の至福の時間は、シュマンさんの声によって遮られた。

「そういえば、リョウ殿。君は何処の生まれなのだ？」

シュマンさんは不思議そうな顔をして尋ねた。なんだろう、俺変なことやっちゃったかなぁ。言動がカタパルト王国の民……ビリアン人の文化にそぐわなかったりしたのかも。

異世界ですって答えるのは流石にまずいよな。異世界、かぁ。今頃俺は行方不明扱いから死亡扱いに変わっているかもな。みんな、どうしているんだろう。

はあ、いつになったらあいつらと会えるんだろうかなぁ。感傷的な気分になった俺はそこで初めてシュマンさんを無視していたことに気付く。シュマンさんは、なかなか答えを言わない俺に対して、複雑そうな顔をしている。

「……、色々かな。むしろどろどろ？」

答えになっていない。誤魔化しただけだ。まあでもある意味どろどろか。元の世界に帰る為に人を殺して戦争の指図して……何やっているんだろうな俺は。

だが、シュマンさんはそうかと答えて済ませてしまった。沈黙が続く。気まずい。シュマンさんには何か人種とか民族とかについて思う所でもあったのだろうか。

「そういえば、君は戦争を経験したことがあるのか？　剣技が特に巧かった訳ではなかったが、妙に冷静だった。それで気になったんだが」

オイオイ戦争の話題とか、空気読んで言ってくれよ。はあ、一々人の心の琴線に触れる人だなぁ。悪気がある訳ではないんだろうけど、イライラする。まあ人殺しについて悩む兵士なんて滅多にいな

いだろうし、まさか俺がそんなことで悩んでいるとは思ってないのだろう。

「んな訳がない。冷静なのは俺の性分で、人を殺したのもあれが初めてだよ。……、生憎俺の故郷では戦争なんて七十年近くなかったから」

鬱屈した気分になる。俺は元の世界のことをこの世界の住人に話すのは元来好きじゃないのだ。しかも戦争、つまり殺人の話とかリアルタイムで悩んでいる話題なんですけども。

「そ、そうか」

ほら、まただ。また沈黙が続く。俺はシュマンさんと肌が合わないのかもしれない。話してて嫌な感じは無いのだが、彼女は軍人。どうしてもそっちの話題になってしまう。でも俺は戦争とか、そんなことの話題は避けたい気分なんだよ。

だけど。何時までも逃げていちゃ駄目なのかもしれないな。戦争の話題になっただけで鬱になる様じゃ、今後の戦争は勝ち抜けない。俺はチャーシューを口に入れ噛み締める。

気分が変わった。最後の一口を食べ終わると、気まずそうにしているシュマンさんに向かって俺は口を開こうとした。

しかし、食堂の時計が目に入る。どうやら、ゆっくりし過ぎたようだ。もうすぐ一時間経つ。ジルに呼ばれていたんだっけな。早く行かなきゃ。

「そういえば、俺国王陛下に呼ばれていたんだっけな。じゃあね、シュマンさん」

早口にそう告げると、俺はシュマンさんの返答も聞かず食堂のおっちゃんにラーメンを返しに行った。ラーメンの残り汁を捨て、おっちゃんに返す。はいよ、と元気な声を出しおっちゃんは奥に引っ込んだ。

さて、向かうは執務室。面倒だけど、しょうがない。仕事だもんな。

「お、おい」

行ってしまった。私はリョウの後ろ姿を黙って見送る。その姿が出口から消えた時、私はため息をついた。

彼には何かトラウマがあるようだ。生まれを訊いた時も、戦争経験を訊いた時も複雑そうな顔をしていた。最後の方など、私から見ても分かる位苛々していたのだ。初陣ですらあの冷静さを見せた少年、リョウ・ヨシダ。それが私の質問一つで表情を変えた。

「故郷に……故郷に何かあったのだろうか」

七十年近く戦争の無かった国。私は考えを張り巡らすが、該当する国は無かった。このアリア大陸にはそんな国は無い。何百年も前にそんな時代があったらしいが、その時は私もリョウも生きていな

い。

異大陸から来たのだろうか。だが、異大陸人とは肌の色も髪の色も違った。彼の姿自体はビリアン人と相違ないものだ。

つい最近ジルに登用され、秘書となった謎の少年。何処とも知れぬ馬の骨だったが、ジルに気にいられたのか秘書として可愛がって貰っている。

衆道の相手か、気の合った友人か。恐らく後者であろう。秘書としての仕事を見る限り大して能力は高くない。国王に取り入るただの佞臣とまでは言わないが、大した能力は無い。それで武官文官達の評価は一致していた。貴族も恐らく同じ考えだっただろう。

しかし、戦争が始まった瞬間リョウは頭角を現した。自らが秘策と言った作戦は穴があったものの成功したし、彼自身も貴族ほか数人の首級をあげるという大戦果だった。

だがリョウについての詳しいことは誰も知らない。何処からやって来たのか、どう国王陛下と知り合ったのか、何歳なのか。

それが、故郷のこととなると表情を変える。実に気になる所だ。そもそも、私が彼を朝食に誘ったのは彼のことを探る目的もあったのだ。誰かに命令された訳ではないが、彼はカタパルト王国の鍵となる人物かもしれない。気になるのだ。

「しかし、申し訳ないことをしたなぁ」

だが、罪悪感もある。彼は恐らく二十にも満たない少年だろう。そんな子供の心の傷を抉って何が楽しいものか。

次あっても、詮索するのはよしておこう。問い詰めたところで、深いトラウマなら話してくれないだろうからな。

第3章第5話　秘密会議って言うと悪役っぽいよねー

「失礼します」

ドアを開けて入ると、そこに居たのはジルとギルさんだけではなかった。ブルゴー騎士団長、レーデ内務大臣（過激派代表）、バトン内務大臣、ハンナ大魔導士（第二将軍、閣僚である）、バトン外務大臣。錚々たるラインナップである。カタパルト王国首脳部が一堂に会した感じだ。

「うむ。リョウ、お主を待っていた」

ジルの言葉。何を始めるのだろうか。執務室にいつもは無い円卓が置いてあり、ギルさんを除き彼らはみんなそこに座っている。もちろんジルは執務椅子だが。一つ席が空いているので、俺は座ってもいいんだろうか。

「座れ」

座ると、隣のバトン外務大臣に書類を渡された。それは二つの束になっていた。一つはフリーダ皇国軍、カール軍、反乱貴族軍、マグナ族に関するモノ。もう一つはカタパルト王国軍の軍事的な資料。

数分ほど目を通し、俺はそれを自分の前に置いた。大体俺が知っている情報だと分かったのだ。わざわざ細部を読む必要はない。

「では、秘密会議を始める。これは閣議ではない。今回は事態が事態なだけに、先の戦で勝利に貢献したリョウにも出席してもらっている。異存はないな？　では、始めよう」

今回は形式ばった感じではないらしい。まずレーデ内務大臣が口を開いた。

「さて、今我々は亡国の危機に瀕しております。敵は、北のフリーダ皇国軍、東のカール一族＋マクシム軍、南の反乱貴族軍＋マグナ族。南は撃退したので善しとしましょう。王国最南端であり、マグナ族の領土と領土が接している貴族達はみな反乱に参加したのでマグナ族とはしばらく戦う必要がありません
それで、北と東どちらを先に対処するかという話になるのです」

まあ状況確認と言う奴だ。一拍置いて、レーデ内務大臣は自分の考えを述べた。

「私は東のカール一族軍を撃退するのが最善策だと思います。北のフリーダ皇国軍はどうせすぐ帰還するでしょう。反フリーダ皇国連合軍は既に合流を終えてフリーダ皇国領に攻め入ったと聞いていますから」

成程、そういえば反フリーダ皇国連合とかあったっけ。今でも俺は危惧を抱いているままだが、まあそれなりに仕事してくれるだろう。

「確かに、そうかもしれませんな。そもそも、北と相対するだけの兵力を我々は保持しておりません。もう少し貴族が王城に馳せ参じるのを待てば総兵力三万程になるのですが」

今国王が保持している兵力は二万人。それだけで賢王ガストンが率いるフリーダ皇国軍四万と戦うのは不安だ。

「私も賛成です」

バトン外務大臣に続き、ブルゴー騎士団長も賛成の意を表した。ハンナ大魔導士も賛成し、後は俺だけになった。

「俺……私も東のカール一族を先に対処するのには賛成です。ですが……」

「だが、何だ？」

「皆さまは、どのようにカール軍を撃退しようとお考えでしょうか？」

俺の問いにレーデ内務大臣が答える。

「そりゃあ、大軍を率いて正面から一気に潰すに決まっておろう」

「他の方々も？」

他の全員が首肯したのを見て、俺は喋り始める。ちなみにジルは全く発言していない。まるで俺に全てを任せているかのように。

「やはり、そうですか」

「やはり、とは？」

「私は、それには反対です」

みんなが驚く。当たり前だ。それ以外にどういう方法があるというのか、不思議に思っているだろう。

「理由から説明しましょう。私は前国王陛下エドガー様の暗殺、マグナ族との関係の悪化、シャルロワ達貴族の一部の反乱、この全てをフリーダ皇国の陰謀と考えております」

タイミングが良すぎるのだ。シャルロワは国王が死ぬとすぐ謀反した。まるで、最初から国王が死にフリーダ皇国が攻めてくるのを知っていたかのように。

「確かにそれは私も考えていた。だが、それと何の関係があるのだ？」

「ならば、それほどの陰謀を企み万事抜かりなく成功させたガストン皇王が、反フリーダ皇国連合の発足とその進撃を読めなかったなんてことがありましょうか。確かに、一連の流れが偶然と言う可能性もあります。しかし、その可能性は極めて低い。将たるもの常に最悪の結果を考えなければならないと言うのは知っていましょう？」

そう、俺にはガストン皇王が反皇連（略称）に対して何らかの処置をしている気がするのだ。

「つまり、フリーダ皇国軍はもしかしたらすぐにはカタパルトを撤退しないかもしれないのです。そうなれば話は別でしょう？　今すぐにでも、まだ完全にカタパルト王国北方を制圧されてないうちに、奴らを撃退する必要があるのです」

となれば、カール軍と戦っている余裕はない。つまりは、そういうこと。

「確かにな……。我々は多少楽観視していたのかもしれん」

ブルゴー騎士団長が納得した。他の人々も苦虫を噛み潰したかのような表情で頷いた。

「では、どうするのかと申しますと、やはりカール軍を放置する訳にはいかないので、戦います」

「それでは、さっきの我々の意見と変わらないではないか」

バトン外務大臣が呟く。

「いえ、我々は少数、それも二、三千人でカール軍を速やかに撃破します」

みんなポカンとなる。驚いているようだ。俺は説明を加えた。

「この兵たちには、魔法をかけて超素早く駆ける馬に乗らせます。もちろん、全員に。歩兵には戦場近くで馬から下ろさせますが、これで大分到着が早くなるでしょう。また、鎧や武器などは別途に運ばせます。そうすればより到着が早くなるでしょう。速度重視で東に突き進めば、敵の想定外の早さで到着します。北のフリーダ皇国と戦うと宣言して大軍備を整えている最中に出撃すれば尚更です」

王城に到着するまでに考えていた案だ。敵はいきなり現れた俺達に驚くだろう。要するに奇襲だ。

「まさかそんなに早くに来るとは思っていないカール軍は大慌てでしょう。ジュネ将軍と力を合わせて挟撃すれば、烏合の衆である奴らはすぐに撃破できると存じます」

カール一族軍八千とマクシム軍は行動を共にしている。体裁ではマクシムの方がカール一族総領より立場は上だが、命令中枢は全く異なる。烏合の衆だ。

「これで東の軍勢は撃破できるでしょう。どうでしょうか？」

他には不確定要素である裏切り。反乱貴族の一部はシャルロワ軍の大敗を聞いてどちらに付くか迷っているはずだ。そいつらに裏切らせれば勝利の可能性は大幅に高まる。

「成程」

レーデ内務大臣が頷く。シャルロワ軍に勝ったあの分断作戦の功績で、少しは俺も信頼されているらしい。続いてブルゴー騎士団長も賛成する。

「細かいところは詰めねばならんが、確かにその案は興味深いな。で、どの部隊が出撃し誰が指揮するのだ？」

そこまでは考えてなかった。どうしよっか。

「私は陛下御自ら出撃すべし、と考えております。一度シャルロワ軍に勝利したとはいえ、まだ静観を決め込む貴族も多い。そこで陛下がご自身で二度目の勝利を収めれば、貴族からの信頼は上がり、静観しそうだった貴族がこちら側に付く、なんてことも起こり得るのです。次善策としては、ブルゴー騎士団長」

基本ジルに功績を回すべきなんだよな。

「だが、それを実行するのは難を極めるぞ？　誰かが国王陛下の不

在に気付く可能性は高い」

「それでも、です。配下の者に破らせるのと自ら打ち破るのでは周りからの評価は違います。前回は囮を用いて勝利したので、ジル陛下にはまだ勇猛という印象はありません。是非、国王自ら戦うべきだと」

「そうだな、私は賛成しよう」

「私も」

「私もだ」

と皆が賛成した所で、ジルが、初めてではないだろうか。口を開いた。

「異存はないな？　無いなら次の方策に行くぞ」

俺の意見が採用されたようだ。続いての議題は、フリーダ皇国に対する方策だ。

「どう戦うか、だな」

「カール軍を撃破すると同時に進軍する。これはつまり、二万人程度で相対しなければならないということだ。何か策が無いとな。リョウ殿は何かあるか？」

「いえ、まだ何も」

「今すぐに貴族諸侯へ檄文を書けばよろしい。さっさと来い、とな。

フリーダ皇国との会戦に間に合わせればいいのだ」

「まあレーデ殿が言うようにそれしか無いだろうが、そんなことで大して兵力が増えるかと考えれば否だ。裏切り工作などが効く筈もないだろうし、出来ることは少ない。姦計抜きに単純な会戦で勝負を決するしかないだろう」

最後にブルゴー騎士団長が締めてフリーダ皇国に対する方策は決まった。決まったと言っても特に何かをする訳ではないが。

「では、他に何か意見のあるものは居るか？」

ジルが仕切り直す。俺は挙手し、意見を述べた。

「まず、カール軍に対して謀略を仕掛ける必要があるかと思われます。カール軍はカール一族軍と反乱貴族軍の二種類に分かれておりますし、反乱貴族の一部を寝返りさせることだってできるでしょう。さすれば、より楽にカール軍を撃破することができます」

「うむ、それは考えておる。案ずるでない。国王直属の諜報機関がしっかりやってくれているよ」

次に手を上げたのはブルゴー騎士団長だった。

「フリーダ皇国軍との会戦、その作戦はどう致しましょう？　陛下はお考えになっているでしょうか？」

「いや、まだだ」

「では、後日開く軍議までに配下の者に少しは作戦を考えておけと

通達しておきます」

「分かった。他に何かある者はおるか？」

何もない。これにて秘密会議は閉会となった。

第3章第6話　無職への道のり

秘密会議が終わり、閣僚たちはみんな退室した。俺とジルとギルさんだけが残る。

「リョウ。話がある」

ジルがいきなり口を開く。何だろうか。俺はジルの顔を直視した。

「話、っていうのはさ。リョウの役職のことについてなんだ」

俺の役職は秘書である。カタパルト王国の戦略行動について口を挟むのは本来ならば越権行為だ。ジルの寵愛がなければ俺は秘書を解雇、最悪の場合首を斬られているだろう。

「君の役職は秘書、だ。僕はそれ以上の大抜擢をするつもりはなかった。なかったんだけど……ちょっと状況が変わって来ただろ？」

状況が変わったというのはフリーダ皇国の侵略のことだ。

「今のカタパルト王国が生き残るには君の智略が必要なんだ。五倍の兵力を率いたシャルロワ軍をも打ち破る作戦を提示したその能力」

別に俺は能力がそんなに高い訳ではない。あの分断作戦だって、国王を囮にするという発想こそ斬新だったが、勝利のカギはカタパルト王国の兵士達の質の高さだった。もちろん訂正する気はない。相手が自分の能力を高く買っているのなら、それでいい。

「でも、残念ながら君はただの国王直属秘書に過ぎない。僕はこれ

から君の役職を上げていきたいと思うんだけど」

確かに、このまま俺が越権行為をし続けるのはいいことではない。それなら、越権行為にならない程度の役職を与えてもらえばいいだけの話だ。

「確かに。俺もそれは思うよ。まあ俺はちゃんと実績を上げたから不満はそう出ないだろうけど。秘書って身分のままじゃ不便ではあるよ」

「そっか。だよね。もちろん、今すぐにリョウの役職を変える訳にはいかない。ただ、この戦争が終わったら君を然るべき役職にするよ。約束する」

だから何だと言うのだろうか。俺にとって役職が高位になるのは嬉しいことだが、今話すことではない。まさに、とらぬ狸の皮算用である。

「分かった。他に何かある？」

「あ、いや……うん。特には」

何故そんなことを言う為だけにわざわざ俺を呼びとめたんだろう。良く分からない。まあジルも何か考えることがあるんだろうな。瞳の色が少しだけ変わっている。

「じゃあさ、こっちからもお願いが一つあるんだけど」

折角だから言っておこう。

「俺はもうすぐ秘書じゃなくなるんだろ？　だったらさ、秘書の仕事じゃなくて他のことしてもいい？　少し気になることがあってさ。作戦の計画立案にもその方がいいと思う。今は兎にも角にも時間が足りないんだ」

最後の言葉は嘘ではないが、気になることがあるというのは半ば嘘だ。俺が今時間を欲する理由は他にある。

「……いいよ。確かにリョウの秘書の能力は高いとはいえ、代わりが居ないと言うほどじゃない。どちらかと言えば作戦参謀としての能力を買ってるからさ。秘書室はそのまま使い続けていいよ」

ぶっちゃけたなジルの野郎。まあ、いいや。通ると思っていなかった申請が通って俺は一安心。これで、ゆっくり心の整理ができる。

「じゃあね。……失礼しました」

俺は執務室を出て、自分の部屋に向かった。

所変わって俺の自室。一人で部屋に籠って心の整理をつけるかぁと思ったのだが、先客が居た。……そういや、この部屋相部屋だったな。

「おう」

リッツだ。久しぶりに会ったような気がする。まあ戦争の時は殆ど喋らなかったからな。お偉いさんの護衛と言うのは基本的に空気にならなければいけない。見ざる聞かざる言わざるの三ざる、だ。偉い人の護衛は四六時中離れない為に時には国をも揺るがす大陰謀を知ることもある。だが、そんな時でも護衛はその三ざるを貫きとおさなければいけないのだ。

「おひさ〜。つーか、どうしたんだその傷」

そ　して今気付いたんだが、リッツはその美形に切り傷が二、三箇所あった。護衛って、国王の傍に居るんだから戦わないはずじゃ……

「国王陛下の傍にいたからだよ。激戦だったんだ、傷の一つや二つ少ない方だろ」

そういや、俺だったな国王に敵本陣へ奇襲するように言ったのは。

「んなことより、お前凄いことになっているぞ」

「え？　顔が？」

「違ぇよ。お前は、秘書の身でありながらシャルロワ軍を倒す秘策を献策したんだ。今兵士たちの一番の注目の的はお前だよリョウ」

おー、と俺は感心しているのかどうでもいいのかよく分からない反応を示した。俺の本心をぶっちゃけると「棚ぼたじゃんw」っていう感じ。どこから広まったのか知らないが、俺が分断作戦を献策したことは周知の事実らしい。それは「リョウ・ヨシダは知恵者」という噂が広がっているということでもある。

別に優越感に浸っている訳ではない。俺は世論がこちらに傾くのを単純に喜んでいるのだ。

あの徳川家康も常に世論を気にしていたという。それで若い頃は「東海道一の弓取り」とか言われて良い評判だったのだ。そのネームバリューは凄まじく、関ヶ原の戦いに勝利した大きな要因の一つは評判の良さだと俺は考えている。

つまり、勉強善し交友善し運動善しの優等生と賭け麻雀喫煙飲酒の不良の二人が居たとする。この二人が喧嘩したとして、どちらが悪いか大人の目から見たら理由を探さなくとも後者だと決めつけるだろう。つまりはそういうことだ。

おっと閉話休題。

「まじか」

とはいえ、そんなことでテンションが上がるほど俺に精神的な余裕はない。そのため、対応もいつもより淡白なものになった。

「あれ、あんまり喜ばないんだな」

意外だったとでも言いたげな顔で俺を見るリッツ。まあ合理的な判断で喜んではいるが、それも些細な感情だ。今の俺の心は萎えと鬱が殆どを占めている。

「つーかさ、個室は無いのかよ個室。俺は今をときめく話題の天才軍師だぜ、もっと良い待遇しろや行政」

まあ、冗談みたいなものだ。個室が欲しいというのは本音だけど、

自分のことを天才だなんてこれっぽっちも思っていないし。

「だよな～。俺だって前の戦争では、国王陛下を守りながらも十六もの首級を上げたんだぜ。もう少し良い待遇しろっつーの」

一人になりたいというのに……。王城は何処に行っても人の気配が絶えない。その上自室が個室じゃないとくれば、不満が出るのも当たり前だ。

「だよな～」

ベットに腰掛けてリッツと駄弁りながら、これからどうするかを頭の片隅で考える。どうせ一人になれないんだったら、本当に秘策を考えるのもいいかもな。つか、秘書の仕事を自分から辞退した俺は暇人になっちゃったし、それ位しかやることがない。

もちろん何も考えないとか何もしないという選択肢もあるにはあるのだが、今の最悪な精神状況ではそれはかえって悪影響だ。何かをして気を紛らわさないとやってらんないよ。

「なんかお前元気ねえなぁ」

とりとめの無い話をしていると、リッツが不意にそう言った。まあ、元気が無いのは確かだ。

「まあ、色々と考えることがあってね」

ただ、リッツは勘が鈍くて助かる。ここで色々詮索されると嫌な気分になってしまうのだが、そんな無神経なことリッツはしなかった。

「へえ……」

本当は分かっていて追及しないのかもしれない。

俺はさっきの思考に戻る。数秒で「そうだ、秘策を考えよう」という結論に達した。そうだな、とりあえずは執務室でジルに返した資料と第一級資料室にあるだろうカタパルト王国北部の地図を持ってこようか。俺は腰を浮かせ、この部屋を出ようと足を一歩前に踏み出す。しかし、俺の行動はつんざく様な奇声によって中断された。

「ああーッ」

何だ？　とその声の主、リッツの方を向く。些細なことでこんな変な行動をする奴じゃない。何か、大変なことに気付いたのだろうか。心配だ。

「おいどうした？」

すると、リッツは唇をわなわなと（？）震わせて一言呟いた。本当にどうしたんだろうか。俺はこの世界での数少ない友人を本気で心配ｓ

「ミクルとした約束。忘れてた」

……心配していた時期もありました。俺の思考を破って耳に届いたその言葉は色々と突っ込み満載だが。

「そうすか」

なんでそんなことで百戦錬磨のお前がびくびくしているんだよと

か、なんでラブコメの主人公やってんだよとか、色々言いたいことはある。でも俺はそれを口には出さなかった。

「んじゃ。お先に失礼するわ」

急いで外に出る支度をしているリッツを横目に俺は部屋を出る。大方、そのみくるちゃんとやらとデートの約束でもしたんだろう。

扉を閉め、俺はもう一度ため息をついた。今度のはリッツとは関係ない。今朝から安息の地がないことを嘆いているのだ。

召喚される前は春休みでのんびりゆったり過ごしていて、家に居る時は暇な時間も多かったのになー。今じゃ穏やかに過ごす時間もないとは。

つーか、これいつ元の世界に帰れんだ？

第3章第7話　吉田亮の憂鬱

「う～ん」

自室に戻り、地図と資料を見比べる俺。ようし秘策を見つけ出すぜぇ！と意気込んだはいいものも、全く思いつかなかった。考え始めてもう二時間は経っただろう。

「あれだよな～。二万人対四万人とかきつ過ぎるよなァ。第一前の戦いと違って、俺達が敵を倒さなければいけないんだから、敵をおびき寄せるのはそう簡単にはいかないし」

カタパルト王国が全兵力を以てフリーダ皇国軍に向かった場合、フリーダ皇国が望むのは会戦だろう。会戦。日本では聞き慣れない言葉だが、ヨーロッパではよく使われた。関ヶ原の戦いなどはそんな感じだ。大規模な兵力を準備してお互いが対峙し戦うことをいう。

「けど、たった半分の兵力で会戦をしても勝ち目なんかないしなァ。文官が相手だったこの前と違って敵は多分戦争のエキスパート」

頭を抱える。とりあえず会戦は却下。つまり、他の方法で敵を圧倒しなければならない。

「あとは、フリーダ皇国軍総大将を殺すとか。……いや、仮にも一国の国王を暗殺なんか出来るわけがないか。精々弱小貴族位にしか通用しないだろうなぁ」

だったら……。俺はそこまで考えて一つのことを思い立った。そうだよ、俺がこの前勝利した要因は何だ？　敵軍を分断したことじ

ゃないか。正直に正面から戦っていても勝てなかった。でも、シャルロワに兵力を三分割させて、それで勝ったんだ。

敵が軍団を二つに分ける。そういう風に誘導すればいい。

では、どうするか。それを考えよう。将棋盤をひっくり返す。つまり、相手の立場になって、兵力を分割するのはどういう時か。

「挟撃、本土急襲、伏兵……」

思考、思考、思考。俺の脳は高速で動いていた。たった半分の兵力で、それでも勝つ方法を模索する為に。

十分経った。しかし、俺の顔は晴れない。なぜなら、敵は挟撃も本土急襲も伏兵も考えないからだ。そもそも敵は兵力でこちらに勝っている。兵士の練度も、将官の質も同程度。士気だってそんなに変わりは無い。そう、フリーダ皇国軍はわざわざそんなまどろっこしいことをする必要がないのだ。フリーダ皇国軍からしてみれば、正面から激突すればいいだけの話。

要するに、普通に戦って勝てるのにわざわざ奇策を弄する奴が居るかっていう話。

「違う！」

だが、その考えを俺は頭から振り払う。現に俺はこの前同じような状況で勝ったじゃないか。考えるんだ。その先には何かがある。

グーーッ。

「……そういえば、腹減ったな。集中し過ぎたからか？　とりあえず飯を食おう」

一旦書類や地図をしまい、俺は食堂に向かう。そういえば、さっきシュマンさんと気まずい感じで別れたよなぁ。ちょっと悪い思い出が俺の心を覆う。鉢合わせなんかしたらヤバいよ、うん。それはもう、幼馴染の親友から告られたのを断った次の日レベルには。

十分ほど経ち食堂に到着した俺は、おっちゃんに栗栖飯を頼んだ。良かった。食堂にシュマンさんが居ない。まあ一日に二度も鉢合わせすることなんか滅多にないよな。良く考えてみれば、待ち合わせをしている訳でもないのに会うはずがないじゃん。

ほっとして栗栖飯を受け取る俺。そこら辺のテーブルに座り、黙々と御飯を口に入れた。しかしふとその手を止め、呟いた。シュマンさんの件で思い出したのだ。

「そういや、まだ答えは出てないんだよなぁ」

俺は自分の手で人を殺した。俺は他人に指図して人を殺させた。そのことが今でも許容できない。別に、カタパルト王国の法律に反している訳じゃない。日本で殺人が犯罪でなくなっても心のしこりは消えないだろう。自分の問題だ。

人は戦争での殺人を基本的に「命令されたから」という理由で正当化する。「殺さなきゃ殺されてた」という理由で殺人を許容する人も居る。だが、俺はそのどちらでもない。

俺にも殺人をしてしまった理由はある。自分の目的を遂行するのに必要不可欠だから。でも、それじゃあ自分を納得できない。罪悪感で心が一杯になるのだ。

「日本で生まれて日本で育ったからなぁ」

七十年間近く戦争が行われず、治安も良かった日本に住んでいたのだから、仕方がない。「人殺しは悪いこと」と教育されてきたのだ。殆どの日本人にとっては、たとえ戦争だとしても殺人はタブーである。そしてそれは俺も例外ではない。

そもそも、俺が殺人を犯す目的すらあやふやだ。確かに俺は元の世界に戻ることを強く望んでいる。しかし、それは人を大量にころしてまで必要なことなのだろうか。元の世界に戻りたいという身勝手な理由で人を殺す、そんなことを俺の心が許容できる訳がなかった。

「ハッ」

自嘲するような笑みがこぼれる。

こんなに悩むくらいなら、いっそ元の世界に戻るのを諦めればいいのになぁ。結局中途半端なんだよ、俺は。元の世界に戻るって強く決意したくせに殺人と言う壁すら乗り越えられない。だからといって、あの決意を覆すことも出来ない。畜生。

涙腺が緩む。だが、俺はそこでふと今居る場所を思い出した。ここは食堂じゃないか。周りに人目があるのに泣けないよ。恥ずかしい。

「あ」

そう思い、裾で目を拭き顔を上げた俺だったが、そこである物を忘れていたのに気付いた。

「食べるの忘れていたよ」

すっかり冷めてしまっている。いつの間にか食う手が止まっていたようだ。急いで栗栖飯を口に入れた。

一分もしないうちに食べ終わり、すぐに皿を返却して自室に戻ろうとする。今は一人になりたい気分だ。

再び無人の部屋に戻った俺はベットに飛び込んだ。強く、強く歯を噛み締める。強く握った手に、温かい水滴が一粒落ちた。

「理不尽だよなぁ。あの時この世界に来なければ、俺はこんなに苦しまなくても済んだのにさ。今頃みんなは楽しく過ごしているだろうなぁ。それに比べて、今の俺は……」

異界の地で俺は一人孤独に四苦八苦している。今の俺よりもっと酷い状況の人間なんて山ほどいるけど。でも、俺は自分の不運を嘆かずにはいられない。そういう問題じゃないんだ。

「まあ、起こったことを今更どう思ったって何も変わらないってのは分かっているんだけどさ。ハァ」

強くなりたい。もっと、もっと強い心が欲しい。

俺は小さくかぶりを振り、ベットから起き上がった。こんなことをしていても何も変わらない。秘策でも考えよう。椅子に座り、俺は頬杖をついた。戦略や戦術のことを考えていると戦争でのトラウマを忘れられるんだ。

「う～ん。やっぱり会戦は危険だなぁ。奇策しかないか。となると、狙いを定めなきゃな。ふむ」

正攻法で行けば、狙わなければならないのは北部の要クリム城だろう。なんとかフリーダ皇国軍を突破してクリム城を落とせば、それだけで状況は優位に傾く。もちろんフリーダ皇国側もそんなことは分かりきっているだろうから、城攻めは困難極まりないだろう。何か俺がアイディアを出さないといけない。

しかし奇策に奇策を重ねるのもアリかもしれない。クリム城を襲うと見せかけて敵を誘導、その隙に狙いの物をいただく。もちろん勝利に有効な物を狙わなければならない。そう考えると限られてくる訳で。

「兵站」

具体的にはフリーダ皇国軍の非戦闘員や食糧などを優先して狙う。これは意外と良い案かもしれない。

フリーダ皇国は、四万と言う大軍を編成して山越えも決行してそし

て今このカタパルト王国に迫っている。この状況が指し示すこと。それは、

「食糧を焼けば、それだけで勝てる」

山が邪魔するので、食糧をフリーダ皇国から運ぶのは困難だろう。つまり、今俺達がフリーダ皇国の食糧を焼き尽くせば、フリーダ皇国は飢餓で士気を失うのである。クリム城を落とすよりは簡単だ。

普通軍隊は食糧を持参してそれを食べながら戦争を行う。探検に置き換えると分かりやすいかもしれない。ある森の奥深くを調査しなければならないと仮定しよう。この場合探検隊がフリーダ皇国である。探検隊はもちろん食糧を持参する。しかし、もしそれが全て消え失せたらどうなるだろうか。食べる物がない、そんな状況に陥る。草の中から毒の無い物を選び、虫や動物を殺して食べる。それ以外に生き残る方法はないだろう。

それと同じこと。食糧を失ったフリーダ皇国軍は飢えを凌ぐ為現地、つまりカタパルト王国で食糧を徴収するしかなくなるのだ。だが、そこら辺の農村を漁った所で四万人を養う食べ物を調達できるはずがない。つまりはジ・エンド。飢餓状態に追い込まれたフリーダ皇国は撤退するだろう。

まあ、実際やってみたとしてそんなに巧くいく訳じゃない。クリム城に多少の食糧はあるだろうし、頑張って山越えすれば食糧を少しは調達できる。そのためすぐには飢餓状態にならないだろう。

「戦争のプロは兵站を語り、戦争の素人は戦略を語る、かぁ。よく言ったもんだなぁ。俺も一度位言ってみたいもんだ」

とはいえ、それらは全て成功すればの話である。その手段を俺は考えなければならない。兵站も重要だけど、やっぱ戦略も大事だよね。素人でサーセン。

「よし、考えるぞ」

第3章第8話　シュジンコー、馬を買う

秘密会議の日から一夜明けた。

「う～ん、いい目覚めだ」

目の辺りをごしごしと擦り、むくりと体を持ち上げる。快眠快眠。まだ戦争の疲れが残っているのでだるさが全くないとは言えないが、上々だ。

朝飯を食べる為服を着替える。今日は何を食べようかなぁと考えながら、部屋のドアを開けた。

栗栖飯もラーメンも昨日食べたしなぁ。玉蜀黍汁（とうもろこしじる）でも食べようか。ちなみに玉蜀黍汁は読み方で分かるように、トウモロコシのスープである。美味しくて、朝食べるのには持って来いな一品だ。やっぱ、朝はさっぱり系だよねー。じゃあ何で昨日の朝ラーメンを食べたんだよと言われると、何も言い返せないけど。昨日は動転していたんだ。

「リョウ殿」

はい？　と前を向くと、そこには三十代のおじさんが立っていた。気さくそうな表情をしている。敵意は無いようだ。ますおさんのような外見とは裏腹に丸太のような腕と脚を持っている。正統派マッチョだな。

ただ、彼は左手にギブスを付けていた。戦争で怪我したのだろうか。

「私は国王陛下直属近衛精兵部隊第八小隊隊長のグランです。よろしく」

長ーい自分の階位を言って、手を伸ばしてきた。良く分からないけれど、とりあえず握手しておく。敵意は無いんだし。それにしても、いきなりなんだろう。知り合いでもないのに握手を求めるとは。俺はあまり軍部の人間と仲が良い訳ではないのに。

「どうして、という顔をしていますな。実は、ジル陛下からある任務を仰せつかったのです」

任務？

俺と関係ある任務か。グランさんと共同作業でもするのかな。

「とりあえず、陛下のいらっしゃる執務室に来て下さい」

俺の頭は？で一杯。だが来て下さいと言われたからとりあえず行こう。ジルから何かの説明があるんだろうし。

「まあそういうこと。頑張ってね～」

三十分後。執務室に着き、ジルから説明を受けた俺はジルの温かい（？）声援を受けてグランさんと共に部屋を出た。どういう説明をされたのか。

ジルの長ったらしい言葉を要約すると、俺みたいな戦争の素人が前回みたいに本隊とはぐれて単騎で戦っていては命がいくつあって

も足りないので、グランさんから乗馬技術を教えてもらうことになったのだ。

「でも三日で乗れるようになるんですかねぇ」

「難しいと言えるでしょう。まあ、二十四時間ずっと特訓を続ければなんとかなるかと」

睡眠時間がないじゃんか。意外とお茶目な人だな。

それにしても、ジルの野郎、三日以内に乗馬できるようになれってのは、いくらなんでも無茶ぶりだろ。理由は説明されなくても分かる。俺達は戦争の準備が出来次第王城を出発するつもりなのだ。あと大体三日程で用意が済むので、それまでに乗馬できるようにしようずという話。

さて、何故グランさんが乗馬教室を開くに至ったのかを補足しておこう。別段彼が乗馬の達人だったという訳ではない。

グランさんはこの間のシャルロワとの戦いで左腕に怪我を負った。シャルロワ軍の本陣を奇襲した近衛隊にいたのだから仕方ないだろう。激戦だったし。

まあそういうことで、しばらくは戦争に加われなくなってしまったのだ。左手は彼の利き手。利き手が塞がれていたんじゃ戦えない。もしも負傷したのが右腕だったら次の戦争にも参加ししていたと、グランさんは残念そうに言っていた。

「左腕の怪我が治るまでやることがないんだ。へえ～。暇なんだったら、リョウに乗馬でも教えてくれない？」というノリになってい

たかと思われ。

「そういや、グランさんって何歳なんですか？　あ、敬語使わなくていいですよ。年上の人に敬語を使われるのってあんまり好きじゃないんで」

回想が終わり暇になったので、グランさんとの対話を試みる。もちろん敬語はやめてもらおう。

「そうかい？　あ、君も敬語使わなくていいよ。え～と、それで質問に答えるけど、私は三十四歳だ。七歳の息子と四歳の娘がいる。君は何歳なんだい？」

意外と饒舌な人らしい。性格も、ますおさんに似てるな。

「俺は十五歳……いや、もう十六歳か」

俺の誕生日は五月二日。召喚されたのは確か四月八日だった。この世界に来てから一カ月程経っているので、もう誕生日は迎えたかな？

「十六歳？　まだ成人したばかりじゃないか。そんなに若いのに、凄いなぁ」

この国では成人は十六歳らしいな。ていうか、何が凄いんだろう。そう思い聞き返すと、グランさんはリッツと同じようなことを言った。

「なんでも、秘書の身でありながら国王陛下や閣僚の方々に『分断作戦』とやらを献策し、カタパルト王国を勝利に導いたそうじゃな

いか。越権行為だったのを圧倒的な功績で見逃してもらった。大したもんだねぇ」

意外に俺の功績は広く広まっているらしい。確かに真正面から戦っても勝つことは容易ではなかったから、俺が勝利を導いたというのも嘘ではない。

「いや、そんな凄いことをした訳じゃないよ。国王陛下の直臣である一騎当千のみんなが奮戦したから勝っているんだし。みんながシャルロワ軍と同じ程度の強さだったら、あの状況を作り出しても負けていたと思う」

しかし、この戦いのもう一つの勝因は練兵、つまり兵士の質だ。俺の作戦と直臣の強さ、この二つがあって初めてあの戦に勝つことができたのだ。

「まあ、確かに私達はカタパルト王国の旗本として十分誇りを持っているけどね。リョウ殿の献策が無ければ数の暴力に屈していたかもしれないよ。その可能性は高かった」

褒め合い合戦を止めるべく、グランさんは俺が「いえいえとんでもないですぅ～」と言う前に違う話題を切り出した。

「そういえば、リョウ殿には家族はいるのかい？」

……鬱だ、死のう。

「あ、いや済まない。無神経だったな」

グランさんは俺の琴線に触れてしまったことを感じたらしく、申

し訳なさそうな顔をしている。デジャヴだ。前にシュマンさんともこんなことがあった。俺って禁断ワードが多すぎるんだよなぁ。

「いや、大したことじゃないんだけどね。もしかしたら一生会えないかもしれないけれど、俺はいつか戻れ……会えるって信じているから」

いや、信じているなんて嘘だ。自分のこの手で、いつの日か必ず日本に戻るって決心した。まあ訂正するのが面倒だからいっか。

「そ、そうか」

しばらく無言のままお互い歩く。若干気まずさがあり、どちらからも話しかけにくい状況になった。

そういえば、執務室を出てから結構経っているのにまだ目的地には到着しないのかなぁ。

「そういえば、あとどれ位で目的地に着くの？　ていうか何処に向かっているの？」

「あと十分ほどかかるね。今向かっているのは馬小屋。君用の馬を出しに行っているんだ」

十分か。だるいな。ずっと歩くのかよ。

「へ～、兵士一人一人に専属の馬が居るんだ」

戦いが起こる度に馬を適当に選んでいるんだと思っていた。グランさんは俺の言葉を、訂正を加えつつ肯定した。

「近衛隊と騎馬隊、上位の士官の方々はそうだね。荷駄を運ぶのにも馬は必要だから無所属の馬っていうのはかなり存在するけど。専属の馬が使えなくなった人は無所属の馬から自分の馬を選ぶ制度になっているだんよ。馬を買うのはたまにしかしないからね」

相槌を打ち、その瞬間俺は体を飛び上がらせた。その原因は騒音だ。

「「「「「はい？」」」」」

体育会系のノリっぽい。軍隊だしね。グランさんは俺の挙動から返事の声の大きさに驚いたものだと理解して、俺に説明をしてくれた。

「ああ、今訓練中のようだね。あれは……騎士団第五小隊か」

「訓練？　一昨日戦争から帰って来たばかりなのに？」

まだ疲労も残っているだろうに。

「一応昨日に休みをとっているからね。でも、しばらくの間は訓練をするのは三時間だけだよ。いつ出兵してもおかしくない状況だし。ちなみに訓練の時間は小隊ごとにずらしてあるよ。いつなんどきでも兵士を動員できるようにね」

近衛隊小隊長ともなれば情報はかなり入ってくるらしい。いつなんどきでも兵士を動員できる態勢になっているのは知っていたが、それ以外のことは知らなかった。

その後もしばらく無言で歩いていると、遂に目的地に到着した。そこは馬小屋。グランさんはポケットから鍵を取り出し、一匹の馬を馬小屋から出した。信〇の野望（歴史シミュレーションゲーム）でしか聞いたことのない馬の「ヒヒーン」という声を聞き、意外な音のでかさにびっくりする。

「じゃあ、早速だけど乗馬訓練を始めてもらおうか。はい、乗って乗ってー」

あれ？　何かコツとかないの？

一応グランさんの言うとおり馬の背中に乗った俺だったが、その先には地獄っぽい感じの特訓が待っていた。

「ここでやると危ないから、柵で四方が仕切られているあそこまで行くよー。今の内に慣れておいてね」

今の内？　良く分からないが、とりあえず馬に乗ってればいいんだろう。しかし自動で馬が動くのかと思いきや、予想に反して馬は微動だにしない。

「ああ、足でちょっと締めつけてやれば歩くよ。いいかい、ちょっとだからね。あんまりきつく締めると走っちゃうから」

うわ、そういう風に言われると怖いなぁ。グランさんの助言通り俺は優しく優しく締めつける。すると、馬が動き出した。なんか感動だね。

「そうそう、良い感じ」

そのまま歩いて柵が四方を囲んでいる所に到着した。俺がその中に入ると、グランさんは自分は入らずに外から入口の鍵を閉めた。え。

「俺は何するの？」

そこで出たグランさんの驚愕の一言。

「走り回ってもらいます」

この日ほど、治癒魔法の存在が有難かった日は無い。後に僕はそう回想した。……って、一人称変わってるじゃねーか？

第3章第8話　シュジンコー、馬を買う（後書き）

キャラがまた増えた……。増やし過ぎ感。まあ後々の為にはキャラは増やしておきたいし、しゃーないかな……。とりま、この人はしばらくモブキャラです。もしかしたら、2年後くらいには「閃光のグラン」とか二つ名がつくかも……嘘だけど。

第3章第9話　渡り廊下歩き隊

「痛ぇ……」

昨日の乗馬訓練は本当にきつかった。何度も何度も馬に振り落とされて、その度に擦り傷打撲は当たり前、骨折や脳震盪すら起こる始末だ。日が沈みようやく特訓が終わりを告げた時、全俺が泣いた。主に嬉し泣きという意味で。

治癒魔法で酷い傷は全部治してもらったんだけど、擦り傷等の軽傷は残ったままだからなー。おかげで寝ようとベットに飛び込んだ時擦り傷が痛んで悲鳴を上げちゃたよ。

今日も午後から乗馬訓練をやるらしい。朝飯をリッツと一緒に食べた俺は部屋に籠り、秘策を練り上げている。リッツは今日は一日中休暇らしいが、午前中は後宮（ハーレム）の女の子達といちゃいちゃするらしい。ちょっと殺意が湧いた。

とはいえ、見た目も中身も凡夫な俺と美形な上に強いリッツとで、女性からの扱いが違うのはしょうがないかな。

そんなことより、秘策を考えよう秘策を。とりま、兵站への攻撃方法でも検討しようか。

「ふむ、兵站への攻撃か。難しいな。フリーダ皇国軍四万人は既にクリム城を落とし、南下している。兵站を攻撃するにはその四万人を突破しなければならない」

兵力が互角以上ならまだしも、圧倒的に兵力差のあるこの状況では、兵站線に大打撃を与えるのは不可能に近いだろう。完全に煮詰

まった。

敵を罠にかけようとしても、フリーダ皇国の方が兵力は二倍もあるのでそうそう馬鹿な真似はやらかさないだろう。

会戦を仕掛けても、半分の兵力じゃ心許ない。古今東西、半分以下の兵力で勝利した戦争はたくさんあるが、それとこれは条件が違うのだ。たとえば、運が良かったとか。たとえば、士気が異常に高かったとか。敵が油断していたとか。たとえば兵隊の練度が高かったとか。新兵器を使ったとか。

カタパルト王国軍とフリーダ皇国軍。士気も練度も兵器も全て同程度である。その上敵将はなかなかの武将。油断も焦りも見せていないとなれば、たった半分で勝つのは相当難しいだろう。運か策。この二つのどちらか、もしくは両方に頼るしかない。

「フリーダ皇国軍には無い特長を、カタパルト王国軍が持っていればそれを生かした作戦だのなんだのできるんだがなぁ」

そうだ、執務室に行こう。ジルは諜報局を直接管理しているので、なんか勝ちにつながる情報があるかもしれない。あと、ブルゴー騎士団長にも話をしに行こう。軍隊の特長を抑えているのはやはり彼だろうし。じゃあ、ま、行きますか。

部屋を出て、俺は明るい声の絶えない王城を歩く。まだ戦争に勝ったわけでもないのに、気楽なものだ。

暗いとそれはそれで嫌なんだけどさ。不安な先行きを悩むこと無い彼らが、少し羨ましいわ。

渡り廊下を歩きながら、俺は過去のことを回想する。昔はここら

辺の土地勘（むしろ城勘？）が無くてしょっちゅう迷ってたよなぁ、と。今となってはいい思い出。一か月も居れば大体覚えたし。

「そういや、戦勝の宴今回はやってないよなー」

ぼーっとしていたら、良く分からない単語が耳に届いた。二人の見たことのある青年が談笑している。片方は女顔、もう片方はサル顔だ。まあキツネ顔の俺に容姿をどうこう言える道理はないんだが。

戦勝の宴って何よそれと俺は思ったのだが、女顔君は知っているようで普通に受け答えした。

「だな。舞踏会も開いてないし、そんだけ上も大変なのかな」

ああもうそりゃあ大変だよ糞野郎と口を挟みたいが黙っておく。丁度進行方向は同じなので安心して聞き耳を立てれるしな。

「舞踏会、かぁ。麗しのエリア姫殿下にお会いできる数少ない機会なのになぁ。フリーダ皇国の奴らを倒せば開かれるのかねぇ」

サル顔が言っていることはもっともだ。フリーダ皇国軍を撃破するまでカタパルト王国に安息は無い。つーか、エリア姫って誰よ。良く考えると俺はジル以外の王族を知らない。

「だよな。戦争なんかさっさと終わってほしいよ」

女顔は悟りきった顔で同調した。

「まあ戦争が終わればまたマリーといちゃいちゃできるもんな」

相方の返しに女顔は顔を真っ赤にした。典型的なラブコメ、いやハーレムじゃないから違うか。違うな、うん。それでも言わせてもらおう。

「リア充ｏｒｚ」

口が滑った。周りは？な表情をして俺の方向を向いたが、まあいいやと思ったのかすぐに俺への興味を失くした。

ま、リア充って言葉も乙って言葉もこの世界に普及している訳がない言葉だからな。むしろ日本人でもこの言葉を知っている人は割と少ないのではないか。

気を取り直そう。俺はリト達と別れ、一人執務室に向かう。いえま、彼らとは知り合いですらなかったんですがね。

上の方の階になると人通りが少なく、とても静かだ。俺はにぎやかな方が好きなのでちょっと居ずらい。

「ふう、着いたな」

こういう風に独り言を漏らすと声が響くのだ。人通りが少ないと言っても歩いている人の数はゼロではないので、誰かが聞いているかと思うと少し恥ずかしい。

ま、そんなことは置いといて。俺は執務室に失礼しまーすと言いながら入った。

「やあリョウ。どうだい、秘策ははかどっているかな？」

なかなかの上機嫌の様子。隣に居るのはきつい性格してます、有能な第二秘書リディーさん。つい最近秘書をやめた俺的には彼女と会うのは気まずいなぁ。色々ごたごたが起きてしまい最終的にやめたバイトの店長さんと道でばったり遭遇した時くらい気まずい。ちょっと実体験込みです。

「全然だ。現状が厳しすぎて、今の所全く秘策が浮かばない。とりあえず色々と情報を仕入れに来たんだけど、忙しい？」

よく考えると、国王にわざわざ情報を教えてもらいに来るというのも変な話だ。

「はい、只今国王陛下は大変忙しくていらっしゃいます」

俺の問いに答えたのはジルではなくリディーさん。「私は拒絶する？」って感じの空気をビシビシ放っている。

でも、情報が無いと秘策を考えることができないのも確かな訳で。俺は頬を掻いて参ったなぁと口にした。うん、本当に参った。すると、ジルが代案を出してきた。

「そうだね、じゃあゲイツ諜報局長と話したらどうだい？　彼は王城の諜報局室に居るはずだよ」

ほう、諜報局か。情報を一手に担う、重要な役職である。ジルよりも多く情報を持っているだろう。恐らく国王専用組織なのだろうが国を守るのにそんなこと言っている訳にはいかない。諜報局が有能な組織だったら俺に情報を与えてくれるだろう。

「良い案だな。じゃあ早速行きますか。じゃあねジル」

「じゃあねリョウ」

俺は情報を求めて執務室を後にした。閉めた扉を背に、ひとまず深呼吸。ちょっと緊張してるかな。

まあ無理もない。俺はそのゲイツ諜報局長に会ったことはないのだ。俺の元居た世界は人間第一印象でその人への評価が決まるとさえ言われる世の中。戦乱の世なのでそれよりもっとシビアだ。舐められたら終わり。ある意味やーさんとも共通しているが、やっていることは同じだろう。戦争業だ。

そしてもう一つ俺が緊張している理由がある。こっちの方は俺の努力ではどうにもならないものだが、かなり俺の未来に関係することだ。というのも、俺はそのゲイツ諜報局長の能力の高低、性格のタイプというものを全く知らないのだ。

だから、俺はもしも彼が無能だったらと思うと心配でたまらない。逆に、有能過ぎても怖い。有能と言うことは、つまり俺の行動を逐一抑えられるということなのだから。また、性格のタイプもこれまた然り。情報を司るゲイツ諜報局長と馬が合わなかったら、それは俺がカタパルト王国で出世していく上での大きな障害ともなり得る。

「まあ、頭の中で考えてばっかじゃ始まらないか。レッツゴー、だな」

俺は、諜報局室の扉を開き、そこで行われていたことをこの目で見て、そして

「……、ｗｈａｔ？」

絶句した。いえま、一応言葉は放っているんですけどね。

第3章第9話　渡り廊下歩き隊（後書き）

戦争の足音が。ひたひた、ひたひた。

第３章第１０話　皇国の守護者的な人

諜報局。

１９代国王アラキ・カタパルトが導入した機関である。諜報だけでなく、誤情報の流布、破壊工作、調略などの任務も背負う。アメリカのＣＩＡ、伊達政宗の黒脛巾組のような組織と考えると分かり易い。貴族の中には彼らをバカにする者も居るが、代々の国王は諜報局というものをある程度は重視していた。どんな政策をとるにしても情報は必要だし、後ろ暗いことの一つや二つ許容できなければ中原の大国と対等な関係は築けない。

とまあ、前置きはさておき。俺は諜報局本部にいる人員を見て絶句した。なにしろ、ここに居た五、六人全員が老人なのである。歯が抜け落ちている者、髪が抜け落ちている者。黒々とした髪を持つ人も健康的な肌を保っている人もここにはいない。

「どうしたのじゃ？」

代表格にあるであろう局長席に座る老婆（ここ大事。ラノベだと十歳位のおにゃのこがってなるけど、幼女は出ないので悪しからず）が俺に尋ねた。何故俺が驚いているのか分からないらしい。だが、ここに来て俺は冷静さを取り戻していた。別に幼女が局長な訳じゃないし、老人が変な言葉遣いをするわけでもない。ちょっとばかし平均年齢が高いだけだ。そう考えるとこの諜報局は普通である。

「いえ、なんでも。そんなことより、少しばかり用がありましてね。それで、国王陛下から貴方方のことを教えてもらったんですよ」

さて、果たしてこの老人達は無能なのか、有能なのか。じっくり

見定めるとしよう。老人達も見定めるような視線を俺に投げかける。

「ほう、それでは君があの」

歯が全て抜け落ちている老人が息をもらした。話は伝わっているらしい。

「まあ、大した用じゃないんですが。フリーダ皇国軍の陣容とその性格を教えてもらいたいだけです」

用件を切り出すと、老婆は少し眉を潜めた。

「それは、わしらの調べたこと殆どすべてが知りたいと、そういうことかね」

しばしの沈黙。あちらさんからはそれを破る気はなさそうなので、俺が口を開いた。

「そうですね、ええ、つまりはそういうことです」

「ほう」

と、また歯の抜けた老人が呟く。俺は夜神月よろしく一層笑みを深めた。だが他の人間は笑っていない。凍りついた雰囲気。

その場の主導権を握った俺は、しかしながら少し失敗したかなと反省した。あまり空気が固いと後々の彼らとの関係がうまくいかなくなるかもしれない。俺の出世には諜報局との綿密な関係が必須なのだ。情報は千金にも値する。

「小僧。……調子に乗るなよ？」

老婆の、牛肉を引き裂いたかのような壮絶な笑みにそれでも俺は動じない。もちろん俺の心は恐怖に震えているが、それを表に出す俺ではないのだ。

「いえいえ、僕はただ協力を要請しているだけですよ。この国の為に、ね」

ハッタリで対抗するという手段もないことはなかった。だが、それは失敗した時が怖い。もっと友好的に行こうぜ。

「国の為に？　笑わせる。お前の顔からはそんなものは少しも読み取れんな」

「いえいえ、僕はこれでもこの国に忠誠を誓う立派な役人です」

「異郷から来たのに、か？」

「だからこそ、ですかね」

彼らは俺がカタパルト王国の人間でないことを把握しているらしい。そうでなくちゃな。あんま危ない人間じゃなさそうだし、有能だし、後は彼らに好印象を与えるだけだ。それが難しいんだけど。

「ふぉっふぉっふぉ。面白い。王国の暗部にずっとかかわって来たわしじゃが、お前の様な人間は珍しく、また面白い。情報は与えよう。陛下からのお達しじゃしの、仕方ない」

ありがたい。好印象を与えられたかは不明だが、とりあえず協力はしてくれるようだ。

「まあ待っておれ。一時間もしたら幹部を派遣する」

「ありがたいです。国を守る為共に協力しましょう」

口角を吊りあげ、手を差し出す。老婆もまた口元に笑みを浮かべながらそれに応えた。その手は力強く、とても老婆とは思えない。面白い。

俺は対談の成功を感じつつ、諜報局室を去って行った。

「と思った俺がバカだった」

期待を抱えつつ秘書室に居た俺を訪れた諜報局幹部は、俺の予想とは正反対な感じの青年だった。

「ちぃーっす。リョウさんっスか？」

「そうだけど……君が諜報局の幹部？」

「そうっすけど、今何でバカって言ったんスか？つーか俺幹部？ブーカンって言われたの初めてっすよ、俺ギザ格好いいっすね」

容姿は説明しなくてもいいだろう。こんな感じの人である。よくこんなのがあの老人に認められたな。初対面の人と仕事で相対して

るのに、何だこの緊張感の無さ。いや、第一印象に取り込まれては駄目だ。これは俺を試す為の演技かもしれない。何ってったって諜報局の幹部。一筋縄でいくだろうと考えるのが間違いである。

「で、早速だけど情報頼むわ」

すると、チャラ男はポケットからある紙を取り出した。瞬間、チャラ男の目の色が変わる。これは、人間がある一つのことに対して集中する時に出る色。ということは、その紙に情報が？でもチャラ男が持っている紙は精々２０文字くらいしか書けなさそうな小さいものだ。

「ンじゃ、早速っすけど話し始めるっス。書きとめないで、頭に保管しておいて貰いたいっス」

紙を手から離し、チャラ男は話し始めた。フリーダ皇国軍の情報を。そしてそれは、俺の考えていた戦術を木っ端みじんに破壊する内容だった。

フリーダ皇国軍を率いるのは賢王と呼ばれるガストン皇王。彼は堅実な戦術・戦略を好み、奇策を行ったことは少ないらしい。どっしり腰を据えた大将で、親分肌と言う。過去、ラクル連邦やセリウス王国に会戦を挑み見事勝利した。しかし一方でラクル連邦との会戦後も続いた局地戦は皇国不利になったらしい。会戦は得意らしいが、戦略的素養はあまり持っていないのだろう。

従う将軍は、まずベーグル・ライル。皇国の中では一目おかれる大将軍だ。歳は４３。兵站の構築や運用が得意らしく、ある意味文官の様な男である。

しかし戦争での働きが苦手と言う訳でもなく、用兵の面でも活躍

を見せる。フリーダ皇国では一部の校尉には「守護神」と言われ尊敬されているらしい。

他にもババロア、バナジューム、エリエー等古兵が従っている。バナジューム一人を除いて全員が４０歳以上のベテランであり、若い将軍にありがちなミスは望めないと言っていいだろう。

皇国軍の内訳は、騎馬隊１００００、魔術師隊３０００、重装歩兵隊１００００、軽装歩兵隊２５０００。歩兵を中央に騎兵を両翼に配置する、基本に忠実な陣形だと考えられる。魔術師隊は決戦戦力であろう。

「これがフリーダ皇国軍のヨージーっすよ」

どうやらこの世界だけでの造語もたくさん作られているらしい。陣容→ヨージーということだろう、多分。これが暗号だったら面白い。

いや、そんなことよりも今のって結構重要な発言じゃね？

「そのライル将軍ってのは、兵站が得意なんだよな？ってことは……」

「そうっスけど、なんかあったんスか？」

頭の上に？マークを浮かべ、良く分からないといった表情をするチャラ男。しかし説明することに意味は無い。今となっては今まで考えてきた作戦は水の泡だ。兵站のプロが相手となっちゃ、兵站線潰しなんて却って不利を招くだけである。

何でも無いと答え、俺は再考した。どうするべきか。やはり、会戦は防げないのだろうか。防げないだろう。しかし、半分の兵力で勝てるとは思えない。

「なあ、フリーダ皇国の指揮を執るのはガストン皇王だよな」

「スっよ」

「ガストン皇王の過去の戦歴、調べ上げてくれないか？詳しく知りたい」

「戦歴っスか。分かったっス」

ガストン皇王の戦績は、６戦中４勝１敗１分け。

会戦の戦術目標は両翼もしくは片翼突破が常。中央の歩兵で敵の攻勢を防ぎ、両翼の強力な騎兵を以て両翼の内どちらかもしくは両方を突破する、という戦術である。

結果も出している。勝率が半分を超えていることからもそれは明らかだ。戦術眼もなかなかのものらしく、決戦兵力の魔術師隊の投入のタイミングは最適である。

一方負ける時はどのような負け方をしたのかと言うと、中央突破らしい。フリーダ皇国軍は両翼の騎兵と中央の歩兵の連携がうまくとれず、そこを巧く突かれた。丁度両翼の騎兵を前方へ突撃させた時に間隙を突かれ、戦列を突破される。フリーダ皇国軍の後背に回った敵勢はフリーダ皇国軍本陣を後方から急襲し、大勝利。あと少しのところでガストン皇王は戦死しそうだったらしい。

五万対三万。それを見抜いた将帥も見事だが、兵力差は二万だ。

負けは負けであり、ガストン皇王最大の失策はこの戦いだと言う人も多い。

要するに、敵軍の将帥は騎馬隊を動かして攻勢に出ようとした、その出鼻を捉えたということだ。

「出鼻か」

剣道を俺はやっていたがこれは出鼻面という技に似ている。出鼻面は敵が動こうとしたその瞬間を狙う技だ。アイデアとして剣道の技を活用するのもアリかもしれない。

「そうっス」

ただ、留意しなければならない点が二つある。

一つは、その戦いを再現しようとしたとして、同じことをやってのけることができるのかどうかである。中央突破を成し遂げた将帥は大変戦術眼の優れた男で、戦場の風向きを察知することに長けていたらしい。俺にそんな特殊能力はあるのかどうか分からないし、ないと思う。

もう一つは、ガストン皇王はその弱点を既に補強しているだろうということだ。敗北したのは三年前。何か対抗策をとっていてもおかしくない。もしかしたら未だに弱点がそのままかもしれない、なんて甘い考えを持って戦うのは危険である。

そして今、俺は既に一つの策が漠然としながらも思い浮かんでいた。

ガストン皇王には幸い勝利の『パターン』がある。その戦術は確かに強い。兵力でも士気でも上回っている皇国軍にとっては、それ

を採用するだけで勝利が確定的になるといっても過言ではないだろう。
ただし――――それは、俺達が無策あるいは愚策を以て戦う、という条件付きだ。

「……、ならば」

フリーダ皇国軍の必勝の策の根幹に、その源に風穴を開ければいい。そう、たったそれだけだ。
それだけに、実行するのは難を極める。が。

「やってみる、価値はある」

俺は頬杖をついた。チャラ男が部屋を去る。しかし、それにさえ気付かないほどに俺は思考の渦に飲み込まれていった。

第3章第11話　裏切りは俺の名前を知っている？（汗

次の日。

昨日もあったグランさんの厳しい乗馬訓練をきつかったなあと回想しながら俺は朝飯を食っていた。最早夢でも馬に追われる始末。俺はこの訓練で却って馬に対する恐怖感は倍増したかもしれない。馬じゃなくてスパルタモードのグランさんが怖いんだけどね。怒鳴って言うことを聞かせる訳ではないが、ともかく訓練がきつい。地獄の練習メニューだ。まあそのおかげで、乗馬できるようになって来たんだけどね。

そして、その訓練は今日もある。三日って言ってたから今日で最後だろう。

「今日も午前中は戦術立案、午後は訓練かぁ。１日中ダラダラしたりできないのかなぁ」

言った傍から自分の言葉に突っ込むようでアレだが、よくよく考えればこの世界には暇をつぶす物は無いんだなー。ＰＣも携帯も本もテレビもゲームも無い。そう考えると日々やることがあるのはいいことだった。娯楽がたくさんあった元の世界が懐かしいわ。

まあそもそも俺が何らかの作戦を立案しないと、カタパルト王国がこの世界から消えてしまう可能性が高いままなので、ダラダラする訳にはいかないのだが。ふむ。

「ご馳走様ー」

朝食を片付けた俺の足は図書館へと向かう。静かで集中できる場所は他にないのだ。なんかこう、図書館の独特な雰囲気が良い感じの集中力を醸し出すんだよねー。勉強だってさ、家でやるとついついゲームしたりパソコンに手をのばしちゃったりするけど、図書館だと集中できるじゃん？

図書館に着き、戦術関連の書籍がある所に座り込んだ俺は、今回採ろうと思っている作戦についての本を右の手に取った。ちなみに左手には戦場と予測される幾つかの場所の地図がある。今朝チャラ男が来て俺に戦場予測地等を教えてくれたのだ。恐らく昨日は思考に入った俺を気遣ってくれたのだろう。ありがたい。

「二万対四万。まあシャルロワに勝ったからもう少し味方は増えるだろうけど、軍勢が敵のほぼ半分じゃなぁ……。俺の考えている奇策が成功しても、勝てるかどうか微妙なラインだわ」

グラビット鉱山を攻略し、周辺地域を次々と併呑しようとしているフリーダ皇国軍。カタパルト王国軍も寡勢なのにシャルロワ軍に勝った。よって士気は五分五分くらい。奇策を成功させるには綿密な打ち合わせがないと厳しいな。勢いで押し切れればいいのだが、士気的にそれは無理だ。半月くらいは指揮官総員で打ち合わせしなきゃ。待つ必要がある。

でも、そのためだけに何もしないで待ってるだけじゃ時間が勿体ない。それに、完全に受けの態勢に入るのは危ない。攻めを見せつつ待つってのができればいいな。

特殊部隊でも先行させて糧道でも叩くか。

本格的に叩かなくても、小出しに様々な拠点を叩いていけば、敵はこちらの意図を読もうと思い慎重になるだろう。いや、こちらの意図を誤認させれば尚良い。

カタパルト王国軍がフリーダ皇国軍の兵站線へ大攻勢をかけようとしている、とフリーダ皇国軍に推測させる様な動きをすれば、フリーダ皇国軍の形は多少なりとも崩れるだろう。そしてその瞬間、敵の思いもしない所を叩く。

うん、これなら緒戦を制することも可能だろう。勝利で手にするものは少ないが、それでフリーダ皇国軍の動きを止めれば十分だ。いい案見っけ。

また、会戦での策を成功させる為には何か決戦兵力ｏｒ兵器が必要だ。魔術師の部隊は確かに強い火力を持っているが、敵も同数の魔術師を擁しているのでそれだけじゃ不十分。信長みたく長い槍を使わせるか？　……厳しいな。短時間で長槍を使いこなせるようになる人数は少ないだろう。

いや、待てよ。決戦兵器なら案外簡単に考えつくんじゃないか？日本の教育水準は元の世界の中でも上の方だったし、科学の知識を生かせれば何かできるかもしれない。粉塵爆発なんて小説でよく使われているだろ。その要領でいけばなんとかなるかもしれん。カタパルト王国の科学者達にアイデアを貰おうか。

「ふむ。ここの地形、もしかしたら利用できるかもしれん」

昨日チャラ男が言っていた「戦場になる可能性の高い」場所の一つだ。一定の時刻に雨が降るだとか霧が沸くだとかそういう地形は、異端者であるフリーダ皇国軍に対して悪い方向に作用する可能性が高いので大歓迎なのである。

「あれ？」

そこで、俺はとある事実に気付く。視線の先は地図の中でもクリム城の周辺。大きな街道の全てがクリム城周辺にあるのだ。クリム城と関わりのない街道の中に大規模なものは、ない。つまり、クリム城こそがフリーダ皇国軍の兵站線の要所なのである。

ライルという兵站の得意な将軍がいなくても、結局兵站を攻めるのは無理だった。頑張って食糧を奪ったり焼いたりしても、クリム城に支えられた兵站線がある限りフリーダ皇国軍が飢えることはないだろう。いくらなんでもこんなに固い城を落とすとか無理だし、最初から兵糧攻めはムリポだったらしい。

その後落胆しつつも色々な策を検討し、もう大体アイデアが出尽くしたと思われるところで俺は図書館を出た。

それにしても、あっという間に時間が経った。もう昼飯の時間だ。

「お前今度はアンの奴といちゃついてたんだって？　食えない奴だなあ」

「いや、誤解だよそれは！　たまたま転んだ時に押し倒しちゃっただけだって！」

「羨ましいねぇ」

「人の話聞けよ！」

「いやいや、でも真面目な話、お前結構な人数の女の子に好意持たれてんぞ。この分だと、男まで落とせちゃうんじゃねーの？」

「だからそれはお前の深読みだって言ってんじゃんか！」

前にも見たことがあるような童顔とサル顔コンビのやかましい遣り取りをぼーっとして聞きながら、俺はどんどんテンションが下がっていくのを感じた。悩みがなくて羨ましいなぁおい。こちとらたった十五歳で国の命運とか殺人の罪悪感を背負ってんのによぉ。

「あっ……すいません」

「いや、こちらこそすいません」

おっと。自己逃避するあまりに周りへの注意を怠ってしまったようだ。ぶつかったのが俺より階級が下位の、恐らく下士官であろう童顔少年だったから良かったが。これからは気をつけよう。偉い奴にぶつかって変に絡まれたら困る。

食堂に着くと、そこにはリディーさんがいた。最近あまり話してないな。随分懐かしい人物だ。軍服を着ているがあまり目立たない、地味な男性となにやら話をしている。

プライベートな関係なのだろうか、いや、違うな。俺が見る限り、彼女は仕事と私事をきっちり分ける人物だ。リディーさんの鉄仮面の様なきつい表情も崩れていないし、仕事の話かな。

そういえば、男性の着ている軍服のあの紋章は、確か隊長レベルの階級を示す物だった気がする。地味な男性は高級軍人なのだろう。やはり、仕事関係の話かな。リディーさんって軍事関連の知識も深いし。

まあどちらにせよ俺には関係ないか。

「ん？　これ新メニューじゃね。よし、これ頼むか。華零羅？麺を一つ下さい！」

要するにカレーラーメンである。カレーラーメンを新製品として店頭に出すなら、もっとポピュラーな味噌ラーメンとかをメニューにしろよと思わなくもないが、最近醤油ラーメンばかりで飽きていたのでいいタイミングである。この世界の華零羅？麺は果たしてどのようなものなのか、期待は膨らむばかりだ。

「へい、お待ちィ！」

待望の新メニュー華零羅？麺。匂い良し。見た目良し。味は……味も良し！

「旨い旨い」

俺はズルズルッとしばらく夢中で麺をすすっていたが、半分ほど食い終えた所でなんとなく顔を上げると、俺のよく知る人物が居た。ギルさんだ。

厨房の近くから食堂全体を眺めているようで、ぼーっとした様子で立っている。何を食べるか悩んでいるのだろうか。

「こんにちは」

「おお、リョウ殿」

柔和な笑顔を見せるギルさん。執事長兼国王専属秘書というＶＩＰな役職を持つ彼は、食堂に居てもどこか異彩を放っている。

「奇遇ですな。私も丁度昼食を食べに来たのですよ」

食堂にごはんを食べる以外の理由で来る人が居るのだろうか、と心中で野暮な突っ込みをしつつ、俺は少し恐縮していた。ギルさんみたいな大人物に私事で敬語を使われると、多少心苦しいものがある。仕事の合間の食事休憩ですら公的な時間だと考えているのか、もしくはデフォで敬語を使用しているのか。

俺を目上だと見ている、ということはないだろう。まず、人間のクオリティーが違う。割と冷静沈着で、不良に絡まれた時でも電車にひかれそうになった時でもあまり動じなかった俺が、立ち会うだけで圧倒されるのである。俺の他人の内面を感受しやすい性質も原因の一つだろうが、ギルさんは敵に回してはいけない人である。

「では、また。今度の策も期待していますぞ」

ギルさんはそう言うと、俺に背を向けて厨房の方へ歩いて行った。俺がもうすぐ食べ終わるのを見て、相席は遠慮しようと思ったのだろうか。しかし、羅？麺を食堂のおっちゃんに頼んだギルさんは、ふと俺の方を向いてこう言った。

「裏切りには、お気をつけなされよ、亮殿」

「裏切り」

裏切りに気を付けろって、つまり裏切り者が居るってことか？

それとも……、

「貴方が思いもしない所。まったく警戒していない所。そういう所からの裏切りが、実は最も恐ろしいのですよ」

「思いもしない、者？」

「たとえば、私。貴方、私のこと警戒してないでしょう？　信用して下さるのは結構ですが、盲信してはならないですよ。それが恋人や家族であっても、ね」

少　し遠くに目をやりながら、語るギルさん。ギルさんの説法を聞けるのは有難いが、どうしたんだろ。

「は、はい……。気を付けます」

「これは紛れもない善意、いや、老婆心からのものですが。いや、つかぬことを言ってしまった。まあ、念頭に置いていて悪いことは無いでしょう、というだけのことです。お気になさらず」

では、とギルさんは去って行った。もうちょっと具体的に聞きたかった俺だが、ギルさんは何かはぐらかす様な感じだったので深くは聞けなかった。う～ん。何か、妙な雰囲気だったなぁ。

第3章第11話　裏切りは俺の名前を知っている？（汗（後書き）

これにて、第3章完結。次は間章を何話か挟んで、第4章に突入します。

間章一話

カタパルト王国は未だ斜陽にあらず。

先の敗戦時の王国軍の進撃を受けると、シャルロワにはそうとしか思えなかった。二重三重にも張り巡らされた罠の組み立て方は、幼き頃学んだ稀代の謀将アラキ・カタパルトの戦術そのものだった。

そう、シャルロワは敵の五倍もの兵力を擁しながら負けたのだ。その衝撃は敗戦の日から二週間経った今でも薄れてはいない。居城ビスケット城で、シャルロワは一人思案していた。

それにしても、カタパルト王国にあんな巧緻な罠を仕掛けることのできる人物は居ないはずだった。少なくとも、国王暗殺を決行する前の調査では。

「リョウ・ヨシダ……いや、吉田亮か」

吉田亮。突如現れたジル国王の側近と周りには認識されている、謎の少年。彼こそがあの戦術を考案した人間だとシャルロワは考えている。シャルロワの知る限り、カタパルト王国にあのレベルの戦術を考案できる人物はいないのである。

ブルゴー騎士団長やジュネ歩兵軍団長等、カタパルト王国にもまだまだ実力派の将軍たちは残っているが、あの戦術は彼らの立てるであろう戦術とは種類が違う。あのような戦術をカタパルト王国に忠誠を誓う軍人が考え付く筈がないのだ。

あの戦術における特異な点とは何か。それは、国王に対する処遇

である。吉田亮は国家元首である国王を囮にして敵の裏を掻いた上に、決戦兵力として近衛隊を使用した。ただし重要なのは、囮にした本陣に国王が居たかどうかではないのだ。「国家元首を囮にする」という発想。それこそがあの戦術のキモである。

カタパルト王国の軍人の中に、そのような良く言えば柔軟、悪く言えば狡猾な発想を思いつく者は居ないと断言できる。軍務も経験してきたシャルロワだから言えることだ。

そして、シャルロワは、ここまで思考が至って初めてカタパルト王国という勢力に恐怖を感じた。

「儂に恐怖を感じさせるとはの。はてはて、何年ぶりかのこの感情は」

だがその言葉に怯えはない。今シャルロワという漢を覆っている感情の正体は、高揚だった。それは、今までのシャルロワに欠けていたものでもある。今となっては昔の、血と汗にまみれた日々。あの時分、シャルロワの心は奮い立っていた。そしてその熱い感情はいつの間にかシャルロワの心から消えていった。
これが老いるということなのかもしれない、という気もしていた。

いや、と、シャルロワはそう考える度にかぶりを振っていた。まだ老いる訳にはいかなかった。やり残していることが、ある。

手を固く握りしめて、シャルロワは目をつぶった。夜明けが、近付いてきた。シャルロワの心の中でも、高揚が少しずつ大きくなってきた。

「ゲル男爵が参軍してくる模様です。これで戦力は六千となります」

シャルロワ子飼いの諜報員の一人が報告に来た。最近シャルロワが目をかけている者である。

今シャルロワの擁する諜報員は十三人。その内の六人が他国に滞在しており、カタパルト王国内で活動する諜報員は七人しかいない。すると当然一人あたりの責務は重大なのだが、彼は毎回のように淡々と仕事をこなしていった。諜報や工作に失敗したことは無い。しかし、たまに激情を見せることも、ある。

彼の父親も似た男だったとシャルロワは思う。淡々とした無表情の男だったが、その最期は僅かながらも熱いなにかを見せた。

「やはりあの敗戦が大きかったようです。日和見に走る者が多く、また我らにつく者もシャルロワ様を頼らず独力で戦うことで、勝利後の地位を上げようとしている者が少々おります」

変にシャルロワにくっつくよりはその方が賢明だ、とでも思ったのだろう。確かに、この敗北によって、シャルロワのマクシム勢における発言力はかなり下がった。

「ニャクルツッペリ卿もまた、多数の貴族に対して書簡を出している模様です」

「そうか」

だが、今は一纏まりになって敵と戦うべきである、とシャルロワは考えていた。

フリーダ皇国軍が北方を占領してきている。このままでは、旧制

カタパルト王国を潰してもフリーダ皇国に支配されて終わりだ。そして、フリーダ皇国はそれを狙って進軍している。そう、シャルロワが仕向けた。

新生カタパルト王国自身の手で勝利をもぎ取り、王都を占領しなければ、新生カタパルト王国に未来は無い。そしてそれは、反乱を起こした全ての貴族の既得権益が奪われるということでもある。

馬鹿な話だ、とシャルロワは笑った。彼らは権益を拡大させようとする余りに、既得権益を失おうとしている。二兎を追う者は一兎をも得ず、どころではない。二兎を追う者は全てを失うかもしれないのだ。

「どうしましょうか」

だが、シャルロワには策がある。あるいは、それが根本とも言えるが。あの戦にさえ勝てば、王都を占領しフリーダ皇国軍を撤退させるだけの用意があったのだ。しかし、それも敗戦によって大きく崩れた。今カタパルト王国軍がフリーダ皇国軍に敗北すれば、フリーダ皇国軍をカタパルト王国内から締め出すことは難事となるだろう。

「まあ、今現在の状況は確かに厳しいものではあるがの、そう慌てる程でもあるまい。元々が茨の道、そう易々と事が運ぶ訳なかったのではないかの」

急いては事を仕損ずる。ここは、待つべき時だ。今までだって、幾らでも待ってきた。動くのは、旧制カタパルト王国とフリーダ皇国の戦の帰趨を見てからでも遅くはないだろう。

「じゃが、ただ何もせず待つというのも芸があるまい。天亥を使え。分かるな？」

「無論。了解致しました」

瞬間、スッと人の気配が一つ消えた。道々の者特有の技である。気配を極限まで薄くし、決して他人に気付かれず移動する。この技が諜報に役立つのは言うまでもないだろう。

「さて」

貴族からの求心力は戦前と比べ落ちている。そして、敗北を補うことができるのは勝利のみだ。しかし、敗北に敗北を重ねれば待つ未来は破滅しかない。自然、シャルロワは慎重に事を運ぶ必要があった。

既に東方ではカール一族軍と新生カタパルト王国軍が合流している。その数、二万は下るまいとシャルロワは見た。恐らく旧制カタパルト王国軍はそれを無視してフリーダ皇国軍と争う。そう、間者からも報告が来ていた。

確かにいい判断だ。だが、それはシャルロワ達新生カタパルト王国軍にとっての話である。旧制カタパルト王国としては、フリーダ皇国に領土割譲する代わりに和睦し、内乱を鎮めるのに力を注ぐのが最も賢明だろう。

あるいは、カタパルト王国という地を異国が支配するということだけは旧制側としても避けたいのかもしれない、とシャルロワは思った。ただ利権にしがみついている愚者の集まりではない、ということは先の敗戦で分かっていることだ。

シャルロワは、ふと考えた。己のやっていることは正しいのだろうかということを。答えは、出ない。

平穏だったカタパルト王国に大きな戦乱を起こしたシャルロワは、一面から見れば奸臣そのものだ。だが、シャルロワには他をかなぐり捨てても守り通さなければならない筋があったのだ。だから、シャルロワは人情に反することもやってきた。倫理観だって捨ててきた。時には、家族すら見殺しにすることもあった。

幾度苦悩したことか。何度、この重い信念を捨てようとしただろうか。

人には、忘れられないことはたくさんある。それが生きることだ、という気もする。そして、それを癒す場所はもうない。

「この期に及んで、心の軸がぶれるとは。少々あの敗北が心に響いたようじゃの」

シャルロワは立ちあがった。いつまでも休んでいる訳にはいかない。配下の兵はシャルロワの息子による訓練の真っ最中だ。あと一カ月も経てば、敗戦の打撃からある程度は立ち直れるだろう。

その瞬間こそが、天の時だ。

間章二話

カタパルト城。クリム城やビスケット城と並んでカタパルトの中でも屈指の堅城と言われる、カタパルト王国の首都に建造された城である。

この城は、庭園や広場を多数内包しており、国家直属軍は皆この城内で訓練する。訓練広場は王城本丸のすぐ近くにあり、国王が自ら視察しに来ることもあるこの場所。兵士たちは訓練中にあまり気を抜くことはできない、ということで有名である。

そして、ここに居る一人の少年も訓練中の兵士（？）の一人だった。

「そげぶっ」

少年というか吉田亮というか俺は訓練用の木剣で鳩尾を突かれ、思わず謎の叫び声を上げながら後ろに吹っ飛んだ。

「中心を取れてないですね。我武者羅に向かって行くのは、胸突きの格好の的ですよッ」

相手はグランさん。訓練中も敬語を使っているが、やってる内容はとんでもない。

「ッ、か、はっ、ちょ、マジもう無理……」

「早く立ち上がって下さいっ」

口で指南するだけならいいが、立ち上がるのが遅いとすぐ打ちか

かってきて否が応でも戦い続けさせようとするので、息つく暇もない。戦場では気を抜いたら最期だ、と言われれば納得してしまうのが余計に悔しいわ。

だが、状況は俺の予測の上をいった。俺が立ち上がる前に、業を煮やしたっぽいグランさんの木剣が上空から振り下ろされたのだ。

一応手を抜かれているようで、今から木剣を動かせば守れるっぽいが。少し思案したのち、俺は防御せずに剣をグランさんの脇腹に振り上げた。あえてっすよあえて。

カキィンッ。

グランさんの振り下ろしは俺の左腕に付けてあるガントレットで剣先を阻まれる。どや。

俺の木剣はグランさんの脇腹に吸い込まれるように軌道を描く。これは一本ありだな。よっしゃ勝ったぜ！

キタッ。と俺が歓喜を上げる準備をした時、グランさんは思い切り後ろへ跳ねた。

「んなっ……。マジかよ」

俺の木剣は、左ななめ後ろに引き寄せられたグランさんの木剣によってその攻撃を防御された。さっきの二倍以上にも見える、圧倒的な速度。俺のガンレットにあえて木剣をぶつけて、その反動で左脇に己の木剣を引いて、うまく擦り引いた見事な動きに、俺は瞬時茫然とした。

「気を抜いてはだめですよ！」

だが、グランさんはそう言うが早く木剣を中段に構え直して俺の首めがけて突きを撃って来た。速度はさっきの手加減モードに戻っているが、手が右斜め上に伸びきっている今の状態では反撃どころか防御するのも難しい。体も未だに倒れたままだし、こりゃあまずったかな、と戦うのを諦めようとしたが、気付いた。そして、思い浮かべた。

さっきのグランさんの技。さっきは擦りながら引いただけだったけど、今度は、

「らあァッ」

擦り引きながら、さらに擦り上げる！

現在の俺の状態的に場所を移動するのは難しいので、擦り引くだけでは狙いは逸れても肩などに当たる確率が高い。だが、引きながら上げれば、グランさんの木剣が通るのは俺の頭のすぐ左だ。

腕の筋肉を収縮させながら擦り引くことで狙いを横にずらし、掌が顔の近くまで来たところで今度は腕を左斜め上に上げた。ビュゥンッ、と耳の傍で空気が引き裂かれる音がした。だが、俺はそれに一々感想を持たない。頭を動かさない。今やることは、攻撃だけだ！

「はあぁっ」

左耳の傍に至った右手の手首を返し、肩を使って思い切りグランさんの首を横から狙う。グランさんの腕はまだ完全に伸長しておらず、今から引き寄せるのは不可能。ならば、今度こそ、当てる！

だが、俺の木剣が斬ったものは空気だった。首と木剣のぶつかる鈍い音の代わりに、グランさんの声が、下から、

「ほう」

「……、――――ッ」

まずい、避けられた！

俺の剣筋を予想していたグランさんは、首に迫る木剣をものともせず体を地に沈めたようだ。佐々木小次郎見たくツバメ返しをやろうと再度手首を返そうとする俺に向かって、グランさんは無造作に距離を縮めようとした。地面に左手をつき、体重移動の力も加えようと思った俺は、ふと。

『中心を取れていないですね』

ふと、グランさんの言葉が頭の中でリピートされた。

そういえば、さっきからグランさんは中心からしか攻めてきていない。それも、大体俺の鳩尾を攻撃してきているのだ。だが、今のグランさんの木剣は俺の頭の横にあるので、中心からは攻められない。それでも、距離を詰めてきている、ということは。

ひじ打ちかっ。

予想通り、グランさんは木剣を手から離して右腕の角度を極端に狭くした。ひじ打ちの構えだ。やばい、このままだとあれをモロに食らうぞ。

体を動かしてこれを避けるのは無理だと判断した俺は、即座に木剣を右手から離した。地についた左手の手首を動かして体を少しだけ右に移行させる。同時に、俺の右手がグランさんのひじ打ちを防ごうと俺の鳩尾の上空へ動いた。

軌道をずらすのが目的だ。鳩尾だけは死守せねばならん。

間に合え！

「ごふっ」

俺が意識を失った時、まだ俺の右手に何か質感のある物を掴んだ感触は無かった。

「イタタ、うおっ、ここ痣になってんじゃん！　肉刺もまじ痛いし、ないわ～」

現在俺は、訓練場の隅っこに体育の授業を見学している奴みたいな感じで座り込んでいる。ついさっきグランさんに起こされて、そのまま少し休んでろと言われたので休憩している。

昨日の俺なら気絶までさせられる、おおよそ現代日本では考えられないような訓練法について抗議をし、訓練したくない、と駄々をこねただろう。というか実際昨日そうしたし。

だが、今の俺はこんなことじゃ動じない。ていうか、慣れた。一昨日乗馬訓練が終わって一息ついた瞬間に次の日からは戦闘訓練するから、と言われた時は脊髄反射的に「だが断る」と言ってしまいそうになったが。

「リョウ殿、そろそろ続きを始めますぞ」

だから、俺は二、三分の休憩を挟んですぐにまた訓練を再開すると言われても驚かなかったし、怒りも湧かなかった。

「分かった」

まあぶっちゃけ、ここで戦闘能力を少しでも上げておかないと後が怖いんだよねー。戦国時代っぽいし。内乱起こってるし。治安の悪い所だと、いつ暴漢に襲われてもおかしくないらしい、この国は。まあ、あんなに治安が良かったのは元の世界でも日本以外に殆どなかったらしいけどさー。

本音は俺だってこんな辛いことしたくないけどさ、平和ボケした日本人の感性のままじゃこの世界を生き抜いていけないってんなら仕方ないよねー。やるしかない。

「昨日と同じく、木剣実践稽古の次は長距離走です。体力を付けることと行軍に慣れることが目的なので、この鎧一式を着て下さい」

差し出された、重そうな装備品。まあ兵士は兵種によっては何十キロも装備品を持って行軍しなきゃいけないんだし、やんなきゃいけなさそーだなー。

「うわ、重っ」

剣道の防具の比じゃないわ、これ。まるで、鍛練用の重ーい亀の甲羅のような……。

「亀仙人かよ、アンタ」

無理ゲーくさい。中学生のころはクラスでも五、六番くらいの体力は持ち合わせていたんだけど、その微かな自信が早くも崩れたわ。

まあ、有効性はあるようなのでとりあえず全部着てみた。が、重い。

「では、私に付いてきて下さい。ちなみに、通る道は昨日と同じです」

うお、いきなり走り出しやがった！ちょ、おまッ。

慌てて後をついていくも、最初からかなりのハイペース。進行ルートは昨日と同じらしい、ってことはまたあんなに走んのか！しかもこのスピードで！？

うろたえる俺を余所に、どんどん先に進んでいくグランさん。初っ端から距離を離される訳にはいかないので必死に後をついていく俺。

グランさん的にはこんなの余裕かもしんないけど、ちょっと思いやりというものを持ってほしいよな、彼には。

「はぁ。はぁ」

直属兵たちが訓練している、数多ある訓練場。その間をすり抜けて、グランさんと俺は王城の外壁周辺まで走る。

既に俺の息は荒くて疲れてきているのが一目で分かる状態なのだが、直属兵たちも辛そーに訓練しているのを見て少し元気を分けてもらった。やっぱさ、大変なのが自分だけじゃないって分かるとやる気上がるよね。勉強も部活も、なんだってそうじゃね？

「はぁ、はぁ」

直属兵の恐らく精鋭だろうみなさんにそんなどーでもいい仲間意識を抱きつつ、俺はふと自分の思考を省みた。

まあ省みたっていう程なんか考えた訳じゃないけど。なんか慣れてきたなーって思って。まだ経験した戦争も殺し合いも一度だけだけど、環境が変われば人も変わるのかなぁ。

最近はあの悩みについても、考えることが少なくなってきている。解決した訳じゃないけど。

「ハァ、ハァ」

あ、やべっ。考え事してたらグランさんが居るのが随分遠くになっちゃったぽい。

しゃーない。速度上げるか。そーなると考えながらってのはきついから無心になるけど、まあいいわな。考える時間は訓練が終われば たくさんあるんだし。

うし！　気合い入れて走るぞ！

間章二話（後書き）

第一部の用語集に地図をうpしました。

これを見たらカタパルトらへんの地理が分かり易いと思います。

間章三話

カタパルト王国領の北部山岳地帯。本来ならばカタパルト王国の軍勢が通るべきその街道は、現在フリーダ皇国軍によって占拠されている。数は、三万五千。五千人程が占領地の統治を開始しており軍勢の八分の一は途中で離脱したが、それでも、三万五千。

現在カタパルト王国内で最大規模のフリーダ皇国軍は、その威容を周辺の村村に見せつけるかのように緩々と進軍を重ねる。

「陛下。注進です。カタパルト王国内で、若干ながら食糧の値段が高騰しています。恐らくは……」

「腹を据えたか。ジル・カタパルト。奴め、儂らとの決戦を望むようだな」

使者の言葉を遮る。はい、と肯定の返事をした使者。従順である。何故ならば。この男こそ、

「皇王陛下」

そう。フリーダ皇国当代の皇王、ガストン・フリーダなのだから。

「なんだ」

そして、皇王に話しかけた男の方は、これまたフリーダ皇国の要人である。フリーダ皇国軍部最高指揮官であり三十年以上戦場で生きてきた、フリーダ皇国軍きっての将帥。戦法も戦術も戦略も何でもこなし、その手腕は一万の軍勢にも匹敵すると言われている、名

将。

ベーグル・ライル将軍。

「努々。努々、油断なされぬよう」

若いころは軍部きっての強硬派として知られていたが、歳をとりフリーダ皇国の重鎮としての自覚が芽生え始めてからは慎重派として通るようになった。その腰の重さに、一部の若い軍人たちは不満を持っている、とも言われているが。

少なくとも、その老練さは他国からは一定の評価を受けている。

「分かっておる」

ガストンは面倒くさげに手をパタパタと振ると、ふう、とため息をついた。

「大方、あの謎の軍師に警戒しておけということだろう？なんせ、あのシャルロワをほんの僅かな軍勢で打ち破ったらしいからな」

シャルロワから秘密裏に受け流された、謎の軍師についての情報。曰く、その男の情報はジル・カタパルトに臣従するようになるまでのものが一切存在しないだとか。ガストンはそれを聞いて耳を疑った。当然である。過去の存在しない人間などいないのだから。そして、相当裏に通じてなければ過去を消すことはできない。

謎の出自の割に能力は大して高くない、とシャルロワは言った。実際目にしたらしいシャルロワがあまり警戒していなかったようなので不審に思いつつ捨て置いたのだが、存外、いややはりと言うべきだろう。なかなかの切れ者のようである。

人を見る目はあると推察されるに相応しい外交手腕を見せているシャルロワを、何らかの方法で欺いたのか。はたまた、旧来の寸法では測れないような人物なのか。ガストンとしても気になる所だ。

「いえ、そうではなく」

だが、ライルはそれを否定して見せた。

「では、何だというのだ」

「北部で。反皇国連合の蜂起が確認されています。何らかの手を打たなければ、緊急事態になるかと」

反皇連。フリーダ皇国周辺の小国が群がって出来た、反皇国の旗を掲げる軍事同盟である。ガストンは宰相とも相談して切り崩しを図っていたのだが、武装蜂起は防げなかったようだ。

「知っておる。既にアレに使いをやった。そもそも、そういうことへの備えの為に本土に半分以上兵を残してきたのではないか。心配症ではないか、ライルよ」

アレ、とはガストンの第四子、ビクセル・フリーダである。子供のころは裏で「バカ王子」と言われた、文字通りのバカだった。

武勇に長けている訳ではないが、兵の指揮はなかなかうまい。山賊の棟梁の様な性格のビクセルに兵は良く懐くし、戦勘が働くのだ。駒による戦術の模擬演習では何かと比べられることの多い兄に敗北していたが、実戦ではビクセルが一番結果を出している。

粗暴、なれど深謀。そう評されるように、単なる馬鹿ではないよ

うだ、と認識する者もフリーダ皇国にて増えてきている。ビクセルの兄を現在ラクル連邦へ親善大使として遣っている以上、ビクセルを総大将にしても何の問題もないだろう、とのことでガストンは先日ビクセルへ使者をやった。

無論、まだ若いビクセルに全権を任せはしない。流石にそれは心配だ。その手腕はライル将軍に次ぐと言われており、ライル将軍にも絶対の信頼を寄せられているという、フリーダ皇国の将軍トム・フリーダを副将に任じた。

その姓が表すように、トム将軍はフリーダ皇国皇家の正当な血を引いている。ガストンとは再従兄弟（はとこ）であり、ビクセルにきついことを言える数少ない重臣の一人。安定した皇家の生活を捨てて軍部に入っただけあり軍事に精通する一方政治方面にはあまり詳しくないが、そこは宰相が居る。トムは明朗快活な性格なので、ガストンの居ない間全権を任せている宰相と対立することも無い。

彼のことを一言で表すなら、歳をとったビクセル、であろうか。ビクセルもこの豪放な男を慕っており、相性は良い。

「それは知っています。が……、反皇連はなかなか統率を取れている様子。あの中にも何人かは切れ者が居るようです」

「ほう。道理で。儂は、何処ぞの大国が暗躍しているのかと思ったが。そうであったか」

「はい。裏でセリウス王国の援助もされているようですが、それにしてもどうも動きが良すぎます」

小国群での切れ者といえば、嘗てはテルイア王家に黒衣の宰相な

る者が居たが、それももう死んだ。将来有望と名の高い若手では、ミクセム王国のジュゲム外務大臣、天華国の錬鵬千人長、ハイマ民主国のゲブ財務官。

だが彼らは、重役の信任があるからこそ自由に立ち回り能力を発揮できる訳で、一人でこんな大それたことを成功に導けるかと考えると、首をかしげざるを得ない。いや、あるいはこの三人が中心で反皇連の組織に貢献したのかもしれない。

どちらにせよ、小粒がいくつ集まっても小粒に過ぎない。そう気にする程の事ではないとガストンは考えていた。

「陛下。あまり小国を甘く見えはいけませんぞ。確かに一国一国だけで見れば規模は小さいですが、それでも集まれば何万にもなります」

「どうかな。足の引っ張り合いをするだけの様な気もするが」

「ならない可能性もあります」

国が寄り集まって組織を作る、というのはそう楽なことではない。以前ラクル連邦に対してフリーダ皇国主導で包囲網を敷いた時も、それを維持するのには大変な労力を使った。四、五ヶ国でもそうだったのだから、十ヶ国以上の連合などすぐに崩れてしまうだろう。無論、崩れなければ正面から崩すのみで、その用意も自信もあるが。

ともかく、ガストンはこの話題を終わらせることとした。続けていても、益はない。

「まあ、分かった。警戒しておく」

「頼みますぞ」

そういえば、とガストンは先程のライルの発言に少し疑問を持った。カタパルト王国の謎の軍師のくだりである。大半の者はカタパルト王国の先の勝利を得体の知れないこと、として怖がっているが、フリーダ皇国きっての軍人である彼はどう思っているのだろうか。

「そういえば。ライルよ。あの軍師についてはどう考えておるのだ？　側近の中にはあの軍師を気味悪がっておる者も多い。先程の発言からして、あまり警戒していない様だが、それには何か理由はあるのか？」

リョウ。

かつてのカタパルト王国の王太子であり、分裂した後は旧制カタパルト王国と呼称されている国の国王、ジル・カタパルトから絶大な信任を得ているらしい謎の男だ。見た目は若く、十四、五歳ほどにしか見えないというが。シャルロワ軍の撃退戦では大いに活躍し、旧制カタパルト王国で名軍師の名を確固たるものとした、その少年の名前である。

その名を重く受け止める者こそあれ、軽んずる者はいない。今現在アリア大陸は群雄割拠の戦国の世。そんな甘い判断をするような人間が大国の上層部にまで伸し上がれる筈もなかった。

「そのリョウという男がどのような人物かは知りません。ただ、その戦いの記録を見ても、あの勝利が計算ずくのものには見えないのですよ……」

「ほう。あの勝利が、たまたまだった、ということか」

確かに、勝ったという事実に踊らされすぎているのかもしれない。ガストンはライルの言葉に頷いてみせた。

一万もの大軍を一千人で引きつけ、残る四千人で本陣五千人を急襲したあの戦い。背後からの近衛兵による奇襲で本陣を破った手腕は確かに優れたものだった。

だが、あの戦略には欠点もあった。シャルロワによると、伏兵の存在は攻撃を開始した時点で認知していたらしい。もしもシャルロワが伏兵を総力を挙げて殲滅しようとすれば。四千人の主攻が潰れることとなるのだ。

「無論、油断はしません。警戒も怠りません。これは陛下に常々申し上げていることですからな。ただ……必要以上にその軍師とやらを意識し過ぎるのもどうかと思いましてな」

実像と虚像の違い。それを逆手に取って勝利へと繋げた軍人は数多く存在する。己を必要以上に弱く見せたり、逆に事実以上に強く見せたり。敵を弱く見て油断することも、敵を強く見て怯えることも、合戦においては害悪である。ただ、敵の情勢を正しく知ること。正しく分析すること。それが重要である。

「ほう。確かにその通りだ。我々は自然体でいけば何の問題もないしな。まあ、少しは警戒しておくことにするぞ。油断大敵、だ」

「はい。仰せの通りにございます」

そういえば。最初に敵を警戒するよう、油断をしないよう言ったのはライルの方ではなかっただろうか、とガストンは気付いた。ふとライルの方を見ると、ニヤリと笑ってみせてきた。

（まんまとはめられたか、ライルの奴は相も変わらず悪戯好きよのう。さて、と。敵は未だ動きを見せぬが、こちらに立ち向かう可能性は高い。はてはて、どのような策を講じてくるのやら）

ガストンもまた、笑みを浮かべていた。いと面白し。そう呟いて、彼は軍務に戻る。

フリーダ皇国九代目皇王、ガストン・フリーダ。彼は良くも悪くも戦好きだった。

第４章第１話　機略

あの秘密会議の後ジルはこんな声明を発表した。

『カタパルト王国軍はこれからフリーダ皇国軍と相対する。心ある者は集まれ。今ここに、カタパルト王国を死守し、その平和を取り戻すことを誓わん』

そして、その日から北方から進軍してくるフリーダ皇国への出陣準備が始まったのだ。兵糧を買い集め、兵站を準備する。ちなみに兵站とは、武器や食料を直したり集めたりして兵士に送り届ける後方支援のことだ（詳しくはｗｉｋｉ参照）。戦争が起こる陰には裏方の多大な努力がある。兵士の健康維持、武器の整備、陣営の構築など多岐にわたるのだ。

これが会戦、つまり大きな戦いとなればその苦労もひとしおである。前の七千人で出発した戦いとは違い、今回は万単位の戦争なのだ。

閉話休題。そういう兵站準備の陰で、もう一つの作戦が密かに準備されていた。国王直属の軍隊は八千人。その内騎士団一個部隊と歩兵軍団二個部隊と魔術師団一個部隊、そして国王直属の近衛隊。一個部隊約五百人なので合計して二千五百人であり、作戦とは、この軍勢を率いて国王ジル自らが東の反乱貴族と豪族カールの連合軍を打ち果たす、というものである。

全員が騎馬隊な訳ではないが、進軍速度を速くする為に皆を馬に乗らせるので馬もたくさん必要だ。もちろん戦場の近くに着いたら、歩兵や魔術師には馬から下ろさせる。

最初からフリーダ皇国と会戦すると発表しているので、密かにカール軍と戦う準備をしてもあまり怪しまれない。フリーダ皇国軍に対するものだとしか思われないだろう。

シャルロワへの勝利を耳にして、各地から貴族が兵士を連れて王城の方向に向かった。

そして、戦争の準備が着々と進む中、軍議を開くこととなったという訳である。俺はもちろんジルの傍に立っているだけだ。

「では、軍議を始める。フリーダ皇国と戦うその作戦を決めるのだ。我こそはと思う者、何かあったら忌憚なく聞かせてもらおう」

ジルが口火を開いた。

もちろん、この中には信用のおける人物しか居ない。多数集まった貴族の内重鎮や信用のおける者数名と今回の内乱でジルに味方した者、あとは軍人の上層部が五、六人。

「では、まず初めに状況を確認しましょう。今回の敵はフリーダ皇国軍四万。敵軍はカタパルト王国北部の山岳地帯を行軍し、クリム城を陥落させました。その後も南進し、カタパルト王国の北部一帯を占拠する模様。総大将はガストン・フリーダ皇王。従う将は皇国の双璧とうたわれるライルを筆頭に古参の部将が配置されています。兵糧はあと三ヶ月分は確実にあるようです。最悪一年は持つでしょう。

我々の作戦目標は敵軍の撤退。さて、何か案のある人はいませんか？」

レーデ内務大臣がまず状況説明を行う。さて、どんな案が出るかな。もちろん俺は今回も作戦は終盤になってから言う。注目度や採用度を高めるのは理由の一つだし、既出の案の良いところをさも自分が考えたかのように採用できるからだ。

地図が出され、皆が凝視した。しかしまだ発言は無い。今回の敵軍は精強であり、士気も高い。簡単に正面決戦をする訳にはいかず、悩んでいるのだろう。

「では。私に一つ案があります」

ブルゴー騎士団長に視線が集まる。何を考えたのだろうか。

「敵軍がカタパルト王国北部を占領しようとするのには理由があります。山岳地帯、中でもグラビット鉱山の権益を奪うのに必要不可欠な城塞クリム城と周辺の砦による防衛線を堅固にするためです。まあここまでは分かっているでしょう。そこで、です。敵の目的を脅かしてやるのです」

熱弁。国を守ろうという愛国心からくるものなのか、混乱の中出世しようという野心からくるものなのかは分からない。でも、その表情からは生気が溢れて出ていた。なんとしても勝つという生気、いや、覇気と言った方が正しいかもしれない。活気ついたのは末端の兵士だけではない様だ。いや、上が覇気を持つと下からも覇気が湧いてくるのかもしれない。

「クリム城攻城か」

「そうです。無論、クリム城の陥落は難しいでしょう。既に周辺の砦も殆ど落ち、防衛線は完成。その上、防衛線の前にはフリーダ皇

国軍が意気盛んにカタパルト王国北部に侵攻している。無理、と言っても過言ではない。ですが」

一旦区切り、

「そもそも四方を敵に囲まれていながら勝利を目指すこと自体が無理ではないですか。無理を通すことも出来ないで何が勝利か！」

決まった。完全に場の流れはブルゴー騎士団長の方へ行ってしまった。

城塞クリムの攻城なんてブラフには使えても、実際やり遂げるのは厳しすぎる。せいぜい敵に不安を与えて動きを鈍らせるくらいしか活用法はない。それとも、何か秘策があるのだろうか。

「策はあります。まずは手元の地図をご覧になって下さい」

秘策はあった。作戦としては、こうだ。

まず、フリーダ皇国軍をカタパルト王国内部に引き込む。敵も糧道を引きのばす訳にはいかないから、途中で進軍を必ず躊躇するだろう。そこを、少しずつ餌を与えて引き込まなければならない。一方で敗北し敵に追撃させながら一方で小さな勝利を重ね、なお且つ軍団の士気を維持するという激務だ。

引き込んだフリーダ皇国軍は放置し、まずは敵の予想通りフリーダ皇国の糧道を叩く。これで、軍隊の大半は糧道を守ろうとするだろう。だが、恐らく糧道は破れない。なんせ侵攻軍のトップは兵站の第一人者であるライル将軍だ。何か仕掛けを施しているだろう。

この瞬間。北部の山岳地帯とクリム城を中心とする防衛線は手薄になる。戦場は南であり、糧道が決戦場なのでクリム城に駐留するフリーダ皇国軍の兵士は気が緩むだろう。そこを、叩く。国王直属軍八千人総員の力を振り絞り、クリム城を急襲。

クリム城が陥落する時には、兵站線攻防戦は佳境を迎えているだろう。そして、恐らく敗北する。だが、元々カタパルト王国軍側も自分達が囮だと知っているが故に、大敗は無い。クリム城陥落の報を聞いたら伏兵で追撃に備えつつ撤退する。

必ず、フリーダ皇国軍はクリム城を奪回せんと山岳地帯に兵を退くだろう。この時フリーダ皇国の占領地が手薄になる。そこでカタパルト王国軍は態勢を立て直す。推定ではカタパルト王国勢一万三千～六千対フリーダ皇国勢二万～二万五千。この時点で兵力差は恐らく一万弱程に縮まるとはいえ、兵力差が五千を超えることがあれば、まだ決戦するべきではないだろう。波状攻撃をしつつ、機を窺う。もしも兵力差が五千以下だったら、決戦だ。

フリーダ皇国軍が山岳地帯に戻るまでには、クリム城周辺の城塞は陥落しているだろう。クリム城さえ落とせば他の城を潰すのは簡単だ。あとは敵の描いた防衛線をこちらが使い、機動防御戦に移る。

そして、最後は挟み打ちにして敵を撃破する。

なるほど。序盤にフリーダ皇国軍を引き込む軍勢を第一の囮とし、糧道を潰そうとする軍勢を第二の囮とし、クリム城を奪回する。今度はクリム城と周辺の砦に籠もる軍勢を第三の囮として旧領を回復する。まさに機動戦。守りではなく攻めの姿勢を持っている所がポイントである。

確かに良策。ただ、現実的ではない。俺も同じような案を検討したが、クリム城の堅固さに万単位の兵力でなければ短期の陥落は不可能だと結論を出したのだ。

「しかし、クリム城を落とすのはちと難しいかと思いますが。かの城は、かつてフリーダ皇国と敵対していた時代に、カタパルト王国の力を振り絞って建築した難攻不落の名城。何か、策があるのですかな？」

バトン外務大臣が皆の疑問を代弁した。しかし、ブルゴー騎士団長は自信ありげな表情を崩さない。

「無論。実は、クリム城には抜け道があるのです。クリム城付近にある一軒家の軒下にある穴を辿っていくと、クリム城の内部に侵入することができます。敵も占領してすぐにこの抜け道を察知することはできますまい」

なるほど。内側と外側の両方から一気に急襲すれば、クリム城を落とすことが出来るかもしれない。

「おお、これなら勝てるかもしれませんな」

隊長格のこの言葉に乗せられるように、軍議場はイケイケムードに突入した。これは、俺の策を出す必要はないかもしれない。これが成功すれば、敵は袋の鼠となり、こちらの大勝利だ。

ジルが目配せをしてきたが、俺は首を横に振った。この作戦でいこう、という意思表示だ。

「この作戦。機を見誤らなければ、我らが軍の勝利間違いなしかと。

この策を告げれば、どっちつかずだった貴族達も必ずや士気を上げるかと」

ブルゴー騎士団長はジルを期待に満ちた目で見つめてきた。自分の策に自信があるのだろう。確かに相応の策だ。

ただ、心残りもある。この作戦は、いわば奇策。敵に漏れたらそれが最後、簡単に撃退され、カタパルト王国軍は一気に潰走するはめとなる。

俺はジルと目があった。同じことを考えているのだろうか。

軍議場の視線を集めたジルは、ブルゴー騎士団長の方に目をやり、頷いた。

「うむ。この策を採ることに異論がある者はおるか？」

無言。全員一致だ。

「では、細かいところを詰めていくとしよう。なにか、改善点があるという者はおるか？」

ジルは、三度、俺の方へ目をやった。

「は。さすれば二つ」

俺は控えめに口を開いた。今回は俺が献策した訳ではないので、日本人自慢の謙虚さ溢れる喋り方でいこう。

「申してみよ」

「さきほど、ブルゴー騎士団長は貴族の皆様方にもこの策を告げると仰いましたが。それは、ちと、浅慮かと」

「なんだお主。我が策が不満か」

憤然とした様子で、ブルゴー騎士団長は俺を睨んだ。本気じゃない様だが、やっぱり怖い。浅慮なのは俺の方だった。こんな言い方ではブルゴー騎士団長との軋轢（あつれき）が増す一方だ。

「いえ。策自体に不満はありませぬ。クリム城を落とせるなら、最上です。ですが、皆さまはあまり気にしてないようですが、貴族の方々に告げるのは危険かと思われます」

「何故」

「内通者の存在です」

ほう、と誰かが息を吐いた。

ギルさんに示唆された可能性。後に諜報局へ問い合わせたところ、怪しい貴族は数名いるという。

「シャルロワの様に、フリーダ皇国に内通している者が、王城へ集う貴族の中に混じっている可能性。高い、と思いませんか？」

「なるほど」

ブルゴー騎士団長も納得したような顔つきを見せた。

「延び切った糧道を叩く、という所だけ伝えておけば良いのではないでしょうか？」

「内通者が居たとしても、逆にそれを利用できるということか。確かに、浅慮だったかもしれん」

この情報が敵に伝われば、クリム城の兵士が兵站の防御にまわされ、却ってクリム城が手薄になるかもしれない。

ジルも満足したような顔をしている。やはり、さっき俺と同じ考えに至ったが、国王であるジルが家臣を信用していない素振りを見せるのはまずいと、苦悩していたのだろう。

「分かった。家臣を信用しないのは心苦しいが、敵を欺くにはまず味方から、とも言う。リョウの言うことを聞き届けよう。で、二つ目は何だ」

「そうですね、クリム城を奪還する所までの手段は最善だと思います。ですが、わざわざ敵軍を挟撃しに行く必要はないかと」

攻撃は最大の防御と言うがこの状況でそれは当てはまらない。折角敵の兵站基地であろうクリム城を落としたのなら、そのまま大人しくこちらは守勢に入っていればいいのだ。

「焦土戦術です」

俺の言葉を聞いた殆どの人が首を傾げたが、数人の軍人には心当たりがあるようで微妙に納得し様な顔をしている。ブルゴー騎士団長は前者だ。

「クリム城は堅固かつ巨大な要塞。あそこを獲ると、カタパルト王国とフリーダ皇国の間の主要な街道を防ぐことができるのです。するとどうなるか」

一旦言葉を切る。ロン毛の軍人が呟いた。

「食糧の欠乏……」

「その通りです。攻略に手間をかけている間に兵糧はなくなり、士気は落ちるでしょう。なんせ、兵站線を断っているのです。敵が食糧を得る手段は略奪しかなくなり、四万もの大軍勢を養う食糧はそう簡単に得ることはできないでしょう」

飢餓に陥る。食糧を失った軍隊ほど悲惨なものはない。

「我々が守勢をとればそう易々と攻めきれません。連携すべき反乱軍も二度の大敗で身動きが取れず。手をこまねいている内に食糧がなくなり、飢えた敵軍の士気の下落は免れないでしょう。そうなればもう終わりです。堅守している我々に突撃して無駄に命を散らすか悲惨な撤退戦を敢行する他ありません」

誰も異論を挟まないのを確認して、ジルは口を開いた。

「では、亮の意見に異論はないようであるし、詳細を打ち合わせするとしようか」

ブルゴー騎士団長は心なしか不機嫌だった様な気がした。

自室への帰り道。策が決まった今特にやらなければならないこともないため、さっきの作戦に考えを巡らせる。

「あそこまで大規模に軍を動かすのはもう、戦術じゃなくて戦略の域だろ……」

良案である。それはみんなも認めていた。俺としても、同じようなことを考えていたので鼻が高い。俺とブルゴー騎士団長との差はクリム城の抜け道を知っていたか否かだったので、悔しさもあまりない。万事順調だ。

俺の立場はカール軍&マクシム軍への電撃奇襲が成功すれば安泰なので、フリーダ皇国戦にはしゃしゃり出る必要もないだろう。いや、十分しゃしゃり出ているかな。

ただ。拭えない何かがあるのも事実だ。不安感だろうか。それとも嫉妬心だろうか。ブルゴー騎士団長の作戦にはどこか違和感がある様に思える。

さっきはかなりの良案だと思った。思ったが……何かが足りない気がする。シャルロワ軍との戦いで俺が献策した作戦と比べてみても、特に劣っている訳ではないのだが。どちらも奇襲が根幹だし。

まあ戦争はいざ実行の段階になると予想外のことばかり起きるのだし、それを俺は対シャルロワ戦で実感した。何かが起きてもきっとなんとかなるだろう。

第4章第2話　荷駄

風が、強く吹いていた。

ヒューヒュー、と音を立てる風音の隙間に、なにやら土を踏みしめるかのような雑音が混じっていた。

暗闇に紛れており夜目を効かさなければ見えないだろう、人間の集団。腰には武器を、体には軽い具足を付けており、どこかの兵士だろうというのが一目でわかる格好だ。中には、背中に弓矢を用意している者も居た。

「急げ。中継地点はもうすぐだぞ」

リーダー格だろう男が声を出すが、雑音に声が消されている。配下の兵士たちには微かな囁きにしか聞こえないだろう程の、小さな音になってしまった。一方で兵士たちは明確に聞こえたようで、応、と小さいながらも力強い返事をした。

彼らは、胸の紋章から分かるように、カタパルト王国の直属兵である。江戸時代の旗本のような立ち位置の彼らは、しかし旗本の様な軟弱な兵士ではない。いくら平和だったとしても、今は戦乱の時代。弱者が直臣を名乗ることは言語道断であり、直轄兵の中では完全な実力主義が採られているのだ。

十分ほど経っただろうか。彼らは小さな村に着いた。着いたと言っても、立ち止まれる訳ではない。少々走る速度が落ちただけだ。

「村人共は、握り飯を差し出せ！なくなったらすぐ替えを出すのだ！兵士たちは、走りながら、走りながら握り飯を食え！食って走れ！走って食え！」

声を枯らさんばかりに指示を出す男。兵站部隊の指揮官らしい。皆、その指示に従い握り飯を食いながら走っている。中には四苦八苦している者も居るが、大半の者は、目を血走らせながら食べ、走っている。

リーダー格の男を先導に、次々と兵士たちが走り去っていく。あたかも、嵐のような速さだ。寝る間も惜しんで疾走する彼らに、村人たちは一抹の同情を向けた。

後続の兵士たちが通るまで少し時間が開いているのだろう。握り飯を差し出す村人達は、次々と地面に座り込み、兵站部隊の兵士たちはそれを咎めない。疲れているようだ。まあ、夜にたき起こされて飯を兵士たちに差しださせられているのだから、仕方ないだろう。中には居眠りしている者も居る。

だが、それは兵站部隊の兵士たちも同じだ。握り飯を作る村人を叱咤し、精力的に動きながらも、疲れの色を見せている。

「さっさとしろ！後続の部隊はもうすぐ来るぞ！次で最後なんだから、気合い入れてけ！」

先ほどとは違う指揮官が喉を枯らす。必死さを見せているのは、この作戦がカタパルト王国の命運を握っていると分かっているからだろうか。

また、それとも違う指揮官も活動していた。村人達に、武器や薬や食糧の山を馬車や人力車へ運ばせているのだ。

「ほら運べ運べ！お前らの仕事はここからだぞ！」

ここの村人たちはあまり疲労していないようだ。作業を始めたばかりなのだろうか。切羽詰まった感じは見られない。

そうこうしている間に、後続の部隊がやってきた。指揮官はシュマン小隊長らしい。燃えるように赤い髪が汗でぬれている。

馬を止まらせたシュマン小隊長は、先程の指揮官のように、配下の兵士たちを急がせている。隣には軍属ではない少年が騎乗したまま止まっているが、兵士たちはそれどころではない様だ。

「はぁ、はぁ……、半端無いわマジこれ……」

少年はその狐顔を盛大に歪ませながら、息を切らしている。あまり体力が無かったのだろう、他とは比べ物にならない程体力を消耗している。実は彼こそが、このカタパルト大返しもどき作戦の功労者なのだが、そんな気配を毛ほども見せない疲れっぷりである。

「行くぞ、少年。ついてこい」

シュマン小隊長はそう言うが早く、手綱を引き締めて走りだした。慌てて少年も走り出す。

少年は、もらった握り飯を流れ落ちる汗ごと食いながら、必死にシュマン小隊長に食い付いている。

またも疾風の如く通り過ぎた兵士たち。ようやく一仕事終わった、と、握り飯を用意していた村人たちの指揮官は一息ついた。だが、仕事はこれだけではない。物資を運んでいる指揮官の方へ行き、次の仕事を始めた。

「よし、荷積みは終わったな。よくやった」

握り飯を用意していた村人たちの指揮官が一番偉いようで、指揮官の一人を労っている。彼は兵站部隊の小隊長らしい。

「では」

「ああ、出立だ。命令通り、街道の途中ナス池付近までは一部の荷物を村人に運んでもらう。途中からは俺達が運ぶぞ。総員に伝達しろ。十分後に出発だ、とな」

「は。了解しました」

慌ただしく、兵站部隊の兵士達が働く。やっと飯を差し出したと思ったら、今度は十分後から荷物運びだ。

ちなみに、村人たちが運ぶのは人力車に積まれている荷物だ。この人力車は、力持ちなら誰でも運べる仕様になっているので、専門的技術は必要ない。

兵站部隊の小隊長は、腕を組んだ。

（ふむ。なかなか厳しいな、これは。この村まで物資を運搬し一休みする間もなく、飯を用意。全員通り過ぎたらまた物資を運ぶのか。

もう少し休みが欲しかったが、休憩は殆どとるなとの命令だ。それにしても、何故一般人に物資を運ばせるのだろうか。確かに兵站部隊の疲労は多少回復するが、効率が悪いのではなかろうか）

いつでも冷静でいるのが彼のポリシーらしい。一目、汗ダラダラで死にそうに見えるが、眼光は冷めたままで、回想中も冷静さを保って思考している。

十分というのは、想像以上に短いもので、あっという間に出発の時間になった。

「皆の者！気合い入れてけ！こっからだぞ！」

兵站部隊の兵士たちは、馬車を引いて荷物を運ぶ者と人力車を引いて荷物を運ぶ者に分かれている。前者は既に馬車に乗り荷物を運んでいるが、後者はナス池で村人と交替するまでただ走っているだけだ。つかの間の休息である。

村人たちも、この地獄のような状況がもうすぐ終わるという段階になって、やる気を見せている。さっさと仕事を終わらせて寝たいのだ。自然、スピードも速くなる。あるいは、これが上官の狙いだったのかもしれない、と小隊長は思った。

小隊長がが思案している間にも、荷駄はどんどん運ばれていく。無論、小隊長も考えているだけでなく先頭を走っている。

「急げ！急げ！」

最後尾は小隊長が一番信頼している指揮官に任せているので問題ない。後は、ひたすら運搬速度を速くするだけ、それが小隊長の仕事である。

風はいつの間にか止んでおり、代わりにとばかりに乾いた土を踏みしめる音が広がって来た。

（昨日一昨日と雨が降らなくて良かったな。土が濡れていたら、運搬速度は落ちていただろう）

「イル小隊長。荷駄を落とした班が出たようです」

「処置は」

「ナマ小隊長補佐官が、周辺の者に戻させました」

「歩調は」

「少し、乱れています。どう致しましょうか」

手を口元に当てて、若干思案した小隊長、イル。だが、すぐに答えを出した。

「急がせろ。速度を少し上げる。ついてこなければ、罰だ」

「は」

下っ端のちょっとしたミスで立ち止まれるほど、時間に余裕はない。むしろ、このミスを機により移動速度を上げるべきだ、とイルは考えている。彼にとって、歩調など、大した問題ではない。重要

なのは、時間だ。
イルの命令を受けて、隊列は一層乱れた。しかし、速度は緩まない。いや、緩ませない。
「急げ」
と言えば、落ちていた移動速度は瞬く間に上がり、兵士たちの顔に緊張感が戻る。
それを繰り返していくうちに、彼らはあっという間にナス池に着いた。疲労度は通常の倍ほど。だが、到達に要した時間は通常の半分だ。
まずまずの結果、そうイルは感じた。
「交替しろ。一分だ」
命令を聞いた部下の顔が驚愕で歪み、すぐさま急いで村人に人力車を受け渡させる作業へ入った。一分以内、というのは酷だろう、とイルも思っている。一分で受け渡しを終わらせるのは流石に難しい。
だが、これが命令だ。
一分を過ぎ、まだ受け渡しは完了していないが、イルは配下の荷駄隊に出発を命じた。一度口に出したことは変えない主義だ。
人力車の指揮官は有能なので後から付いてくるだろう、とイルは見ているので不安は無い。付いてこれなければ罰を与えるだけだ。
「出発だ。付いてこい」
手綱を引き締め、わき目も振らず走り出すイル。

慌てて、後から部下が追いかけてくるが、荷物を持ってないイル小隊長になかなか追いつけず、差は広がるばかりだ。

「急げェェ！」

間があるので少し大声を出してイルが命令を伝えると、心なしか、後ろで緊迫した空気が形成される気がした。イルが怒っていると部下たちは感じているのだろう、とイルは推測した。

（それでいい。俺が鬼にならなければ、奴らは本気にならないだろう。火事場の馬鹿力、とも言う。限界まで速さを引き出すのが、俺の仕事だ）

街道を走り抜けるイルと、イルを追う荷駄隊と、荷駄隊を追う人力車部隊。

いつの間にか吹き始めていた風が、彼らを後押ししていた。

第4章第3話　機密

東方の豪族カール一族と反乱貴族、そして正統な王位継承者を主張しているマクシム・カタパルト。

二万人にも及ぶその錚々たる軍勢は、ジルに臣従するジュネ第三将軍率いる三千人の兵の命をまさに刈り取らんと意気揚々としていた。

王都からの援軍は来ない、という情報が彼我の士気差を広げていた。

敵の半分はおろか、四半分にも及ばぬ少勢でこの状況を打開できる訳が無い。用兵のなんたるかを分かっている者達は皆、そう思っていた。自然、空気も陰鬱となる。

だが、その中で最も軍務経験のあるだろう、ジュネ自身は、こともあろうに笑っていたのだ。

「いよいよ、だな」

側仕えのまだ若く十六七位の兵士は驚いていた。ジュネの笑みは虚勢には見えない。六倍以上の敵に追い詰められて尚、笑う理由が彼には分からなかった。

「何が、でございますか？」

そのため、反射的にそう聞いてしまったのも仕方の無いことだった。無論、護衛を職務とする側仕えの兵士が主君の意志を問うなど

言語道断である。彼は失態をおかしてしまった、と思わず目をつぶって肩を縮めた。

（まずい、怒られるっ）

「聞きたいか」

しかし、意外なことにジュネの表情には怒りは見えなかった。
確かにジュネ将軍は決して厳しい人ではないが、この苦境にあって家臣が失態をおかすのを見過ごすというのは、おかしな話である。普通だったら敗勢による苛立ちを抑えきれず、必要以上に彼を叱りつけるだろう。

ジュネは苛立ちを部下にぶつけるような人物ではないが、それにしても違和感があった。

「い、いえ。出過ぎたことを申しました。申し訳ありません」

一方、ジュネ将軍といえば、こちらの頭の中は大変興奮していた。彼の違和感は的を射ていたようだ。

「気にするな」

その一因は、半月前にジル国王から届いた一通の手紙だった。

文面は、援軍は出すという趣旨のものだ。具体的には、二千から三千の国王直属精鋭部隊が王国軍の北への出発に紛れて東へ出発。強行軍を行って東方の連合軍へ強襲をする、という話だった。強行の具体的な策も書いており、それはジュネの眼鏡に合うものだったのだ。

そして、昨日届いた新たな手紙。
明日の夜未明に強襲を行う、とのこと。ジュネにはそれと呼応して敵を撃つことを要請してきた。さすれば、必ずや敵軍を撃退できるだろう、とも書いてあった。異論は無い。

（問題は、この策を建てたのが誰か、ということだ。噂では、リョーとかいう少年がシャルロワ勢を打ち破った作戦を建てたらしいと聞いたが。その男が実在するなら、これも恐らく彼の仕業だろう。一度会ってみたいものだな。兵役は不得手とはいえ、カタパルト一の貴族シャルロワ元大公を打ち破る策を建てるとは、なかなかの人物に違いない）

「閣下。何の御用でございますか？」

「お前か。遅かったな」

「兵糧の備蓄に、少々問題がありまして。ただ、今はもう解決しています」

「そうか。さて、すまぬがお主らは下がっててくれぬか。二人で話したい」

ジュネは軍務も統括しているが、彼はその補佐役だ。少し才が走り過ぎることもあるが、なかなかに有能だ、とジュネは評価している。そのため、軍を動かすのも最初に彼に言っておこうと考えた。
人払いをして二人だけになった宿舎でジュネ将軍は口を開いた。

「そろそろ軍を動かす。準備しておけ」

補佐役の男は一瞬驚きで体を止めたが、すぐに言葉を返した。

「それは決定事項ですか？」

正直なところ、今軍を動かしても状況は良くならないだろうというのが軍の総意だ。何か考えがあるのだろうという推論に彼は至ったが、それでも信じがたいことではあった。

「ああ。敵に動きがある可能性が高い。なくても、そろそろ動かねばならないとも思っていた所だ」

嘘である。国王の手紙のことは口外するなと書かれていたし、するつもりもない。ジュネは機密保持の原則をよく理解している男だった。

「動き、とは何処へでしょう」

「さあな。そこまではつかめていない。ただ、王都から北へ大軍団が出発したのは知っているだろう。今王都の守りは薄い。敵は動くとすれば、西にだろう」

地理的には、王都の真東の方向に敵軍が駐留しておりその南にジュネらがいるということになる。街道をふさいでいる訳ではないので、やろうと思えば敵は王都の方向へ進軍できるのだ。挟み撃ちにされるのを恐れて敵は足踏みしているが、王都がガラ空きになれば決心して進む可能性は高い。

「なるほど。しかし、後を追うにしても敵は当然その備えをしているのでは？」

「いや」

かぶりを振ったジュネの考えを、補佐役の男は機敏に感じ取った。

「後を追うのではなく。後を、蹴散らすのですか」

「そうだ」

つまり、彼が言いたいのは敵の兵站を潰すということだ。

後ろを追ったとしても、返り討ちに合うとまではいかなくても敵の動きを遅くするのは難しいだろう。ならば、敵の本拠地、反乱貴族の領土やカール一族の支配圏を脅かす、という発想である。

まあ、それもジュネが適当にでっちあげた嘘に過ぎないのだが。

「王都は問題ない。陛下が何かしらを仕掛けているだろう」

「なるほど。では、進路は北西ですな。どこから攻めるのでしょうか」

「まずはゲタポ侯爵領からだな。ベズ子爵領を経由して、チンジャウ伯爵領へ。ゲタポ侯爵もチンジャウ伯爵も、大身だが気は弱い。特にチンジャウ伯爵は最近新たな食物の栽培に乗り出した所で、領土を荒らされるのは嫌だろう。敵の足並みはすぐ乱れる」

元から、連合軍に結束力はない。最初こそ団結しようという姿勢はあったが、圧倒的勝勢で慢心していることもあり、足の引っ張り合いが起こり始めているらしい。カタパルト王国側からも調略を仕掛けている様な感じもある。

（やはり、シャルロワ殿が敗走したことが原因だな。勝勢であること自体は変わっていないが、明確な統制者が大失態を演じたことで、一体感が無くなってきている。シャルロワ殿の影響は思いのほか大きい。やはり、彼は良くも悪くも並々ならぬ人物であったのだろう）

「確かに、敵も三千人が一斉に西を向くとは考えてないでしょうからな。ただ、それを成功させるには電撃的な速度が必要です」

「分かっている。だからお前に最初に言った」

実際に電撃戦を仕掛ける向きは西にではなく北にであるが。ともかく、電撃的に動くことには変わりない。

「期待に沿えるよう、努力します。では、情報統制はどうしましょうか」

「いつも通りでいい。主な士官には知らせる。そうでないと、いざ実戦の時に足並みが崩れかねないからな。漏れたとしても、それはそれで結構なことだろう。後ろが怖くて立ち止まってくれれば、それに越したことは無い。状況の打開を求めているのは遠征している奴らで、状況の停滞を求めているのは我々だ」

「分かりました」

少し多弁が過ぎた、とジュネは後悔した。部下に違和感は悟られたくない。

ちなみに、情報を厳しく管理しない真の理由もきちんとある。敵の目を敵自身の領土に向けさせることができれば、味方の強襲もより効果が上がるのだ。

「では、準備をしてくれ。まあ、何時でも出立できるようになっているのだから、心の準備しか要らないかもしれぬな」

「ははっ、確かにそうですな」

それでは、と補佐役の男は帰っていった。

ジュネはその後ろ姿をぼんやりと眺めた後、人払いしていた兵士たちを呼び戻した。

それにしても、である。信頼し合っている者に嘘をつくということは案外に疲れるものだな、とジュネは思った。これから同じ嘘を他の者にも言わなければならないというのは、辛いものだった。

（いや、今はそんなことを憂慮している場合ではないな……。敵を欺くにはまず味方から、とよく言う。気にする程の事でも無かろう。だが）

ジュネは無意識のうちに腕を組んだ。

（敵の不意を突いたとして、果たして勝てるのかどうか、という問題もある。察するに戦場はコーランド平原。情報の秘匿が完全に行われ、我らと陛下の二軍による奇襲が両方成功したとしても、まだ足りぬ）

「閣下。お茶をお持ちいたしました」

「うむ」

側仕えの少年から受け取った茶を一口飲んで喉をうるおすと、ジ

ュネは己の執務机に茶碗を置いた。気が利く少年だと思いつつ口には出さなかった。そこまでの余裕がジュネにはない。

（カール軍は精強だ。これをどう対処するかが重要項。いや、むしろ、貴族軍のみを攻撃して潰走させればカール軍も引くやもしれぬか）

別の側仕えから書類を受け取ると、ジュネはその思考を止めた。考えていてどうにかなることではない。既に手は尽くしてある。

戦とは生き物である、というのがジュネの軍人としての信条だ。足りない点は戦場の機転で取り返す。

そう決意すると、机に置いておいた茶を一気に飲み干した。苦い味がした。

第４章第４話　迎撃

ここは、東方の豪族カール一族率いる八千もの大部隊の一角、第三大隊の兵舎である。そこには、勝ちは決まったとばかりに騒ぎ始めている荒くれどもたちが居た。

本来なら大隊長はそれを制止する立場にあるのだが、その大隊長自ら油断を露わにしているのだから世話は無い。傭兵の比率が多く統率力の低い第三大隊の規律は、たちまちに崩れていった。

（……）

それでも、流石というべきか彼らはいっこうに武器を手から離そうとしない。紛争地帯はカタパルト王国と違い絶えず戦争が行われている地域だ。そこから来た兵士がカタパルトの兵士より危機意識が薄い訳もなかった。

そんな地風なので、当然油断をせず常に周りを警戒している者も少数ながら存在する。兵舎の隅で所在なさげにしている男も、その内の一人だった。

ただ、彼は紛争地帯の出身でもなければ正式なカール軍の兵士でもない。カタパルト王国側から潜り込んだ、諜報員だった。

（士気を下げられただけでも、僥倖と考えるべきだろうか。酒さえ飲んでくれるなら、手間は無いのだがな。イピロス人ではないから、あまり派手な行動を起こすと怪しまれるし。今回ばかりは、少々勝手が違うようだ）

諜報員は、正体をばらしたら一貫の終わりな職業である。自然、周囲への警戒心も強くなるだろう。

ちなみに、イピロス人、というのは東方の紛争地帯に住む民族の名称である。カタパルト王国では紛争地帯としか呼ばれないが、紛争地帯内部ではこの地のことをイピロスと呼ぶ。
カタパルト王国に住むビリアン人と違う点は殆ど無く、少し肌の色が濃い程度だが、民族の違いというのはなんとなく分かるのである。警戒するに越したことは無い。

「あんた。見ない顔だな」

三十代半ば程の、頬に十字型の切り傷があるのが印象的な男が声をかけてきた。服装は簡素で、腰にかかっている大剣もどこか粗忽だ。身なりからして、傭兵だろうか。

「……。お前は」

諜報員の男は、まだ実戦経験が浅い。諜報局でも下っ端だ。そのため、途中からカール軍に潜り込んだのをばらさないように、無口な男を演じることにしていた。影を薄くすると、色々と便利だ。

「何故話しかけてきたか聞いているのか？単純だ。あんたが一番警戒心が強そうに見えたんでな。周りは浮き足立っちまってあの通りさ。ちょっくら話し相手がほしかったんだよ」

完全に気配を隠せなかったようだ。まだまだ、精進が足りない、と諜報員の男は自戒した。他人との必要以上の交流はできるだけ避けるべき。それなのに、声をかけられたというのは、男の経験不足を意味しているに他ならない。

「……」

「無口だなぁあんた。とてもじゃないが傭兵には見えねえぜ。名前は？」

「イームーだ」

「俺は、ガゼルだ。さて、早速だが、あんたはどう思ってんだ？」

この戦争に対して何か感じないか、とガゼルは暗に問い掛けてきた。諜報員の男、イームーは困惑する。このガゼルという男が何か情報を掴んでいるのなら、その情報を引き出すのが最善である。

適当に会話して別れようかと思っていたイームーは、初めてガゼルの目を真っ直ぐ見た。ガゼルは笑う。

（ようやくこっちを見たな、こいつ。やはり、この男も感じているようだな）

「……じきに。戦いが始まるだろう」

「俺もだ。血の匂いがする。あんたの目、覗くに値するようだな」

ガゼルは、己の意見の賛同者が居ることに、喜びを隠そうともしない。イームーも、ガゼルの意にかなう返事ができたようだ、と安堵の溜め息を漏らした。

その溜め息をどう捉えたのか。ガゼルは、再び口を開く。

「あっちの奴らは、俺の傭兵としての勘を聞こうともしねえ。一応同じ傭兵団に所属してるんだがな、少しは年長者を敬えってんだよ」

冗談めかすように愚痴を言ったガゼルは、情報は得られそうにな

いと落胆したイームーの前に座り込み、尚も言葉を続ける。

「あんた、相当経験積んでるだろう？イピロスでは一度も見たことねえ顔だが、一目で分かったよ」

一目でただものではないと見破られた、というのは傭兵にとっては嬉しい褒め言葉だが、諜報員であるイームーにとっては未熟者と罵倒されるようなものだ。嬉しいはずもなく。

「未熟者さ、俺は」

どこか自嘲気味に言葉を吐き捨てるイームーに違和感を感じつつも、ガゼルは気にせずに立ち上がった。

とそこで、正規兵の怒号が兵舎に響いた。

「注進！」

騒いでいた兵士たちが一斉に振り向く。その中に第三大隊大隊長の顔もあることを確認した正規兵は、大声で続きを読んだ。

「カール様の書簡にござれば！敵軍、襲来！総員、戦闘態勢につけ！とのこと！」

騒然とする第三大隊の兵舎。だが、ガゼルもイームーも動じない。常に戦える体勢、心構えをとることは、熟達した傭兵にとっても諜報員にとっても当たり前なのだ。

「あんたの勘。当たったみたいだな」

にぃ、と口角を吊りあげたガゼルは、そう一言言い捨てると傭兵団の仲間たちの所に戻っていった。
その笑顔が、何処か遊び道具を見つけてはしゃぐ子供の様に見えたのは気のせいだろうか。一瞬の間逡巡したイームーは、すぐに我に返る。

（遂に始まったか。後は、乱戦に乗じて大隊長とその副官を殺せば仕事は終了だな。暗器の手入れも十分。腕が鳴る）

気配を消し、大隊長の傍に近寄り、耳をたてる。何か有益な情報があれば、近くに居る仲間にそれを伝えるのも重要な責務だ。

「ジュネ将軍と思われる将官の率いる兵、目測一千から二千程が奇襲攻撃を仕掛けてまいりました。ベズ子爵軍、リイル侯爵軍が相次いで撃破されたとのことです」

「了解した。して、殿からの命は？」

「カール軍精鋭八千は魚燐の陣を採る、とのことです」

「分かった。……、くく。一塊りになっておれば敵も手出しが出来まい。何せ五千以上も兵力差が開いているのだからな」

運良く、カール軍の採る作戦の一部が分かった。

（この情報、上官に伝えた方がいいな。カール軍には、後から如何様にでも理由を付けて紛れこめるのだし。行くか）

気配をさらに薄くし、念のためガゼルの方にも目をやって誰にも知覚されてないと確認したイームーは、第三大隊の兵舎から姿を消

した。
それに気付く者は、いない。

「チッ。……、嫌な気配がするぜ」

ここは、第一大隊の兵舎。そこでもまた、戦の気配を身で感じ取った男が居た。彼もまた、傭兵である。
ゲルト・ユーグスタント。紛争地帯では猟犬と言われ恐れられている、かなり名の通った剣士だ。一匹狼という訳ではなく何人かいる仲間と共に合戦に参加するが、傭兵団を組織するほど群れたがる男ではない。

「確かにな、あまりに優勢過ぎて撤退しちゃうかもしれねーし」

「ねーよ。何の戦果も上げずに撤退なんかする訳ねーだろ」

今回は二人の友人と共にカール軍に参加している。二人とも腕は確かなのだが、戦場に行かないとその本性を発揮せずのんびりしている。
要は、戦がなければただの呑気な奴なのである。

「違ェよ。何だかな、そろそろ戦が始まる気がすンだよなァ……」

二人は、だからこそ何時戦が始まるかには頓着する。

「まじで？」

「ゲルトの勘は、割と当たるからなあ……けど、敵はたった三千だぜ？立ち向かってくるなんて有り得なくね？」

「だよなァ、やっぱ。……けどよォ、なんか怪しい気配があるんだよ」

ただの勘。第六感なので、ことさら強く主張することはできないし、またそのつもりもない。だが、ゲルトは自分の勘というものをかなり強く信じていた。いや、彼が信じているのは勘というより「自分」の方だが。

ゲルトは、背に差してあった大剣を抜く。平常時に剣を抜くその動作に多少視線が集まったが、ゲルトは気にせず立ち上がった。そのまま歩き始める。

「素振るのかよ」

「ああ」

「こうなった時のゲルトの勘はいいからなぁ。俺も一緒に行くわ」

「それじゃあ俺も」

二人とも、各々の得物を取り出し、ゲルトの方へ小走りする。ゲルトの勘が正しくて、今すぐにでも戦が始まる可能性を考えてのことだ。体を少し温めてちょっと汗が出た位の状態が、戦場に臨むにはちょうどいい。

「じゃあ、ちょっくら体温めっか。十分位でいいよな」

そう言い残して兵舎から出ようとしたが、ゲルト達の行動は大声によって遮られた。

「注進！」

一瞬で周りの注目を集めた正規兵の使者。殆どの兵士は緊迫した様子の使者に違和を感じ戸惑っている。二人の仲間はゲルトの勘が当たったことと間の悪さに対して苦笑いを浮かべるにとどめているが、ゲルトは口角を思い切り吊りあげた。

「カール様の書簡にござれば！　敵軍、襲来！　総員、戦闘態勢につけ！　とのこと！」

指揮官の第一大隊大隊長はといえば、彼もまたゲルトと同じように笑みを浮かべていた。

「やっとか。体も鈍って来て暇だったんだがなァ。待ちわびたぜ！」

どこぞのチンピラに喧嘩を売られたかのような反応。流石は、大豪族ビル・ダイオシン・D・カールが最も信頼する部将であり豪傑ジョージ大隊長。「闘牛」という二つ名に恥じない程の器量を持ち合わせている、とゲルトは上官の頼もしさに思わず驚嘆する。その巨体を、さも面白そうに揺らし、ふと思いついたように話の続きを促す。

「ジュネ将軍の率いる兵、目測一千から二千程が奇襲攻撃を仕掛けてまいりました！ベズ子爵軍、リイル侯爵軍が相次いで撃破された

とのこと！」

ざわざわ、と僅かに喧騒が生まれた。すぐさまジョージは一喝し、そして立ち上がった。

「二軍も撃破されてやっと気付いたのか！相当緻密に計算された奇襲みたいだなあ！で、殿からの命令はなんだ！」

快活に大笑いするジョージ。だが、彼の心中はそう単純ではなかった。

（うちの情報収集が下手打ったのか、敵さんが巧かったのかは分からねえが……新生王国軍は内部に間諜送りこんでたんじゃねーのかよオイ。まあ、なんっつってもジュネ将軍が相手だから手際の良さには納得できるが）

「カール軍精鋭八千は魚燐の陣を採る、とのことです」

「おうよ！良し、てめえら！急いで戦闘準備しろや！」

ジョージの怒号が飛び、一気に慌ただしくなった第一大隊兵舎内。その中、数少ない冷静な者たちは一斉に思案を始めていた。

（はッ。今日の俺ァ最高に勘が冴えてるじゃねえか！来たぜ来てるぜ俺の轟運がァ！）

（乱戦に紛れてもアレは暗殺できそうにない。流石は闘牛、隙が無いな。仕方ない、一旦情報を本営に送るか）

（ちっ。敵は少勢。恐らく奇襲に成功してすぐ退却するだろうから

なぁ。急がなきゃならんなあ糞が！）

お知らせその２（前書き）

お知らせ内容は２０１１年１０月のものなので、それ以降に本作を始めから読んでいる方は読まなくて構いません。

お知らせその2

２０１１年１０月の頭に改稿をしました。内容は以下の三つ。

?:段落の時の行空け

?:冒頭～一章の大幅改稿

?:その他もチョコチョコと

２０１１年９月に読んだっきりの方は、始めから読み直した方がいいかもしれません。ちなみに、?は割と伏線に関係がありますが、?は殆ど気にしなくていいです。ちなみに伏線といってもそれが明らかになるのは主に第五部とかその辺りなので、今から読み直さなくてもそれ程支障はきたしません。

見切り発車で始めたので、ラストを決めたのがつい最近になってしまいました。すいません。

お知らせその３（前書き）

お知らせ内容は２０１１年１０月のものなので、それ以降に本作を始めから読んでいる方は読まなくて構いません。

お知らせその3

遂に改稿が終了しました。

ただ、先のお知らせにて言ったことを一部訂正します。

～今回内容が大幅に変化した話～

プロローグ
第一章第一話第三話第五話第九話
第三章第十話第十一話

～今回新たに挿入された話～

第二部冒頭の「これまでのあらすじ」

ということで。申し訳ないですが、読者の皆さんには機会を見て最初から読み直すことをオススメします。無論話の大筋は全く変わりませんが、設定が一部（召還理論とか）改変されたり新しい設定が組み込まれたりしています。第六章が始まるまでには読み返すべきですかねー。逆に言えばそれまで大丈夫ですお。

「細けぇことはいいんだよ！」

とおっしゃる方は読まなくても大丈夫かと思われます。当分支障はありませんので。

では、無駄に二度も更新してしまってすいませんでした！　お知らせは二つとも、一か月程経ったら消します！

☆２０１１年１１月２３日位に追記

第二部冒頭の「これまでのあらすじ」の書く書く詐欺と、お知らせの消す消す詐欺について。

嘘をついてごめんなさい！
あらすじの方は、書こうと思ってたんだけど存在を忘れてた！
お知らせの方は、消し方が分かりません！（↑アホ）

第４章第５話　挟撃（前書き）

冒頭にある地図ですが、一つ訂正を。
旧制カタパルト王国軍の兵力は２０００ではなく２５００です。

第4章第5話　挟撃

>i27676—3429<

ジュネ将軍から電報が届いた。

『反乱貴族軍への奇襲は成功。既に二軍を切り崩した』

それを受け取ったジルの顔には僅かながら笑みが伺える。奇襲した勢いで貴族軍を二つも打ち破ったことで心に余裕ができたらしい。このまま敵がジュネ将軍の奇襲に大慌てすれば、第二の奇襲も成功に導けるのではないか、と考えているのだろう。

カタパルト王国の正統な王位継承者を自称するマクシム・カタパルト率いる連合軍、その数およそ二万。途中で合流した豪族カールの軍勢とだけでなく貴族軍内部でもなかなか統率がとれていない様子だが、それでも二万人だ。

先の戦いで圧倒的な劣勢をものともせず勝ちぬいたジルとて、不安を抱かずには居られないのが現状だった。

「やっぱ、ジュネ将軍って強いんだなー」

ぶっちゃけジュネ将軍の三千人と俺達の二千五百人で二万人を挟

撃するのは無理のある作戦だ。いくら俺達の電撃的高速機動で敵の虚を突いたとしても、勝てるもんじゃないだろうと思っていた。

だが、やはり将兵の質というものは戦においてかなり重要らしい。ジュネ将軍はカタパルト王国最強とまで言われる用兵家。彼の率いる歩兵軍団三千人の内三分の二は、カタパルト王国の直属軍なだけあって精兵である。あっという間に貴族軍の一部を打ち破って見せた。

そしてこちらもまた精兵の集まり。ジル率いる近衛隊五百に加えて、歩兵軍団一千人（第六部隊・第九部隊）と騎士団五百人（第四部隊）と魔術師団五百人（第三部隊）が統制下にある。徴兵されただけの農民が多数を占めている軍勢とは質が違う。

「そうだね。父上もよくジュネはカタパルト王国有数の軍人だって褒めてたし。それに、ジュネが率いるのは常備兵の直属軍だ。民兵とは訳が違うよ」

ジルも俺と同じ考えを持っていたらしい。当たり前か。

それにしても、俺には少し懸念材料があるんだよなー。

常備兵は民兵よりも強い。これは常識だ。日々鍛錬を怠らない兵士と日々農業に勤しんでいる兵士のどちらが強いか、と考えれば一目瞭然。民兵は勝ちに乗るとかなり強くなるが、負けそうになるとかなり弱くなる、っていう側面も持つし。精兵で一撃加えればそれだけで士気は下がるだろう。

で、問題なのはさ。あっちにも少なからず常備兵が居るってことなんだよねー。

「カール軍。あれは侮れないと思うけど、どうなのさジル」

豪族カール一族軍。武辺で名を挙げてきた豪族なだけあって、重臣は皆武勇に長けたものばかりだ。配下の兵もまた精度が高い。戦闘技術を売り物とする傭兵や武勇でその地位を上げてきた兵士が半数以上を占めている。

「既に手は打ってあるよ。暗殺者を数名、潜り込ませてある」

「そんだけ？」

「いや、まさか。貴族に一人内通者を作っている。ゲタポ侯爵って男でね。開戦と共にカール軍を攻撃するよう手配した」

「大丈夫なのかよ、そのナントカ侯爵って奴」

二重スパイってことはないのかな。ちょい不安。

「あ、ちなみにゲタポ侯爵は気が弱いから虚偽の内通ってことはないと思うよ。胆力が無いからそうだとしてもすぐ分かる。それに、こちら側からはあんまり情報を渡してないからね。反故にされてもそこまで被害は被らんはず」

「そっか」

成程。ゲタポ侯爵としても同じ貴族の軍勢を攻撃するよりは、裏切る可能性のあるカール軍を攻撃した方が気が軽いだろう。虚偽の内通だった時の予防線さえはってあれば、良い策略だ。

俺の後ろから何人かの足音がした。振り返ると、そこには厳つい男が二人と怪しい気配の男が一人と赤髪の美女が一人。シュマンさんか。何時の間に来たんだろう。

「殿。そろそろ頃合いかと」

騎士団第四部隊隊長ことシュマンさんが口を開いた。歩兵軍団第六部隊隊長、歩兵軍団第九部隊隊長の二人も同意見の様だ。怪しい気配の魔術師団第三部隊隊長は何も言わず三人の後ろでニヤついている。ロン毛で目の彫りも深く、いかにも魔術師って感じの容貌だ。

彼らの目の先には、ジュネ将軍の奇襲で右往左往している連合軍の姿があった。ぶっちゃけ言って無様だ。カール軍と比べても情けなさすぎる醜態。雑魚オーラぷんぷんだし、結構余裕に片付けられるかも。

「そうか。では、どこを切り崩す」

ジルは俺に対する先程までの緩い表情を一変し、固い空気を身にまとう。そうだな、それ位緊張感あった方がいいかも。俺も気合い入れよう。

歩兵軍団隊長の一方が答えた。

「貴族軍ですな。まずは、チンジャウ伯爵の軍勢を攻めるのがよろしいかと」

「ふむ。そうだな」

貴族軍から攻めるのは常道。敵の弱いところを先に攻めるのが戦

術の王道だからだ。どっちみち精強なカール軍はゲタポ侯爵とかいう人に横槍を入れられて大混乱に陥るのだし、相手にしなくても貴族軍が壊滅すれば退却するだろう。

十秒程黙考したジルはふと俺の方を向いて質問した。

「リョウ。何かあるか？」

そーだなー。どっかの本で読んだナポレオンの戦術でもパクろっかな。あの戦術ってナポレオンが創始者ってことは近代に出来たはずだから、モロ中世のこの世界だと斬新じゃね。

あの戦術を行うには魔術師が大砲の役割を果たさなきゃいけないのがネックなので、一応質問しよう。

「確か、魔術師団第三部隊は遠距離型だったと思いますが、よろしいでしょうか」

「うむ。大半はそうだ」

よし、それじゃあ、ドヤ顔しながら近代戦術を披露させてもらいますか。

「では。魔術師団に一斉射撃をさせることで敵に一撃を与え、騎士団で敵を縦断させて混乱を深め、歩兵軍団一千で蹂躙する。これが最上の策かと」

近代戦の応用だ。大砲をバンバン撃って、騎馬隊で敵を引き裂き、歩兵で勝利を決する。遠距離型魔術と大砲なんて大差ないのだし、問題ない。

「次善ですな」

歩兵軍団第六部隊隊長、略して第六歩兵隊長が口を挟んだ。

「歩兵軍団を一気に投入するよりは、少しずつ投入した方が良いでしょう。チンジャウ伯爵勢は弱兵。ここで二千人投入するよりは、逐次投入した方が敵軍の士気はより下がるでしょう」

「うむ。確かに」

と、第九歩兵隊長。え、何で？

「簡単な話です。次々と少しずつ戦力を投入していくとしましょう。我々が兵力を全て投入し終えても、敵は更に兵力を投入してくると思って士気は下がります」

成程。戦力を全力投入して何時まで経っても増援しなければ、敵もこちらの兵力が三千にも満たないと分かってしまう。それよりは戦力を逐次投入した方がいいということか。

でも、疑問も残る。

「いや、でも制圧した後も戦いはあるんだから、一気に投入して早く片付ける方がいいんじゃないの？」

制圧するのが目的ならばそれでもいいけど、チンジャウ伯爵軍を倒しても敵はまだまだいる。それならば、さっさと倒す為に一斉に歩兵を投入した方がいいと思う。

俺の考えを理解したのか、歩兵軍団隊長の二人は考え込む。ここで、魔術師団隊長が口を挟んで来た。

「この者の言うことには理屈が通っていますよ。お二人方も異存はないでしょう？」

確かに、そうだな、と歩兵軍団隊長は納得してくれた。三人が賛成するなら俺の言ってることに間違いはないのだろう。失敗を恐れずに自分の意見を言って良かった。状況はより好転するみたいだ。

「では、制圧後のことについて話しましょうか」

と、シュマンさん。先程までは議論に口を挟んでいなかったが、彼女はいち早く役目の終わる騎士団隊長だ。自分の役目が終わった後のチンジャウ伯爵軍制圧方法については興味がなかったからなのだろう。

歩兵軍団第六部隊隊長が答える。

「我々歩兵軍団は状況の変化を見て臨機応変に対応するのだが、問題は騎士団と魔術師団だな」

話を振られた魔術師団第三部隊隊長は一言「騎士団の援護に徹しますよ」と言った。笑みを浮かべつつ話すこの人は俺生理的に受け付けないわー。

「それでは、私達騎士団は貴族軍内部を駆け回りますね。貴族軍が壊滅した後は、カール軍を攻撃します」

「では、陛下。ご指示を」

四人を代表して歩兵軍団第六部隊隊長がジルに指示を仰ぐ。指示といっても、俺達の話しあってたことを纏めるだけなんだけどね。

「うむ。では、チンジャウ伯爵軍に対して一斉に魔術を行使し、騎士団でチンジャウ伯爵軍を二分せよ。その後歩兵を一斉投入してチンジャウ伯爵軍を制圧する。右翼は第九部隊、左翼は第九部隊、中央は近衛隊だ。

騎士団はチンジャウ伯爵軍を裂いた後は、敵陣を縦横無尽に駆け巡れ。魔術師団は歩兵投入まではチンジャウ伯爵軍へ魔術を放ち、それ以降は騎士団の援護射撃に徹せよ。歩兵軍団はチンジャウ伯爵軍制圧後は各自の裁量で動け。

以上だ」

「「「「は」」」」

テントを張った宿舎から外に出る武官達。ジルも付いていくようなので、俺も金魚のフンをする。

外では既に兵士たちが戦闘準備を終えていた。ジルが国王専用の名馬っぽいのに乗った。場がシーンと静まりかえる。

「諸君」

ジルは演説を行うらしい。兵士たちはその言葉を一言一句漏らすまい、と全力で耳を傾けている様子だ。中には笑みを浮かべている者も居る。

「これより、反乱軍の懐へと侵入する。彼奴等は亡き父上の遺言に背き、悪戯に国を乱すマクシムこそが王に相応しいと決起した。そ

の数、およそ二万。ジュネ将軍の軍勢と合わせても、まだ我らの三倍以上ある」

放つ言葉とは裏腹にジルは余裕気な表情をしていた。

「しかし、我らには大義がある。先代国王陛下の御世の様な、平和な世界を再びこのカタパルトにもたらすという、大義だ」

その眼光は獲物を狙う高の様に鋭かった。

「三倍の兵力が何程であろうか！　平和を乱す物が何者であろうか！　我らには大義があり、そして我にはお主ら精兵がなんと二千五百余騎もおる！　そして、向こう側には忠臣ジュネが率いる二千の同志が戦っている！」

手を振り上げて、尚もジルは言葉を紡いだ。

「今こそカタパルト王国旗本の真の役目を果たす時！」

一息おいて。ジルは声を張り上げた。

「すわ、かかれぇ！！」

地を震わせる兵士の雄叫びと共に、ビスケット紛争第二の奇跡『コーランド電撃戦』が幕を開けた。

第4章第6話　猛進

あちこちで魔術が飛び交い、剣戟の音が混ざりあっている。皆が皆決死の表情で、気の抜けた者から血を噴き出して死んでいく。激戦である。

が。

やはり、合戦の序盤と比べると進撃速度は劣っていた。最初は奇襲を食らってあたふたしていた連合軍も、少しずつ冷静を取り戻してきたようだ。となれば、やはり兵力で劣るジュネの部隊には面白くないこととなる。

コーランド電撃戦は第二の局面を迎えていた。

「かかれぇ！　かかれぇ！」

おおおおーーーー！！

歓声は鳴り響くものの、いまいち戦況は良くならない。ジュネは一人歯を悔しげに噛み締めていた。

（もうすぐ援軍が来るだろうが、やはりこの劣勢は覆しがたいな。いかんせん、数が違いすぎる……！）

現在、ジュネの軍勢は二つの勢力に攻撃されている。一つは、反乱貴族軍。先程打ち破ったベズ子爵の軍勢も体勢を立て直し、既にこちらへ攻撃を加えている。一つは、カール軍。「闘牛」という二つ名を持つ豪傑ジョージを先鋒とした、百戦錬磨のカール大将軍率いる約八千もの戦力である。

序盤は奇襲の恩恵もあってそれらを圧倒していたジュネ軍だったが、次第にその勢いは薄れてきた。
守勢に回ると弱いが攻勢に回れば最強、とまで言われたジョージ大隊長の迂回攻撃が直接のきっかけだった。自ら先頭に立って猛攻を仕掛けたジョージに気圧されたジュネ軍。その隙を見逃さず攻勢に転じたカール軍本隊によって序盤の勢いを失ってしまったのだ。

「ジュネ将軍閣下とお見受けしたぁ！！　いざ、勝負！！」

壮年の男。十年を超えた傭兵歴を持つ、赤鹿傭兵団団長ガゼルである。十字の傷跡とは別に頬には新たな傷ができており、血飛沫を浴びたのか実際に斬られたのかは分からないが、右目が真っ赤に染まっている。

「掛かってくるがよい！」

ジュネは即座に腰から短刀を取り出した。今年で四十五歳。この世界でいえば老齢といっても差しつかない年齢であり、まだ若々しさを多く残しているガゼルと戦うのは、普通なら無謀と言えよう。
雰囲気や肩書きから推察できるように、ガゼルは相当の実力者だ。一対一ならカタパルト近衛隊隊士とも互角以上にやりあえる。伊達に傭兵団長をやっている訳ではないのだ。

だが、ジュネにとってガゼルと戦うのは無謀ではない。

伊達にカタパルトの将軍をやっている訳ではない。少なくとも、自信を持ってそう言える程度には誇れる武勇を持っている。

「はぁぁ！」

ガゼルの大剣が乗馬しているジュネの脇腹に向かった。それを軽くいなして、ジュネは下馬する。
ガゼルは一歩後方に下がり、今度はジュネの頭部を切り裂かん、と前方へ跳びながら大剣を上から振り下ろした。
（今から攻撃されても間に合わないだろう！　これで、勝つ！）

ビュンッ！

ガゼルの期待とは裏腹に、耳に届いたのは渾身の一撃が空を切る音だった。見れば、一歩退がったジュネの額には紅い真っ直ぐな縦の線が描かれている。先程にはなかった傷跡。つまり。

（ぎりぎりの所でかわしたか！）

この一瞬。ガゼルに、自分の心が全て読まれているのではないか、という一抹の恐怖が湧いた。たった一秒弱でガゼル渾身の前振りをかわしたジュネ。最初からガゼルの攻撃を想定していなければ、あそこまで鮮やかに大剣を避けるのは不可能なのである。その上、ジュネの額にはガゼルによる切り傷があった。それが指し示す事実は、ことのほか重い。
（すんでの所で避けれたのではなく、ぎりぎり避けることで行動の無駄を省いたのか！　……、強い！）

一方のジュネは、後方への跳躍を利用して、着地した時には完全に体勢を整えていた。
腰を落とし、左手に短刀をもって右手をフリーにする構え。普通より手足を柔軟に曲げているのは、筋肉を一気に伸ばすことで発生

するエネルギーをより大きくする為だ。

そして、四半世紀は戦場に立っている猛将ジュネである。ガゼルの心の隙を読めない訳もなく、即座に行動を起こした。

「とぉぉ！！」

収縮した左手を一気に伸長。目標は喉。力強い踏み込みと共に、ジュネの突きは電撃の様な速度でガゼルの首へ向かった。

一転して命の危機に見舞われたガゼルだったが、彼も凡人ではなかった。前振りには失敗したものの、体勢は崩れていない。手首を反時計回りに回しつつ、大剣を下から上に振り上げた。

「――――ッ」

ガゼルの肩に痛みが走る。ジュネの突きは喉から外れて肩に向かったのだ。それも、ただ突き刺した訳ではなかった。ガゼルが大剣でジュネの短刀を上に擦り上げた為、下から上に切り裂かれてしまったのである。

ジュネの突きをいなしながら半歩左方に動いたガゼルは、擦り上げた大剣の刃をジュネの頭に向けた。

突きを外したジュネは短刀を持った掌を上方に向けた。

ガゼルは痛みで一瞬動きを止めた。ジュネは体勢の崩れで二瞬程、体勢の再構築に時間を費やした。

そして、結果的に先手を取ったのはガゼルだった。今度こそ、とジュネの頭部に向かってガゼルの前振りが放たれる。

通常ならば突きを防がれた時点でジュネの敗北は決定的である。この状況から攻撃を防ぐのは難しい。

「閣下ァ！！」

近従の一人が声を上げる。悲しみの色の混じった叫び声だ。しかし、予想に反して、ジュネの命はそこでは尽きなかった。

ガキィィィンッッ！！

剣と短刀のぶつかる音が戦場に打ち響く。ジュネの額の前にあるのは、その左手。短刀の鍔でガゼルの大剣を防いだのだ。

（何故だ！　何故短刀の鍔ごときで俺の剣が防がれた！　……まさか、この男。大剣の攻撃力を全ていなす程巧みな体重移動をしたのか！）

実際には体重移動だけで全てのエネルギーをいなしきれた訳ではなかった。

ジュネは右籠手の強度の高い部分を大剣の先端にぶつけて威力をいなしていたし、その両籠手の内側は垂れ流れている血で充満している。

決して、そのような神業をやってのけた訳ではない。

が、この傭兵団長ガゼル。実は、最初から「ジュネ」という名前に潜在的な恐怖を抱いている。そう、彼は決して心が強い訳ではないのだ。そして、その驚愕によって一瞬動きを止めてしまったガゼル。余程訓練された兵士にしか分からない程のものだったが、確かに彼は隙をさらけ出してしまった。

瞬間。

ジュネは時計回りに手首を百八十度回転させた。同時に腕も動かす。狙うは左胴。

（マズった――――ぎゃ、逆胴……！）

避けようと体を動かすが、もう遅かった。ジュネの大剣はガゼルの脇腹を正確に捉え、痛恨の一撃を加えたのだった。

「とぉぉ！！」

ジュネは剣を通して引き裂かれる肉の感触を覚えた。グジュリ、と内臓が割かれる音が耳に響く。逆胴を食らったガゼルは、倒れた。

「なかなか強かった。ここで殺すのも惜しいが……まあ、諦めろ」

吐血し、そして激痛に耐えきれず金切り声をあげたガゼルだったが、その目はジュネを離すことは無かった。最期まで敵意を失わずいる姿に感心こそ覚えるが、戦場で死ぬのは傭兵の宿命。助命という単語は頭の中に現れすらしなかった。

しかし、とどめを刺そうとしたジュネの前に立ちはだかる男が一人。

「団長を死なす訳にはいかねえ……！」

目に怯えを残してはいるものの、闘う気満々である。斬り殺そうかとでも思ったが、その後ろからもぞろぞろと仲間と思わしき男が

現れた。

「ほう、傭兵団長か。道理で強い訳だ。それに、人望もあるようだな」

ジュネは短刀で複数の相手をするのは分が悪いとみて、ガゼルの落とした大剣をさっと拾った。大胆に、敵に背中を見せた行動である。だが、仲間達は動けない。戦闘中にだらだらと話された挙句背中まで見せられては思考停止するのもやむを得ないだろう。

「閣下！　虹蛇（にじへび）の御旗を掲げる軍勢が敵軍を後方から襲撃した模様です！」

「なにぃ！？」

虹蛇の御旗。カタパルト王家が自ら戦場へ向かう時に掲げる旗である。

報告を受けたジュネはすぐ様反転、軍の指揮に戻った。

「潜ませていた予備兵の内二百人に、カール軍への横入りを命じる。伝令、急いで伝えに行け」

「わかりました」

（それにしても、よもや、陛下御自らが出陣されるとは……）

ともかく、ジュネには遊んでいる暇は無い。

今少し敵を切り捨てて部下の士気を上げたい所だが、国王である

ジルが出てきたということは、今こそが戦の最重要時点である。ここでジルの奇襲に乗っかって敵を崩すか、この機会を逸して長々と戦闘を続けるかでは天地の差なのだ。前者に成功すればこの戦には勝利で幕を閉じれるが、後者だといずれ兵力差が理由で押し切られる。

今この瞬間に起こす行動こそが、戦の趨勢（すうせい）を決めるのだ。

「全軍……突撃ィィィィィ！！」

第4章第7話　突破

戦場には騒音が絶えない。指揮に使うホラ貝、太鼓の音だけでなく、剣戟のぶつかる音、叫び声、気勢。数々の種類の音が混ざり合って、どこか異質な空間が形成されるのだ。

「かかれぇ！」

「うげぼっ」

「ギャー！」

その中で、騎士団第四部隊隊長である女騎士シュマンは、無言のままに敵兵を屠っていた。

「死ねェ！」

斬りかかって来た傭兵らしき男が長槍を突き出してシュマンの落馬を誘ってきた。この掛け声は、シュマンの動揺を誘うハッタリだろう。そう判断したシュマンは、奇をてらった突き方をしている男の穂先を冷静に捌き、反撃の機会を窺う。

（三流の騎士ならとうに落馬しているだろう。巧緻な攻め口を見る限り、弱くはないのだろうな。しかし……）

（所詮は二流！）

シュマンは機を見て攻撃に転じた。こうなると、速い。流麗な対捌き、馬捌きで息つく暇も与えず猛攻を繰り出す。最初こそ耐えて

いたが、五合六合と間断ない攻撃を受けて、一瞬体勢を立て直そうと男は間を取ろうとする。

（敵が後ろに下がった今が、好機！）

「はぁ！」

跳躍。

シュマンの大剣は、男の正中線を捉えた真っ直ぐな軌道を進んだ。男は槍を上に上げて、頭をかち割ろうとする大剣を防ごうとした。

二人は交差する。

「うあぁぁあ！」

男は砕かれた頭から血を噴き出して倒れた。シュマンは残身をして男の死を確かめた後、騎馬を反転して次の敵に備える。

（奴の剣の軌道は無駄が多すぎた。奇をてらった打ち方よりも、打突の基本である真っ直ぐな打ちの方が効率的なのにも拘らず、だ。最後のも、最適な軌道で守られていたら、勝負は分からなかっただろうな……）

更に数人の雑兵が斬りかかって来たが、シュマンの敵ではなかった。適当に数合あしらった後、隙を見つけてバサリ、と両断する。これを何度か繰り返すだけで、身体的には彼女に勝っている男達は、次々と倒れ伏せた。

配下の兵士達から、流石隊長、と感嘆の声があがる。

というのも、殆どの敵は隊長であるシュマンの元にくるまでに配下の兵士に殺されてしまう。そして、それにも関わらず彼女の元まで到達した者は、そこらの雑兵よりかは余程良い腕を持っている。
それ程の勇士をいとも簡単そうに、実際はそこまで余裕ではないのだが、流れ作業のようにあしらって、倒していく。その光景は、シュマンの容姿の可憐さとも合わさって、兵士たちの士気を鼓舞したのだ。

しばらく前線で剣戟を交わしたシュマンは後方へと下がった。

（兵士の士気は十分上がった。もう無理をして戦わなくてもいいだろう）

彼女は隊長という役職に就いている。本来この役職は配下の兵士を指揮・監督するのが仕事なので、前線に立たなければならない訳ではない。
特に、現在の様に最高指揮官が国王なので裁量が殆ど隊長達に任されている状況だと、隊長は後方で仲間（歩兵軍団隊長が二人と魔法師団隊長が一人）と連絡を取り合い、連携しながら指揮をする、というのが理想的なのだ。

ただ、兵士の士気を上げるという一点だけを考えれば、隊長自ら前線で剣を振るうという状況は理想的である。まして、美人であるシュマンが男ばかりの敵兵を屠る姿は非常に幻惑的であり、兵士たちの心を奮い立たせる。

シュマンはメリット・デメリットをきちんと考えた上で、少しの時間ではあるが前線に立つのを決断したのだった。

「隊長。いかが致しますか」

後方に戻り指揮椅子に座ったシュマンに話しかけた男は、騎士団第四部隊の副将である。連絡兵を何人か連れている所を見ると、暗にシュマンの指令を伝えるから早く指示してくれ、と言っているのだろう。

「そうだな……。そろそろチンジャウ伯爵軍も突破できそうだ。突破後は右回りに旋回する。今はとにかく前方に攻勢を集中しろ」

「了解しました」

連絡兵が散らばった。恐らく各曹長の元に伝達へ行っているのだろう。

ここで、カタパルト王国騎士団の構成を説明しよう！

騎士団は一人の団長によるワンマン体制が敷かれており、その下には第一部隊から第六部隊までである。そして、第一部隊隊長は団長が兼任している。

人数は、第一部隊だけ五百人、第二部隊から第六部隊までが三百人ずつだ。

そして各部隊には五十人程度の兵力を司る曹長がいる。曹長は全員で四十人程だ。曹長が率いるのは分隊と言われる少人数の部隊である。会社で言う中間管理職。前線に立って戦いつつも上司の命令を聞いて小隊を指揮しなければならない、苦労の多い役職だ。

さらにその下には伍長がいる。伍という四人から七人の小さな集まりを纏める役職で、曹長の命令を聞いて数人しかいない伍の皆を

纏めればいいだけの比較的楽な仕事である。

ちなみに、兵站を司る補給部隊の編成は実戦部隊とは若干違う。

閉話休題。

数分経ち、シュマンは再び動く。チンジャウ伯爵軍を突破したのだ。

「さて。では、再び私が前方に立とう。後方での指揮は頼むぞ」

副官に後方からの指揮を頼み、シュマンは手綱を強く引き締めて前線へと向かった。

流れ矢が数本飛んでくるが、大剣で叩き落とす。

五本目の矢を叩き落としたシュマンは、遂に先頭へ到着した。先頭を走っていた曹長に代わって、シュマンが先鋒を務める。曹長は次鋒の位置まで下がった。

慌てふためく貴族軍が次々と目に入る中、シュマンは各貴族軍の間を抜けて突き進む。狙うは、金蜂の旗のある軍勢。イフミ勢である。

その目の前にまで近付き、シュマンは吼えた。

「かかれぇぇぇぇぇぇぇ！！」

応と咆哮を返しながらシュマンの後ろを従う五百の騎士達が、イフミ勢に思い切りなだれ込む。

最初に敵兵と遭遇したのは先頭を走るシュマン。五、六人の敵兵が横に並んで、天に突き上げた槍を一斉におろして攻撃する。シュマンは卓越した技量にとってはそんな攻撃などどういということはない。大剣を横に振って彼らの槍を全て叩いたシュマンは、兵士らをものともせず走り去った。

しかし彼らに生きる望みはない。シュマンの後ろを追って突撃してきた騎士総勢五百人。一つの獣のように直進する衝撃力に対抗できるはずもなく、無慈悲に蹂躙される。

後続の騎士の攻撃に数人の者が体を打ち砕かれ、倒れるにとどまった者も馬に蹴飛ばされ続けて息絶えた。

一方のシュマンは敵陣の奥深くまで突き進む。人の大きさ程はあろう大剣が雑兵の首を次々と刈り取っていった。圧倒的な実力差を感じ取った雑兵は徒党を組んで対抗するがシュマンの命を奪うには至らず、後続の騎士に押し潰されていった。

が、イフミ勢はすんでの所で耐えた。精兵を表に出し、事態の打開を放ったたのだ。また、それと同時に味方の貴族軍から加勢が入る。

これにはシュマンも手を焼いた。一対一では余裕でも、ある程度武術の心得を持つ者が大勢でかかってくれば焦りは隠せない。加勢により敵勢は自軍の二倍程となり、騎士達も一対二の状況には厳しいものがある。

(面倒だな。敵勢動きから考えて、指揮官は戦下手のイフミ公爵ではないようだ)

しかし、シュマンの予想に反して、イフミ勢の中央が騎士団の猛

攻を受けて崩れ始めてきた。想定外の優勢。

無論この状況にも理由がある。

イフミ勢の指揮官は経験豊富な初老の上級貴族で、良将という程ではないが凡将ではなく、将器はほぼ互角だ。兵数は敵勢の半分程度。しかし、兵士の質が違った。奇襲をかけたため勢いがあるというアドバンテージもあった。それから、士気にも大きな差があった。

そしてなにより、魔術師団の魔術による援護が決定的であった。

火力が圧倒的に違う。魔術師を数人しか擁していないイフミ勢と、五十人程の魔術師が莫大な火力で攻撃してくれるシュマンの部隊。火力の効果に疎いシュマンは理解していないが、後者の方が有利なのは自明の理だ。

「そろそろか」

混戦状態になったのを確認して、シュマンは後方へ下がった。大将たる者ずっと剣を振っている訳にはいかない。後方から指示を出してよりより状況で兵を戦わせるのも大きな役目である。

すると、連絡兵の男がこちらに寄って話しかけてきた。

「隊長」

騎士団の者ではない。歩兵軍団の制服を着ているので、第六部隊か第九部隊の隊長からだ。

「なんだ」

「歩兵軍団第六部隊からの通達です。チンジャウ伯爵軍撃破せり、と」

「ほう」

シュマンは副将を見やった。副将が頷く。

「では、突撃を仕掛けよう。いつまで経ってもここで足止めを食らう訳にはいかんからな」

副将が連絡兵を呼び、同じ文言を繰り返して第九部隊に送った。第六部隊からの連絡兵はもう帰っている。

数分経ち、シュマンは椅子から立ちあがった。

（もうとっくに連絡はついているだろう。敵も守勢に疲れてきている。突撃するには十分だ。さて、いくか）

「隊長、では」

相変わらずシュマンの意を汲むのに長けている副将が表情を変えた。

「ああ、突撃だな」

その時だった。

歓声が沸き起こったのである。

場所は、第四部隊戦線の更に奥、敵陣の方向。大将首を取ったのは

状況的に間違いなかった。

「シュマン隊長。イフミ侯爵の首を我が隊の兵士がとったようです」

槍の穂先に刺されて天へ突かれたイフミ侯爵の首を見たのだろう。目の良い部下がシュマンに間違いない、と言ってきた。

ちなみにイフミ侯爵という男は、イフミ公爵家棟梁の弟であり、軍事については兄の代行をしている貴族である。七年前の戦役で、反乱の首謀者の一人を打ち果たす、という功績をあげたことで一躍有名になったイフミ公爵家の雄。

大軍を指揮出来る程の大器ではないが、東方マクシム軍における重鎮だったことは否定できない。そのイフミ侯爵を殺したのである。当然のように、敵軍は動揺している。イフミ勢だけではなく、周りで連携している他の貴族軍も同様に動きを止めた。

絶好の機会だ。

「者共ォォォ！　敵軍の指導者イフミ侯爵は既に討ち取った！　今や賊軍に将はおらず！　総員、突撃ィ！」

シュマンは喉を枯らさんばかりに怒鳴り、下馬して隊長自ら敵軍に突っ込んでいった。その大剣を縦に横に振り回し、大した装備を持たない雑兵を次々と殺してゆく。

突き殺し、叩き殺し、斬り殺す。

形勢が変わった。

大将自ら前線へと飛び込んで敵兵と戦っているその様が、第四部隊兵士の心を動かしたのである。

「うぉぉぉおおお！」

「はぁぁぁああ！」

「キエェェィィィ！」

シュマンにあてられて気勢を上げた兵士達の歓声が所々から沸いた。五百人もの大集団が熱を帯びていき、イフミ勢の陣形を崩していく。

「退却、退却だー！」

イフミ勢の副将は厳しい戦況をみて退却を敢行しようとするが、甘く引き返させてくれる第四部隊ではない。士気を失い我先に逃げるイフミ勢は、追い討ちをかける第四部隊の兵士達によって、人数をどんどん削られていった。

イフミ勢の隣を位置取っていたセルマンド勢、ヒール勢、第二陣で援護していたスナル勢。これらの軍勢も士気を失っていた。

味方が無様に敗走しているのだから、当然だ。

シュマンはイフミ勢の敗走をしっかりと確認すると、副将に言い放った。

「私は右のセルマンド勢をやる。お前がヒール勢にあたれ」

この戦場でシュマンの第四部隊は突出している。突出していると前

右後ろの三方向から攻撃を加えられる位置にあるという欠点はあるが、同時に、敵陣を引っかき回すことを容易にするという特長もあるのだ。

部隊を二つに分けて、シュマンはセルマンド子爵の軍勢へと突っ込んでいった。

第4章第8話　苦境

戦場は酷いあり様になっていた。ジョージは喉を枯らさんばかりに叫ぶ。さっき言ったのと同じ内容だが、乱戦と化した戦場では何度も言わないと将兵に伝わらない。

「散らばるな！　味方同士で固まって、連携しろ！」

既に横陣を突破された今、できるだけ被害を減らして反撃の機会を待つしかない。ジョージは槍を振るいつつも、苦い表情をしていた。

（まさかこれ程の苦境になろうとはな。いささか考えが甘かったのかもしれん）

ジュネ軍の奇襲を受けた時、ジョージの中にそこまでの不安はなかった。不意を突かれたとはいえ、ジュネ軍は総員合わせてもカール軍の半数も居なかったのだ。ましてや、カール軍の傍では新生カタパルト王国軍も野営している。

たとえジュネが城に守備兵を全く置かず出撃したのだとしても、序盤の不利は兵力で押し返せる。そう、ジョージは予測していた。

無論、ジュネが兵力差の不利を理解しているだろうことも、ジョージは分かっていた。だからこそ、ジュネ軍は奇襲に成功した後、すぐに撤退するだろうと読んでいたのだ。しかし、ジョージの予測は裏目に出た。

「オラオラオラぁぁぁああ！」

槍を振るって先程からしつこく攻撃してきた三人の兵士を吹き飛ばすも、有効打撃にはならず。ジュネ軍の中でも精鋭の、王国直属歩兵軍団団員の様だ。徴募された一般兵との比率は２：１。ジュネ軍は、強い。

「覚悟ぉ！」

中央に居た団員が突出し、胸元へ向かって突きを見舞う。ジョージが持ち前の技量で左上に擦り上げるも、団員は刀を下から回して素早く中心をとり、すぐに第二弾を繰り出した。

（ちっ。読まれてたか。掛け声もブラフで、この第二弾こそが本命か……ッ）

咄嗟にそこまで考えたジョージは、直進運動する刀を下から右手首で押し上げた。同時に、頭を下へ下げる。

ドゴンッ。

刀の軌道は逸れて額に向かったが、頭に身に着けていた防具に阻まれ、ジョージの頭に強い衝撃を与えるだけにとどまった。

「糞っ」

団員が思わず言葉を吐いた瞬間、ジョージの小刀がその首を斬った。防勢の最中から既に左手を腰に当てて機を窺っていたのだ。攻撃を防いだ瞬間、頭部への衝撃で一瞬動きが止まったものの、小刀を抜いて水平方向に動かした。

首の断面からは血が吹き出て、そのまま地面に倒れこんむ。攻勢

に乗ろうとしていた他の兵士も、思わず立ち止まった。

（精鋭とはいえども、傭兵出身である俺に比べれば、実戦経験は数分の一。戦場では一瞬の迷いが命取りになることを知らねえみたいだなあ！）

左に向かって足を踏み出しながら、左方の団員の首めがけて小刀を投げた。団員は焦って首を横に曲げる。ジョージはその間に槍を天へ立てて、体を近付けた。

焦った団員が上からの打撃を回避しようとするも、もう遅い。攻撃は見てから防ぐのではなく、事前行動から予知して防ぐものなのだ。ましてや、ジョージは一流の武芸者。精鋭である歩兵軍団の水準から考えても、信じられない程の速度で槍を迫らせてくる。

結果として、ジョージの槍は、団員の左肩に深く食い込んだ。

絶叫。

ジョージは手ぶらとなった左拳でその顔面を殴打し、団員の意識を奪った。

右方から最後の団員が急迫する。ジョージは槍を捨てて、後ろへ倒れこもうとしている団員の腰から、右手で刀を抜いた。腰にはまだ一本刀が残っているが、この先の戦闘を考えての行動である。

「死ねぇ！」

（まずいっ。余裕ぶっこいて腰刀を温存すべきじゃなかったみてえだな！　チッ。間に合うか？――）

真っ直ぐ上から下に剣を振る団員。基本の動きで、普通に相対していたらジョージならば対処できるだろう速度だった。が、タイミングが悪い。

反撃を諦めたジョージは抜いた刀の刃を斜め上に向け、左手で剣先を掴み、団員の剣を防いだ。

剣は刀にぶつかった反動で団員の手元に戻る。ジョージの胴を斬るのには持ってこいの体勢。団員は考えることもなく、反射的に二撃目を振るった。

訓練の賜物だろう。

そこらの雑兵なら一発で終わらせてしまうだろうし、経験のある傭兵でもこの行動に至るまでには数瞬を必要とする。しかし、歩兵軍団で何度もやらされた反復練習の結果、団員は考えることなしで攻撃を加えることが出来たのだ。

（さっきの二人よりは上手か。だがな、俺はその上を行くぜ！）

ビュゥンッ。

団員の剣は空を切る。分断された風が微かな音をあげた。

胴打ちに失敗して居付いた団員の隙をジョージは見逃さない。刀を持っていた右手首を返して、団員の首を上から下へ斜め方向に切り裂いた。

最後の団員の首がゴロンと地面に落ち、彼はその命を失った。

（一発目に失敗して二発目の胴を打ったのは良い判断だ。相手が悪かったな。この俺を二発で仕留められると思ったのが敗因だ。油断

もあっただろーしな。ま、当然の帰結ってやつだ）

剣を防いだ時、ジョージはその打撃を利用した。衝撃を受けると同時に後ろに跳んで、間合いを取ったのだ。それに気付かず胴を打ってしまった団員は、ジョージの反撃に対応しきれず、負けた。

「おらぁ！　カタパルトの精鋭はこんなもんかぁ！？　この程度で精鋭っつうんなら、ジュネ本人もたかが知れてるなァ！　総員、速やかに敵勢をぶち殺せぇ！」

僅か十秒で三人の精鋭を打倒したジョージは、挑発の言葉を口にして愛馬に乗った。部下たちはジョージの気迫を受けて、敵を前方へ押し込んでゆく。

ジョージは一息ついて、戦場全体を見回した。

（やはり、敗勢なことには変わらねーな。ゲタポ侯爵の造反もあって、新生カタパルト王国軍の奴ら浮き足立ってやがる。これじゃあ組織的な反攻は望みが無い。速やかに体勢を立て直して退却するしかねーか。それにしても、悔しいもんだな。折角の勝ち戦がまさかの展開でひっくり返されるたぁ、情けねえ）

ジョージは、この戦いの帰結は敗北だろうと予測していた。そして、敗因は旧制カタパルト王国軍の介入による新生カタパルト王国軍の瓦解だとも断定していた。

新生カタパルト王国軍は、農民から徴募された戦争未体験の民兵とピンキリである傭兵の寄せ集めだ。練度は大して高くないし、各貴族が独自の指揮権を持っているので纏まりにも欠けている。

つまり、弱いのだ。

その点、カール軍や旧制カタパルト王国軍とは大きくなっている。カール軍の民兵は相次ぐ戦争で百戦錬磨であるし、傭兵も総じて質が高い。軍の指揮は、豪族カール一族の総領であるビル・ダイオシン・D・カールが全権を持っており、上意下達の即応的な軍隊となっている。

また、今戦場に出ている旧制カタパルト王国軍は全員が王国直属の常備兵である。貴族軍は連れてきていないので、こちらも上意下達である。軍のトップが戦争初心者の国王ジルであるためカール軍程ではないが、配下の家臣が支え合っている為こちらも十分即応的である。

閑話休題。

ともかく、ジョージの考えは正しいと言わざるを得ないだろう。次々と貴族勢が破れる中、現在新生カタパルト王国軍の士気は低く、瓦解寸前の状況だ。

現在のカール軍は北方からジュネ軍本隊の攻撃を受け、西方からジュネ軍別働隊の攻撃を受け、南東から旧制カタパルト王国軍騎士団の一部の攻撃を受けている。

ここで新生カタパルト王国軍が瓦解すれば旧制カタパルト王国軍全軍がこちらに投入され、三方から包囲されることとなるのだ。残った方角である南は山岳地帯。非常にまずい。

その為ジョージはどうにかしてこの状況をひっくり返す必要があるのだが、そこまでの余裕は彼にはなかった。ジュネ軍別働隊の横からの攻撃がかなりの効果を発揮していたのだ。

さっきのパフォーマンスで味方の士気を上げて敵の士気を下げたが、それでも敗勢の雰囲気は消せない。

（俺には良い打開策などは思い浮かばないな。まあ、そもそも俺は大隊長に過ぎぬ。勝敗分岐点で良い働きができるように部下を纏めること位しか出来ないのだったら、そのことだけに集中するとしよう）

ジョージは気持ちを入れ替え、両手で刀を握り締めた。すると、左手から血がポタポタと滴った。三人目の剣を防ぐため刀の先を握った時の傷だ。ジョージはその手を見て、ニヤリと笑ってみせた。

（そうだ、俺は指揮官肌の男ではない。闘牛だ。それが俺の二つ名ならば、暴れてやろうではないか。ククッ。それにしても、赤き血を見てたぎるとはまさに闘牛だな。誰がこのあだ名を付けたのだか。笑わせてくれる）

敵から奪った刀を、遠方で乗馬している敵の士官に向けて放る。丁度肩に突き刺さり落馬した。味方の武器で負傷するとはとジョージはまたもや笑い、二人目の団員の体から槍を取り出す。

「行くぞぉぉおお！　俺についてこい！」

第4章第9話　閃光

「ぎぁぁああぁぇぇ！」

目の前の男が血を噴き出しながら、息絶えた。頭に白髪が結構な割合で混じる初老の男だった。

「ふぅ。これで二人目か」

ジル率いるカタパルト王国軍が奇襲をかけてから数十分経っている。俺は、今二人目の男を殺したところだった。

ちなみに、一人目の男は狐顔の青年だった。俺の十年後みたいな顔してたな。他の数人の若者と徒党を組んでカタパルト王国軍の兵士をブッ刺してたから、後ろから斬り殺した。

ごめん、これ嘘。戦闘の素人な俺は一発じゃ殺しきれなくて、十発くらい滅多刺ししてやっと仕留めたんだ。その間に何故徒党を組んでた奴らに攻撃されなかったのか疑問。

頭の中でアドレナリンでも分泌されているからなのだろうか。正直、殺人への禁忌をあまり感じない。戦場はやるかやられるかの世界。甘い考えに浸っている場合ではないということを、無意識的に分かっているのかもしれない。

「っと。気持ち切り替えなきゃな」

現在は俺達が優勢な様で、俺の戦っている位置はさっきまでは前線のはずだったが、もうここら辺に敵兵士はいない。とはいえ、流

れ矢や流れ魔術（？）が飛んでくるかもしれないし倒れている兵士が皆死んでいるとは限らない。あまり油断しない方が得策だ。

さて行こうかと足を前に踏み出した瞬間、俺は思いっきり横に跳躍した。

ビュッ。

流れ矢がさっきまで俺の立っていた地面に突きささる。危ない危ない。やっぱ弓矢は怖いな。魔術はレアだし、大きな音を立てて範囲を広げながら進んでくるので攻撃を察知しやすい。一方弓矢は案外攻撃力がでかい上、矢の空気を切り裂く音は戦場の喧騒にかき消される程度だ。

たまたま今俺が流れ矢の危険性に思い至って警戒したから良かったものの、もう数秒早く来ていたら避けきれなかったかもしれない。マジあぶねー。

ただま、現在は混戦中の様で。散発的な流れ矢ならともかく、組織的な一斉掃射はないだろ。多分。こっち優勢だし、そんな余裕は敵軍にはないはず。

さて、そろそろジルのいる本陣に帰ろう。逃げてるなんて言うなよ！　ろくに戦闘訓練も積んでいない俺が戦場に出たのは、戦場の空気を見て形勢を判断する為だし、どーせ他の兵士はみんな俺より強いんだから、俺はむしろ足手まといだ。

ということで退散だな。俺は後方に待機している馬のところまでひた走る。後はみんな頑張れ！　俺はもう戦わない、これは戦略的撤退だ（キリッ。

「舐めてんじゃねーぞ雑魚が」

とか思ってあそこから移動した俺がバカでした。吉田亮です。こんにちわ。

移動中に二人の騎士と互角に渡り合う怪物くさい傭兵さんと会っちゃったのが運のツキ。仲間を助けようと思って俺から背を向けて戦っているゲルトとか言う男に向かって剣を振りかざしたら、仲間らしきこれまた二人の騎士と戦っている怪物さんの「後ろだ！　ゲルト！」という言葉の所為で振り向かれちゃった。

一応剣道部で鍛えていたんだぜ（ドヤァなはずの俺の面打ちが見事に弾き返され、刀は空に飛んで行ってしまったのである。慌ててのけぞる俺を尻目に、ゲルトとかいう奴は油断している後方の騎士の一人をぶった斬った。続けざまにもう一人の騎士に斬りかかり、数合打ちあったがすぐに二人目の騎士は殉職した。

ゲルトは再びこちらを振り向き、歯を剥いてニヤリを笑みを浮かべた。そして冒頭の発言に至る。

現在の俺の状況を表すなら、オワコン、が最もふさわしい表現だろう。怪物じみた実力を持つ相手を前にして、俺は震え上がった。一応剣道をやっていたとはいえ全国区レベルとは程遠い一般人な俺

が、全日本剣道選手権大会優勝者レベルであろう傭兵に対して、勝てる訳が無いのだ。

そこで問題だ！　この貧弱な肉体と惰弱な精神でどうやってゲルトの攻撃から生き延びるか？

？ハンサム（笑）な吉田亮は天才的な頭脳で危機を回避する。

？突如時間が止まり、幼女神様が現れてチートの力を五つまで授けてくれる。

？瞬殺される。現実は非情である。

「じ、じゃあ？でお願

「心の準備はもういいみたいだな。それじゃあ、こっちから行かせてもらうぜぇ！」

突如攻撃を始めた傭兵ゲルト。俺は咄嗟に後ろへ跳びのくも、素早く間合いを詰めてくるゲルトに対して成す術はない。

やばっ。死んだかも。

そう思った瞬間、思わぬ味方が登場した。後方からゲルトへ思い切り剣を振り下ろす。ゲルトは獣のように敏捷な動きで攻撃を交わし、逆に反撃までやってのけた。味方の人は片腕なのにゲルトと互角の戦いを演じ、間合いが近付いた二人は鍔迫り合いに移行した。

俺は尻もちして、前で競り合ってるゲルトとグランさんを見てい……ってグランさん！

「てめえ、なかなかやるじゃねえか」

急いで俺が後ろに下がっている間、片腕のないグランさんがゲルトとは互角につばぜり合いを繰り広げていた。ゲルトだって滅茶苦茶強かったのに、片腕でそれと互角に戦うとはグランさんは実は物凄いのかも。

ゲルトはグランさんの刀を弾き後方へ大きく跳んだ。間合いを取って仕切り直そうという目的だろう。だがグランさんは相手の思惑に乗らず、すかさず攻撃を繰り出した。低い軌道の刀がゲルトの足を狙う。すねを斬って機動力を下げようという狙いだろう。

ゲルトは刀をかざし、間一髪のタイミングですね打ちを防ぐ。が、グランさんの猛攻は止まらない。手首を返して胴、逆胴、と多彩な技を放つ。ゲルトはグランさんの刀をなんとかそらして尚も後方に下がろうとしたが、最高のタイミングで面が振られた。

真っ直ぐ上から振り下ろされるグランさんの刀に対して、ゲルトは剣先を斜め右前上の方向に向けながら、手元を上げる。グランさんの刀とぶつかる瞬間、手を思い切り絞った。

ギィィンッ。

二人の刀がぶつかり合い、グランさんの刀は衝撃で上に弾かれたが、ゲルトは手首を返して手元を斜め下に伸ばす。グランさんの顔色が変わった。

ゲルトの狙いは面返し胴。真っ直ぐ振られた面打ちを刀を上げることで守り、手首を返して脇腹を狙う技である。直撃すれば、グランさんは腹を斜め上からバッサリ斬られることとなる。

ゲルトは口角を吊り上げた。俺は思わず目をつむる。

瞬間。

「――ッ」

グランさんの体当たりでゲルトは吹き飛ばされたようで、強い衝撃音が俺の耳に届いた。グランさんの脇腹からは僅かに血が滴っている。致命傷ではない。ぶつかったのが殺傷力の低い手元側の刃（元打ち）だった上、斬られた時既にゲルトはふっ飛ばされ始めていた。それが理由だろう。

体勢を崩しながらも必死に転倒を避けようとしているゲルト。が、グランさんは容赦せず袈裟切りした。今度こそゲルトの防備は間に合わず、グランさんの刀が脇腹に食い込んだ。傷口に沿って血が噴出する。

グランさんはすかさず止めをさそうとするも、ゲルトの仲間の雄叫びを聞いて体を反転した。

「うおおおおー！」

槍を担いでグランさんへ一直線に進む、絶叫の発信源。ゲルトの仲間の傭兵だろう。我を失いながらも構えに隙はなく、予想外の直進速度にグランさんは一瞬体をこう着させた。

その間にも男は突き進む。そして槍の射程範囲内に入った男は、槍を振っ……ッ。

「フェイントか！」

思わず俺は心の声を表に出してしまった。相手が俺なら完全に騙

されていただろう。それ程の気迫だった。しかし、相手が相手だ。グランさんは笑みを浮かべた。男がフェイントの為に無駄な時間を使ったことを喜んでいるのだろう。もしかしたら、男の攻撃がフェイントだと最初から分かっていたのかもしれない。

男はフェイントでグランさんの構えが崩れなかったことに驚きつつも、本命の面を撃つ。天高く突きたてられた穂先が風を切り裂きながらグランさんの頭部へと向かう。

グランさんは左手に刀を握り締めて、手元を上げた。

槍と刀が交差し、ぶつかり合う音が戦場に鳴り響いた。

グランさんは片手で持った刀で、重力加速度を利用した両手での攻撃に耐えたらしい。槍は反動で再び空へ突きたてられていた。正面がガラ空きだ。今なら殺せるだろう。

という俺の予想に反してグランさんは思い切り後方へ跳び、間合いを取った。男はその間に構え直す。その額には汗が貼り付いていた。

何故絶好の機会をみすみす見逃したのだろうか。この俺の疑問は一拍置いて氷解することとなった。グランさんが着地した瞬間、さっきまでグランさんの居た位置に刀が振るわれたのである。ゲルトだ！

ゲルトは寝た状態から刀を振ってグランさんの隙を狙った様だ。右手で脇腹を押えながらも立ち上がり、切っ先をグランさんの胸に向けた。男は構えを変えない。腕の筋肉は緩んでおり、左足の先に体重が乗っている。臨戦態勢だろう。

俺も立ち上がり、正眼の構えでゲルトを牽制した。左隣のグラン

さんに聞きたいことはやまほどあるが、とりあえずはこの強敵を片付けなければならない。

緊張感の張りつめる中、不意にゲルトは口を開いた。

「そこの片腕野郎。てめえ、中々強いじゃねえか」

痛みに耐えているのか笑みが苦笑いになっているゲルトだが、その口調は不敵だ。その後もじりじりと後ろに下がっていく。男もそれに応じて後ろへ下がった。

「ひとまず退散させてもらうが、一先ず質問させてもらおう。……、てめえは何者だ？」

「グラン。元、近衛隊だ」

「てめえ……。閃光のグランにお目にかかれるたぁ今日の俺は運がいいみてぇだな」

閃光。グランさんの二つ名のようだ。やっぱり、相当な腕前だったんだな。道理で片腕だけでゲルトと渡り合えたはずだ。グランさん凄ぇー。

一方のグランさんは特に表情を変えず、ゲルトの動向を窺う。油断していない。それを見て、ゲルトはふぅとため息をついた。隙ができたら攻撃するつもりだったのかもしれない。

「俺はゲルトだ。覚えとけ、とは言わねえ。だがな……覚えとくぜ、『閃光』」

そう捨て台詞を吐き、ゲルトと仲間の男は去って行った。俺は戦

場だというのに一気に緊張感をなくして、その場に座り込んでしまった。

第4章第9話　閃光（後書き）

ノリで二つ名付けちゃった。閃光（笑）。むしろ閃光（キリッか。だが、後悔はしていない！　なぜなら、

第3章第8話後書きより引用

『もしかしたら、2年後くらいには「閃光のグラン」とか二つ名がつくかも……嘘だけど。』

旗は立っていたのだから。恥ずかしいというよりむしろ

（書いてやった！　書いてやった！）

って感じ。

第４章第１０話　撤退

マクシム・カタパルト。

カタパルト王国先代国王エドガーの弟アリーの嫡男であり、第二位の王位継承権を持つ。魔術理論・魔術行使に優れており、高名な学士にすらその才能を保証されたことで有名だ。伯父である国王エドガーの死後は国王を僭称し、従兄弟であるジル・カタパルトとの内戦にまで至った。

また、容姿が大変美形で怜悧な瞳が世の婦女子に持て囃されていることでもその名を知られている。国王を名乗った後は、マクシムについた貴族の娘の殆どが婚姻を夢見ていると噂されている。

その冷静沈着で知られているマクシムは、本陣で自軍を指揮する立場にありながらも、現在正気を失っていた。ジュネ軍の奇襲。ジル自らの救援。ゲネブ伯爵の裏切り。崩れる戦線。マクシムから冷静な思考を奪うには十分な惨状だった。

「糞ッ。畜生！」

彼の悪癖である。予想外のことや悪いことがあると、すぐ冷静さを失って感情を爆発させる。ただ、本陣には今他の貴族がいないためその姿を見られることはなかった。外行きの顔を気にするだけの理性は残っている。

「どうする……どうすんだよ！」

椅子を蹴り飛ばしていささか鬱憤を晴らしたマクシムは、肩で息をしながらやっと思考停止していた状態から立ち直った。

（負けだ。この戦いは敗北で終わる。それは確実。確実だが、次があることも事実だ。挽回なら、できる）

「陛下。どう致しましょうか？」

侍従が不安げな顔でマクシムの顔を覗き込み、決断を催促する。マクシムは、その質問に笑みを浮かべて答えた。

「退く。退却だ。今ここで敵軍を叩くこともできるが、それは我慢するべきだな。攻撃したところで勝敗は変わらんし、もう混戦になっている」

マクシムはそこまで言って、連絡兵にある情報を各貴族へ伝達するよう命じた。

退却というたった二言の短い通達ではあるが、それの指し示す意味は存外重い。

相次ぐ敗戦を見て、日和見していた貴族達が一斉にジルの側旧制カタパルト王国に付くかもしれないのだ。両カタパルト王国に未来はないと踏んでフリーダ皇国に付く者もいるかもしれない。総大将格のシャルロワと総大将のマクシムの両人が負けるとは、そういうことなのだ。

ただ、この状況、敗北は絶対であり後はどれだけ犠牲を減らせるかにかかっている場合では正しい判断だと言えよう。無駄に抗戦を続けるよりは、撤退して体勢を立て直す方がマシだ。旧制カタパルト王国は、北から迫り来るフリーダ皇国軍を撃退しなければならないので撤退する敵をいつまでも追撃できる程暇ではない。

「陛下。どういうことなのですかな」

マクシムに付き従う貴族の中心格であるイフミ公爵が、抗議の声を上げて本陣に戻って来た。彼の軍勢は既に撃破されている。このまま撤退戦に陥ったらまずいという思いから撤退を止めようとしているのだろう、とマクシムは考察した。戦場を見る目はないがそれを自覚して弟に指揮を任せている男だと、そう高評価していただけに、マクシムは多少の失望感を隠さずにはいられなかった。

「敗北は決定的。今更形勢を挽回するのは難しい。分進合撃は諦めてシャルロワ大公と合流するのが最善だ。フリーダ皇国の援軍のおかげで敵軍に時間の余裕はあまり無い」

「しかし」

「それに、退却を引き延ばして一番損をするのは公であろう？　確か、公の軍勢は既に撃破されているはずだ。早く撤退しておいた方がいい」

「陛下は私を臆病者だと仰せになられたいのですか！」

「恐怖を感じて逃げる。それはは臆病者だろう。だが、次の機会を得る為の撤退は大局的な判断の出来る者にしかできない。臆病とは違う。それとも、公はこれから単身突撃でもするか？　蛮勇しか持たぬ臆病者と言われたいか？」

「陛下、私は恐怖を感じてなどいません。訂正して下さい」

「そうだな、公は臆病でも蛮勇でもない」

「戦況を御報告致します！」

ここまで口論を続けていると、連絡兵が大声で戦況の報告をしに来た。次々と貴族の名前を挙げて彼ら全員の軍勢が撃破されたあるいはされつつある、と締めた。イフミ侯爵を説得しようとしている姿を見て気を利かせたのだろう、とマクシムは頬を緩めた。

彼の努力は実り、イフミ公爵は何も言い返そうとしない。マクシムはそれを了解の意だと受け取ることにして、家臣に退却の準備を進めるよう再度命令した。

「は。分かりました。では、陛下は一番先にお逃げ下さい」

当然のことである、とイフミ公爵は当たり前のことの確認作業をしているのだと思った。そんな無駄なことをしている時間があるなら早く準備をしろ、と怒鳴りたい気持ちを抑えて、足をトントンと小刻みに揺する。

しかしその落ち着きの無い様子も直ぐに止まった。マクシムがイフミ公爵の想像を超える発言をしたのである。

「最後まで残る。殿だ」

想像を超えたのは家臣も同じだったようで、皆口を空けて茫然としている。彼らを擁護すると、撤退戦の最後尾を総大将が自ら受けるという異常な行動に驚愕したのは正しいと言えよう。撤退戦は総大将を逃がすのが第一目標なのであり、肝心の大将が殿と言う一番危険な役目を受けるのは間違っているのである。

（確かに、本来王自ら殿を務めるのは誤りだろう。だが、だからこそその効果は）

「大丈夫だ。策はある。それとも、国王の命令に従えないとでも言うつもりか？」

「ははぁ、何かあるのですかな。よろしければ、この私にそれをお教えなさって下さりますと助かるのですが」

イフミ公爵は暗にそのふざけた行動をやめろ、と皮肉を放った。マクシムはそれに動じず、言葉を返す。

「二度、負けた。二度だ。信頼は随分と損なわれていよう。失われた信頼は、命を賭して取り戻す。それがカタパルト王の矜持だ」

家臣達が威勢よく返事をして、退却の準備を始めた。イフミ公爵は戸惑う。

（どういうことだ？　殿をして死んだらどうする。王が死んだら我らも終わりなのだ。ジル・カタパルトに見せしめにされるかフリーダ皇国の風下に置かれるかしかなくなる。それでは、困るのだよ。私は既にマクシム・カタパルトを全面的に支持しているのだ）

（だが）

「では、陛下。私は先に戻らせてもらってもよろしいでしょうか」

イフミ公爵の問いにマクシムは首肯する。

イフミ公爵はそれを聞くと、無言のままに本陣を出た。僅かな兵力と共に自領へ戻る準備を始めるのだ。マクシムはその後ろ姿を見て、ほっと溜息をもらした。

（グベルトン・イフミ。軍事の素人で戦争に関してはからっきしだが、イフミ公爵の地位を継いでからの政治手腕は本物だ。地味で目立たないが、保守派の中でも相当の影響力を持っている。臆病でもない。彼には、生きていて貰わなければならない。僕が真の王となるために）

マクシムは頭の中に打算を張り巡らせる。絶体絶命の戦況を前に、彼はそれ程の焦燥感を抱いていなかった。

（マクシム・カタパルト。先代国王の甥であり、王位第二継承権を持つ男。女からの評判の良さに若者はやれ軟弱だだのと妬んでいるが、馬鹿ではない。ジル・カタパルトよりかは余程頭は回るだろう。何か、策はあるはずなのだ。そして、私がそれを知る必要はない。策があって、無事に帰ってくるならそれで十分だ）

イフミ公爵は頭の中に考えを張り巡らせる。彼は軍事に関しては愚鈍だが、権謀術策渦巻く政界で頭角を表してきただけあって、知略は十分持ち合わせていた。

第４章第１１話　凝縮

ジュネは、高揚していた。
血の匂いが風によって運ばれ怒号が鳴り響き次々と命が失われていく戦場の中で、心を震わせていた。

（これならば……勝てる。勝てるぞ！）

率直に言って、ジュネの心の中には常にしこりがあった。絶望と言う程強い感情ではなかったが、圧倒的兵力差や皇国の参戦によって半ば勝利を諦めていたのだ。長年カタパルト王国の将軍として経験を積んできたジュネはジルにつく他の貴族とは違って、カタパルト王国が劣勢にあることを十分知っていた。それでも反乱軍に靡かなかったのは、彼自身の誇りがそれを許さなかったからに他ならない。

負けると思っていた。ならば武人として最後の働きをしよう。そう思った。

（そのはずが、最期の戦いになるはずが、ならなかった。まさか奇跡が二度続くとはな。考えもしない）

まだ勝敗が決した訳ではないがジュネは自軍の優位を悟っている。これも、長年の経験で培われた戦術眼なのだろうか。
違う。そう呟いてジュネはかぶりを振った。誰が見ても分かる。カタパルト王国軍は勝勢だ。

「はぁぁ！」

剣を振り、群がる傭兵達を一閃。重い打撃と強い気迫に押された傭兵の首を、一人ずつ流れ作業をこなすかのように刈り取っていく。老境に差しかかっていることはその姿からは想像も出来ない。

いくらか骨のある傭兵も、五合十合と剣戟を交わせばいつかは隙をさらす。しぶとい傭兵にはこちらがわざと隙を見せて、罠に食い付いた所を返り討ちすれば済む。無論相手が全員格下だからこそ通用する論理だが、ジュネより強い傭兵はほぼいない。あのガゼルという男はなかなかだったが、それでも足りないのだ。

ジュネは十人目の傭兵の腹を横一文字に斬り裂き、ふと悪寒に駆られた。

瞬間。

バァァン。

ジュネは体を捻り、突如接近してきた炎を避けた。魔術である。カール軍は遂に魔導傭兵を投入したようだった。

（そろそろ撤退か。今更少数の魔術師を動員したところで戦況を大きく変えることは不可能だし、それが分からぬカールでもない）

ジュネは剣を握り締めた。大詰めだ。追撃でどれだけ戦果を拡張できるかが勝敗の鍵となる。

戦争は敵の戦略目的を阻止するものであり追撃は必要ないという論陣を切ってはる将が多い中、ジュネは敵軍を完膚まで無く叩きのめしてこそ勝利だと考えていた。敵兵を一番多く殺せるのは追撃戦なのだ。

ジュネは最早勝利を疑っていなかった。

「団長」

「何だ」

「足並みが乱れてきています。敵が体勢を持ちなおそうとしており、油断していると反撃の可能性すらあるかもしれません」

副将の報告にジュネは少し頭を冷やした。戦場での慢心は敗北につながる。まずは、目の前の敵を倒さねばならない。

ジュネは後方に下がり、連絡兵を呼んだ。各部隊毎に細かな指示を与える。計算に裏打ちされた緻密な指示は、ジュネが名将と呼ばれる所以の一つだ。

（敵はなかなか持ちこたえている様だな。まあ、仕方あるまい。敵は腑抜けた貴族と農民だけではないのだ。戦を生業とする傭兵は強いし、紛争地帯で日々戦う武人もまた、強い。味方が壊滅しかけている状況でよくやるものだ）

ジュネは鷲が獲物を狙う様な目で戦場を見渡した。案外カール軍に少しでも隙ができたら、早期の勝利に向けて即座に叩き潰すべきだ。そして敵陣の僅かな隙も見逃さない戦術眼をジュネは持っている。必然的に、ジュネは気を抜く訳にはいかなかった。

魔法と矢の降り注ぐ戦場を一人立ち止まって観察していたジルは、ふとある場所に視線を向けた。貴族軍。マクシムに付き従った反乱貴族の軍勢である。

（ふむ？　貴族軍の動きが変だ。単に逃げ惑っているようにも見え

ない。まさか……退却をしているのか？）

早過ぎる。貴族軍の退却を確信したジュネは驚きを隠せなかった。貴族は総じてプライドが高い。軍人貴族、つまり戦争を生業としている貴族は訳が違うが、普通の貴族は見栄や面子を重要視するものだ。自身の血統に誇りを抱き、平民を蔑視して自身を高尚な存在だと信じる。それが、貴族である。

そして、今敵軍の中枢にいる貴族は軍人貴族だけではない。いくら軍人貴族達が不利を察して撤退を進言しようと貴族達がそれを了承するはずが無い。ジュネはそう考えていたのだ。

（俺は、間違っていたようだな。僭王マクシムも反逆者イフミ公も阿呆ではない。それに、退却を決断したという事実があるのだ。それに至った理由などは後で考えればいいこと。いまやるべきことは、目前の時の撃破である）

ようやく、連絡兵が報告に来る。敵軍、退却。それを聞いて周りの者は騒然としたが、ジュネはもう驚いていなかった。

「団長。どうしましょうか。私は早々に攻勢をかけるべきだと思いますが」

副官がジュネに意見を申し出る。

成程、確かに今貴族軍を叩いておけば再起不能になるだろう。しかし、とジュネは首を横に振った。

「第一に、カール軍は精強だ。我々が横腹を見せた隙に、逃げるどころか攻撃しかねない。第二に、どうせ追撃は陛下の軍勢が行うだろう。我々が絶対にやるべきだ、という訳でもない。第三に、我々には時間の余裕はあまりない。フリーダ皇国軍も迫っている状況で

追撃をしたところで、成果はたかが知れてるだろう」

そうだ、とジュネは呟いて身を引き締めた。

納得した様子の部下達に命令を下す。

「無論、これに便乗して敵勢への攻撃を加える。予備兵力として最後まで残しておいた部隊に、いつでも攻撃できるよう言っておけ。敵は我々の再攻勢を恐れて、形を崩す。そこが、狙い目だ。予備は僅か百の軍勢だが、勝利を決定的にする大役は任せた」

（本来ならここで、敵勢左翼と中央の連結部分辺りに攻撃する所だ。するのが普通だが……それは敵も分かっている。なんらかの動きをして弱点を守ろうとするはずだ。守られた弱点を攻撃するよりは、弱点を守る動きの為に新たに生じた隙を狙う方が有効だろう）

高度な読みである。戦場では必ずしも敵が自分の思った通りに動く訳ではない。思い通りに誘導しても予想外の動きをしてくることは多々あり、そのために敗北した将も数知れない程居る。

それを分かっていても尚、ジュネはその判断を変えることはなかった。豪族カールについての情報。実際に戦ってみて感じた感触。戦場の風向き。全てを考慮して敵の動きを読んだジュネは、自分の予測に疑いを挟むことはあっても、そのために行動を変えることはなかった。

（単純な利害計算だ。敵が俺の思う通りに動く可能性は高く、その結果与えることのできる損害は大きい。たとえ思い通りに動かなくても、ある程度の損害は与えられる）

ジュネは再度戦場を俯瞰した。

カール軍は劣勢にも関わらずよく戦っていた。傭兵の士気低下は各大隊長の先頭に立った突撃と元来の兵力差で埋め合わせされており、ジュネ軍はなかなか有効打を与えられずにいた。

闘牛ジョージを始めとした大隊長達が鬼の如き武力を発揮して戦場で暴れ回っている。後方指揮官としては二流で兵の動かし方も粗削りだが、味方の士気へ与える影響は大きい。

ふと、ジュネはある一点を注視した。最右翼である。あそこだけ動きがおかしい。違和感が、ある。中央と左翼の連結部分を補強するだろうと読んでいたが、そうではないのかもしれない。

そう思い、ジュネは一抹の不審を感じながら敵の動きを見守った。傍には連絡兵が居て、いつでも予備兵を投入できる。

段々と時間が経つにつれて敵の陣形が心なしか圧縮されていくように感じた。ジュネは気付く。

最右翼が少しずつ左に動くにつれて中央と左翼の間の距離は狭まり、自然と連結部分が補強されていったのだ。単純に密度を増しただけではなく、戦列を短くした所為で余った兵力を連結部分の後方へ位置させている。いつ攻撃されてもすぐに対応できる。

ジュネはほぞを噛んだ。畜生、と呟く。動き始めた時にその狙いを察知できていれば何らかの手段を講じることができた。

「やられっ放しでいる訳にはいかないな」

突然口を開いたジュネに部下達は呆けた視線を送ったが、すぐに言わんとすることに気付いたのか、口を揃えて「は」と了解の意を示した。

「半包囲だ。陣形を広げて包み込め。中央は後ろに少し退くことになるが、横との連携を忘れるな。戦列が崩壊しそうになった場合、予備兵はその援護を背よ。裁量は任せる」

ジュネの思惑は外れた。敵が補強に動くことは間違いないと思っていたが、百戦錬磨のジュネに察知されることなく補強に成功したのだ。臨機応変に対応するほかない。

ジュネは遥か前方にそびえる山を見据えた。その左にある緩やかな丘陵からは魔術師団が援護攻撃を行っている。未だその矛先は貴族軍に集中しているが、貴族軍は魔術師の攻撃範囲から外れようとしている。

（魔術師団の援護があれば敵は耐えられまい。ビル・ダイオシン・D・カール。なかなかの戦上手だが、これで終わりだ。包囲殲滅の餌食となれ）

第４章第１２話　確信

「勝利は確定したみたいだな」

ようやく本陣に戻って来た俺は、ふうとため息をついた後そう呟いた。ジルは頷き、言葉を返す。

「マクシム達貴族軍は退却。カール軍もジュネ歩兵軍団長の攻勢にたじたじだ。兵力差はあるけど、敵はこちらと違って烏合の衆だからね。今更逆転できるはずもないさ」

「確かこっちの兵力って五千位でしょ？　あっちは数万人なのによく勝てたよなー」

奇襲と内応によって無効化されていたけど、地味に兵力差は半端無かった。真正面からぶつかったら絶対負けるだろってレベルで、それならマクシム軍が油断したのもしょうがないのかもしれない。いや、違うな。優位だからこそ、敵が絡め手を使ってくることを警戒しなきゃいけなかったんだ。

「ゲタポ侯爵も無事離反したし、リョウの考えた作戦が良かったんじゃない？」

ジルもご機嫌な様子で俺に対してお褒めの言葉をくれた。その姿に調子こきすぎだろと思った矢先、ジルは突然無表情になって俺に大して口を開いた。

「で、追撃するかい？　今回は兵の損耗はそれ程でもないけど」

軍事の話か。俺も頭を真面目モードに切り替えて、思考に移った。

フリーダ皇国軍がやけに南に攻めてきている。次々と領土を攻め立てられて、相当拙い状況である。でも、別に一刻の猶予が無い訳じゃない。敵の兵站は脆いのだ。

四万人の食糧・武器・住処。医療や遊女も必要だろう。用意すべきものはとてつもなく大きい。それを置いてきぼりにして前進し続ける軍隊に待っているのは、ナポレオンのロシアでの体験と同じものだろう。すなわち、兵站が足りなくなって士気が崩壊する。

フリーダ皇国に兵站に長けたライル将軍がいるとはいえ、短期間マクシム軍を相手していても大丈夫なのだ。今頃敵はカタパルト王国領で略奪でもしているだろう。兵糧自弁で最後まで突き通すのは無理だ。

「カール軍とか日和見しそうな貴族に対しては必要ないと思う。ただ、マクシム軍の中でも完全にあっち側についている貴族には、やるべき。敵だと分かっているなら、出来るだけ兵力を減らすべきだし。まああんまり悠長してるとフリーダ皇国軍が攻めてくるだろうから、ある程度の所で切り上げればいいんじゃない？」

「なるほどね。じゃあ連絡兵。戦場にいる各部隊長とジュネ将軍にその旨の報せを」

ジュネ将軍が戦っている相手。カール軍か。ふと西を見やると、カール軍は執拗に抵抗していた。勢いがある。傭兵と練兵を主軸にしているだけあって、流石に強い。ジュネ将軍も苦戦しているのかも。

「カール軍はなかなか潰れなさそうだな」

「その通りですねぇ」

「え？」

ふと呟いた俺の後ろにはいつの間にかロン毛のおっさんが立っていた。魔術師団隊長だ。暇そうな気の抜けた表情。俺とジルに無駄がらみしに来たの？

俺の疑問を代弁してジルが魔術師団隊長に話しかけた。

「どうした」

すっかり君主モードである。口調が固い。そんなジルの言葉に魔術師団隊長はニヤニヤしながら受け答えした。

「いえ、それがですね。私たち魔術師団は少少手持ち無沙汰なようで。追撃に加わるかカール軍を攻撃するか、陛下の判断を仰ぎに来たのですよ」

残念なことに、戦慣れしたジュネ将軍とはなかなか緊密な連携が取れそうにない。さっきまでは敵を挟んで向こう側に居たのだ。だからこその独自裁量なのだが、この魔術師団隊長はわざわざこちらに来たようである。

「わざわざ来たのか」

またも俺の疑問を代弁するジル。訝しげな視線であるし、実際疑問に思っているだろう。

「いえ、元からここにいましたので」

……。ん？　何でこっち見てくるんだよ魔術師団隊長。しかもジルまでこっちを見てきやがるし。俺に答えろっていうのか？

「隊長さん、カール軍を攻撃した方がいいのでは？　追撃するマクシム軍を追いながら魔術を撃つよりも既に射程範囲内にいるカール軍を撃つ方が効率的でしょうし、敗走するマクシム軍よりも奮闘するカール軍の方を優先するべきでもあります」

一応敬語で俺の思ったことを話したが、魔術師団隊長は異論でもあるのかこちらに向かって言葉を放った。

「シュタールです」

「え？」

「私の名前ですよ」

ああ名前か。どうやら俺の献策に対しては特に言いたいこともなかったようだ。魔術師団隊長改めシュタールは体の向きを変えてジルを見やる。ジルはただ頷き、それを見てシュタールは俺達に背を向けた。本陣の外で待っていたのだろう従卒らしき少年が駆け寄り、一言か二言会話を交わしている。

シュタールの背中を見て俺はやっぱりこいつ変だな～との思いを再確認した。ロン毛だし、目の彫り深いし。肩まで垂れる黒髪は微妙に湿っていて、それもまた彼の持つ変な雰囲気を助長している。

ただ、実力はあるのだろう。シュタールの手のひらは肉刺だらけでゴツゴツだった。生粋の武人であるブルゴー騎士団長と比べれば

流石に劣るが、そこら辺の兵士よりかは余程鍛えているだろうと予測できる。

「援護あるし、すぐ終わるな」

俺は呟く。すると、数秒間時間を置いてジルは言葉を返した。

「そうだね。カール軍だって全員が経験豊富な古兵な訳じゃないし」

横では味方が無様に逃げていて上からは魔術が降ってきて前には意気盛んな敵兵がいる。新米で練度の低い兵士にはたまらないだろう。負の連鎖は続き、やがてカール軍の戦列は乱れ、そうなったらもう終わりだ。

「連絡入りました。ヒール男爵を騎士団第四部隊第六曹長が討ち取ったとのことです！　追撃中とのことでした」

早速朗報が入ったみたいだ。ジルは笑顔で連絡兵の言葉を聞いていた。幸先がよくてなによりだな。

「ヒール男爵か。こうも早く討ち取れるなんて意外だったなー」

ジルが感嘆する。俺はあんまり詳しくないんだけど、何が意外なんだ？

俺がその疑問をぶつけると、ジルは若干嬉しそうに（むしろドヤ顔で）説明した。ここは軍師的立ち位置の俺や各部隊長の独壇場でジルは意見を聞いてばっかりだったから、自分の意見を他人に伝えるのが嬉しいのかもしれない。話は聞くよりする方が楽しいしね。

「ヒール男爵は文官、というより政治家だよ。戦場の士気は武官で

ある下級貴族に任せて、後方に待機している。つまり、退却となると一番逃げやすいのさ」

成程。確かに後方にいれば一目散に逃げられるしな。何で殺されたんだろ。

「ヒール男爵はどちらかと言えば無能だったから。部下を見捨てて逃げるのが嫌だったというよりは、貴族である自分の逃亡を誇りが許さなかったっていう方が理由としてはしっくりくるなぁ。無駄な誇りだけどね。もしかしたら彼にだけ退却の連絡が遅れたのかもしれないけど。流石にそれはないでしょ」

しょっぱいなー。どうでもいいけど。

そんな話をしていると、再び連絡兵が来た。

聞くところによると、魔術師団の攻撃は効果を発揮してカール軍の士気は大幅に下がっているんだとか。実際に逃亡しようとした兵士も数人いるらしい。しようとしたというのは、そういう奴は皆キモの無い徴用兵だから全員上官にぶった切られているということだ。

まあ、傭兵が逃げるようになったら終わりだろうな。戦況が悪くなり過ぎたら逃げるのが傭兵だし、その傭兵を斬る程の余裕はもうない。逃げるのを一度見過ごせば、他の兵士も逃げたいと思って士気が崩壊する。

そして、その時がくるのはもうすぐだ。

そう思った俺が戦場を見ると、カール軍の旗は意外なことになかなか前に押し込んできていた。この劣勢で前進できるって有り得な

いと思うのだが。とりあえずジルに質問してみる。

「なぁジル。案外カール軍って前に進んできてるよな」

「確かにね。リョウ、何故だと思う？　どう考えてもこっちの方が優勢だと思うんだけど……」

地面を見つめて俺は考え始める。

その優勢を無駄にするようなジュネ将軍でもない。ということは、つまり、これはジュネ将軍の狙い通りってことなのかな。狙い、狙いか。思い浮かべることができる策はただ一つ。単純だ。

包囲殲滅。

カルタゴのハンニバルを始めとして成功例にはいとまがないが、失敗例はその数倍もある危険な作戦だ。変に敵が調子ついて中央突破をされると負けにつながる。Ｖ字型である鶴翼の陣形がよく使われる作戦だ。

ふむ。成程。

カール軍は頑張って突撃してくるものの、元気がなくて中央突破出来る程の力を持ち合わせていない。中央突破される危険性が低いなら、包囲殲滅しちゃおうぜってことか。

これはカタパルト王国直属軍所属の精兵が多いから出来ることだな。奇襲していた時は逆ｖ字型だったろうに、そこから両翼を前に中央を後ろにしてＶ字型の陣形に変化させるとは。横のつながりが薄くなってその間隙を突かれる危険性大だ。

農民兵が多くを占める貴族軍では絶対に出来ないだろうし、凡百の武将でも成しえないことだろう。優秀な兵を優秀な将官が指揮したからこそ出来たことだな。

まだ包囲状態への移行途中だろうけど、こりゃあ全滅させられるかも。ラッキー。

「陛下。ご連絡致します」

連絡兵か。今度は何だ？　まあその形相からしてこちらに有利な情報だというのは想像できるけどねー。

「カール軍が退却しました」

「マジで！？」

驚いた俺が戦場を見ると、確かに旗が後ろに下がっている。折角包囲殲滅出来そうだったのになー。いや、思惑に気付いたのかもしれない。戦国時代みたいな所で戦ってる将兵だから、それ位なら全然有り得る。

顔に喜びの表情を浮かべたジルに更なる報せが舞い込む。

「ジュネ将軍はカール軍の再度の攻撃がないことが確信でき次第、追い討ちを切り上げて貴族軍の方向へ向かうとのことです」

第４章第１２話　確信（後書き）

第二部ってそんなに怒涛じゃなくね……？　むしろ怒涛（予定）なのって第３部じゃね？

ということで名前変えます。

第４章第１３話　威圧

カール軍は劣勢であった。それは兵士らが一番感じ取っていたことだったし、将も皆戦場の趨勢に気付かぬ程鈍感ではなかった。

士気が下がり始めた時は崩壊の序曲だ。

いくら猛将で鳴らすジョージ達が必死に鼓舞しようとも、大きな流れを変えるには至らない。

「大隊長」

副大隊長がジョージに声を掛けた。前線から戻って来たジョージに全体の指揮をどうするか尋ねている。ジョージは力強い口調で答えた。

「劣勢は覆せない。敵に一打撃与えた後は速やかに退却する。中隊長に伝えておけ。殿は俺自ら務めるから、さっさと逃げる用意をしとけ、ってな」

ジョージの主君であるダイオシン・Ｄ・カールから言われたことと全く同じである。何もせず退却しても、怯えて逃げた為追撃の的となっている貴族軍の二の舞になるだけ。カール軍はそのように考えていた。

実際の戦争のセオリーにのっとって考えてみれば、間違っているとはいえないだろう。だが、この行動は裏を返せば、ギャンブルで負けが込んでる時に「一回でも勝ってからやめよう」と考えるのと全く同一のものである。

敵中央への突撃が失敗に終わればさらに酷い結末を迎えることとなる。そして、ジュネ軍の作戦を考えてみれば限りなく失敗に近い突撃であると言えた。

そのことに、彼らはまだ気付いていない。

（精強で鳴らすジュネ軍だが、案外楽に事は進むものだなァ。こりゃあ、ひょっとすると、何かあったのかもしれんなぁ！　将軍が怪我をしたか、誘い込む罠なのか、はたまた特に理由が無いのか。まあ戦場では不思議なことが起こるなんざ、ざらにある。罠を疑って及び腰になるよかァ、前進する方が余程いいだろ）

カール軍はさらに突進する。中央が前に前に進む一方で、両翼の軍勢は数に劣るジュネ軍を切り崩せずにいた。魔術師団の援護もあり、両翼は元居た位置をどうにか踏ん張れていた。

結果、包囲陣形が少しずつ作られてゆく。

ジョージも、あまりにもうまくいき過ぎる戦況への違和感が益々強くなっていった。

（中央への魔術師の攻撃が弱い。弱過ぎるな。カタパルト王国の魔術は大した事ねぇのか？　……、待て。そうじゃねェ。それだけじゃ、ねぇんだ。やってる感じ、敵軍の用兵は巧い。ジュネは生きている。だが、それにしては前進を許し過ぎじゃねぇか？）

急使が来た。主人であるダイオシン・D・カールからの使者だ。

即座に反転し、退却を敢行せよ。

ジョージはその内容に、笑みすら浮かべた。獰猛な、笑みだ。おおよそ喜んでいる様子の表情ではなかった。どちらかと言えば、獣が牙をむく様な、そういう得体の知れない感覚を覚えさせる表情だ。

「中隊長に伝達しろ。今から五十秒後に合図すっから、反転するように。ってな」

待機していたジョージ子飼いの連絡兵が散らばる。副大隊長が前に出ようとするも、ジョージはそれを己の右腕で制止した。

「てめぇが指揮しろ。俺は、前に出る」

「しかし」

「俺を誰だと思ってやがる」

副大隊長は沈黙し、呟いた。闘牛。その二つ名を持つ巨漢ジョージは、戦う時は先頭に立ち退く時は最後尾につく男だった。

三十秒が経過し、各中隊の動きがぎこちなさを増していく。報せを受けて、必死に反転の準備をしているのだろう。

既にカール軍は半包囲されていた。ジュネ軍の総攻撃による殲滅戦はもうすぐだ。一刻の猶予もない。

それを知ってか知らずか、ジョージの額は汗で湿っていた。胃の痛みが増す。

五十秒が経過し、ジョージは大声で叫んだ。

「反転ッッッッ！！！！」

待ち構えていた中隊が即座に反転する。敵軍の殆どは咄嗟のことに自失しており、一部の有能な部隊長が追撃に移るも、突出した追撃にそれ程の効果はない。

敵軍がようやく状況を把握した時にはもう、ジョージ達が最後尾に立っていた。

「大隊長直下中隊の野郎ども。もう十分体力は取り戻しただろう？吉報だ。てめーらにはこの撤退戦で最大の武功を上げさせてやる。安心しろ、てめーらの傍には俺がいる。俺は、闘牛だ。血を見て猛る猛獣を簡単に止められると思うなぁぁぁ！！！」

瞬間。

ジュネ軍の追撃の全てがジョージ率いる殿軍に振りかかった。

魔術があちこちに飛んでくる。弓矢の放射も激しい。そして、ジュネ軍最精鋭の歩兵が真正面から激突してきた。

衝撃が伝わり、殿軍は数十歩ほど後退した。

だが、耐える。ここで潰走したら終わりだ。無駄に兵の命を散らせることは費用対効果が合わないし気分も悪い、とジョージは思う。それは、傭兵として身を立ててきた男の意地だった。

横隊をなるべく崩さないように、少しずつ後退する。一気に退くと苛烈な追撃を食らうし、かといって留まっていても豪雨のような魔術や矢に体力を削られるのだ。一旦退いて体勢を立て直すしかなかった。

縦方向への突破を狙うジュネ軍に対して、ジョージは密集陣形を組んで対抗した。ジョージの傍だけは薄いが、そこは彼自身の武勇で穴埋めできる。密集すると魔術や矢からより効率的に打撃を与えられるのだが、背に腹は代えられなかった。

「掛かってこいやぁぁぁああ！」

ジョージの挑発に数人の兵士が挑む。

左右方向から同時に剣を振られ、ジョージは一瞬のうちに数歩後ろに下がった。剣同士がぶつかり合い、派手な音を鳴り散らす。右側の兵士の腕を蹴り上げて武具を手放させたジョージは、すかさず武器を失った兵士の左肩を叩き斬った。

「ぎぁぇあッ」

速すぎるジョージの動きに左側に居た兵士はついていくことを許されない。とはいえ、流石に精鋭。立ち直って左に迫ってきているジョージに気付くと、すかさず体当たりをしかけた。

ジョージも負けじと腰に力を入れて対抗する。互いが後ろに吹っ飛ぶこととなり、その結果ジョージは後方からも剣を振られた。

「……ッ」

咄嗟に体勢を崩して前かがみになり、後ろの兵士の足を思い切り蹴る。兵士の剣は空振りし、体を反転させたジョージは右手で兵士の首を捻り上げた。

音も発さず、兵士は息絶える。ジョージは憤懣やるせないといった表情で、先程体当たりをした兵士と向かいあった。が、それも一

秒にも満たない一瞬の出来事。刀を担いでジョージは兵士に近付いて行った。

威圧感。

それは、時として人の動きを阻むことがある。蛇に睨まれた蛙は思わず心臓を止めるのだ。気に圧倒された人間は、無力である。

そしてこの時、カタパルト王国直属歩兵軍団の精鋭たる兵士は、同じ状況に陥っていた。

言葉を発してもいないのに、確かに放たれる威圧。気色。無言の気勢。ジョージには精兵をも圧倒させる力があった。

グシャリ。

こうして、兵士は命を落とす。ジョージの気勢によって作られた一秒にも満たない空白は、逃げることを手遅れにするには十分の物だった。

第４章第１４話　焼却

勝敗分岐点はもう過ぎていた。

「かかれぇー！　追い首だァーッ」

シュマンは叫んだ。心の中ではほくそ笑んでいる。

逃げる敵を殺害するのは、真正面から向かってくる敵を倒すよりも遥かに簡単である。敗者が兵力を消耗するのは主に追撃戦なのだ。敗走しながらも士気高く立ち向かう兵士は、少ない。

シュマン自身も先頭を進んで背を向ける敵を掃討していく。

「うわぁぇー！」

後ろから迫られる恐怖に耐えられなかった敵兵がシュマンに剣を向ける。打ち合うまでもない。一撃で首を叩き斬った。

後ろを振り返るとそこにはシュマン配下の騎士団員しかいない。騎馬隊の追撃速度に歩兵軍団は付いてこれていないのだろう。

（ならば騎馬隊が殺しつくす必要性も薄いな。掃討は歩兵にしてもらうとするか。向こうにいる貴族軍は、僭王マクシムの軍勢かな。疲労の色が薄い。ここで殺せれば儲けものだ）

「全軍進撃速度を引き上げるぞ！　走りながら斬れ、斬りながら走れ！」

言葉を捨ててシュマンは馬の手綱を引き締めた。単独で疾走し、逃亡する貴族軍の波に切り込む。振り回した大剣は誰かしらの背中や腕にぶつかり、強烈な打撃力によって次々と負傷者を増やしていく。

一拍止まった騎士団員達は、シュマンの独走を見て一斉に手綱を引き絞った。大剣に恐れをなして転倒した兵士や背を斬られて蹲った兵士は、一斉に突撃してくる騎馬隊に成す術なく蹴り殺される。

旋風の如き突入に敵軍は軍隊の秩序を完全に崩壊させ、シュマンら士官は皆余裕の表情を浮かべた。全くの苦戦なしで圧倒的大勝利。誰もそのことを疑ってすらいなかった。

「騎士団部隊長シュマン男爵と見受けられる！　覚悟！」

若い男シーザーがシュマンの乗る馬の足を狙って槍を振る。低く水平な軌道は馬の跳躍によって綺麗にかわされた。

シーザーを乗り越えたシュマンは馬の右足を軸にして左に回る。方向転換したシュマンと振り返ったシーザーは互いを見つめ合い、攻撃に転じた。馬上から大剣を斜めに振るシュマンの攻撃がシーザーの右肩を打つ。シーザーは槍でどうにかして受けるも防ぎきれず、血が滴り落ちた。

左斜め前に体を動かしたシーザーの横をシュマンが通り過ぎる。その後背をシーザーの槍が切り裂いた。

「……ッ」

強い。シーザーは卓越した戦闘技術を持っていた。速度、威力、体捌き。どれも一流であるシュマンに傷を付けたシーザーは一流以

上なのだろうか。少なくとも、敗戦で士気を落とすような兵士でないことは明らかだった。

再び振り返ったシュマンの首めがけてシーザーの槍が迫る。真正面からの、突き。馬面に向かって踏み込むなど、正気の沙汰ではない。虚を突かれたシュマンは馬を退いた。

だが、遅い。シュマンの首元に槍が浅く刺さり、血が霧状に噴き出た。

「……、らぁッ」

シーザーが気迫を出して槍を肩に担ぐ。斜め上からの頭部への攻撃。シュマンは大剣を咄嗟に上げて致命傷の一打を阻んだ。

本来ならば安心するべき場面だ。乗馬しているシュマンは元から優勢である。攻撃を防いだ以上、前に進んで体当たりすれば実力差関係なしに吹き飛ばして決定的な隙を作れる。そのはずだった。

が。ここでシーザーは予期せぬ行動に出た。

体重を乗せた両足で思い切り前に跳ねたのだ。シーザーは足を斜め下からシュマンの脇へと思い切り叩き込んだ。がはっと息を吐いてシュマンは落馬し、シーザーは右手を槍から離して馬の頭を掴む。右足と右足を馬の体に引っかけたシーザーは、そのまま馬上に座った。

「貴様ッ」

その後の言葉を紡ぐ時間は与えられなかった。シーザーの槍がシュマンの体に迫ったのだ。

一合打ちあう毎にシュマンの体は傷つき、シーザーが十つ目の攻撃を終えた時既にシュマンは満身創痍になっていた。手足の所々から血がにじみ出て、蒼白な顔で大剣を握り締めている。

今にも倒れそうなその様子に、遅れて来た部下達が驚きの声を上げた。

「隊長！」

振り返って向かいあったシーザーと三人の兵士の体が交差した。崩れ落ちた体は、三つ。シーザーは一瞬で三人の兵士を殺していた。

更にやってきた五人の兵士は尻込みして立ち止まる。一番早く立ち直って剣を振ろうと前に出た兵士の体が後ろに吹っ飛んだ。

バァァンッ。

シーザーの左手に握られているのは、杖。風系統の、魔術だ。

「あまり、使いたくないのだがな」

シュマンの頭に血が上った。彼女は魔術師であるシーザーに武技だけで挑まれても負けたのだ。シーザーが最初から魔術を使っていたら今頃シュマンは死体と化していただろう。

ただ、彼女は貼り合った所で勝てる相手ではないと考えることができる程度には冷静さを保っていた。

シュマンの葛藤も知らずにシーザーは次々と兵士を斬りふせていく。魔術は、使わない。しかし、どんなに良い兵士でも三合は持たなかった。シュマンが他とは圧倒的に強いとも言えるし、それ以前

にシーザーが絶対的に強いとも言える。

十数人程がシーザーの槍の錆となり、彼は殺した兵士の槍を拾って血塗れの槍を捨てた。シーザーはふと立ち止まり、呟いた。

「シーザー。俺の名だ」

戦闘中に突然名乗りを上げたシーザーに兵士は呆気にとられたが、シーザーは気にせず槍を振りかぶった。

グシャリ。

また一人死ぬ。シーザーはあまりに余裕すぎるのか、戦闘中にあくびまでし始めた。隙を狙わんと突撃を敢行する兵士は、数秒後何も言わぬ物と化した。

(糞ッ。強い……強過ぎる。何十人もの精兵を敵にして魔術なしで圧倒できるなんて、人のできることじゃない。ないのだが、これ以上部下を見捨てる訳にもいかぬ!)

シュマンは遂に決意し、大剣を構える。殺意を察知したのか、シーザーはシュマンの方をチラリと見た。しかし無視して、残った兵士を片付けようとシーザーが馬を一歩前に踏み出させる。

その時、突如として戦場に鐘の音が鳴り響いた。

シーザーはそれを聞くと顔をしかめ、矛先を収める。

(これは、敵軍の鐘。このシーザー以外にも十数人の敵兵が反撃に転じているが、あの様子からして退却の合図だろうか)

そしてシーザーはサッと体を翻し、シュマンの乗っていた馬を見事に乗りこなして去って行った。残された兵士達はしばし呆然とする。しかしすぐに立ち直り、シュマンに指示を仰いだ。

「隊長」

「追う。だが、深くは駄目だ。特にあのシーザーとやり合う時は、十分注意しておけ。どうせ後から歩兵軍団が来る」

無理をする必要はない。シーザー一人倒せなかった所で戦況に影響はないし、騎士団は尖兵に過ぎないのだ。蹂躙する為の歩兵軍団は千人居る。秩序を失いかけている貴族軍を掃討するのには十分だ。そう、シュマンは自分に言い聞かせた。

シュマンは死んだ騎士の乗っていた馬の内一頭を手元へ誘い、それに乗った。部下は皆突撃を今か今かと待っている。傷だらけで余裕の無いシュマンだが、士気の為にもそのようなそぶりを見せる訳にはいかない。

部下がほぼ全員纏まっていることを確認すると、シュマンは一度だけ深呼吸した。そして、大剣を持っている右腕を上げる。

一瞬の沈黙を味わった後、シュマンは大剣を振りおろし、敵勢の中心に切っ先を向けた。

「かかれッ」

手綱を引き締めて疾走する五百の騎馬隊は、シュマンとシーザーの決闘で多少の距離を稼いでいた貴族軍にたちまち近付いていく。

シュマンは散発される矢を大剣を小さく振って防ぎながら、その先頭を走った。

この時シュマンは、シーザーの脅威を受けてどこか臆病な心になっていた。そのため、かもしれない。ふと、怖気を覚えたのだ。

そして、気付く。

何故、シーザーが出てきたか。何故、シーザーが退いたのか。何故、マクシム勢といとも簡単に向かいあっているのか。

シュマンはそのことを、戦場で培った勘によって感覚的に悟った。

「まずい！」

しかし、間に合わない。間に合わなかった。なぜなら、シュマンが言葉を発した時。その時、もう貴族軍は準備を終えていたのだから。

この戦いは、決して、逃げる者を虐殺する気楽な追撃戦ではなかった。

炎が、とてつもなく大きな轟炎が、騎士団を襲った。

第４章第１５話　悔恨

戦争は終わった。

コーランド電撃戦はカタパルト王国軍の、俺達の勝利で幕を閉じたのである。

現在兵士たちは戦争の後始末をしている。それが終わったらすぐ反転して、対フリーダ皇国軍に合流する腹積もりだ。

「ふぅ。これで、残るはフリーダ皇国軍だけか」

俺は呟いた。南と東の敵軍を撃破したのだから、残るは北のフリーダ皇国軍。勿論南と東の敵を完全に壊滅させた訳ではないのだが、概ね事実である。だが、一番手ごわい敵がフリーダ皇国軍だということもまた事実だった。

フリーダ皇国軍は、強い。その事実を再確認するために、反乱軍と比較してみよう。

第一に、正規軍か否かの差がある。

フリーダ皇国軍は、その全てがとは言わないが正規兵の占める割合は高い。皇王直属軍という中原でも五指に入る強兵がいるのだ。そこらの農民を駆りだした反乱軍とは比べ物にならない精強さを持っている。今までの二戦では、カール軍を除く敵軍の殆どが徴用された農民で、正規兵どころか傭兵すらあまりいなかったのだ。そこが、カタパルト王国の勝機になったとも言える。

第二に、率いる者の格も違う。

シャルロワ軍はトップが軍事よりは政務に名の高い元宰相だったし、特に著名な武将も参加していなかった。マクシム軍もトップは学者肌の王子だし、軍事よりは謀略に長けている高級貴族達が脇を固めていた。カール軍は皆戦慣れした猛将ばかりだったが、連携相手がマクシム軍だったのが敗因だろう。

では一方でフリーダ皇国軍はどうだろうか。トップには数々の会戦で名を上げてきた皇王ガストン、ナンバー2には慎重で堅実な用兵を好む名将ライル、その下には若いながらもその才を認められたバナジュームや長い年月を戦争と共に過ごしたエリエー・ババロア等の良質の将軍が揃っている。

「ご連絡に参りました」

考えにふける俺の前に、魔術師団を除いた部隊長達が到着した。正確に言うと、ジルの前に、だが。俺の横でどっしりと腰を降ろしていたジルが許可を与えると、全員を代表したのか歩兵軍団第六部隊隊長が口を開いた。

「申し訳ございません。追撃に失敗いたしました」

申し訳ございません、と残りの二人も言葉を続ける。

そう、彼らは追撃に失敗した。

その報告が届いたのは数時間ほど前。カール軍の撤退を聞いて完勝を確信していた俺達は、有り得ない報せを聞いた。

マクシム軍を追撃していた騎士団、歩兵軍団の二割が死傷。

二割が死傷したというと軽く聞こえるかもしれないが、これは相当酷いことだ。火力を持たない軍隊に二割も兵士を活動不能にされるというのは、かなりの状況でなければあることではない。

「何故そこまでの死傷者を出した」

ジルも厳しい顔をして問う。

確かに、今回の戦いでは終盤に大量の死傷者を出した所で戦況は変わらなかった。潰走していて士気の低い状況だった為、マクシム軍は反転することなど出来なかったからだ。そういう面では、大したことのない損害だと言えるかもしれない。

しかし、戦いはこれだけではない。最大の敵フリーダ皇国軍が残っているのだ。これからが正念場であるののだから、当然精鋭である直属軍の損耗は避けるべきことだった。

「我々騎士団第三部隊が追撃を続けていたところ、いきなり強い炎系統の魔術で攻撃されました。咄嗟のことに何の対応もできず、多くの死傷者を出しました。言い訳のしようもございません」

「後ろから追ってきていた我々歩兵軍団両部隊もまた、強烈な炎系統魔術で大打撃を与えられました。申し訳ありません」

「シュマン、ジュワンベルク。強烈な、というのは一体どの程度の規模の物だったのだ。そしてどの程度の時間攻撃を受けた。二割の損耗とは、並大抵のことではないだろう」

ジルは口調をきつくして再び問う。歩兵軍団第六部隊隊長、改めジュワンベルクが悔恨の情を見せた。

「一部隊全てが攻撃にさらされる程度の超大規模な魔術でした。たった一回。たった一回食らっただけで、多くの兵士が死に絶えました」

「……、それは本当か？」

疑う様なジルの言葉にシュマンさんはただ「はい」とだけ言った。

「それは、有り得ませんな」

と、シュタール。いつの間にか話を聞いていたようだ。気配を隠したのか何だか知らないけど、知らぬ間に近付いてくるって相変わらず怪しい男だ。

「どういうことだ。シュタール」

「そのような大規模な魔術を単独で行使できる魔術師はいません。魔術理論的にも一人の魔力で行うのは不可能です。となると、大人数で行う魔術儀式が必要となりますが、それも可能性は低いと言わざるを得ない。逃走している途中にたまたま魔術儀式場があったなんて出来過ぎでしょう？　我が軍を察知していないのに逃げ場にそんなものを用意するなんて、非合理的だ。そもそも」

一旦言葉を区切って、シュタールは表情を歪ませた。

「七人」

「え？」

「反乱軍に確認された魔術師は七人なのでしょう？　超大規模な魔法はその程度の人数で行使出来る程甘くはありませんよ。全員がハンナ大魔導士様なら、有り得ますがね」

シュタールは皮肉気に話を終わらせた。すると、ジュワンベルクがお茶を入れて混ぜっ返す。

「サラマンダーでもいたのではないか？」

シュタールは不気味な笑いを見せたが、シュマンは目を吊りあげた。もう一人の歩兵軍団隊長は我関せずと何も言わない。ジルも無言だ。

暫くしてその空気に気付いたジュワンベルクは、気まずそうにして少しジルに頭を下げた。

沈黙。誰も喋らない。嫌な空気だなぁ。ちょっと分からない点もあるし、沈黙の続く状況を打開しよう。

「攻撃を受けてから咄嗟に魔術儀式場を作った、ということはないのですか？」

一応敬語を使って、誰ともなしに聞く。皆「空気読め」とばかりに目をそらしてきたが、シュタールだけは気にせずに答えてくれた。

「そうですねぇ。無理、でしょうねぇ。魔術儀式場を作る気満々だったなら数時間で完成させられる可能性もゼロではありませんが。とてつもなく大規模な魔術を儀式場で展開するには色々と素材や用意が必要ですので、まず有り得ないと言っていいかと」

そっか。じゃあなんなんだろうな……。

再び本陣を沈黙が包み込むが、黙考していたシュタールがふと顔をあげた。

「一つ、思い浮かびました」

ジルは若干不機嫌そうな顔で続きを催促する。シュタールはいつものニヤけ顔ではなく真剣な表情でそれに答えた。

「移動型魔術儀式場。文字通り、移動できる魔術儀式場です。これを持ち運んで決戦で使用する気だったのではないでしょうか。急な襲撃にうろたえている間に混戦状態となり、退却の時しか使えなかった。これなら、筋が通っていますねぇ」

「なに？」

シュタールの言葉に反応したのはジルだった。何か思う所でもあるのか、苦い顔をしながら口を挟む。

「それはついこの間ラクル連邦の学士によって理論上で証明されたらしいと聞いた。ありえないだろう。たかだか数カ月も経たない内に、理論上の産物を実戦に投入できる程度で作成できるとは思えん。それに、たとえ急速に製造できたとしても、それ程の魔力を貯蓄できる時間はなかったはずだ。反乱軍に魔術師は殆どいないのだからな」

「しかし、キュトラ伯がいます」

キュトラ伯。マクシムと懇意にしている初老の女性だ。が、ただの貴族ではない。滅茶苦茶頭の良い貴族である。魔術理論学とやらの学界でも有名人だという。

ずっと前に誰かから聞いた気がする。でも、その人が証明した訳じゃないじゃん？　どういうことなんだろ。

「証明した某魔術理論学者は、学界内ではキュトラ伯の弟子として名が通っている。このことと併せて考えると、どうでしょう。弟子が学界で発表する前に師匠が下見した。考えられることです」

無論そのような慣習はありませんがね、と付け加えてシュタールは言葉を切った。ジルは苦い表情をしている。

「何故盟主である僭王マクシム自らが殿を務めたのか、というのもそのためであろうな」

「そうでしょうねぇ」

秘匿情報を自分の手で管理する為には、使用場所が危険な殿だとしても傍にいなければならなかったのだろう。そもそもそんな凄い武器（というよりむしろ火器？）があるなら大して危険でもないし。

「うむ。では、この話は一旦終了としよう」

話題を転換するみたい。俺は傍観者気分を一新して耳を傾けた。

「今後の行動を確認したいと思う。ジュネ将軍とメルラーデを呼べ」

メルラーデ。確か近衛隊長の人だ。連絡兵みたいな人がダッシュ

してメルラーデ近衛隊長を呼びに行く。時間かかるかなぁと思って相好を崩した俺だったが、予想外に早く到着した為焦って佇まいを直した。

……。ブルゴー騎士団長がいなくてよかったわ。

「只今参りました」

メルラーデ近衛隊長より少し遅れてジュネ将軍がやってきた。血の匂いがぷんぷんする。笑みを浮かべてはいるが、シュタールとは違って包容力がある。まさに将軍って感じだ。

「そうか。では、今後の行動を確認する。リョウ」

え、俺？　そういえば出発する前に話してたなー。えと、うろ覚えだけど、まいっか。

「はい。現在北方に向かっている王国軍本隊と合流します。強行軍は行わず、通常の速度で本隊まで移動することになります。合流後も説明するのでしょうか？」

「いや、いい」

そしてジルはジュネ将軍の方へ顔を向けた。

「陛下」

うおぃ！　ビクったー。正統派の怖いおっさんがいきなり喋りだすとかやめてくれよー。

「私が率いている歩兵軍団の指揮権をお返ししましょう」

ん？

「そうか」

「私は如何なる処分でも受けるつもりです」

え？

あ、そうか。確かジュネ将軍って西方の砦を守ってたんだっけ。カール軍と反乱軍の攻撃を耐え切れず西に退いた。まあ確かに失敗といえばそうかも。ぶっちゃけあんまり気にする必要はない気がするけどなー。

「罰を与える気はないのだが。そうだな。ローラン・ジュネ。お前をカタパルト王国軍の副将に任命する。儂を補佐する役目だ。光栄に思え」

「は」

事実上の総大将に任命されたジュネ将軍はそれ以上言葉を紡がなかった。その目にメラメラと闘志を燃やしながら、命令を受け取る。

だよな。失敗したから辞任するなんて無能や凡人のやるべきことだ。ジュネ将軍みたいに有能な人が一度の失敗で罰を受けたら、結果的に俺達の不利益になる。対フリーダ皇国戦では恐らく最も頼りになる人だろう。

「陛下」

黙っていたジュネ将軍が不意に口を切った。得物を狙う鷹のように鋭い眼光がジルを射ぬいた。泰然とした笑みを浮かべているが、目は真剣そのものだ。

「勝ちましょう。必ず」

第４章第１５話　悔恨（後書き）

第二部終了。

キャラ紹介と新設定集を（多分）置いてから第三部開始。

～新キャラ紹介～

～重要人物～

ガストン・フリーダ（４１）

フリーダ皇国代九代国王。領土拡張政策を取っていて、強気な外交が持ち味。戦術の手腕は確かなもので、中原の王族では屈指の実力者。反面、細かい軍務が苦手である。ライル将軍のことは深く信頼している。

ベーグル・ライル（４３）

フリーダ皇国大将軍。実質ナンバー２。戦術指揮能力、戦略眼、政治力等においてフリーダ皇国で群を抜いている。特に得意としているのは兵站の構築で、兵站をとても重要視している。

皇国では貴族軍人問わず、一目置かれている。ただ、若く血気盛んな武人からはその慎重な姿勢を不満に思われている。

～割と重要人物～

シッシェド・グラン（３４）

元カタパルト王国近衛隊第八小隊隊長。

『閃光』という痛くなさそうで普通に痛い二つ名を持っている。ナップルの戦いで左腕を負傷した。コーランド電撃戦までの間は主人公亮に乗馬や戦闘術を教える。割と強い。

ビル・ダイオシン・Ｄ・カール（４５）

東方の紛争地帯イピロスにて名を上げている豪族カール一族の領袖。
見た目も性格もスマートではなく泥臭いやり方を好む猛将。出番は少ない。どんまい！

ジョージ（３８）

豪族カールの配下の武将。
彼もまた泥臭いやり方を好む猛将であり、武勇の誉れ高い元傭兵。大雑把であっけからんとした性格で知られているが、内面は案外冷静で計算高い。『闘牛』という二つ名を付けられている。
名字が無いのは、農民出身なことが影響している。

～脇役～

ガゼル（２８）

イピロスの傭兵。コーランド電撃戦ではカール軍に雇われた。傭兵団に所属している。
戦中、ジュネと戦って敗北し負傷した。

グベルトン・イフミ（４８）

反乱軍に所属した保守派の貴族。イフミ公爵家の棟梁。
戦下手だがそれを自覚しており、私兵の指揮は弟に任せていた。政治の中でも謀略が得意で、イフミ公爵家の地位を押し上げてきた。地味で目立たないが、保守派の中でも相当の影響力を持っている。
コーランド電撃戦では私兵がカタパルト王国軍にボコされて涙目な人。

ゲルト（２２）

イピロスの傭兵。コーランド電撃戦ではカール軍に雇われた。大剣を装備している。二人の傭兵仲間が居る。

戦中、亮を守ろうとしたグランと戦って敗北し負傷する。

～一発役～

イームー（？）

カタパルト王国諜報局の諜報員。カール軍第三大隊に潜入していた。

チャラ男（？）

同上。主人公にフリーダ皇国の陣容を教えた人。

タークライツ・イル（２８）

カタパルト王国軍輜重隊の小隊長。出番はもう無い。

～これまでのあらすじ～

シャルロワ大公軍を撃退し、王都に凱旋した亮達カタパルト王国軍。だが、北からはフリーダ皇国軍が、東からは第二王位継承者マクシムと豪族カールの連合軍が、真綿で首を絞めるように緩やかに王都へ進撃する。カタパルト王国は第二の苦難を迎えていた。

カタパルト王国は各地の貴族に参集命令を出した。カタパルト王国直轄軍と集まって来た貴族軍は併せて二万。壮烈な大軍がフリーダ皇国軍の占拠する北方へ向けて進軍を開始した。

一方夜雨に紛れて西に向かう軍勢の姿もあった。近衛隊五百、騎士団一個部隊五百、歩兵軍団二個部隊一千、魔術師団一個部隊五百。僅か二千五百の少勢が、徹底的な運送の効率化によって高速機動を成し遂げていた。

西では、マクシム率いる新生カタパルト王国軍一万と、紛争地帯の豪族カールの軍勢八千が駐屯していた。その少し南方には、ジュネ将軍が四千程の兵を率いて籠城していた。

かくして、『コーランド電撃戦』が幕を開ける！

ジュネ将軍が三千の軍勢を率いて敵陣を奇襲。瞬く間に攻勢を強める。ジルと亮もまた、二千五百の精兵を率いて敵陣を急襲。夜襲な上に挟撃を食らった連合軍は、カール軍の踏ん張りで少し形勢を保とうと努力したものの、完敗という結果に終わった。敗走するマクシム軍を追撃したジュワンベルク・シュマン達は謎の魔術攻撃に晒されたが、その効果は追撃の中止にとどまり、反転逆撃を食らうことはなかった。

こうして、カタパルト王国は南と西の強敵を次々と撃破し、遂に北のフリーダ皇国軍に相対する。

～これまでのあらすじ～（後書き）

２０１１年１１月２４日追加

第5章第1話　歓喜（1）

「斥候からの報告です。敵軍の誘引に成功しました。フリーダ皇国軍先鋒部隊エリエー将軍。率いる軍勢は約七千から八千人です」

「ほう。案外簡単に進むのだな」

北上している本隊に合流してから二日。ブルゴー騎士団長が別働隊五千五百を率いて西から迂回進撃しているため、カタパルト王国軍は総勢一万五千人程だ。

一方フリーダ皇国軍は、クリム城付近に数千。占領地に五、六千程置いて三万強の軍勢が南下してきている。

今の所状況は予想通りに推移していると言っていいだろう。

「陛下。それでは、当初の作戦通り兵站を攻撃するのですな」

と発言したのはジュネ将軍。ジルは頷き、攻撃部隊を率いたい者はいないか、と一面を見まわして尋ねた。

すかさず挙手するジュネ将軍。他に立候補する人が居ないのを確認すると、ジルはすかさずジュネに全権を委任した。

まあ無難じゃね。兵站の攻撃はあくまでもブラフだし、逆に誘引撃破されると困る。実力の確かなジュネ将軍なら間違いはないだろう。

「かしこまりました。具体的な攻撃場所はソーウの備蓄基地と思われる場所ですよね」

「うむ。異存はないだろう？」

俺の頷きを見てジルは「続けろ」と言った。心なしかその表情には喜悦の色が伺える。やはり本職の軍人には頼もしさがあるのだろう。

「連れていく部隊の選定は私が致してよろしいでしょうか」

「うむ」

手早いこって。流石軍人。もう部隊の選定までしたらしい。

「騎士団第四部隊。歩兵軍団第六部隊、第八部隊。北方に兵力を持つ貴族の皆様。合計して歩兵一千騎兵二千の陣容。というのも、機動的な奇襲を行う為には多くの騎兵が必要です。罠にはまらない内に撤収するのが最重要ですからね」

声を揃えて了解を意を示した部隊長達。シュマンさん、ジュワンベルクさん、と……誰？　王都にいた直属軍の軍勢は、ブルゴー騎士団長の率いたのを除くと騎士団第四部隊と歩兵軍団第六第九部隊しかなかったはずだけど。

「そうか。歩兵軍団第八部隊は東方守備兵の中では損耗率が低かったのであるし、妥当だろうな。で、率いる貴族勢とは？」

あ、そっか。ジュネ将軍は歩兵軍団長でもある。東で率いていたジュネ軍の多くが歩兵軍団の部隊だったんじゃん。ド忘れしてたわ～。

ジルの質問を受けたジュネ将軍はテキパキと答えていく。たった

三千人しか率いないのに、やけにたくさん貴族の名前を呼んでいたなぁ。領土の狭い貴族が多いってことだろうか。

「では、進軍進路を説明します」

と言って、ジュネ将軍は地図のような盤を持ち出した。カタパルト王国軍の現在地に指を当てて、スライドさせていく。広い街道は通らず狭くて複雑な地形の場所を通るらしい。ブラフとはいえ奇襲なんだから当たり前だな。

フリーダ皇国軍の配置によって変わる二通りの進路を説明した後、ジュネ将軍は顔をゆっくりと上げた。

「どちらの進路を進むかですが、これが一番重要です。察知されて逃げる暇もなく撃滅されてしまっては、注意を引きつけることができるという利点があるとはいえ、その勢いのまま攻め立てられるという可能性もありますから。最悪の場合王都すら落ちることとなるでしょう」

まあそうだろうね……。メリット＜デメリットとなってしまっては意味が無い。ソーウ辺りに居る軍勢は七、八千人程度らしいが、その後ろには皇王やライル将軍率いる大軍が待っているのだ。合計三万は超えている。「小細工しおって！　突撃じゃー！」で危なくなる程度の兵力差はある。慎重過ぎるくらいで丁度いい。

「そうしないためには、敵軍の状況を正確に把握することが重要です。無論斥候を多く出し過ぎても警戒されますから、そこは注意しておくべきでしょう」

斥候を多く出すことでフリーダ皇国に迎撃体勢を作らせて時間を稼ぐのがカタパルト王国の狙いだ、なんて深読みしてくれたり……。

ないか。時間を稼いでも問題の先送りにしかならないし。

なんだかんだいって、情報は大事だよねー。桶狭間の戦いを一つ例にとっても、織田軍の勝因は今川軍の本陣が何処にあるかという情報を得たことだろうし。出撃してたまたま本陣とぶつかった説もあるけど、まぁそこら辺は気にしない方針で。

「では、今夜出撃を致します」

「そうか。任せたぞ」

ニカっと男笑いするジルに、ジュネは頭を下げることで答える。おっさんがやれば武将らしくていいんだけど、美形がやるとニコポにしか見えないんだよなー。ある意味それも威厳か？

「連絡致します」

軍議を解散した後連絡が届くとそれは面倒だし、良いタイミングだ。多分ブルゴー騎士団長からの経過報告だろう。

と思った俺の考えに間違いはなかったようで、ブルゴー騎士団長から「目的地までの道のりの三分の二を越えた。ただ、敵軍の警戒が厳しいので行軍速度は落ちる」とのこと。一週間後には到着するかな。遅くても二週間。これで形勢は逆転だ。

「うむ。それでは、軍議は解散とするか」

「陛下。フリーダ皇国軍にいささか変な動きがあります」

と爺が挙手し、ジルの許可を得て立ちあがった。表情は見えない

が、別段悪い情報ではないっぽい。一瞬誰だよと思ったけど、この老け具合からして諜報局か。

「フリーダ皇国軍の兵站準備の規模が想定よりも小さいですな。ソーウへの兵糧の移行に手間取ってるのかもしれません」

兵站の第一人者らしいライル将軍と聞いたけど、過大評価乙だったのかな。

いや、諜報局を信じよう。となると、元々南まで進撃する予定はなかった説が有力かなぁ。まあ一度の戦争で敵国の殆どを領地にするなんてそうそうできることじゃない。北方の権益を守り、そのために十分な領土を獲ることで満足していたのかもしれない。

いや、それなら何故南下を選んだ？

「案外いける。もっと行こう！」という第二次世界大戦の日本的なノリではないはずだ。なんせ俺らは二度も逆転したんだ。フリーダ皇国にとっては逆に「案外まずい」となるのが当然。まあ、まずいといってもまだまだフリーダ皇国優勢なんだけどね。

となると、逆に戦況が案外悪いから攻めてきたのか……。反乱軍が二度破れたという事実は大きい。反乱軍の勢力は当初に比べるとかなり衰えているのだ。フリーダ皇国的にカタパルトは二分されていて欲しい。それなのに想定以上に反乱軍が劣勢だ。だから、攻めてきた。

こんな感じか。

「何か考えられる理由はあるか？」

「いえ、特に。ただ、移行に戸惑ってはいないようでした。フリーダ皇国軍兵站部隊は、最初からその予定だったかのように整然としており、特に焦る様子は見られません」

ライル将軍の手腕で未だに整然としているように見えるだけなのか、最初から攻めてくる予定だったのか。どっちだろうか。

「では亮に聞こう」

え、いきなり！？

いきなり話を振るのはマジやめて！　びっくりするから！

と言いたいところだがそういう空気でもないので、俺は立ちあがって大人しく私見を口に出した。

「我々の想定外の優勢により、警戒心を増幅させたのではないでしょうか。結果、カタパルト王国に大きな打撃を与えようと方針転換をした。それならば、兵糧の少ないことも納得できます」

「まあ、そうでしょうな。慌てている様子が見られない、というのは少し気にかかるが」

ジュネ将軍が口を挟む。同意だ。何故兵糧が少ないこの状況を座視しているのか。疑問は残る。

ん？

「陛下。一つ質問してもいいでしょうか」

「なんだ」

「フリーダ皇国軍は今まで略奪を行っているのでしょうか？」

ジルが諜報局の爺の方に顔を向けた。爺は少し頭を捻る様子を見せた後、静かに口を開いた。

「していると言えばしています。しかし、これまでのフリーダ皇国軍の戦役と比べると、その規模は小さいと言わざるを得ません」

ジルの視線がこちらに向き、興味深々そうな表情で俺を見つめた。だからなんだ、という表情をしている。ジュネ将軍なんかはもう俺の言いたいことが分かっているみたいだ。俺は答弁する。

「フリーダ皇国は元々北方の占領が目的で、カタパルトの中央部まで攻め入る気がなかったのだと考えられます。そのことと軍の備蓄基地には通常よりも少ない兵糧があるということを考え併せますと、見えてきますね」

ジュワンベルクさんが成程と呟いた。続ける。

「徹底的な略奪による食糧の補給。それこそが、敵軍の狙いなのではないでしょうか」

ドヤァとうざい顔をした俺の発言によって本陣が騒然となった。

「静かにせい」

時を移さず言い放ったジュネ将軍の威容に、全員が黙り込む。十数秒程沈黙を味わい、ジュネ将軍が口を開いた。

「とはいえ、皆が驚くのも無理はありませんな。今までのフリーダ皇国軍は略奪に関しては消極的でした。ただそれは、自領に組み込む予定に入っていたからだ、というだけのことだったのです。そうでない場所からはとことん略奪をするでしょう。今までとて略奪をしていなかった訳ではありませんが。これから行われる略奪は想像を絶するものでしょうな」

ジルは頭を痛そうにする。まあカタパルト王国領が徹底的な略奪の対象となってしまったから嫌なんだろうなー。少なくとも今までフリーダ皇国はカタパルト北部を「自領」として見做していたから、そこまで酷い略奪はしなかったし。

既に各貴族が物資をかき集めて兵力を十分に蓄えた後なので、数万の大軍を補給できる程の物資はカタパルト北部にはない。それなのにも関わらず用意した兵糧が少ないということは、根こそぎ奪い尽くすつもりなのだ。たとえフリーダ皇国軍を撃退しても、残るのはまさしく焦土となった土地だろう。

いや、違うな。全然問題ないじゃねぇか。元々焦土戦術をとる予定だったんだ。要するに勝てばいいんだよ。何の問題もない。

「なるほどな」

ジルはようやくその言葉を絞り出した。悔しさと喜びの混じったような形相で、ジルは思いもよらぬ言葉を吐き捨てた。

「領土の急な拡大は兵糧の欠乏をもたらす。よく、分かっている。分かっているからこそ、南下しなかったのだろうな。そして、今の南下は領土の拡大が目的ではない」

なるほど。だからフリーダ皇国軍は北部の征服で満足したのか。となれば、フリーダ皇国軍には略奪を思いとどまる理由がない。カタパルトの資源と人命は根こそぎ失われるかもしれない。

「陛下」

連絡兵が無礼にもジルに口を挟む。懇願するような視線にジルは彼のことを思い出したのか、すまんすまんと言いながら連絡事項を言い渡した。

「今の所フリーダ皇国軍は、別働隊に気付いたと思われる行動をしていない。そう伝えろ」

連絡兵はそれを聞くとすぐさま反転して、ブルゴー騎士団長の元にだろう、馬を走らせた。

その後ろ姿をじっと見つめるジルの背中からは、不思議と高揚感がにじみ出ている様な気がした。気のせいでは、ない。俺からしか見えないジルの右手は、強く握りしめられていた。

なるほど。ジルも理解している。カタパルト北部で徹底的に略奪をする為に兵糧を少なめにしているということは、むしろ好都合なのだ。俺達の思惑通りに物事が進めば、勝利は見えてくる。

勝てる。

俺は無意識のうちに口元を吊り上げていた。それは、複雑な感情の入り混じっていたジルの笑みとは違い、単純な一つの感情に彩られていた。

歓喜だ。

第5章第2話　欺瞞（1）

＞i35381―3429＜

備蓄基地ソーウに対する奇襲作戦は順調に進んでいた。フリーダ皇国軍の警戒は想定以下で、カタパルト王国軍の進軍速度は想定以上に高い。

「閣下。このまま進むのですか？」

「思いのほか首尾が良いのですし、この調子を保ちたいところですな」

歩兵軍団第六部隊隊長ジュワンベルクが尋ねた。続けて若い貴族が所見を述べると、他の貴族達も同調した。彼らの顔つきからは幾分か晴れやかさが伺える。万全を欠く備えに期待感を覚えているのだろう。警備がザルなのは事実だ。確かに、現在の局面は奇襲を敢行する好機のようにも見える。

だが、ジュネの胸の内はそれほど浮き立っていなかった。

（浅はかだな。まるで分かっていない）

ジュネは心の奥底でその楽観的な認識を一蹴した。

「そうだな。そうすることとしよう。だがな、敵の計略ということも十分考えられる。些細なことでもいいから、変な報告を受けたら俺に教えてくれ」

「心得ております」

貴族達が口を揃えて大丈夫だと言うが、ジュネは不安を感じられずにはいられなかった。所詮貴族は自信の栄達しか考えていない、という先入観を持っているからだろうか。

「合図があったら一斉に突撃。号令を聞いたら即座に退却するように。順番は手筈通りだ。命令を無視したら断固とした処分を下す。いいな？」

全員が理解したのを確認すると、ジュネは貴族達を自分の率いる部隊の元に出向かせた。部隊の指揮官が後方にいると素早い対応が出来なくなる。この行動も、敵軍への警戒心によるものだった。

報告が届く。フリーダ皇国軍に怪しい気配あり。一部厳重な警戒のしてある場所があるらしい。

やけにあっさりと懐へ潜り込んだ割にはこれだ。妙だと言わざるを得ない。やはりな、とジュネは口角を吊り上げた。

（いや、呑気に笑っている場合ではないと分かっているのだが。やはり戦場はこれ位の緊張感があった方がいい）

連絡兵に各部隊への伝達を命じた。

『一撃離脱』

単純な作戦だが、将の指揮能力と兵士の練度が重要になってくる。通常ならば貴族軍と混合した状態で行う作戦ではないが、現在の士気の高さとフリーダ皇国軍の陣形を考慮してジュネは成功を確信していた。

「ああ、それからジュワンベルクにはこう伝えておけ。隊列を崩すな、と」

連絡兵が散り、急いで情報を送りに行く。次にジュネは副官に対して声をかけた。

「急を要する事態になった時。万が一の時。速やかに指揮権を移行して退却するように」

本陣が急襲されたり、大きな罠にはめられる可能性もある。その時ジュネが死ぬこともある。そのような切迫した状況下で、重責ある副官の立場にいる者が判断を遅らせるというのは非情に筋の悪い行動だ。

「無論、承知しております」

そうか、そうだな。そう呟いてジュネは会話を終わらせた。

実際、当たり前のことだ。最初からジュネはこの奇襲について危険性を感じたらすぐ撤退すると言っているし、その意味が分からない男がジュネの副官として許されている訳でもない。ならば副官を信頼していないのかという問いもまた不適当だ。副官は熟練した指揮官であって、凡庸ではない。

ならば、何故このような問い掛けをしたのだろうか。

（なんのことはない。俺は、不安だったのだ。罠かもしれない。詐術を弄してあってもおかしくない。そのような危地で戦うのだ。そう簡単に心配を振り切れはしない）

それでも、ジュネの心の中には高揚感があった。気持ちは弾んで

いた。この二つの感情は、相反はしていても決して矛盾するものではないのだ。

半刻経った。夜の闇が深さを増している。静まりかえった道中に行軍の足音が乾いた響きを広げていた。

「閣下。敵軍に動きが見えます。我が軍の動きを察知したようです」

ジュネは一斉攻撃の決断をした。最早一刻の猶予もなくこれ以上迷っていても時間の無駄である、と判断したのだ。

「そうか。ならば、もう潮時だろうな」

手を握り締めて深く息を吸った。腰に帯剣していた剣を抜き、天上へと突きたてる。空気を切り裂く音と共に、ジュネは大音声で進撃を命じた。

「突撃！」

何千もの兵卒が雄叫びを上げ、駆ける衝撃で大地が鳴動する。意気盛んに声を上げた軍勢は一匹の獣となってフリーダ皇国軍と激突した。意表を突かれたフリーダ皇国軍はカタパルト王国軍の突撃を防ぎきれず、若干ながら後退した。

その間僅か幾数分である。

だが、フリーダ皇国軍とて何の備えもしてこなかった訳ではない。冷静さを取り戻すと時を置かず反撃に移行した。幾らかの勇猛な部隊が瞬時に突出することでカタパルト王国軍を浮き足立たせ、フリーダ皇国軍はその間に体勢を立て直したのである。

揉み合う状況に移行して押し合う両軍。とはいえ、先を取ったカタパルト王国軍の優勢は依然として変わらない。そのように考える各部隊が必死に猛攻を繰り出す中、ジュネは違う見方をしていた。

（懐までは簡単に潜り込ませてくれたが、その割に防御は堅い。まあ、このまま攻めていればいつかは打ち破れるであろう程度の堅さでしかないので、その点は問題ないのだが……）

罠。

ジュネが唯一懸念している事項である。

攻勢に移った後も未だ伏兵は見当たらないので、今のところはまだ敵の網にはかかっていないだろう。だが、このまま敵中にいれば飛んで火に居る夏の虫。包囲されて逃げられなくなる前に退くべきだ。

そうジュネは考えていた。

「退くぞ。法螺貝を鳴らせ」

鈍く大きい音が戦場に響き渡る。それと同時にカタパルト王国軍は素早く後退した。整然な動きで退却するカタパルト王国軍に、フリーダ皇国軍首脳部は追撃を行う余裕すら持てなかった。フリーダ皇国軍の部隊の一部が散発的に追撃を行うが、周りとの連携をとれていないのですぐに撃破される。

手ごたえは良い。良すぎる。もう一度攻めかかってもいいのではないか。

ジュネはいささか逡巡した。すぐに気を改める。調子に乗って高望みした将に結果が付いてくることは少ない。あったとしても、偶

然である。

ほどなくして、ジュネは手堅く退いたことを自賛？した。

伏兵による奇襲である。

直前に察知したジュネは辛うじて防備を固めた。方陣。四角形に組まれたこの陣は、前後左右どこからの攻撃でも防ぐことが出来る。防御に適した陣形だが、一度隊列を割られると弱い。密集しているため、混乱に弱いのだ。

伏兵はジュネ軍の後方やや左を急襲した。そこに位置していた貴族の軍勢が崩れた。だが方陣は崩れない。防備を固めるというのは単に方陣を組むというだけではないのだ。自軍の弱点の補強も立派な防備である。

そして、フリーダ皇国軍はジュネの予想通りの場所を攻撃してきた。敵の指揮官は戦を知っているらしい。ただ、それ以上にジュネが巧緻だった。その場所に中央から直轄兵が移り、すぐに防備の穴を埋めていたのだ。

伏兵の勢いが少しずつ削られていく。攻撃、特に伏兵による奇襲は初手が肝心だ。初手でカタパルト王国軍を崩せなかったのだから、奇襲の失敗は目に見えていた。

いや、それも後になってから分かることだろう。ジュネは自身の油断を恥じた。

いまだ追撃の軍勢はまだ来ない。ようやく追い始めたところなのだろう。だが、もしかしたら退却の道を回り込まれいるかもしれないのだ。用心するのに越したことはなかった。

「閣下。敵勢が後退し始めました」

手綱を引き締め、ジュネは目をこらす。確かに後ろへ退いている。反転攻勢を目論んでいる訳でもなさそうだった。

「よし。我々も退くぞ」

ジュネは追撃の許可を出さず引き続き退却するよう下知した。敵勢は反転することなく距離を離していく。ジュネの判断は正解だったようだ。もしかすると、反転攻勢を狙っていたのだが整然な撤退に追撃の意志を失ったのかもしれない。

ジュネは息を吐き、安堵の表情を見せた。

恐らく敵の企てはあの伏兵による急襲だったのだろう。ならば、それを撃退した今はもう何も恐れることはない。注意深く退却すればいいだけだ。

そこまで思考を深めて、ジュネは顔を上げた。

憂慮するべき懸案はもうない。そう見たジルの元に注進が入った。

進路の横に更なる伏兵の姿あり。

第5章第3話　欺瞞（2）

想定外の事態である。少なくとも、ジュネは、これ以上の術策をフリーダ皇国軍がめぐらしているとは考えていなかった。

（だが、焦ることはない）

ジュネは周辺の地理に長けた幾つかの部隊に指示を出した。更なる伏兵の撃滅である。

今ジュネ軍が通っている道は狭いため、全軍を敵勢に当てることは出来ない。それはフリーダ皇国軍の算段だろうということも、兵数を集中できない攻撃は悪手だということも、ジュネは分かっている。

だが、問題ない。ジュネには伏兵を攻略する自信があった。

第一陣から第三陣までは地形を熟知している貴族軍が務め、ジュネの率いる直轄兵が核となる。

瞬時に陣立てを考えたジュネは全軍に細かな命令を出す。各部隊はいささかの遅滞もなく動き、いつでも動ける態勢をとった。余った軍勢は副官に率いさせて退路を進ませるつもりだ。

ジュネ軍は伏兵と相対した。互いに少しずつ近付いていく。

そろそろ攻めるか、とジュネが意を決した瞬間、フリーダ皇国軍は動いた。

「閣下！　敵勢目測数千の軍勢が速やかに前進してきています！」

先をとられるのを嫌がったのか、出鼻を挫くようにして第一陣に

攻めかかったようだ。第一陣はその緩急に惑わされ、隊列を崩した。
ジュネは時を置かずに第二陣を前に進ませた。怯んだ第一陣の後ろから第二陣が攻撃の手を加える。第二陣は容赦ない攻勢で敵勢を後退させた。

（まずいな。敵の術中にはまっている）

おびき出された第二陣を半包囲して撃破。これが敵の思い描いている理想図だろう。さすれば、ジュネ軍の士気は落ちて隙もできることとなる。折角得た勢いをこんなところで殺される訳にはいかない。

ジュネは第二陣の指揮官に一旦退くように命じた。それで敵が面食らったら反転逆撃し、そうでなければ大人しく体勢を立て直す。連絡兵にはそう言い含めた。敵の罠にかかるまでまだ時間はある。それまでに第二陣の指揮官がジュネの意をとれるかどうかが勝負所だった。

第二陣の戦列が延びきろうとしていた。仕方がない。そう第三陣の参戦を決意したジュネが口を開こうとした、その時。
ようやく第二陣が退いた。敵勢は乱れない。

（焦らずじっくり行くことだ。それでいい）

第二陣と第一陣が陣構えをただした。第三陣、本陣共に少しばかり前進している。戦場が前に移動しているようだ。あまり引き込まれるようだと危ない。

一抹の不安を抱えつつも、ジュネは鐘を鳴らせた。攻撃の再開だ。
既に戦いの仕方については連絡してある。中央から攻めるのでは

なくて、両翼から締めあげるように攻勢を強める。少数である敵勢は、それで撃破できるはずだった。

第一陣と第二陣が一斉に打ちかかる。敵軍は応戦するが、最初の頃の勢いはもうない。第一陣と第二陣の兵力は敵軍よりも少ないのだが、後方の第三陣と本陣の存在が敵の動きをけん制している。結果的に、兵力差はひっくり返されていた。

両翼から押し込まれ、敵軍はじりじりと後退していく。頃合いか、とジュネは呟き、第三陣に攻撃命令を出した。

強い衝撃と共に第三陣の軍勢が敵軍に向かってぶつかって行った。

「ほう。やるではないか」

壮絶な大攻勢を前に、敵軍は踏みとどまった。思わず感嘆の声が漏れる。

小さく纏まって攻勢をやり過ごそうとしているようだ。一気に攻め崩そうとするカタパルト王国軍に対して密集陣形で対応したのは正解だろう。

矢玉がおよんで厳しい攻撃に身を晒されている敵軍は、一見無為に後退しているように見えるかもしれない。かもしれないが、実態は逆だ。カタパルト王国軍の攻勢を受け止めて、反撃の機会を狙っている。

手強い敵だな、とジュネは気を張り詰めた。

本陣を率いて前進し、先頭に立ったジュネは目を凝らして戦況を見守る。今の所、敵軍は必至の防勢で猛攻を耐えている。敵はいつ反転するのか。ジュネは考え迷った。

戦場の後方で待機しているジュネ率いるカタパルト王国直轄兵。その存在を考慮するならば、攻勢に出るのは間違っている。
たとえ攻勢に移ってもこちらにはまだ予備兵力があるのだ。そして恐らく敵軍には予備が無い。どちらが勝つかは自明の理だ。

（ならば何故敵は先程逃げなかったのだ。退却するには十分な間合いがあったろうに。退かずに攻めてくるということは、勝算があるか指揮官が阿呆かどちらかなのだ。そして戦場の士気を見る限り後者は有り得ない）

ならば、敵はまだ切り札を温存しているのか。熾烈な攻撃を受けて敗走すら有り得るこの状況で、まだその切り札を出さずに我慢しているというのか。

ジュネの体に悪寒が走った。

直後、猛烈な攻勢を浴びせていたジュネ軍の構えが、崩れた。

「迂回奇襲か！　あの状況で横入りするとは、やってくれる！」

敵軍の後方に待機させていた騎馬隊を大きく迂回させて、ジュネ軍を横から突いたのだろう。敵軍は間髪入れずに反転して、ジュネ軍へ深く斬り込んだ。混乱。形が崩れる。

まずい。明らかにまずいと言える状況だ。ジュネは遂に重い腰を上げた。本陣の参戦である。後詰めも数百ほど用意しているが、役に立つかどうかは分からない。ここで勝負を決めなければならない。

「行くぞ。総攻撃だ」

鐘が鳴り、轟音が戦場に大きく響いた。大地を揺らすような音響が、戦火を交える両軍に趨勢の変化を意識させる。
鬨(とき)の声を挙げて攻めかかるカタパルト王国直轄兵が、先程まで襲いかかってきていた敵勢の勢いを削ぎ、逆撃を仕掛けた。

今この瞬間こそが、勝敗分岐点。

そう確信したジュネは総攻撃の下知を出し、自ら前に出て剣を振るった。

数人雑兵を斬り倒したところで、名のある兵士が大音声を上げて勝負を仕掛けてきた。
十数合剣戟を交えるも、決着がつかない。ジュネは敢えて隙を見せた。敵兵は空気を切り裂く音と共にその槍でジュネの急所を突いた。
ジュネはその突きを裏から擦り上げて、剣を斜めに振った。

袈裟切りだ。敵兵は表情を苦しそうに歪ませながら、血飛沫を上げた。そのまま地面に倒れる。動かない。命を失ったようだ。

死んだ敵兵を一顧だにせず、ジュネは怒声を上げた。
俺に付いてこい。そう言わんばかりの姿に、部下達もまた雄叫びを上げて前に突き進む。練度も士気も高い直轄兵に、長引く戦いで疲労の色濃い表情を見せる敵兵は気圧されている。

ジュネは戦場を俯瞰した。
勢いはこちらにある。先程までジュネ軍を圧倒していた敵軍だが、もうその勢いはない。

こちらから見て右側にある敵軍の左翼が、崩れる。ジュネは思わ

ず目を細めた。部下達に敵軍の左翼を集中的に攻撃するように命令を下す。ジュネは勝利を確信した。
弱った所を叩くのは戦場の道理であり、今や敵軍の左翼は絶好のカモである。そう呼べるほど、弱っている。

浮き足立った敵軍の左翼と、踏みとどまろうとしている敵軍の中央にある軍勢。その間を騎馬隊が駆け抜けて、敵陣を完全に寸断した。横との連携がとれなくなった敵軍の左翼は、前方からの攻勢に押されて及び腰になる。
増していく圧力に耐え切れなくなったのか、遂に敵軍の左翼が潰走した。

「勝ったな」

敵軍は左翼の潰走から時を移さず行動した。総退却である。だが、敗走するのを甘く見逃すジュネではない。小さく纏まりながらも素早さを維持して退く中央の軍勢ではなく、敗走に戸惑い浮き足立っている右翼を優先して攻撃するように命令した。

（なかなかの良将が率いている様だし、中央を崩すのは少し難しい。出来ないことはないが、損害が出るだろう。それよりも、右翼と左翼を完全に潰すことだ。）

さすれば、熟した果実が落ちるように敵軍が総崩れするだろう。ジュネはそう呟いた。

手始めに、敵軍の右翼と中央の間を、騎馬隊に走らせた。これで敵軍は三分された状況になる。左方に位置する中央の軍勢との連携がとれなくなった右翼は、左翼と同じように潰走した。
蜘蛛の子を散らすように逃げる敵勢に、容赦ない追撃がかかる。

背を向けた敵兵が一人また一人と絶命していく。

ジュネは自軍の右翼と左翼に位置する部隊に、敵軍中央の軍勢を包囲殲滅するように命令した。必死に逃げようとしている敵軍は、しかし、後ろに向けた背中をいいように攻撃されている。

「閣下。勝ちましたな」

ジュネの元で本陣を指揮していた部隊長ジュワンベルクがポツリと言葉を漏らした。

事実である。後は雑巾を絞るように敵軍を全方位から絞り上げるだけだ。指揮官はなかなかに有能そうだったので、彼の命を奪えばフリーダ皇国軍の戦力は減退するだろう。

だが、油断は禁物だった。既に勝利は決まっているが、この戦いはあくまでも局地戦。全体を見ればカタパルト王国軍が不利なのは依然として変わらないのだ。今はこの局地戦でどれだけフリーダ皇国軍の戦力を減らすかが重要だった。

八分の勝利ではもの足りない。完全な勝利を以て初めて、カタパルト王国軍の現在の劣勢を少しはマシに出来るのだ。

包囲されている敵軍がある一点を集中攻撃していると、注進が入る。ある一点とは、敵軍から見て後方にある部隊のことらしい。

ジュネは周りの幾らかの戦力をまわして備えとするように命令した。しかし、それが裏目に出た。

敵軍が集中攻撃の的を変えたのだ。先程まで攻撃していた場所の隣に位置する軍勢に標的を変え、集中攻撃を浴びせる。標的となった部隊は隣に戦力をまわしていたため、呆気なく撃破された。

ジュネは顔色を変えた。糞ッ、と言葉を吐き捨てて、逃げる敵軍を追うよう全部隊に一斉に命令を出した。追撃命令を知らせる鐘が鳴り、ジュネ軍は必死に敵軍に追いすがる。

してやられた。そう思わずにはいられない、見事な撤退だった。両翼を潰されて、敗北は決定的。そのような状況下で兵を纏めてきちんと退却するのは、容易なことではない。凡百の将では出来ないことだろう。

だが、いくらか疑問も残る。それ程の指揮官が何故完敗するまで戦場に留まったのか。本陣が参戦したあの時すぐにでも退いていれば、敵軍はここまで圧倒的な敗北を味わわずに済んだはずだ。

まあ今そんなことを考えても仕方がない。ジュネは思考を打ちきった。

「閣下。敵軍が森の中に逃げ込みました。このまま追撃いたしますか？」

「追撃だ。地の利は我らにある。攻撃には地理に長けた貴族の部隊を優先させろ。本陣の軍勢は待機だ」

大軍の利が生かしにくい森に敵が逃げ込んだため、総力を挙げて追撃することはできない。だがその分の損失は、味方の部隊が地形を熟知しているという利点によって帳消しになるだろう。

包囲殲滅出来なかったことは悔み種だが、まずまずの結果に終わった。ジュネは安心感と達成感、そして僅かばかりの悔恨を覚えた。

こうして、カタパルト王国とフリーダ皇国の戦いの初戦は、カタパルト王国軍の圧勝で幕を閉じた。世に言う、ソーウ奇襲戦である。

第5章第4話　歓喜（2）

兵糧備蓄基地ソーウ。

フリーダ皇国のカタパルト侵攻に重要な役割を占める要塞である。当初兵站の管理はクリム城で行っていたのだが、南下が進むにつれて想定される戦場により近いここソーウが新たな兵糧備蓄基地となった。

カタパルト侵攻の総指揮をとっているのが兵站に重きをなすライル将軍が作っただけあって、無駄のない実戦的なつくりとなっている。急造なため防備の薄さは否定しきれないが、それでも短期間でこの基地を作ったライル将軍には素直に感嘆する他ないだろう。

しかし、先程の戦い。ソーウ防衛戦では、その欠点が如実に表れた。

「してやられましたな」

エリエーについている校尉の一人バナジュームが自嘲した。

バナジュームは、退却したジュネ軍を先回りして奇襲し、その結果大敗した、あの戦いの指揮官である。さぞかし自責の念にとらわれていることだろう、とエリエーは彼の気持ちを推し量った。

「まあ、そう言うな」

「しかし、エリエー将軍。初戦で敗北するということは、勢いを敵に持っていかれるということです。今回の敗戦は、痛恨の失敗と言えるでしょう」

他の校尉も、言葉には出さないが皆バナジュームの言葉に無言で同調した。

しかし、エリエーは心の中で反駁する。

（戦には、勝つべき戦と勝つ必要のない戦がある。そして、今回の戦いは勝つ必要のない戦だったと俺は思う）

完膚なきまでに敗北したこの戦いは、不測の事態ではある。ではあるのだが、エリエーは特段焦燥感や切迫感を覚えている訳ではなかった。

（策がある。陛下とライル将軍と俺、そしてあ奴しか知らない策がな。そして、大敗を喫した今でもその策は無傷だ。いや、むしろ補強されたと言ってもいいかもしれん）

「エリエー将軍。今後の行動をいかが致すのですか」

幕下の校尉からエリエーの意見が求められた。エリエーはゆっくりとした口調で口を切った。

「斥候を出し、敵の動きを注意深く見極めた上で、何か動きがあった場合には臨機応変に対処する。要するに、何もしなくてよい。今我々がすべきことはない」

「後手後手に回っては、勝てる戦も勝てないと思いますが」

「今の兵力では敵とまともにぶつかっても甘味がない。陛下の本軍を待つべきだろう、やはり」

「正面からぶつかり合うのは下策。それは分かります。ですが、どちらにせよ敵軍はここソーウを攻めてくるのです。その時、如何様にしてここを守るお考えですか」

一人の校尉が熱弁を振るった。他の校尉達も、気まずそうにしているバナジュームを除いては、皆が不満そうにしている。

敗戦の汚名を早く返上したいのだろう。また、フリーダ皇国のこれまでの勢いをここで失う訳にはいかないと思っているのかもしれない。どちらにせよ、的外れな意見と言って差し支えなかった。

何も見えてない。エリエーは苦々しくその光景を眺めた。

とはいえ、何も見えていないという感想は、エリエーがライル将軍の策を知っているからこそ出るものである。何も知らされておらず、策の存在に気付く程のヒントもない状況では、彼らの意見もあながち間違っている訳ではなかった。

「攻めてくることはないだろうな。陛下とライル将軍が率いる本軍の到着が遅くなるということは、敵軍には知られていない。そのように手配されている」

「しかし、万が一ということも」

「確かに、いざという時にその万が一の事態が起こるのが戦場だ。だがな、もしそうなったとしても、我々は背水の陣を敷いている訳ではない。多少退いたとしても問題はないのだ。敵を引きずり込んで決戦に持ち込むのもまた、戦略だろう」

「それでは、我が軍の勢いがますます削がれるではありませんか」

「勢いの為に戦略を犠牲にするというのは、本末転倒だろう。決戦

に持ち込めば、我が軍の勝利は確定だ。それで、十分だろう」

「巧く敵を引きずりこむことに失敗した時。その時はどうするのでしょうか」

「こちらから攻めればいい。そもそも、もし敵が攻めてきたならば、巧く敵を引きずりこむのが我々の任務だ。軍人が己の責務を果たせない状況を仮定するのはよろしくない」

「軍人が楽観的観測に身を任せることも、よろしくないかと」

「バカか貴様は。その時はこちらから攻めればよいと言っているではないか」

エリエーは憮然として言葉を吐き捨てた。その心中は荒れ狂っている。態度は悪く見えるが、これでも抑えている方だった。

いかにも不快であるという表情をしながら、食い下がってきた校尉を見ずに、言葉を放つ。

「他に何かある者はいるか？　ないならばこれで終わりにするが」

声をとがらせたエリエーの発言に、バナジュームが挙手した。

なんだ、また同じことでも言うつもりか、とエリエーは多少気色ばみながらも発言を許す。一方バナジュームはほぞを噛んだような表情で立ちあがり、切言した。

「先の戦において、伏して奇襲を敢行したのにも関わらず、大敗を喫して逃げ帰って来たこと。非情に忸怩たる思いでございます。つきましては、もしも敵軍が攻めてきた際、是非とも殿を申しつけられたくございます」

ほう、とエリエーはバナジュームの潔さに感じ入った。このような男は嫌いではない。途端に上機嫌になったエリエーは、表情を緩めて一言投げかけた。

「見事、名誉を挽回するがいい」

バナジュームが負けた遭遇戦。エリエーはその話を聞いてバナジュームを一応叱責したが、己の所感としては、バナジュームを面責する必要性はあまり感じなかった。

兵力差もあったし、奇襲とはいえ伏せていたのを気付かれていたので、その優位は無いに等しい。そして、その遭遇戦における敵将はあの『ローラン・ジュネ』だった。ジュネとは、カタパルト一の名将である。兵站管理や大規模な戦略眼においては到底ライル将軍に敵わないが、戦術という視点に立ってみればフリーダ皇国に彼を凌ぐ者は居ない。

少なくとも、エリエーはそう評価していた。

「では、意見のある者はもうおらんな。防衛体勢に入ることは決定事項とする。斥候を多めに出して常に敵の動向に気を張るようにしろ。特に、今回のような奇襲が再び行われないように、入念に警戒するように。以上、解散」

校尉達が椅子を引いて立ちあがり、それぞれの幕舎に向かって行った。エリエーは目を閉じて、戦いの行方を思索する。

（ジュネ将軍の攻撃は徹底したものではなかった。もう少し留まっていられただろうに、奇襲して我々の虚を突くや否やすぐ退いた。何かがあったのだろう。問題は、何を考えていたのか、だ）

俺の読みに気付かれていたのかもしれない。エリエーはぞっとした。

エリエーは奇襲を予期していて密かに兵を臨戦態勢にしていた。そのため、ジュネ軍の奇襲を聞いてすぐに退路を塞ぐ為の伏兵を置けたのだ。

それが察知されたのだとすれば、退いたのも納得できる。

（いや、流石に違うな。いくらジュネといえども、俺が兵を動かしたことを即効で気付いたなんてことはあるまい。ならば、単純に警戒心ゆえの所業か？　それも恐らく違う。フリーダ皇国の兵糧を減らして兵を葬る絶好の機会だったのだ。警戒心だけで退くはずがない。

だとすれば……）

ライル将軍の言葉は正しかった。間違いなく、敵には策がある。確信したエリエーは、胸の内を絞り出すようにポツリと言った。

「迂回機動によるクリム城の奪還。なるほど、ライル将軍の読みは的中したようだ」

ならば問題ない。エリエーは心の中で言葉を続け、口角を吊り上げた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2454k/

異世界の智将

2011年12月13日07時11分発行